

うつせみのあなたに

第4巻

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
もくじ	4
第1部 09.04.19～09.05.04	
09.04.19 平安時代のテープレコーダー	8
09.04.20 言葉を奪われる	19
09.04.21 「事実＝意見」＝両方ともでたらめ	32
09.04.22 「人間＝機械」説（1）	45
09.04.23 4月23日にギャグる	54
09.04.24 「人間＝機械」説（2）	58
09.04.25 「人間＝機械」説（3）	72
09.04.26 反「人間＝機械」説	85
09.04.27 あう（1）	93
09.04.28 あう（2）	101
09.04.29 あう（3）	115
09.04.30 あう（4）	126
09.05.01 あう（5）	138
09.05.02 あう（6）	151
09.05.03 あう（7）	163
09.05.04 こんなことを書きました（その6）	176
第2部 09.05.05～09.05.13	
09.05.05 スポーツの信号学（1）	184
09.05.06 ドラマ信号論（1）	196
09.05.07 信号論から見た経済（1）	211
09.05.07 信号論から見た経済（2）	222
09.05.08 信号学的視線論（1）	227
09.05.09 信号学的視線論（2）	235
09.05.10 信号論（1）	244
09.05.11 もくじをつくりました	258
09.05.12 信号論（2）	260

09.05.12	信号論 (3)	266
09.05.13	こんなことを書きました (その7)	278
あとがき		
	あとがき	284
	『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル	285
奥付		
	奥付	304

はじめに

はじめに

本書を第4巻とするシリーズは、2008年12月19日から2010年3月11日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第4巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いるという仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「09.05.04 こんなことを書きました(その6)」、そして第2部の最終記事「09.05.13 こんなことを書きました(その7)」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

もくじ

はじめに

もくじ

第1部 09.04.19～09.05.04 ブログタイトル：「うつせみのあなたに」

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実＝意見」＝両方ともでたらめ

09.04.22 「人間＝機械」説（1）

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間＝機械」説（2）

09.04.25 「人間＝機械」説（3）

09.04.26 反「人間＝機械」説

09.04.27 あう（1）

09.04.28 あう（2）

09.04.29 あう（3）

09.04.30 あう（4）

09.05.01 あう（5）

09.05.02 あう（6）

09.05.03 あう（7）

09.05.04 こんなことを書きました（その6）

第2部 09.05.05～09.05.13 ブログタイトル：「うつせみのあなたに」

09.05.05 スポーツの信号学（1）

09.05.06 ドラマ信号論（1）

09.05.07 信号論から見た経済（1）

09.05.07 信号論から見た経済（2）

09.05.08 信号学的視線論（1）

09.05.09 信号学的視線論（2）

09.05.10 信号論（1）

09.05.11 もくじをつくりました

09.05.12 信号論（2）

09.05.12 信号論（3）

09.05.13 こんなことを書きました（その7）

あとがき

『うつせみのあなたに第1巻～第11巻』の各記事タイトル

第 1 部 09.04.19～09.05.04

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

◆平安時代のテープレコーダー

2009-04-19 14:37:47 | 言葉

このところ、話し言葉について考えています。話し言葉を味わい楽しむことが、いつかできなくなるのではないか。中途難聴者である自分にとっては、そうした不安が常にあります。聞こえの程度は、日によって差があります。花粉症でもあるため、この時期にはとりわけ神経質になります。

ご承知のように、鼻と耳とはつながっていますよね。鼻水ぐじゅぐじゅの日、つまり、花粉の飛翔が活発な日には、聞こえも悪くなるのです。起床後、両耳に補聴器を装着するさいには、緊張します。テレビの音量をいつもの数値に合わせてから、補聴器のスイッチを入れます。

自分の使用している補聴器はボリュームの調整ができるので、朝のニュースでアナウンサーが話している内容が聞きとれるところまでボリュームを上げていきます。いつもよりボリュームを上げないと、何を言っているのかが分からない。そんな時には、がっくりきます。ああ、きょうは聞こえが悪いなあ。頭の中で、そうつぶやきながら、ふと最悪の事態を想像してしまうのです。聞こえなくなったら、どうしよう。来る日が来たら、どうしよう。

よく聞こえる日もあるので救われますが、1年に2度くらい受けている聞こえの検査結果は、徐々に聴力が低下していることを示しています。

数年前に、NHKの手話講座を2年続けて受講したことがあります。今はどうなのか知りませんが、1年間の講座が前期と後期に分かれていて、後期は前期の再放送でした。

放送自体もためになりましたが、テキストに載っているコラムや番組利用者の声で得た情報がとても興味深く、また受講期間中に並行して見ていた聴覚障害者向けの番組にも啓発されました。

もともと言葉というものに関心を持っていましたが、手話を学ぶことで、言葉＝言語をより広いものとしてとらえるようになりました。個人的な定義では、

*狭義の言葉＝言語とは、話し言葉と書き言葉、または普段「日本語」「英語」などという漠然とした語で呼んでいる言語（※ひとくくりして「日本語」と言っていますが、実際には多数の方言があるほかに、少数の人たちだけが使っている「日本語の中の日本語」があったりします）

くらいに考えています。一方、

*広義の言葉＝言語とは、話し言葉と書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（※家庭だけで通じる断片的な手話）、指点字、点字、音声（※発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号など

という具合に、かなり大きくとらえています。これだけ広く考えると、いくら「広義の」と断っているとはいえ、「言葉」というより、コミュニケーションや自己表現のために用いる手段や道具と呼んだほうがいいかもしれません。

*

ところで、

*言葉を奪われる

とか、

*言葉を失う

とか、

*言葉が無い

という事態=状況があります。想像なされたことがありますか？ 以上は、どれもがネガティブな言い方ですが、

*言葉を学ぶ (or 覚える or 習う)

とか、

*言葉を作る

とか、

*言葉を再現する

という状況もあります。

これだとポジティブに響きますね。今挙げた*の付いた6つのフレーズをそれぞれテーマにして、かなり長い文章が書けそうです。実際、以上の6テーマをタイトルにしたブログ記事を書こうと、かなり前から考えていて、そのためのメモを、お菓子の入っていた紙製の箱に溜め込んでいます。

縦横がそれぞれ約20センチの正方形で、深さが15センチ弱ほどの箱です。メモは、テーマ別にクリップでとめてあります。そういうことが好きなのです。無職なので、時

間だけはたくさんあるという事情もありますけど。

で、きょうは、

* 言葉を再現する

ということをテーマに書きたいなあと思っていましたが、なぜか（※単に、だらしないからなのですが）、難聴と手話の話から入ってしまいました。この2つについても、いつか腰をすえて、それぞれじっくり取り組んでみたいと思っています。

*

そうでした。今になって、分かりました。なぜ、難聴の話から始まったのかというと、「言葉を再現する」というテーマ用のメモの中に、「聞き取る」という行為についての走り書きがあったからです。それを目にしたために、「聞こえ」の話が出てきたのです。いかに「でまかせ」に記事を書いているか。とんだ楽屋裏の様子をお見せしてしまいました。

体系的、論理的、終始一貫、筋道を立てる……。そもそも、そういうことが苦手なのです。「つれづれなるままに」という自己弁護用の言葉が、頭に浮かびましたが、不謹慎ですね。反省します。ただ、あまり肩に力が入らないように、以上のような脱力系のスタンスで、このブログを書いていることを理解していただければ嬉しいです。

*

さて、ここで、あるなぞなぞを出します。お聞きになったことがあり、答えをご存知の方も多いと思います。

* ははに2度あうことができ、ちちに1度もあえないもの、なーに？

です。

わざと、ひらがなで書いたのは、本来、なぞなぞは、口承文学と同じで、口伝えに広まってきたものだからです。ところが、このなぞなぞは、一癖あって、「現在」声に出して言うとなぞなぞでなくなってしまうのです。歴史的経緯というものがからんでくるからなのですが、詳しいことは、のちほど述べます。

上のように、ひらがなを多くして書いたほうが適切である。そんな少々トリッキーな、なぞなぞなのです。さらにまた、その答えが曲者（くせもの）でして、答えを声に出して言っても、文字として書いても、現代の日本語を使っている人たちにとっては、ピンと来なくて、全然「答え」にならず、わざわざ説明してようやく「答え」だと納得してもらい必要があるのですから、困ったものです。

とにかく、なぞなぞの答えを言います。答えは、

くちびる

です。

このなぞなぞをご存知の方には、説明は無用なのですが、初めてお聞きになった方、あるいは、以前聞いたけど、どういう理屈で答えが「くちびる」なのかをお忘れになった方のために、説明をさせていただきます。と、書いたものの、ここで、あることを思い出しました。説明の前に、ちょっと脱線します。

そういえば、英語でも、くちびるを使ったトリッキーななぞなぞがあります。かなり前のことですが、学習塾で中学生に英語を教えていたことがあり、その教科書に載っていたものです。あっ、それなら知っている、などと懐かしく思い出すが、みなさんの中にいらっしゃるかもしれません。英語だし、だいぶ前のことなので、一字一句正確には覚えていませんが、次のようななぞなぞです。

* What flowers do you have in your face? (顔にある花は、なーに?)

答えは、「鼻＝はな」なんかじゃありませんよ。何しろ、英語なんですから――。nose
では、no でっ se。なんちゃって。失礼しました。

答えは、tulips = チューリップスです。s がついて複数形であるところが、肝心です。
なぜなら、two lips = トゥー・リップス、つまり、「上下に1つずつある、計2つのくち
びる」とほぼ同じ発音になるからです。ちなみに、米国系の発音だと「トゥーリップス」
みたいに聞こえますので、このなぞなぞはなぞなぞとして存在できますが、英国系の発
音だと「チューリップス」みたいに聞こえますので、ちゅっと苦しいなぞなぞになるよ
うです。

要するに、このなぞなぞは、だじゃれですね。こうした言葉の遊びを土台にしたなぞ
なぞは、日本語、英語を問わず、各言語にたくさんあるようです。「ただのうだつの上が
らない尻尾のないおサルさん」の脳の中で、なぜか大異変＝ズレが起こってしまい、「尻
尾のないおサルさん+ α 」＝「ヒト」＝「人間様」に進化したという、紙芝居的な「おと
ぎ話＝神話＝伝説＝仮説＝架設」を前提にすると、ヒトは「言葉＝言語」という、とて
つもない面白い道具を「獲得」してしまったのです。だじゃれは、そのとんでもない道
具に備わった数々の特性うちの1つから生じた「副産物＝刺身のつま」だと言えるかも
しれませんね。

*

話を戻します。

* ははに2度あうことができ、ちちに1度もあえないもの、なーに？

その答えは、「くちびる」でしたね。なぜでしょう？ それは、

* 平安時代にテープレコーダーがあった。

からです。というのは、半分ウソです。平安時代だったかどうか、その辺の記憶もあいま
いで、でまかせに平安時代と書いてしまったのですが（※テキトーで、ごめんなさい）、

とにかく平安時代あたりに、「はは=母」を「ばば」「ばば」「まま」「ぶあっぶあっ」か、何だったか忘れましたが（※きわめてテキトーで申し訳ありません）、現代日本語の「はは」と違って、上下のくちびるが触れる、あるいは、こすれるような発音をしていた証拠になるのが、このなぞなぞだという理屈らしいのです。ややこしいですか？ もっと簡単に説明します。

その前に、またもや、脱線させてください。ダジャレの虫がさわぐのを無視できないのです。では、いきます。

*「まま」は、「ばば」と「ぶあっぶあっ」して「はは」になり、いつか「ばば」になる。

失礼しました。

さて、

「ははに2度あうことができ、ちちに1度もあえないもの、なーに？——答えは、くちびる」という、ふるーい、なぞなぞが伝わっていた。なぜ、答えが、「くちびる」なのかが、今では分からなくなっていた。そこで、国語学者か言語学者か音声学学者か知りませんが、その道の専門家がいろいろな文献を調べたり、この国にある各地の方言なんかを研究しているうちに、

はひふへほ

を

ばびぶべぼ、or ばびぶべぼ、or まみむめも（「まみむめも」は昔からあったらしいから、それ「もどき」でしょうか）、or ぶあっぶいっぶうっぶえっぶおっ

みたいに発音していたらしいことが分かった。このあたりの記憶も、定かではありませんが、いちばん大切な点は外していません。以上の発音をする時には、上下のくちびるが触れ合う。これがポイントです。実際に、発音なさってみてください。ねっ、唇同士

が確かに触れ合いますよね。そういうわけで、

「ははに2度あう」＝『はは』と発音した時には、唇が2度触れ合う＝「母に2度会う」

の部分の謎が解けた。同時に、

「ちちに1度もあえない」＝『ちち』と発音した時には、唇が2度触れ合うことはない＝「父に1度も会えない」

の部分の意味も分かった。

ということらしいのです。

*

何という不正確な説明だ！ 実に、けしからん。だから、素人は駄目なんだ！

と怒っている玄人（※くろうと）の方々の声が聞こえるようです。

言葉や国語に関しては、いつもこんな調子ですね。つまり、「しろうと」は「正しいこと」を全然「しろうと」はせず、きわめてテキトーであり、一方の「くろうと」は「くろうと」して、「正しいこと」を「しろうと」に「しろうと」いう気持ちを起させて、いつの日か「美しい日本語」とやらをつ「くろうと」しているのです。

個人的な意見を申しますと、文化審議会国語分科会（※国語審議会の後釜）あたりに巣くっている「玄人」たちが、国民＝「素人」たちが払った税金を使って行っている苦勞は、ぜんぜん報われない、と思っています。税金の無駄使いです。ご苦勞なことですね。いや、本当に苦勞しているのは、玄人ではなく素人のほうなのです。素人が言葉＝国語を作るのです。玄人のお節介や指示や指導やお説教、まして命令など無用。これが

持論です。

で、例のなぞなぞですが、

平安時代のテープレコーダー

に相当する何らかの信頼できる「学術的な証拠」があって、答えの謎が解けたらしいのです。

なぞなぞの答えではなく、なぞなぞがどうしてなぞなぞなのかのなぞが解けた（※早口言葉みたいですね）。

ということです。よかったですね。以上の冗談みたいなエピソードもまた、

* 言葉を再現する

という大仕事の一部を成しています。

*

今挙げた例以外にも、いろいろな時代の「テープレコーダー」（※比喻ですよ）というか、仕掛けというか、ヒントみたいなものがたくさんあるらしいのです。それを玄人たちが利用して、平安中期に書かれたという

* 『源氏物語』の「当時の発音バージョン」のレコード

を作った。

実は、そんなことを今朝、歯を磨きながら、ふと思い出し、今この記事を書いています。CDではなくレコードと書いたことから、お分かりになるように、これもまた昔の話です。中学生か高校生だったころの記憶です。

『題名のない音楽会』というテレ朝の長寿番組がありますね。かつては長年、黛敏郎（まゆづみとしろう）という人が企画と司会を務めていらっしゃいました。もうお亡くなりになった方です。その黛氏が舞台（※あの番組は、どこかの劇場で収録されるという形式をとっていますね）で、言語学者だか国語学者の男性と、平安時代の装束に身を包み（※十二単（じゅうにひとえ）というのでしょうか）、髪型も当時のものを再現したらしく厚化粧の女性を紹介しました。

その女性が口パクだか、実際に声を出していたのか分かりませんが、何とも知れない妙な発音で、『源氏物語』の一節を朗読し始めたのです。驚きました。まさに、

平安時代のテープレコーダー

が録音した声を聞いているような錯覚に陥りました。その番組の中で、黛氏が『源氏物語』の「当時の発音バージョン」のレコードが存在することを教えてくれたのでした。なにしろとてつもなく長い物語ですから、一部だけを録音したレコードだと想像されますが、感銘を受けました。

すごいことをやっているじゃん！

と。

さきほど、少しだけ触れましたが、方言を専門に研究されている人たちがいて、全国各地の特に老人の語りを録音したり、現在では録画して、言葉遣いや発音・発声の仕方を記録しているとのことでした。

断片的な記憶ですが、奈良県あたりに、英語の th に似た発音をする地域があるとかあったとか、また、東北地方で英語の f に似た発音が残っているとか残っていたとか、そんなことを聞いた覚えがあります。

『平家物語』を「he - kemonogatari」(※「-」は伸ばして発音するという意味で使いました)ではなく、「fe - kemonogatari」みたいに発音するのだ—。

どこかで誰かが、そう言ったのを、耳が記憶しています。ちなみに、自分のような中途難聴者でも、耳の記憶つまり、聞いた音の記憶というものがあります。

*

お聞きになったことがある方も大勢いらっしゃると思いますが、この国の先住民であるアイヌの人たちの「言葉=言語」を聞き取って筆写したり、録音したデータがたくさん残っているらしいです。これもまた、「言葉を再現する」ためにどうしても必要なステップですね。これこそ、大変な苦労だと思います。アイヌの言語では文字が存在しないことを思うと、その苦労は想像を絶します。何しろ、ネイティブとしてその言葉を話している人たちは、いつか亡くなるのです。文字のように、残らないのです。

以上は、日本の話でしたが、「言葉を再現する」という作業は、世界各地で行われているようです。アメリカ大陸の先住民の言語の記録と再現がよく知られています。北米、主にアメリカ合州国(※このブログでは「合衆国」の代わりに、この表記を採用しています)では、先住民の諸言語の研究によって、かつて世界の言語学および文化人類学の「先進国」だった時期があった、と言われているそうです。

そうそう、忘れてならないのは、イスラエルで公用語として使用されている現代ヘブライ語です。これは、世界に散らばった民族が、「失われた」自分たちの言語を「再現し」復活させたという奇跡的な例です。

このように、

* 言葉を再現する

は、

* 言葉を奪われる

という恐ろしく、また悲しいことと表裏一体を成しています。恐ろしく悲しいだけでなく、広く深いテーマですね。でも、素人なりに、いつか取り組んでみたい、というか、考えてみたいと思っています。

09.04.20 言葉を奪われる

◆言葉を奪われる

2009-04-20 15:25:16 | 言葉

「国語とは軍隊を有する方言である」とか、「言語とは軍隊を有する方言である」というフレーズがあります。

前者はすんなり理解できますが、後者は何を言おうとしているのかが不明です。おそらく、翻訳されたフレーズなのでしょう。原文が何語なのかは知りませんが、英語だとすれば、language という言葉が使われていたのでしょう。米国などの学校では、日本で言えば「国語」の授業にあたる語が English ではなく、language と呼ばれていますから、上のフレーズは前者のほうが適切なのではないかと思います。

それにしても、うまくいったものです。言語と国家と「権力＝武力」の関係を簡潔に言い表していますね。事実確認をしていないので恐縮ですが、記憶では、あのフレーズは確か英国が出所ではなかったでしょうか。ご存知のように、英国の正式名は、「グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国」(= United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland = UK) ですね。

英語 = English とは、グレート・ブリテン島にあるウェールズ、イングランド、スコットランドのうちのイングランドの言語です。ウェールズにはウェールズ語、スコットランドにはスコットランド・ゲール語が、英語と併用して使われているらしいですが、それぞれの言語をネイティブスピーカーとして自在に使いこなせる人の数は減ってきているようです。英語の使用が圧倒的に優勢なのです。

グレート・ブリテン島の西に位置するアイルランド島の北部にある北アイルランドでは、アイルランド語とアルスタースコットランド語という言語が、やはり英語と併用される形で使われているもようです。

同じく島国である日本より少し狭い面積でありながら、英国では言語だけでもそんな多様性があるとは、驚きです。しかも、「イングリッシュ = 英語」自体に地方・地域によって方言がたくさんある。さらに英国では「階級」というものが依然として残っていて、その階級による「方言」差がある（※発音・言葉遣い・語いが異なる）というのですから、日本人にとって、そうした状況は、非常に理解しにくく、また体感しにくいですね。

いったい、どんな感じなのでしょう？ 何年も、そこで生活してみないと分からないのではないのでしょうか。以上のことを考えると、「国語（※\ [英国では\] 英語）とは軍隊を有する方言である」というフレーズの意味が、ほんの少しだけですが、分かったような気がします。

実のところ、あの国は、イングランドが他の国を武力で「征服」した結果、成り立っている連合国家なのです。そればかりか、英国では、現在、ヨーロッパ以外の文化圏、たとえばイスラム圏、アジア圏からの移民が急増しつつある。そう考えると、さらに英国の言語の状況を想像することが困難になります。

多文化および多言語国家

という状況は、日本人にとって実に分かりにくいですね。

*

舞台は英国ではありませんが、『最後の授業』というお話が、かつて日本の教科書や副教材に載っていました。小学校か中学だか忘れましたが、自分も授業で読まされた記憶があります。ドイツとフランスの国境を挟むバイリンガル地域で、独仏2つの言語のどちらを公教育の場で「国語」として教えるかをめぐっての話でした。もちろん、背景にあるのは、さきほどの英国と同様、軍隊＝武力＝権力＝統治＝政治です。

話の筋についての記憶があいまいなだけでなく、ある気になる点があったので、ウィキペディアで調べたところ、やはり複雑な話でした。詳細をお知りになりたい方は、どうか「最後授業」をキーワードにウィキペディアでの記事を参照なさってください。

ウィキペディアの記事を読んで、「ある気になる点」について、疑問がある程度解消されました。『最後の授業』という話が、きわめて政治的な側面を持っていて、フランス側の視点から書かれている。それを田中克彦氏の『ことばと国家』、そして蓮實重彦氏の『反＝日本語論』などが指摘し批判した。というような経緯についても、書いてありました。かつて2冊の本を読んだことがあり、以上の点が気にかかっていたのです。やっぱり、そうだったのか、という感じです。

*

話を変えます。

ある1つの出来事が起こり、その出来事を言葉に置き換えて「お話＝神話＝伝説＝フィクション」が作られる。これは、言葉を使用して生きているヒトにとっては日常的なものとみえますね。テレビや新聞やネット上で報道されるニュース（※もとは取材なり伝聞した結果の報告ですが）もそうですし、そのニュースを見聞きした人が伝言ゲームのように他の人に伝えていくこともそうです。うわさ話もそうです。

こう考えると、ノンフィクションとかドキュメンタリーという考え方が、非常にいかがわしいというか、不確かな土台に立っていることが分かります。フィクションとノンフィクションの区別すら、あやしいという極論も出てきそうです。そうした極論に従えば、

*ニュースもまた、フィクション＝虚構である。

ということになります。

個人的には、そうだそうだと大きくなすぎたくなります。ちなみに、英語ではニュースや新聞記事を story と呼ぶことがありますね。伝説も、ちょっとした長さの小説も story と呼ぶ場合があります。

*しよせん、みんなストーリーなのだ。

という感じです。

言えてませんか？ メディアリテラシーという考え方の根底にも、メディアによる報道が「作られたものである」という発想があるように思われます。作る＝捏造（ねつぞう）する＝でっちあげる＝語る＝騙（かた）る＝情報を操作する＝意図する＝誤解する＝曲解する＝言葉のひとり歩き……という連鎖が頭に浮かびます。何を言いたいのかと申しますと、さきほど挙げた『最後の授業』のように、

*ある出来事や現象を「物語る」ことは、大きな危険性＝賭けをはらんでいる。

ということです。

解釈とかメッセージの解読といった作業は容易ではない、ということです。その作業は、フィクションかノンフィクションかという、安易で短絡的な区別＝分類を超えた、不可能性＝可能性＝賭け＝挑戦でもあるのです。論文の書き方の指南書などで、よく

*「事実と意見を分けよ」

みたいなことが書いてあります。

そう書かざるを得ない事情は理解できますが、能天気な発想だなあと思います。せめ

て、「内緒の話だけど、これってほんとうは冗談なんだよ」というユーモアをまじえて書いてほしい。そう願っています。さもないと、読者が本気にしますよ。ぶっちゃけた話、事実と意見って、本当に分けられるのですか？

日本の数社の新聞を読み比べるだけでは、ピンときませんが、イスラム圏の電子版英字新聞と、たとえば米国の新聞の電子版で同じ出来事の報道を読み比べてみてください。事実と意見を分けることなど、とうてい無理＝「それこそフィクション」＝（笑）＝「ジャスト・ジョーク」＝「ガチョーン」ではないかと思うはずです。

またもや話が飛躍して、ごめんなさい。さきほどご紹介した『最後の授業』が、ある出来事＝事実＝虚構（※「小説＝フィクション」ですが、背景には別の「事実＝フィクション」があるらしいというほどの意味です）を語っていながら、「意見＝立場＝利害」の表明になっている。簡単に言うと、そういうことです。

*

ところで、このブログではやたら「＝」を使いますが、深い意味はありません。もちろん、「等価である」という数学的な意味など、全然ありません。得体の知れない存在である「言葉」を「＝」でつないで、「等価である」なんて荒唐無稽なことなど、あるわけがありませんもの。それこそ、「あり得ない～」です。

「＝」のイメージとしては、「言葉＝語」同士が保育園や幼稚園の子どもたちと同様に、手をつなぎ合っているさまを思い浮かべてください。一方が喜んで手を握っているのに、もう一方は「イヤだな」と感じていたり、先生に手をつなげと言われたから何となくつないでいる、くらいの気持ちで突っ立っている子どももいるでしょう。そんな感じです。

「＝」を介して並んでいる言葉の間の関係は、お読みになっているあなたの「思い」で自由に想像なさってください。「読む」という行為は、「書いたヒト」の「メッセージ」をありがたく「くみ取る」必要など全然ないのです。実際問題として、くみ取ることができるなどという発想自体が幻想なのです。

「＝」で、思い出しましたが、「AとB」という場合の「と」について、とっても興味があります。この「と」って、何なんだろう？ と、ずっと前から思っているのです。いつか、

この1語=1字について、考えていることを書いてみたいです。

ちなみに、「AやB」の「や」もありますね。こっちにのほうには、なぜかあまり関心がないのですけど。や、ですね。テキトーで気まぐれで。たぶん、これは一種の近親憎悪ではないかと自己分析しています。「と」の「端正さ」に比べて「や」は、きわめて「テキトーで、気まぐれで、でまかせ」っぽいのです。「テキトーで、気まぐれで、でまかせ」が大好きな者としては、かえって「や」に近親憎悪的感情を抱いてしまうみたいなのです。

*

話を戻します。

*国語とは軍隊を有する方言である。

というのは、よく考えるとすごく恐ろしいことです。具体的にいえば、

「きょうからは、この言葉（＝言語）を使え、さもなければ殺すぞ」

と脅迫するのですから。

と、言われても、ピンと来ませんね。自分もそう言われた経験がないので、想像するしかありませんが、自分の想像を超えた恐怖——それこそおしっこを漏らしそうになるような恐ろしい体験なのでしょうね。特にこの国の人たちには、なかなか理解できないフレーズなのではないでしょうか。

とはいうものの、「殺すぞ」と言ったかどうかは知りませんが、かつてはこの国は「きょうからは、この言葉（＝言語）を使え」と言う側にあり、実際にそう命令したのですよね。もう高齢になり少数ではありますが、日本語の読み書きや、あるいは話すことを覚えている人たちが、アジアや、オセアニアの上のほうや、南太平洋にある複数の国々に暮らしていらっやいます。現に生存なさっているのですから、その人たちの存在と、この

国が過去にその人たちに対して行った「教育」を、否定することはできないでしょう。

そう考えると、殴られたほうは覚えているが、殴ったほうは忘れていて、とかいうフレーズは、なかなか言えているなあと感心してしまいます。

* 国語とは軍隊を有する方言である。

とは、日本人にとっても、決して他人事（ひとごと）ではないのですね。また、

「きょうからは、この言葉（＝言語）を使え、さもなければ殺すぞ」

という命令が発せられる事態＝状況は、世界各地でこの時点でも起きつつあるのですね。そういう「話＝ノンフィクション＝フィクション＝ニュース」という伝言ゲームを通じて、知ることができます。言い換えると、

* 言葉を奪われる

という事態＝状況が日常である地域が、世界にたくさんある。そして、それは恐ろしくもあり悲しい出来事に違いないと想像されます。

*

きのうは、

* 言葉を再現する

について書き、記事の最後のほうで、

* 「言葉を再現する」と「言葉を奪われる」が結びついている

という意味のことを書きました。正しくは「言葉を奪われる」が先にあり、次に「言葉を再現する」という順番になります。

でも、自分たちが生まれ育った環境で使われていた言葉を、いったん「奪われ」、長い年月を経て、ようやくその言語を「再現する」という幸運に恵まれる人たちはばかりがいるわけではありません。歴史の本を読んだり、ニュースを見聞きしていると、むしろ、そうした幸運に恵まれない人たちのほうが圧倒的に多いような気がします。

*

ところで、みなさん。

* この国にも半ば言葉を奪われている状況にある人たちがいる

のご存知ですか？ その数は万単位でいるはずですよ。どうしてこのようなあいまいな言い方になるのかというと、ちゃんとした調査が行われていない、つまり信頼できる統計が出ていない。そもそも統計をとることがきわめて困難である。という事情があります。でも、その万単位の人たちが、言葉を半ば奪われていることは確かなのです。その多くは日本国籍をもつ人たちです。あなたの周りにもいる可能性は高いです。

* 手話は日本語とは違う。文法も異なる。

たとえば、分かっていただけでしょうか。

自分の場合には、手話が日本語とは異なるということを知ったとき、あまりにも不思議な話なので、しばらく頭が混乱状態になりました。不思議というか、それまで全然考えたことがないことなので、言われたこと自体が理解できなかったのです。

「手話」という言葉は知っていました。正確に言えば、見聞きしたことがありました。でも、空っぽの箱みたいなもので「手話」が現実には何を意味するのかは、まったく分かっていなかったのです。

テレビドラマで「ろう者」を主要な登場人物にしたものが放映されたことが、何回かありましたよね。また、公共放送であるNHKは、すべての国民に等しい放送サービスを提供する義務がありますから、毎日、手話ニュースの番組を設けています。

さて、たった今、「ろう者」と書きました。ここで、聴覚障害および聴覚障害者について、説明させてください。聴覚障害者とは、文字通り聴覚に障害を持っている「聞こえにくい」、あるいは、「ほとんど聞こえない」人たちを指します。

「ろう者」と呼ばれる人たちは、先天的に聴力が著しく低く、話し言葉を習得するのが「きわめて困難＝不可能に近い」人たちを、主に指します。と書いたものの、「聴覚障害・知覚障害者」と「ろう・ろう者」については、さまざまな定義や考え方があるので、それぞれの言葉をキーワードに、グーグルやヤフーなどで検索していただくのがよろしいかと思います。

話がややこしく、また広くなりそうなので、以下はあくまでも個人的な考えだと断ったうえで、先を続けさせていただきます。

*

数年前にNHKの手話講座を受講したのをきっかけに、手話および聴覚障害に関するいろいろな情報に積極的に接する癖がつきました。そうした中で、初めて知って驚いたことを箇条書きにします。

*手話は、日本語と異なる別の言語である。つまり、語順や文法や単語など、言語を成立させている体系や規則や要素がまったく異なる。

*手話は、世界共通などではない。単なる、ジェスチャーでイメージされがちなものとも異なる。

*日本で使われている手話にも「方言」がある。

*ろう者が日常生活で用いている手話と、手話ニュースで用いられている手話や手話講座で教えられている手話とは、異なる。

*ろう者が日本で生きていくためには、上述の2種類の手話と、日本語の、最低3種類の言語を習得する必要がある。これは、ろう者にとって著しく大きな負担になる。

*手話は言語であるため、それを使うことを制限されたり妨げられると、特に子どもの場合には知能の発達にまで影響をおよぼす。

*ろう児は、しばしば知的障害児や発達障害児と混同される。

*聴力が不自由であるなら、幼いうちから文字で日本語を教えればよいという考え方は、聴覚障害に対する無知からくる暴言＝妄言である。話し言葉を習得しかけてもいない幼児に、いきなり文字を教えるということは不可能である。

*ろう者にとっての母語に相当する手話は、主に聾（or ろう）学校というコミュニティで「こっそりと」使われながら存続してきた。

*2007年に、学校教育法改正により、従来の盲・ろう・養護学校を統合し、それぞれの障害の違いを事実上無視した形で「特別支援学校」ができた。官僚によってもっともらしい理屈がつけられたが、予算の削減が目的である。この新制度は、上記の項目から分かるように、手話を母語とするろうの児童・生徒には、きわめて不幸な事態をもたらしている。

*ろうの児童・生徒たちの聞こえ具合は、一様でなく、ほとんど話し言葉を聞きとれない者もいれば、補聴器を用いてかろうじて聞きとれる重度の難聴者もいる。

*従来、聾（or ろう）学校では、授業中での手話の使用を禁止し、日本語の話し言葉を、唇と口の形の動きを見て「読みとる」方法や、補聴器を用いる方法で習得させ、それと並行して日本語の話し言葉と書き言葉を習得させるという指導方針が実施されてきた。また、現在もほとんどの特別支援学校で実施されている。この指導法を「口話法」（＝「聴覚口話法」という）。

*ろう者にとっての「母語」である手話によって、教育を行う方法を「手話法」という。

*「口話法」と「手話法」は対立している。これは長年続いている、世界的な現象でもある。

*「口話法」は、ろう者には非常に困難な言語の習得法である。ろう者にとって「聞こえない」話し言葉を習得することは、「拷問」にたとえる者がいるほど、苦しく耐え難いものであるらしい。

*かつて聾（or ろう）学校がろう者のコミュニティの単位となっていたため、全国に散在していた学校によって手話は微妙に異なっていた。

*聾（or ろう）学校に通えなかった、あるいは通わなかったろう者は、家庭だけで通じる断片的な手話である「ホームサイン」を用いて家族内でコミュニケーションを行っている場合があった。

*手話言語学が存在する。

*手話にも言葉の遊びやダジャレがある。（※これを知った時には、びっくりしたと同時に、幸せな気持ちになりました。「ああ、よかった――。でも、どうやるんだろう!？」）

*米国では、全国にろう者のコミュニティが多数存在し、またその活動も活発で、大きな政治的力と社会的発言力も持っている。ろう者のための大学もある。

*フィンランドでは、フィンランド手話が公用語の1つとして法律に明記されている。つまり、フィンランド語や、フィンランドで話されている他の複数の言語と同様に、1つの別個の言語として正当な扱いを受けている。

ほかにもありますが、この辺でとどめておきます。

*

きょう、この記事で取り上げたいと思ったのは、以上のうちの、

*ろう者にとっての母語に相当する手話は、主に聾（or ろう）学校というコミュニティで「こっそりと」使われながら存続してきた。

と、

*従来、聾（or ろう）学校では、授業中での手話の使用を禁止し、日本語の話し言葉を、唇と口の形の動きを見て「読みとる」方法や、補聴器をもちいる方法で習得させ、それと並行して日本語の話し言葉と書き言葉を習得させるという指導方針が実施されてきた。また、現在も実施されている。この指導法を「口話法」（＝「聴覚口話法」という。

という事実です。

分かりにくい文ですよ。どういう状況を指しているのか、理解に苦しむのが当然です。

*「隠された事実」

みたいなものなのです。なにしろ、

* 「健康で文化的な最低限の生活を営む権利」

を保障した、日本国憲法の生存権に違反している教育を、国家が行ってきたのですから、きっと事実を「隠してきた」に違いありません。したがって、

* ろう者は、国家によって言葉を奪われてきた。

と言えます。

*

この事実を知った時には、非常に驚いたとともに怒りを覚えました。また、それまで自分がいただいていた

* 「言葉＝言語」に対する考え方を根本からとらえなおす必要

を強く感じました。自分は、いったい何を考えてきたのか？ 言語というものについて、とんでもない勘違い＝誤解をしていたのではないか？

* 言語をあまりにも狭く規定していた

のではないか？

手話を勉強し始め、手話に関する情報に敏感になって以来、自分の言語観は大きく変わりました。きのうの記事で触れたように、狭義の「言葉＝言語」だけでなく、広義の「言葉＝言語」を意識し、それを大きな意味での表象という考え方に重ねて、言葉＝言語＝表象を扱おうというスタンスをとるようになったのです。

ちなみに、英語では手話のことをサイン・ランゲージ＝ sign language と言います。

language は tongue と同様に「舌」を語源としています。つまり、話し言葉を前提としていますね。一方、sign という語はもともと「しるし」という意味から派生したものですから、意味は広く、また厚くなります。

sign を、ぜひ英和辞典で調べてみてください。なかなかミステリアスな語です。signal (=シグナル) も親戚ですし、構造主義言語学で用いられている、フランス語の「シーニュ」(signe) や「シニフィエ」(signifié)「シニフィアン」(signifiant) も親戚です。この「しるす」「しるし」に当たる sign と、日本語の大和言葉系の語である「かく」について、近々考えてみたい、そして書いてみたいと思っています。

さて、以上、書き連ねたことのうち、特に手話に関する記述では、事実誤認があるに違いありません。お気づきの点がありましたら、コメントをお寄せください。お願い申し上げます。

09.04.21 「事実＝意見」＝両方ともでたらめ

◆「事実＝意見」＝両方ともでたらめ

2009-04-21 16:40:50 | 言葉

* 金元工作員：金賢姫元北朝鮮工作員：金賢姫（キム・ヒョンヒ）元北朝鮮工作員：金元死刑囚：金賢姫元死刑囚：金賢姫（キムヒョンヒ）元死刑囚：金賢姫（キム・ヒョンヒ）元死刑囚：北朝鮮の元工作員で大韓航空機爆破事件実行犯の金賢姫元死刑囚：大韓航空機爆破事件実行犯の金賢姫（キム・ヒョンヒ）元死刑囚：大韓航空機爆破事件実行犯、金賢姫（キム・ヒョンヒ）元死刑囚：大韓航空機爆破事件実行犯、金賢姫（キム・ヒョンヒ）元北朝鮮工作員：87年の大韓航空機爆破事件実行犯、金賢姫元北朝鮮工作員：普通なら、〇〇さん、とか、〇〇氏で済むのにね。大変ね。（「09年3月12日をギャグる」2009-03-12 from「でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）」in『うつせみのあなたに』）

* 地方のニュースより：男は男性の右足をバールのようなもので殴りつけ、女に命じて

女性の右腕を鈍器のようなもので殴打させたもよう。(「続・2009年3月10日をギャグ
る」2009-03-10 from「でまかせしゅぎじっこうちゅう(前編)」in『うつせみのあなたに』)

以上は、以前開設していたブログから引用したものです。

さて、21世紀に入ってもう10年になります。現時点でみなさんがこのブログ記事をお読みになっているのは、インターネットというメディア=媒介=触媒があるからです。マスメディアやマスコミと呼ばれる「特権階級」が、「権力」という「特権階級」と野合したり敵対しながら作り上げてきた、「報道」という名で呼ばれている新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、書籍などの影はだんだん薄れてきています。

*

その一方で、上述の「報道」の代わりに、パソコンやケータイでアクセスできる「ネット空間」の中で、「データ=情報=記録」や「曲 or 書籍」や「意見=主張=感想」を、閲覧する、あるいはダウンロードする、という形で購入する、情報入手のあり方が日常化しています。

そうした、ヒトの歴史における、とてつもなく大きな変化の中で、個人的に注目していることの1つに、

*既存の約束事の崩壊

があります。

漠然とした言い方ですね。さまざまな思いが込められています。きょうの記事で問題にしたいのは、

*これまで「特権階級」だけが占有していた「情報=データ=記録」が、「特権階級」以外の人たちにもアクセス可能となり利用されるようになった。

という、よく見聞きする状況です。その状況を分類して、箇条書きしてみます。

(1) プロだけでなく、アマも、「情報＝データ＝記録」を世界に向けて発信できるようになった。

(2) アマ同士がつながって、大きな「流れ＝トレンド＝ブーム」を作ることができるようになった。

(3) 長く「プロ」＝「特権階級」が使用してきた約束事にとられない形の「情報＝データ＝記録」の「加工＝プレゼンテーション＝表現」が、「アマ」にも利用できるようになった。

(4) 発言力という点で、プロとアマの違いが鮮明ではなくなってきた。

という状況です。

どれもが、どこかで耳にしたり読んだりしたことのあるものではありませんか？ 以上の4つのフレーズを、言い換えてみましょう。各フレーズにある「プロ」と「アマ」という語のペアを、以下の7通りのペアで言い換えるのです。

* 「プロ」→ (1) 「特権階級」／(2) 「支配する側」／(3) 「多数派」／(4) 「強者」／(5) 「富める者」／(6) 「先進国」／(7) 「西欧」……

* 「アマ」→ (1) 「一般人＝庶民＝大衆」／(2) 「支配される側」／(3) 「少数派」／(4) 「弱者」／(5) 「貧しき者」／(6) 「開発途上国」／(7) 「非西欧」……

「プロ」対「アマ」、「特権階級」対「一般人＝庶民＝大衆」……という具合に、上下がペアになっています。簡単に言えば、下克上＝革命＝変革＝逆転＝「こんちくしょう」＝「そりゃないぜ」＝「かんげーねーだろー」＝「おい、きみたち、待ちたまえ」＝「問答無用！」＝「話が違うじゃん」＝「カラスの勝手でしょ〜」状況です。

*

ここで、冒頭に挙げた、*で始まる2つの文章というか、言葉のかたまりを再度ご覧になってください。最初のもは、2009年3月12日にネット上で読める複数の新聞社や通信社の電子版のニュースから集めたデータです。ある出来事があり、そのさいにその出来事に大きくかかわった人物をどのように表記したかに注目して、書き写したものです。再度引用します。

*金元工作員：金賢姫元北朝鮮工作員：金賢姫（キム・ヒョンヒ）元北朝鮮工作員：金元死刑囚：金賢姫元死刑囚：金賢姫（キムヒョンヒ）元死刑囚：金賢姫（キム・ヒョンヒ）元死刑囚：北朝鮮の元工作員で大韓航空機爆破事件実行犯の金賢姫元死刑囚：大韓航空機爆破事件実行犯の金賢姫（キム・ヒョンヒ）元死刑囚：大韓航空機爆破事件実行犯、金賢姫（キム・ヒョンヒ）元死刑囚：大韓航空機爆破事件実行犯、金賢姫（キム・ヒョンヒ）元北朝鮮工作員：87年の大韓航空機爆破事件実行犯、金賢姫元北朝鮮工作員：普通なら、〇〇さん、とか、〇〇氏で済むのにね。大変ね。（「09年3月12日をギャグる」2009-03-12 from「でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）」in『うつせみのあなたに』）

いわゆる「プロ」がある事実をどう報道したかの、ほんの一部を再現して並べて比較しただけですが、その言葉の羅列を眺めていると、いろいろな見方ができそうです。本来、

*ニュースは客観的に事実を報道するものである

みたいな暗黙の了解＝約束事があるようです。たいていの人は、そういうものだと思います。でも、冒頭という言葉の羅列をみただけで、「客観的に」も「事実」もが、いかにテキトーであるかが分かります。

ニュース記事でも、学術論文でもいいですが、言葉で何かを記述するさいには、まずセンテンスをつづるためのパーツである「言葉＝語」や言葉遣いや語句と呼ばれるものを選択しなければなりません。記事や論文の場合、「選択」とは、複数の可能性＝選択肢から1つあるいはせいぜい2つを選ぶことです。つまり、

*他の可能性を「排除」する

ことです。この「排除」し「選択」した時点で、「意見＝立場＝利害」を表明したことになります。

*

確認をしていないので恐縮ですが、韓国なり中国なり台湾なりのニュースや新聞記事では、上記の女性を表記するにあたっては、上記とは異なった表現になっていたはずで、同じ国でも、報道機関の姿勢によって、表記に違いもあったらと推測できます。まして、その内容の記述となれば、さまざまでしょう。今挙げた国の言語に詳しい方は、どうか確認なさってください。

中国、韓国で思い出しましたが、たとえば、この2国の政治家について日本で報道される場合に、以前は、漢字と原語読みを併記するかしないかについての約束事があったみたいです。

中国と日本の場合には、両国が勝手に自分たちの国の標準的な「読み方＝発音」をする。

一方、韓国と日本の場合には、それぞれが相手国の言語での「読み方＝発音」を「尊重する」。

確か、そんな具合だったらしいですね。だから、前者の場合には、新聞だと、漢字で書かれた人名をどう読んだらいいのかが分からない。後者の場合には、原語読みがルビで処理されていたり、()でくくられている。ということです。

現在では、中国の人名には中国語の標準語にあたる「普通話」(※でしたっけ?)での読みをルビや()で処理する新聞がある一方で、中国関係の記事を読もうとしても、人名や地名を何て発音するのが全然表記されていないために、その漢字をどう読んだらいいのかが分からず、自信をもって音読できない。つまり、「声に出して読みたい日本語」では書かれていない新聞もありますね。

あっちの話はカンケーないもん、声に出さなくてもケッコーという「投げやりさ」がにじみ出ていませんか？ 今述べたこと、つまり人名をどう表記するかといった「いろはの『い』」自体が、既に「事実」を伝える以前の問題として、「意見＝立場＝利害」の表明になっています。

*

「事実と意見を分ける」というフレーズの「いかがわしさ＝不可能性＝でたらめさ」は、国内の話題を扱うさいには見えにくいですが、以上のような「グローバルな」話題について話したり書いたりする場合には、はっきりとあらわれてきます。

この惑星にネットが張られているのが「現実」であるとするなら、国内だけで通じるレベル、つまり日本語に固有な情報処理法の通用する次元だけで、文化や学問や時事問題やスポーツなどを論じるわけにはいかなくなっているのです。さらに屁理屈をこねるなら、何語で書くのかが選択の対象になっても、何の不思議もないのです。グローバルな時代とか環境が実現しているというならば、言語の選択も当然視野に入ってくるはずです。

「ここは日本なんだから、日本語で書く（or 話す）のは当たり前でしょうが」

と言う発言があったとするなら、それはグローバルな見地からすれば、

「えっつ？」

というおびただしい数の反応を引き起こすはずです。

なぜなら、その発言が、世界的に見れば、

「特殊」

だからです。1つの国家に複数の言語で書かれた新聞や、複数の言語で話されているテレビやラジオの放送が存在するほうが、この惑星では

「普通」

なのです。ヨーロッパなり、東南アジアなり、中東なり、アフリカなり、南北アメリカ大陸なり、オセアニアなり、旧ソ連地域なりで、ラジオを付けてチューナーを回せば、さまざまな言語の放送が聞こえるのです。

米国でも、日本では考えられないほど、ラジオ（※テレビではなく）が日常生活で重要な役割を果たしているそうです。多民族・多文化・多宗教（※キリスト教内の宗派だけでも多数存在します）から成り立っているという事情があるからだけでなく、車社会がラジオを普及させているからだという説もあります。

一方、テレビにしても、ケーブルテレビのチャンネルの多さは3桁です。ジャンルが多だけでなく、さまざまな言語の放送があるからです。

*

以上のような状況は、実はあなたの目の前にあるパソコンで、すでに実現しているのです。ただ、それに気づいていないか、知識として分かっているけど、利用していないだけです。ウィキペディアで日本のタレントの情報を検索しているだけでは、ピンときませんが、たとえば「サッカー」を検索してみてください。左側に、ずらーっといろいろな言語が原語（※これまで見たことない文字もあります）で並びます。クリックすれば、その言語を使っている人たちが編集した「サッカー」についての情報が書かれています。

そういえば、あの外国語版の数々を日本語版の外国語バージョン（※忠実に翻訳されていて、対訳で読めるという意味です）だと勘違いしている人がいて、びっくりしたことがあります。

あれは、日本語で読めるものとはまったく別物と考えた方が正解だと、念のために書き添えておきます。日本語で編集されたものとは異なる視点から、「事実」を記述してあるのです。そう考えると、「事実」と呼んでいるものの曖昧さ＝テキトーさが、ある程度分かるのではないのでしょうか。

あなたが一番興味を持っているテーマや物事——たとえば「サッカー」でも「投資」でも「音楽」でも「環境」でも「ハムスター」でも何でもいいです——ウィキペディアで検索して、他の言語のページを意味が分からなくてもいいですから、順々にクリックして覗いてみてください。「グローバル」とか、「21世紀」とか、「ネット社会」とかが、知らぬ間にあなたの目の前に実現していることが、「見える化」されると思います。

英語や他の言語を勉強されている方なら、グーグルやヤフーの英語あるいは多言語検索用バージョンのほうで、英語や他の言語の単語をキーワードにして、自分の興味ある、あるいは、よく知っている話題について検索してみてください。きっと、英会話学校へ行く気持ちが失せるでしょう。

* ネット社会で大切なのは、まず外国語を「読み書きする力」をつけることだ

と実感できるはずですよ。「話す力」は、対面での場面であれば、ボディランゲージを利用すれば補える部分が多いです。でも、読み書きだけは、身ぶり手ぶりではフォローできません。おびただしい数の画像も、ネット上で流通していることは確かですが、

情報を得るなら、やはり、文字

ですよ。もちろん、翻訳ソフトを利用する手もあります。使ってみた感想を申しますと、あれはまだ不完全です。理解するより、誤解するほうが多いです。犬が西を向けば尻尾は東を向く、といった簡単なことには、使えそうですけど。

それで思い出しました。みなさんが現時点で、パソコン、あるいはケータイの画面でお読みになっているブログについて考えてみましょう。英語のブログサイトに入って、翻訳ソフトを使ってみることをお勧めします。ソフトが使いものにならないことがよく分かりますよ。

*

で、ブログですが、その盛況ぶりは驚くべきものがありますね。いったい、日本だけでも何人の人たちがブログを開設し、ほかの人たちのブログを読んでいる、または見ているでしょう。百万とか千万単位の数に違いありません。それに、掲示板、YouTubeなどの画像・動画サービス、SNSとそのたぐいのサービス.....。

新聞、放送（※テレビ・ラジオ）、出版といったギョーカイの影が薄くなるもの当然です。これって、これまでの少数の特権階級である（※いや、そうであった、と過去形で言うべきでしょう）

「プロ」にとっては「危機」

かもしれませんが、大多数を占める

「アマ」には「チャンス」であり「天国」

です。

さきほど書いたことを繰り返します。

簡単に言えば、下克上＝革命＝変革＝逆転＝「こんちくしょう」＝「そりゃないぜ」＝「かんけーねーだろー」＝「おい、きみたち、待ちたまえ」＝「問答無用！」＝「話が違うじゃん」＝「カラスの勝手でしょ～」状況

です。

嬉しいですね。チャンスは見ているだけじゃ、もったいないです。チャンスを生かさないやって思いませんか？ それだけではありません。

* 事実と意見は分けられる。

が大ウソだということが、暴かれた＝ばれちゃったのです。つまり、

* 「事実＝意見」＝両方ともでたらめ

とでも書くほかしかない、

* きわめてテキトーな＝混沌とした＝めちゃくちゃな事態こそが、ホントーなのだ。

という事態が、実現してしまっているのです（※ところで、このブログでの「＝」の使い方については、きのうの記事をお読み願います。お読みになりたくない方に申し上げますと「テキトーにつないでる」だけです）。以上のことを、簡単に申しますと、

* 事実と意見は分けられる、なんて大ウソだ。

が起きているのです。「特権階級」＝「プロ」が占有してきた約束事がことごとく崩壊する場が、ネットを通じて無数にこの惑星に広まりつつあるのです。

でも、あくまでも、以上の「約束事の崩壊」＝「支離滅裂状態」＝「しょうきのさたでないと（＝正気の沙汰でない＝笑気の Saturday Night）＝意味なし＝ナンセンス」は、晴れて脳内で「ズレ」を起したために「うだつの上がらなかった尻尾のないおサルさん」から「尻尾のないおサルさん＋ α 」に昇格した「ヒト＝人間様」だけにとっての「実に困った」＝「なかなかスリリング」＝「狂え、狂え」＝「きわめて楽しい」状況にすぎません。

もっとも、その影響はさまざまな形で（※たとえば、地球温暖化、化石資源の枯渇、焚き火、殺虫剤散布、ウズラ処分、沈黙の春、金魚 or イヌ大百科の出版など）、他の生き物たちにも大きな影響＝被害＝災厄を及ぼしているに違いありません、でも、それは、こ

ここでは考えないことにしましょう。

*

話を戻します。さきほどの「プロ」と「アマ」について (1) から (7) のペアを挙げて、その直前の (1) から (4) の下克上の状況を説明しようとした個所に戻ります。きょう、特に、みなさんと一緒に考えてみたいのは、(7) なのです。

* 「西欧」 vs. 「非西欧」

イメージしているのは、

* 「経済的」に力をつけつつある中国とインドよりも、「文化的」な自信を取り戻しつつあるイスラム圏

です。中国とインドは、「西欧的な幸福」である市場経済＝資本主義にかなりほれこんでいるようですが、イスラム圏は、そうでもなさそうです。確かに一部のイスラム圏にある国家で石油によって潤っている一部の「上流階級」＝「ほぼ王族」はいます。でも、それは例外中の例外です。

あとで触れるつもりですが、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というブログを開設していたころには、気を紛らわせるために、医師の処方してくれたお薬で薬漬け状態になりながら、パソコンで電子版のニュースばかりを見ていました。で、英語が全然得意ではないのに、英語のニュースも「斜め読み＝想像読み」していたのです。

その中で、中東およびイスラム圏の新聞の英語版なるものを集めたサイトがあり、一時、読みふけていました。そのころは日本語の新聞のニュースもたくさん読んでいたので、「ああ、あのことが書いてある」みたいな感じで、筋がつかみやすかったのですが、論調が全然違うのです。

みなさんお馴染みのアルジャジーラの論調などは、穏健派です。多くの論調が、きわ

めて過激なのです。「文明のガチンコ」だか「衝突」だか「ガッチントン」だか、そんな言葉が頭に浮かびました。ひょっとして、「ソフト・パワー」なんて出る幕じゃ「ナイ」のとちやうか、とも思いました。

*

この国の周辺にある複数の国々はこの国の状況を例にとると、分かりやすいかもしれませんが。はっきり言って、この国は、近隣諸国と仲良しだとは言えませんよね。で、時々テレビのニュースなどで、そうした国々の政治家の発言や、そうした国々の放送局のアナウンサーが読み上げているニュース原稿の内容を聞くことがあります。

そんなとき、むっときませんか？「何を言っているんだ！！」って感じです。それと似ています。いや、それより、もっと事態は深刻そうです。「こりゃ、コミュニケーションなんて無理だわ。まして、仲よしになるなんて……」という印象を強く抱きました。

あっ？ と、わざとらしく気づきましたが、冒頭に挙げた2つめの引用を忘れかけていました。実は、あれは、「地方のニュース」などではなく、ギャグとしてでっちあげたものだ、ということをここで白状いたします。ごめんなさい。「こんなことを書きました(その2)」2009-04-18 in『うつせみのあなたに』というトホホな記事で、告白＝弁解しましたが、一時的に「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というタイトルのブログを書いていたころは、今もそうですが、かなり精神的に「あやうかった」のです。「うつのだん底」っていうヤツです。

そのころを思い出したくないので、それはそれで忘れろとして、上記の「地方のニュース」みたいな新聞記事やニュースを見聞きなさったことがありませんか？ 再度引用します。

>*地方のニュースより：男は男性の右足をバールのようなもので殴りつけ、女に命じて女性の右腕を鈍器のようなもので殴打させたもよう。(「続・2009年3月10日をギャグる」2009-03-10 from「でまかせしゅぎじっこうちゅう(前編)」in『うつせみのあなたに』)

悪者＝加害者は、いつも「男 or 女」。いい人＝被害者は、いつも「男性 or 女性」。そ

のうえに、ニュースの癖にバールの「ようなもの」とのたまう、「客観的事実に基づいた報道」の、きわめてテキトー＝芸なし＝「でたらめ」ぶり。みなさん、どうお感じになりますか？ ニュースがあれば許されるなら、このブログも許されると思います。あんな感じでオーケーなら、こんな感じでもオーケーではないでしょうか？

*

くくだと書いてきました。何を言いたいのかと申しますと、ネット社会は、グローバルな規模で、

* 「プロ」と「アマ」の間での、下克上＝革命＝変革＝逆転＝ CHANGE = CHANCE

を実現しつつあり、文化的には、

* 「事実＝意見」＝両方ともでたらめ状況

を加速化させていて、それと直接的 or 間接的に結びつく形で、文明的には、

* 「文明のガチンコ」だか「衝突」だか「ガッチントン」という事態

の到来とその下地を着々と準備しつつある。ということなのです。

* ヒトは新たな「狂い」＝「脳内でのズレ」の時期を迎えつつある。

とも言えそうです。

そうなると、「何が正しいのか、何が真実なのか分からない」とお感じになった方、あなたの現実認識は、すごく「正しく」「真実」であると思います。おちよくなってなんかいません。本気です。正気とは申せませんが、本気です。

ここまでお読みいただき、どうもありがとうございました。

09.04.22 「人間＝機械」説（1）

◆「人間＝機械」説（1）

2009-04-22 16:41:23 | 言葉

きのうの記事の中で、最近英語で書かれたブログを読んだことと、そのさいに翻訳ソフトを試してみた経験について少し触れました。翻訳ソフトが英語で書かれたブログを翻訳するには使いものにならない。そんな結論も出しました。説明不足でしたので、まず、再びその経験について書きます。きょうは、

*言葉を作る

というテーマで記事を書くつもりなのですが、それとも大いに関係があるからです。さて、なぜ、わざわざ「英語で書かれたブログ」と限定したのかというと、英語で書かれたブログでは「アマチュア＝素人」によって書かれているものが大部分を占めるという事情があるからです。

きのうは、ネット社会の実現によって、この国でも「アマ」と「プロ」の間で「下克上」が起りつつあり、また、「アマ」と「プロ」の境を定めることが難しくなっている、という現象についても触れました。

そもそも「プロ」と「アマ」とは、どちらがうのでしょうか？「プロ」はある作業で金銭的な利益を享受している人たちで、「アマ」はそうではない。「プロ」は特殊な「スキル」を持っているが、「アマ」は持っていない。「プロ」には社会的影響力があるが、「アマ」

にはない。など、いろいろ頭に浮かびます。ここでは、「プロ」と「アマ」との間にある多くの違いのうち、

* 「プロ」とは、これまで長く続いてきた「約束事」を守ろうとする人たちであるのに対し、「アマ」とはそうした「約束事」を無視したり、知らなかったり、あるいは、そうした「約束事」に反抗する人たちである。

という点に注目して、話を進めます。

*

で、ブログですが、このブログもそうですが、「アマ」によって書かれています。記事を書くことで、金銭的な利益を享受してもいなければ、一時期、ある種の売文業に携わった経験が多少あるにせよ、文章を書くという作業で特殊な「スキル」を持っているわけでもありません。また、社会的影響力など全然ない者が、この文章をつづっているのです。それを、みなさんが、今お読みになっているわけですね。

さらに（※これが大切な点なのですが）、「プロ」の世界ではどうてい受け入れられないような、「＝」や「or」や「*」や「感字＝当て字」や「頻繁な改行」や「(裏付けなど全然ない) でまかせ」や「テキトー」や「だじゃれ」や「頻出する誤字・脱字」や「首尾一貫性の欠如」や「文章作法からの逸脱」に満ち満ちた文章、つまり、「プロ」たちの間で、これまで長く続いてきた「約束事」とはかけ離れた文章を、みなさんは今お読みになっているわけです。

ですから、さぞかし読みにくいでしょう。みなさん、ごめんなさい。とお詫び申し上げます。

*

とはいうものの、このブログを書くにあたって、自分なりにスタンスというか、ポリシーみたいなものがあることは確かです。弁解させてください。このブログで記事を書く場合には、

「正確であること」

を心がけております。「何が、正確だ。冗談は顔だけにしてくれ」とお思いになったり、「ははは！」などと、どうか、お笑いにならないでください。

本気なのです。詳しく申します。

事実に正確である

という意味ではありません。そもそも

「事実」というものがあるのかどうか、

自分には分かりません。「事実らしきもの」があったにせよ、それを「認識する」自信もありません。以上が大前提としてあります。

したがって（※または、しかし）、

「自分の考え」を文章にすることについては「正確であること」を心がけよう

と思っています。「自分の考え」というものについても、実は、よく分からないのですが、「自分の」という言葉が付いている限りは、その「考え」なるものについて、1匹のヒトとして責任をとろうと思っています。

ただし、「自分の考え」を「正確に書きあらわそう」と努力すればするほど、世間で呼んでいる「正しい基準」とか「正しい文章」とかけ離れていくことは、ひしひしと感じています。

*正確に書こうとすればするほど、正しくなくなっていく。＝正確に書こうとすればするほど、とちくるってくる。

そんな感じなのです。分かりにくい弁解になりましたことを、お詫び申し上げます。とはいえ、この文章のスタイルを変えることは、これから先、おそらくないと思います（※ただし、小説を書くさいには、もったきどって書きますので、例外ですけど）。何か思うところがあって、自主的に「文体」＝「書き方」＝「表記法」が変化することはあるかもしれません。

でも、誰かに注意されて不本意ながら書き方を変える意思はありません。そんな事態が起これば、ブログじゃありませんもの。公開、つまり、他人に読んでもらうことを前提としていながらも、ブログはあくまでも自由で楽しいものであるべきだと思っています。不自由な気持ちで嫌々書くブログなんて、ブログじゃありません。侮露愚です。

*

ブログを読むだけでなく、ご自身でも書いていらっしゃる方にお尋ねしたいのですが、そうお思いになりませんか？「だめだめ、そうじゃない。ブログつーのはなあ、こう書くんだよ。どれ、添削してやる」とか、「なんだい、こりゃ？書き直し！」なんて他人から言われるなんて、イヤですよ。でも、「プロ」の世界、たとえば、新聞社や出版社や物書きのギョーカイでは、先輩だの編集長だの編集主幹だの上司だのチェッカーだの校正者だのその道の達人だのお局だのボスだの……がいて、偉そうに、新入りだのべっほこだの駄目なヤツだのを監督し指導するのです。

あー、イヤだ。「アマ」にあまんじます。いや、甘んじるなんて、弱気じゃだめですね。「プロ」がぐいぐい押しつけま「くろうと」する掟（おきて）＝約束事なんか「しろうと」いう気持ちなんて、こちとらには全然ないよー、という感じですか。

悪態はこれくらいにして、軌道修正をします。翻訳ソフト（※ここでは、ウェブ上で誰もが入手できる簡易版のソフトに限定して話を進めます）がある程度「使えるなあ」と感じるのは、電子版の新聞記事です。2つの理由があります。

(1)「プロ」が書いているからです。読みやすく(※センテンスが短い、たとえ長くても、接続詞を「適切に」使用しているという意味です)、誤字脱字もほとんどなく(※新聞や通信社が発行している「用語の手引き」とか「用字用語集」の表記法に沿っているという意味です)、文法的にも「正しい」(※個人的には大嫌いな言い方です)文章が書かれているからです。

(2) 翻訳ソフトが「お馬鹿さん」だからです。ここでの「お馬鹿さん」の意味は、5つくらいあります。(1) 教えられたことしかできない。(2) 融通がきかない。(2) 想像力がない。(3) 創造力がない。(5)「約束事=掟」以外のことに遭遇するとキレるか、または、すねる。

何ごとも、ものは言いよう。上の(2)の文章をポジティブに書き換えることもできます。あまり乗り気はしないのですが、しぶしぶ書き換えてみると、

(2) 翻訳ソフトが「お利口さん」だからです。ここでの「お利口さん」の意味は、5つくらいあります。(1) 教えられたことを忠実に実行する。(2) 勤勉で不平不満を言わない(=疲れることを知らない)。(3) プログラムにそって作動する。(4) 余計なことをしない。(5) 作業の対象に「誤り」があった場合には、きわめて「適切に」処理する。

くらいの感じでしょうか。

*

もっと楽しい話をしましょう。

英語のブログを集めたサイトを検索すると、それはもうびっくりするほどの数のブログがネット上に存在することが分かります。日本語で書かれたいろいろなブログを読むだけでも面白いですが、世界レベルになるとそれこそ多種多様でめまいを起こしそうになるほど楽しいです。英語なんて、単語を拾って読んで、勝手に内容を想像する=でっちあげて自己満足する。それでいいのです。英語を読むのが面倒なら、画像=写真のいっぱい載っているブログだけを覗けばいいのです。

* 玉石混交

という「イヤな」というか、人を馬鹿にした、きわめて主観的で独断的な言い方がありますね。一言でいえば、

* 「差別」

です。主観的で独善的なのはヒトの特徴ですから、それはそれで仕方ないのですが、許せないのは、「玉石混交」と口にしたか書いた瞬間に、自分がお立ち台の上か、ひな壇の最上段に立ったような尊大な気分になる人がいることです。「玉」と「石」というものが客観的に存在し、自分がそれを客観的に見分けられる特権的な位置にあるという錯覚に陥っている。それなのに、その錯覚にまったく気づいていない。そんな鈍感で厚かましい人が、よく口にするのが「玉石混交」という言葉です。

ついでに悪態をつかせていただきますと、「天才的」とか「あいつは天才だ」という言い方もそうですね。「天才的」と口にするからには、「天才」と「天才でない」を見分けられる「天才＝類まれな才能」が備わっていなければならないはずなのに、どうもそうとは思えない人が、よく口にしますね。あれも、錯覚に基づく鈍感さの表れではないかと思います。身の程をわきまえて「あいつはすごい」くらいで、やめとけばいいのに……。

*

で、「玉石混交」ですが、ネット上の「データ＝情報＝記録＝報告」について論じる場合に、よく見聞きする言い方ですね。たいていは、「プロ」を自称する人たちが自分を棚に上げて使います。あれって、危機感と焦りと嫉妬とを取り繕い、冷静さを装ったヒステリーを抑え隠すための自己暗示のツール＝気休めのフレーズ＝おまじないの1つだ、と解釈しております。またもや、悪態になりましたので、軌道修正いたします。

で、英語で書かれたブログですが、たとえば、次のような文章にお目にかかれます。

yesterday i went to the mall nearby and bought a new radio. here's its photo. don't u think it's cool? i happened to hear obama's address. i felt great listening to him thru

the radio waves.

ブログで書かれている英語の文の特徴を誇張するために、実際に書かれていたものに少しだけ手を加えましたが、以上のような感じです。「普段、よく目にする」(※「正しい」とは言いません) 文だと次のようになります。

Yesterday I went to the mall nearby and bought a new radio. Here's its photo. Don't you think it's cool? I happened to hear Obama's address. I felt great listening to him through the radio waves.

(きのう、近くのショッピングセンターに出かけて、あたらしいラジオを買いました。その写真を載せておきます。カッコいいでしょ？ そのラジオをつけてみたら、たまたまオバマ大統領の演説を放送していました。電波を通して大統領の声を聞いたなんて、サイコーの気分でした。)

大文字小文字の区別がない。省略したスペリングを使う。この2つの特徴だけでも味わってください。以上の例をみれば、翻訳ソフトが「英語で書かれたブログ」を相手にしては「使いものにならない」という意味がお分かりになると思います。

逆に「使いものになる」のは英語で書かれた「電子版の新聞記事」だと、上で書きました。一口で新聞記事といっても、書き手や、新聞社の方針がありますね。

プレーン・イングリッシュ (plain English)

と呼ばれる、1センテンスが短く、複雑なセンテンスを使わず、難しい単語をなるべく用いないで書かれた記事がある一方で、意識してちょっと凝った文体で書くこと売りにしている記事があります。前者のほうが翻訳ソフトとの相性がいいみたいです。もっとも、

*英語のネイティブ・スピーカーにとって「簡単な」単語や語句は、日本語の大和言葉をひらがなで書くのに似て、多義的になるために、かえって「難しい」単語のほうが、日本語の漢語系の言葉を漢字で記すのと似て、意味が何通りにもとれるという「ややこし

さ」を、免れることができる。

という、ちょっと「ややこしい」問題もあります。

以前に「見えないものを見る」2009-01-08 という記事でも触れましたが、短い単語＝簡単な単語＝ゲルマン系の言葉ほど意味が多いのが、英語の特徴だからです。翻訳ソフトは、難しい単語＝長い単語＝ビッグワード＝ラテン系の言葉に強いのです。そうした事情もまた、「アマ」が自由自在＝勝手気ままに書いているブログの文章が、翻訳ソフトには馴染まない原因の1つになっているように思います。

*

「英語で書かれたブログ」について、ぜひ、付け加えておかなければならない大切なことがあります。

*ネイティブ・スピーカー以外の膨大な数の人たちも、英語でブログを書いて世界に発信している。

ということです。

日本人も多数いますよ。「ブローケン・イングリッシュ」という、これまた差別的でイヤな言葉がありますね。文法的に正確ではない。言葉遣いが正しくない。変だ。文章の流れが論理的でない。といった罵倒を短く言い表したのが、「ブローケン・イングリッシュ」です。

このトピックについては、「ピジン言語」と「クレオール言語」という考え方を紹介しながら、後に詳しく述べます。ここでは、英語のネイティブ・スピーカーではない人の書いた英語を馬鹿にしたり、卑下するのはきわめて失礼だし、いわゆる「グローバル化」という既実現化している状況においては、英語だけでなくあらゆる言語において、

*ネイティブ・スピーカー vs. ノンネイティブ・スピーカーという図式は、意味を持たな

くなってきている。

と指摘しておくだけにしておきます。

要するに、気にしないでいい、ということです。「ある程度」通じればいいのです。そもそも言語において「完璧」なんてないのです。この国に、「完璧に」日本語を読み書きできる人なんていますか？ いませんよね。そもそも「完璧な」日本語ってありますか？ ありませんよね。「幻想」だから存在しないのです。

でも、その「幻想」をよりどころにしているものがあり、その「幻想」をよりどころにしている人たちがいるのです。後ほど取り上げますが、ある種の「機械」と、それを作ろうとしている人たちです。「幻想」と「機械」についてはさておき、以上のことから、英語で書かれたブログが翻訳ソフトと相性が悪い、さらに別の理由があることがお分かりになったと思います。

*

で、その翻訳ソフトですが、ネット上で無料で利用できる簡単なものもあれば、有料、しかも高価なソフトもあります。使った経験はありませんが、値段が高いほど、性能が高いという意見を聞いたことがあります。

さて、翻訳ソフトのほかに、機械翻訳という言葉をお聞きになったことがありませんか？ その道の専門家は、機械翻訳という語を使っているようなので、以後は「機械翻訳」という言い方を用いて話を進めます。「ソフト」に比べて重量感＝存在感のある言葉ですね。

この機械翻訳を行う主役がコンピューターという機械であることはご承知の通りです。コンピューターや機械工学の専門家つまり理系の人たちと、言語学や論理学などを専門に研究している文系の人たちが力を合わせないと、なかなか使い勝手のいい翻訳マシンはできないみたいです。翻訳マシンの開発が、人工知能（A I）の開発とも大いに重なることは、容易に想像できますね。何しろ、

* 「言葉＝言語」を読み・書き・話し・聞く機械を作る

ことが目標なので、思考するも視野に入ってくるはず。

いずれにせよ、ヒトはとんでもないことをやり始めたものです。翻訳マシンにしる、人工知能にしる、根底となるのは、

* ヒトを機械に「なぞらえる」＝「たとえる」＝「こじつける」という考え方＝作業

です。

これから話題にしようとしている機械は、いわば「比喩の産物」＝「比喩の実現化」なのです。話が大きくなってきました。この続きは、次の記事で書きたいと思います。もちろん、冒頭に挙げた、本題の、

* 言葉を作る

についても書くつもりです。

では、また。

09.04.23 4月23日にギャグる

◆ 4月23日にギャグる

2009-04-23 11:23:14 | 言葉

【きょうは、抑うつ状態がひどいため、久しぶりに「でまかせしゅぎじっこうちゅう」をして、気晴らし＝うつへの対処をしたいと思います。きのうの記事の続編「人間＝機械」説(2)」は、うつへの対処が済んだところで、書く予定です。「だれも、あんたに書いてくれなんて、頼んじゃいねーよ」ああ、幻聴！ 気にしない、気にしない。】

【注：この記事が書かれた頃の時事や世相を思い出しながら、お読みください。】

■政局編（テーマ：辞めるの？ 辞めないの？：サブテーマ：世襲）

*「おれはオトコだから、♪さらば並みだ（＝さらば同然＝おさらばして当然）と言おう。なあ、にしかわくん（注：ゆうせい）！」 by もりたくん：てなことには、ぜんぜんなりそうもない。

*「十代からあの髪型って、すごくない？」「○らかしら、それとも、しょく○○かしら？」「どっちにしても、お金がかかったでしょうね。いろんな意味で、偽装には、お金がかかるから」「だから、しがみついているのよ。元とらなきや。確か、ここんとこ、タレント業はしてなかったんでしょ。いろんなところに、借りがあるはず。これからが稼ぎ時よ」「それにしても、皺だけは隠せないよね。笑うたびに、すごまれているような気がするのよ、わたしだけ？」「そうそう、こわいこわい。ハイビジョンで見たとき、思わず目を覆ったわ。これでも、むかしはファンだったのよ」「年相応とか、自然体っていうのが、いちばんよね」

*告発へ：もりけん、なかなかやめんけんのう、そのうち、やめけんのお世話になるのかのう？

*ちば、けんも、しも：やっぱ、はまこーしかおらん。

*問題：次の感字を読みを書け。：蛾目津胃利痔腸利痔父子輪辞目田毛度、安何出巢魔瀬鱈、阿寒憎。：（解答：がめついでりじちょうりじふしはやめたけど、あんなんですませたら、あかんぞう）

*やめない一郎、やむところを知らないイチロー。

*まだ、やめていなかったの？ あんなことがあったの「にかい」？「いちろう」並みだね。：以上、総選挙前「にしまつ」することになっている cocksuck 捜査での、じルート、みんルートの現状を総括。

*ハットトリック兄弟（注：dove）の心理分析：兄：屈折したグランパ&ファザコン：いちろう離れができない。特に威ばったいちろうに執着。：弟：屈折したグランパ&パパ自己同一視：かつての「しげる→いちろう」の再現を夢見る（注：戦後史参照）。「あんなのが、今、やってるんだ。次はおれしかいない」と、かくぎで横目。

*ハットトリックの兄はいいとして、同じ民のかんは？：あれは単なる「アラカン」（注：還暦、キミマロぎゃぐ、アラシ）、略して「アカン」。その座に「なおと」どまるつもりでいる。

*あべ、まえはら首相で日米関係OKだって？：「あれ、Mさんて、とっくに自に鞍替えしてるんじゃないの？ まだ、民？」「そう、だからあの話は「まだ見ぬ（ん）」夢ってやつ」「それにしても、Aさんて厚かましいこというのね」「そりゃ、じいちゃん譲りの毛の生えた「しんぞー」の持ち主だもん」「へえー、あんな顔して」「しょうわのよーかいの血を引いているから、へいせいのよーかいを目指しているのと、ちゃうか」「で、また、やって、また、さじを投げるわけ？」「銀のさじをくわえて生まれてきたさかい、しょうがないわ」「ところで、Mさんも、づ〇かしら、それとも、〇〇〇もうかしら？」「びみょうなところやなあ。いろんな意味で偽装には、カネがかかるからなあ。進退これきわまつことは確かやな。今度、ハイビジョンに映ったとき、よーく観察しとくわ」

*世：世を

襲：襲う毒

*襲名：落語家、歌舞伎役者、〇〇〇、せいじか・・・

*二世うようよ：偽ものだらけ：三世うようよ：酸性雨並みの災厄：四世うようよ：よも

すえ：五世うようよ：こうなったら、もう豪勢な王朝政治、ぎょうさんカネかかるでー、みんな税金やでー

*♪ やめろと言われても（♪ひできい！）、ASOUかい、わかった、なんて、UOSA おうしねーぞ。べらんめー。

*「ストップ・ザ・サトー」（注：A作、B作に非ず）ってあったなあ。懐かしいなあ。そういえば、今、「ストップ・ジ・アソー」（注：不要）って、誰も言わんなあ。

*うえより、古い話。いわゆる「バカヤローかいさん」（注：よしだないかく）ってのもあったなあ。懐かしいなあ。そういえば、今、「あほーかいさん」（注：不要）って、ことになる気配ないなあ。

*支持率微増で、浮かれ「たろう」、はしゃぎ「たろう」で、まわりがハラドキ。：お義理の肩たたきご祝儀なのに、ああ勘違い平行棒。民意と交わる可能性はゼロ。

*核には核：「角（注：ウイスキー）には角煮（注：酒の肴）って聞こえたけど、あんた、まだ、いたの？ ところで、お酒断ったの？ 辞任どころか辞職すべきだったのよ。なにしろ、お国に大恥かかせたんだから。罪は深いわよー。話をそらせば、済むってものじゃないのよー」。「ふおっ。ぷうっ。どこだー？」（注：そういえば、これもせしゅう）

■芸能編

*あの人、やめたけど、いったい誰があたまに「きたの」？：まあ、「こと」なかれ主義の既存のギョーカイ「プロ」集団は、「まこと」のことは言わんだろうなあ。新興勢力の「アマ」集団がネット上であーでもないこーでもないって騒いでいるけど、さっぱりわからんなあ。いずれにせよ、この国って、ほんとうに民主主義国家かい？

■環境問題編

* 「ミツバチはどこに?」: 長年、甘い蜜 (みつ) を盗んで吸ってきた罰 (ばち) とちゃうか? : “Where are the bees?” “It can’t be helped. That’s what it should be.” (直訳: 「ミツバチはどこに?」 「仕方ないよ。なるべくしてこうなったんだ」): 「bee と be でかけたつもりやけど、ダジャレやっとなんて分かるかな?」 「漠然とした状況の it やな。ただ、should の意味をどう取るかが、ポイントやな。Whatever should be, should be. は、どうや?」 「それ、ケ・セラ・セラのパクリやろ?」 「ばれたか。どれでもええけど、英語で書いてあるブログのコメントにでも、貼り付けて、質問してみても。Does this joke make sense in English? とか、Did you laugh just now? とか書いて」 「そやな、さっそくためしてみるわいな」

09.04.24 「人間＝機械」説 (2)

◆ 「人間＝機械」説 (2)

2009-04-24 14:57:02 | 言葉

まず、きょうの記事の結論というか見取り図から書きます。

* 森羅万象 = 「世界 or 宇宙」 → 人間機械 = 言語能力 → 正しい文 = 言語運用

という、実に簡略化された = 馬鹿みたいな図式で、

* 言葉を作る

という、実に簡単そうで難しいテーマを説明する。そんな大雑把 = 杜撰 (ずさん) な話なのです。

身の程をわきまえた結果、こんなんになってしまいました。前回の記事でも触れまし

たように、「アマ」は「プロ」の約束事を無視したり、知らなかったり、それに逆らおうとしますから、たとえば、以上のような結論が出てくるわけです。

で、説明をします。翻訳機械を作り、機械翻訳をさせようとするためには、当然のことながら「狭義の言葉＝言語」＝「話し言葉&書き言葉」を、機械に理解＝処理させなければなりません。手っ取り早い方法は、

*機械の仕組みに、「言葉＝言語」の仕組みを合わせる。

ことです。機械はヒトではありませんから、機械に合わせて作った「言葉＝言語」はヒトが日常生活で使っているものとは異なります。

*コンピューターがいかに「お馬鹿さん」＝「お利口さん」であるか

については、前回の記事で述べた通りです。

*

ここで思い出したことがあります。ある人文科学系の学問分野で研究をし、大学で教員をなさっている方がいまして、その方のお手伝いを何回かしたことがあります。学問の世界では、日本語で論文を書いた場合でも、その内容の要約（※レジюмеとかアブストラクトとかサマリーとか言います）を英語で書いて、添えて提出しなければならないそうです。

論文の要約文を日本語で書いたものを英語に直してほしい――。大学の先生をしているその方から、そのように依頼されたのです。英語が得意ではないので、断ったのですが、「英語の要約なんて、誰も読みやしないんだよ。形だけのもの。テキトーでいいから、みつろってくれよ」という調子で強引に原稿を渡されました。

気の弱い自分は、結局、引き受けて英語に直し、その方にお返ししました。そんなことを何回かやりました。お金をいただけるので嬉しかったのですが、あんなんでもかっ

たのかという後ろめたさを覚えたことも確かです。

で、その方が、ある時に、「ちょっと見て欲しいものがあるんだけど」と言って、英語の文章を差し出したのです。一目見て、論文の要約だと分かりました。「先生が、お書きになったのですか？」と尋ねると、「まあね」と曖昧な返事をし、「とにかく読んでみてくれないか」と言って、のんびりとコーヒーを飲みながら週刊誌を閲覧になっているのです。

こちらとしては、仕方なく、その英文に目を通しました。英語の良し悪しなどよくは分からないのですが、何となく変な英語だと感じたので、そう伝えました。それが、生まれて初めて読んだ機械翻訳された英語だったのです。20年近く前の話です。

その大学の先生から、先日、またお声がかかり、同じように英語で書かれた要約文をチェックしてくれと頼まれました。こちらの病（※うつのことです）について、よくご存知の方なので、「薬を服用しているせいで、前のように頭が働かないし（※実際には、今も昔も頭は働かないのですが）、その種の英語も最近は全然読んでいません」とお断りしたのですが、「まあ、いいから、いいから、どうせ、誰も読みやしないんだ。でも、一応チェックしてみてよ」とおっしゃるのです。

で、読んでみて、びっくりしました。少なくとも、自分の英語力から判断する限り、とても読みやすく、違和感のない英文になっているのです。正直に、その感想を述べました。先生は、とても満足した様子でした。

「これ、翻訳ソフトに訳させたんだよ」、と先生。

「昔に比べると、だいぶ性能が良くなったんですね」、と自分。

「そうでもないんだよ、実際のところは。それより、こっちの使い方がうまくなったんだ」、と先生。

「どういう意味ですか?」、と自分。

「ソフトが訳しやすいような日本語を書いているんだ」、と先生。

「……………」、と自分。

*

絶句したのは、感心したのです。なるほど。そういうことか。さすが、頭のいい人は、考えることが違うなあ、と思いました。それから家に帰って、そのことばかりずっと考えていました。

*機械が処理しやすいように、自分の書いた言葉をいじくる。=機械の仕組みに、「言葉=言語」の仕組みを合わせる。

という作業=操作が何となくイメージ的に分かってきたのです。同時に、そういえばコンピューター言語という言葉があったなあ、と思い出しました。

今話しているのは、全然違うお話なのですが、かつてコンピューター言語や、それとは全く違う「機械語=マシン語」で、すごい苦勞したことがあったのです。X68000というパソコンがあったことをご存知の方なら、あのパソコンが発売されたころのコンピューターをめぐる状況と、あのパソコンを使いこなせた人たちの先進ぶりを思い出していただけでしょう。

身の程を知らないために、昔、自分はある知り合いにそそのかされる形で、あのパソコンを買ってしまったのです。周辺機具をそろえると、小型の車1台が買えるほどの値段がしました。思い返すと、あれが自分史における「バブルの時代」だったようです。「打ち込み」などという退屈な作業も、その知り合いに習ってやってみたりしました。コンピューターについてのお勉強をしようと思いついたのです。でも、だめでした。半端じゃなく難しいのです。

*

というわけで、「こんなものは自分の頭では処理できない」=「こんな出来の悪い頭で理解することは不可能」と身に染みていますので、コンピューター言語とか、プログラムおよびプログラミングとか、OSの仕組みとか、機械語などについての苦い経験の記憶を振り払いました。自分の好きな=癖になっている「お祓い」の儀式をしたのです。

そして、X68000 は、二束三文で売ってしまいました。おかげさまで、現在は、その周辺の知識は「すっからかん」になっております。パソコンの操作は大の苦手。このブログの設定の仕方さえ、よく分かっていない。使いこなせていない。そんなありさまで。ただ、

*ヒトの言語A（※コンピューター言語とか、機械語＝マシン語ではなく、念のため）を、機械翻訳とか翻訳ソフトを通して＝使って、ヒトの言語Bに置き換える（※簡単に言えば、たとえば日本語を英語に機械翻訳させるということです。「そうなら初めから、そう言え」ですか？ ごめんなさい。正確に書こうとするとややこしくなるのです）。

くらいは、考える対象にしようと思ひ、その部分だけの記憶は、お祓いをせずに＝お引き取り願わずに、残しておきました。つまり、消去せずに、常に思い出せる状態にしておいたのです。

*

ところで、大学生時代に、マラルメ空港 or ソシユール空港経由、デリダ or バルト航空あたりを、うろちょろしていた過去があるために、自分はチョムスキー空港経由、生成文法航空あたりには不案内です。

特に、生成文法については、意地の悪い小役人や性悪のキャリア官僚が得意とする、ペーパーワーク＝国民いじめ＝法律いじりに似た、煩雑さ＝厳密さ＝機械もどきの融通の利かなさを、即座に連想する。そんな個人的な偏見があって、チョムスキー空港経由、生成文法航空を利用しての旅を、ずっと敬遠してきました。

というわけで、これから書くことを、万が一、生成文法派の方々がお読みになった場合には、お願いですから、怒って意地悪しないでくださいね。以前にも書きましたが、生まれて一度も口での議論と腕力での喧嘩に勝ったことがない。これだけが、自分の唯一の誇りであり自慢なのです。議論、喧嘩のたぐいは、ノー・サンキューです。つまり、しません。というか、できません。

腕ずくの喧嘩はさておき、自分が議論が苦手なのは、議論や批判（※すべての言葉が

批判になり得ます。たぶん批判とは、ある言葉を受信した人の頭にわく妄想なのでしょう)の応酬が、錯覚に基づいているようなので、できるだけかわりたくないのです。自分の錯覚に対処するだけで精一杯なのです。

議論では、武力の代わりに言葉を使いますね。言葉は何かを指し示すと同時に、その使い手のその時の気分や感情を表します。議論のほとんどは、言葉の「意味的部分＝議論のテーマ」ではなく、言葉を発する人の「気分や感情」を「ぶつけ合う」という行為です。つまり、

不機嫌、むしゃくしゃする、嫉妬、気に食わない、寂しい、誰かにかまってほしい、嬉しい、誰かをいじめたい、気持ちがいい、自分の喜びを他者に伝えたい、何か知らないけど他人と一緒にしゃぎたい、なぜかむなし.....

という、自分ひとりだけでは解決 or 対処できない感情を抱いたとき、ヒトは言葉を発する、あるいは利用するという行動をとります。広い意味でのコミュニケーション欲ですね。

その時、発せられる言葉は、話し言葉であれ、書き言葉であれ、意味的部分が吹っ飛んでしまうのです。言葉を発する動機は、言葉の意味的要素からではなく、言葉を受け取ってくれるであろう相手の感情に訴える、ひいては、それによって相手の感情を動かし、何らかの行動を引き起こすところまでに持って行きたいという欲求から生じます。

大まかに言うと、ヒトは

「快」か「不快」あるいは「わけが分からない」の3種類の感情

を、常に抱いています。その3種類の感情を発散させる道具として、言葉が機能してしまうのです。この惑星に生息する生物のはしくれである、ヒトの原始的＝本能的な習性が、ヒトが獲得してしまった狭義の言語という道具を利用するという形で、立ち現れている。そんな現象が起きているのです。

*

したがって、議論でかわされる「批判や非難」という名で呼ぶことも可能な「発言＝言葉」は、意味的部分を欠いたまま、あたかも、意味があるかのように議論をしている人たちの間を飛びかうわけです。

「あたかも、意味があるかのように」と、たった今書いた部分が重要です。意味はないのです。議論をしている最中に、

*ヒトは必死に「言葉の意味の辻褄」を合わせようとしているかに思われる。しかし、現実には、「感情の辻褄」を合わせようとしている。

のです。それなのに、意味があるという前提に立ってしまっているのです。

意味がない言葉をぶつけ合って、結論なり、テーマの発展なりがあるはずがありません。議論をしている人が2人であれば、どちらか一方（or 双方）がくたびれる、気が変わる、あるいは、邪魔が入るといったきわめてテキトーな状況で、議論は終わるか、中断します。

もちろん、最初から、議論をしかけられたほうが取り合わないという状況もあります。その場合には、しかけた側は、通常「ぎゃあー」とフラストレーション＝ヒステリーを起しますから、しつこく絡むという状況に発展する場合もあるでしょう。

要するに、

*議論で問題になっているのは、「言葉の意味」ではなく、「感情」なのです。

ディベートという言葉のやりとりを基盤とする「お遊び＝ゲーム」があります。また、それに類したお遊びが、法廷や議事堂や論壇や会議場、そこまでいかなくても個人レベルの会話で、「実用化＝現実化＝本番化」されています。

*世界はゲームである。

というよく聞くフレーズを思い出しますね。

で、そうした場で行われる議論はのほとんどは、言葉の意味ではなく、感情のぶつけ合いに終始していますが、それをいったらおしまいなので、ヒトは都合よく錯覚を受け入れて、「本気」で議論してしまうのです。

「こんちくしょう（＝私はあなたが気に入らない or 何か知らないけどむしゃくしゃする）」「なんだと？ このやろう（＝私はあなたが気に入らない or 何か知らないけどむしゃくしゃする）」という感情のぶつけ合いがえんえんと続いているだけなのに、ヒトはそれを、裁判とか討論とか論争とか話し合いとかいう言葉で呼び、真剣に or 不真面目に or 無気力に、言葉を交わし合うのです。

という、個人的な考え方＝意見＝感想＝妄想＝「.....じゃないかなあ」があるために、議論（※かなり広い意味でとってください）という名のもとで発せられる、言葉の意味をいちいち本気でとる気にはなれないのです。

*

たとえば、

*「裁判とは、利害に基づく個々の感情をぶつけ合う場であり、判決もまた感情の吐露である」

とか、

*「世界物理学会議での議論は、宇宙というヒトの抱く幻想についての個々の学者の感情のやり取りである」

などと言えば、「その気もないのに＝意図せずして」、喧々諤々（けんけんがくがく）の議論に巻き込まれてしまう可能性があります。そんな大きな話ではなく、ブログでもそうです。記事に何か言葉を書けば、そこから「その気もないのに＝意図せずして」、議論をしかけられるという困った事態を、この自分も、またブログを開設している人すべてが受け入れざるを得ないのです。

議論が目的、つまり「その気になって＝意図的に＝やる気満々で」いろいろ言葉を書き連ねている人たちもたくさんいます。ネット上には掲示板という場もあります。でも、自分はそうしたことが苦手です。嫌いです。

「世界＝言葉は無意味だ」

を前提としたお遊び精神で、「意味を持つ言葉」（※本当はそんな不条理なことはないと思うのですけど）を用いてブログを書いている。そんな倒錯したことをしているのです。ですので、

*このブログに書かれている言葉はすべて、無意味、ぜんぶが「」にくくられた幻想＝たわごと＝でまかせ＝保留事項だ

とってください。

*

「議論は苦手だ」という言葉を説明すると、以上ようになります。また、次のようにも言えます。

*ヒトは、「無意味」という「森羅万象＝「世界 or 宇宙」」の前で徹底して無力

なのです。でも、大多数のヒトが言葉を使える状態に生まれついているから、「意味」があると思って＝錯覚して生きている。さもなきや、人間なんてやってられません。というか、実際、

* 言葉を使うしか選択肢はない。

つまり、「自由」ではない。「不自由さ」をかかえている。拘束＝制限されている。その「不自由さ」を意識しているかどうか、たぶんヒトというレベルで「身の程を知る」ということではないかと思います。

どうして、話がそれて、「議論」をめぐるの被害妄想的な言葉を、くぐぐと述べているのかと申しますと、さきほど、「特に、生成文法については、意地の悪い小役人や性悪のキャリア官僚が得意とする、ペーパーワーク＝国民いじめ＝法律いじりに似た、煩雑さ＝厳密さ＝機械もどきの融通の利かなさを、即座に連想する。そんな個人的な理由があって」と書いた、実体験＝トラウマがあるからなのです。

何しろ、生成文法を研究なさっている人たちは、頭が切れるというか、頭の回転がよく、自信に満ちてもいるし、議論がうまいのです。しかも、概して数学にも強いので、「世界を支配する普遍性」（※そんなものがあればの話ですが）への志向もすごく強かったという印象があります。こちらが何を言っても、自分たちに対する批判と受け止め、即座に的確な受け答えをまるで用意してあったごとくに、すらすらと雄弁な口調で返してくるのです。

あの人たちの口にする「言葉の意味＝話の内容」を深く考えずに、「感情」語に翻訳するとすれば、「どうだ。いつも、こっちの勝ち。身の程を知れ」。簡単に言えば、「優越感」です。いわゆる（※あくまでも、いわゆるですよ）お馬鹿さんや、このブログ記事を書いている、世の中に不必要な偏屈者やその同類が吐き出している言葉とは違いますから、パワーと説得力があります。

しょせん、言葉なんて「ダジャレ＝こじつけ＝たとえ」だという「遊び心」に満ちた、マラルメ空港 or ソシユール空港経由、デリダ or バルト航空の旅に慣れた自分には、上述の人たちの醸し出す真剣で殺気だった雰囲気は肌に合いませんでした。

ですから、その人たちに向けて、こちらの発する言葉から「言葉の意味的要素」を除外した「感情」語は、「おしっこが漏れそうなほどこわい」や「ビビりまくっている」というトホホなものでした。で、ささやかな抵抗として、その人たちの前で、恐れおの

きながら、心の中で、こっそりつぶやいたのが、

*ヒトは、メタな（＝すべてを視野におさめた高い位置にある）立場に立つことはできない。でも、メタな立場に立つことが「できる」という「錯覚」を抱くことなら「できる」。

でした。

たった今書いたフレーズを読んで、「そういうお前はどうかだ」とお感じになった方がいらっしやるとすれば、さきほど、

*「こんちくしょう（＝私はあなたが気に入らない or 何か知らないけどむしゃくしゃする）」「なんだと？ このやろう（＝私はあなたが気に入らない or 何か知らないけどむしゃくしゃする）」という感情のぶつけ合い

と書いた部分を思い出してください。

「無意味」な言葉に「意味」を汲み取ってもきりはないのです。何でも「批判」に受けとめることが「できる」＝「可能な」のは、言葉が「から＝空＝殻＝うつお」だからであって、そうした仕組み＝メカニズムにすべてのヒトがとらわれているからなのです。

それ以前の段階として、ある特定の言葉やフレーズを見聞きした瞬間、それを「批判」と知覚し、その言葉やフレーズとまるでセットになっているような、お決まりの言葉やフレーズを連想し、「批判」という、パブロフのワンちゃん状態の思考をする人たちもいます。たとえば、

「何？ そういうお前はどうかだ、たった今、自分こそが、メタな立場に立ったような錯覚に陥って、批判したじゃねーか」

「ねっ、きりがないでしょう？ だから一、さっきから、言っているのは、そういうことなんですよ一、もう勘弁してください、議論するなら、議論の大好きな、身の程をわき

まえた人たちと仲よくやってください、こっちはノー・サンキュー」

という感じです。

*

言葉に「意味」があると錯覚する、言葉に備わったメカニズム。多くの場合に、「議論」のもととなる、「不機嫌」＝「不快」＝「こんちきしょう」＝「八つ当たり」＝「無意味」……という「感情・感情語）」についての切りのないお話は、この辺でやめておき、チョムスキーに話を戻します。おそらく、チョムスキーは次のようなことを考えていたみたいなのです。

* 森羅万象＝「世界 or 宇宙」→人間機械＝言語能力 → 正しい文＝言語運用

ヒトには言語を習得する能力が備わっている。その能力は、ヒトという種に共通の属性を持っているらしい。その証拠に、ヒトの子（※特に乳幼児）であれば、人種・民族・出身地に関係なく、どんな言語でも習得させることができる。その能力を「言語能力 (linguistic competence)」と、とりあえず呼ぼう。

さらに、ヒトが言語能力（※抽象的なもの）を発揮して見えるあるいは聞こえる形で表出 or 産出した結果＝話し言葉・書き言葉（※見聞きできる具体的なもの）を「言語運用 (linguistic performance)」と、とりあえず呼ぼう、みたいな話＝考え方が前提としてあるようなのです。

チョムスキーにゴマをするわけではありませんが、ヒトに共通する言語能力という言葉＝考え方＝ツールには魅力を感じます。このブログで、よく紹介する、

* 「うだつの上がない尻尾のないおサルさん」の脳内で、なぜか「ズレ」が生じたために「ヒト＝人間様」が「生まれた」。

という「紙芝居の筋書き＝神話＝出まかせ」に出てくる。「ズレ」を「洗練された＝お

しゃれな＝ポジティブな」言葉で言い表しているような気がするからです。

話は変わりますが、チョムスキーは、米国で大学教授を務めていますが、政治的には変わり者 or 過激派とみなされていて、どうやら政府の情報機関の監視対象になっている人のようです。きな臭い話になるので、このことについては、これ以上書きません。

で、かつて、高山宏氏（＝通称「学魔」氏）から、「チョムスキーはデカルトと同じようにヒトを機械のように考えているらしいよ。その2人をつないでいるのが「ポール・ロワイヤル文法」でね」、みたいな話を聞きました。こちらは「!」「?」「zzzzz.....」状態だったので、記憶違いかもしれません。

でも、気に入った説なので、その記憶を前提に話を進めます。以上の断片的な知識をまとめると、先ほど紹介した図になるのです。再度、以下にコピペします。この

* 森羅万象＝「世界 or 宇宙」→人間機械＝言語能力 → 正しい文＝言語運用

を、

* 「人間＝機械」説

と勝手に名づけました。

説明的に記述すると、

* ヒトは、(1) 森羅万象＝「世界 or 宇宙」を知覚し、(2) 言語能力と呼ぶこともできる「ブラックボックスみたいな＝抽象的な＝誰も見たことも触ったこともない」「仕組み＝仕掛け＝機械みたいなもの」を通して、(3) 言葉を正しく用いた話なり文を作る。

となります。

気になるというか、イヤな気分がするのは、(3)の部分です。「正しい」という考え方が重要な意味を持っていて、その「正しい」を気に食わない語だといって、勝手に外すわけにはいかないらしいのです。確か、チョムスキーの言語モデルでは、「正しい」が大切なのですよね？ 違いますか？ いえいえ、専門の方、ご返事は要りません。議論はしたくありませんので。

ですから、ご返事は「違う、大切ではない」でも、「そう、大切なのだ」でも、どちらでもいいです。上の2つの「→」を使った図と、それをフレーズという形で、たった今、*をつけてつづった文は、個人的な感想文ですので、違っていても、つまり、正しくなくても、構いません。

「チョムスキーは、そんなことを言っていないぞ」。というふうに、お気に召さないようでしたら、「事実誤認」ということになりますので、この記事からチョムスキーという名を外しても、一向に構いません。議論も喧嘩もいびりもいじめも、ノー・サンキューです。

*

で、Ch とかいう人(※面倒を起したくないので、これからは、こう書きますね)とそのお弟子さんたちが、ある時期に、世界的なレベルで、「言語学のある分野」or「言語学が研究されているある村や地方や地区」で、非常に大きな影響力を持っていました。日本でも、その信奉者がたくさんいました。個人的も、何人か見たことがありました。話したこともあります。今もいるかもしれませんが、知りません。

で、その Ch とかいう人の直接のお弟子さんか、孫弟子さんか、喧嘩別れなさった人たちか、知りませんが、とにかく、その種の人たちが作り上げた、上で述べたような言語観＝言語の仕組み＝言語の働き＝言語の「実態(?)」に類したモデルが、機械翻訳 or 翻訳機械 or 人工知能の開発に大いに寄与したという話を聞いたことがあります。

伝聞ですので、本当のところは分かりませんが、ここではそういうことにしておきます。で、ようやく、話を Ch とかいう人関連のトピックから、

*言葉を作る

という、この「人間＝機械」説」シリーズで取り上げたい、一番大切なテーマに、話を移すことができます。次回は、その本題に入りたいと思います。

09.04.25 「人間＝機械」説 (3)

◆「人間＝機械」説 (3)

2009-04-25 14:53:24 | 言葉

ある言語で書かれた文章を、機械に翻訳させるさいには、その文章が文法的に「正しい」ものであることが、重要な条件になります。

*言語Aの正しい文法に沿って言語Aで書かれた文章を、言語Bの正しい文法に沿った言語Bへと翻訳する。

以上の作業なら、機械はユーザーにとって満足のいく仕事をしてくれるはずです。一方で、

*言語Aの正しい文法に沿っていない言語Aで書かれた文章を、言語Bの正しい文法に沿った言語Bへと翻訳する。

以上の作業を、機械にさせることは、現在のところでは、かなり困難、不可能に近いようです。「人間＝機械」説 (1)」2009-04-22 で述べたように、「英語で書かれたブログ」を翻訳ソフトを使って日本語に訳すことが難しいのは、そうした事情があるからです。また、「人間＝機械」説 (2)」2009-04-24 で述べたように、翻訳ソフトの「癖」＝「性能」＝「働き」にわざわざ合わせた日本語の文章を作り、英語に訳させると「使える」翻

訳文ができあがるのも、同様の事情があるからです。

ここで注目したいのは、

(1) 文法的に正しい、

と、

(2) 機械に合わせる、

という考え方です。

ヒトが機械のように思考する。もしできなくても、思考した結果を、機械を用いるときに機械に合わせて言葉をいじれば、ヒトと機械は友好的＝有効な関係を結ぶことができるでしょう。でも、こうした関係は窮屈だと思います。ヒトが機械に気を遣っている。機械の顔色をうかがっている。そんな比喩的な言い方が頭に浮かびます。本末転倒という言い方もできるでしょう。ここで、ちょっと遊んでみましょう。

* 言語Aの正しい文法に沿っていない言語Aで書かれた文章を、言語Bの正しい文法に沿っていない言語Bへと翻訳する。

どうでしょう？ 翻訳機械 or 翻訳ソフトは、以上の作業が得意でしょうか？ 2通り考えられます。

(1) 言語Aの正しい文法に沿っていないデータの処理はプログラムされていないので、「翻訳しそこなった結果として、」言語Bの正しい文法に沿っていない言語Bの文章が出来上がる。

(2) 言語Aの正しい文法に沿っていないデータの処理がプログラムされているために、「誤りを忠実に翻訳した結果として」言語Bの正しい文法に沿っていない言語Bの文章が

出来上がる。

(1) は、でまかせ=テキトー、

(2) は、すごい=高性能、

ということになりそうです。

なにしろ、

(2) は「誤り」、つまり「正しくない」を忠実に「正しくない」に翻訳している

のです。

ややこしいですね。今みたいな形式的な論理思考に基づく論理ゲームが得意な人たちがいます。そういう人たちでないと、Ch とかいう人の言語モデルに基づいた言語学の理論を理解したり、その理論に沿って、たとえば翻訳機械を製作することはできないとのこと。というわけで、この種の思考=ゲームが大の苦手なので、残念ながら、機械翻訳および翻訳機械のお話は、ここでおしまいにします。

*

「正しい」ことは苦手なのですが、「正しくない」ことは得意とは言わないまでも、しっかりと身につけているらしい自分としては、「正しくない」と呼ばれていることに話を集中させようと思います。「人間=機械」説 (1) 2009-04-22 で、

「ブローケン・イングリッシュ」

について触れました。その中で、蔑称 (べっしょう) みただけど、気にしなくていい

という意味のことを述べました。また、

*ネイティブ・スピーカー vs. ノンネイティブ・スピーカーという図式は意味を持たなくなってきた。

とも書きました。

この場合の、ネイティブ・スピーカーとノンネイティブ・スピーカーとの対比=区別=差別は、英語に限ったことではありません。あらゆる言語=言葉についての話です。当然のことながら日本語も含んでの話です。言語=言葉というのは、恐ろしい側面を持っています。日本語、英語という意味での言葉、そして単語や言葉遣いや発言というレベルでの言葉。前者の場合でも、後者の場合でも、それがきっかけとなって、紛争=戦争が起こってきたことは、これまでの歴史が示しています。ここで説明するまでもないでしょう。

紛争という言葉、いざこざを含むくらいに広くとれば、近所に住む人同士、仲間同士の争いや喧嘩という形で、みなさんも日常的に経験しているはず。きのうの記事で触れた、議論や、批判の応酬もそうですね。そうした、きな臭い話も苦手なので、ここではしません。もっと、楽しいというか、ほのぼのとした話をしましょう。テーマは、

「言葉を作る」

です。いろいろなケースが頭に浮かびます。

*

たとえば、昔、ある客船が暴風雨にあって難破し、無人島に5人の乗客が漂着した。5人は母語が違い、自分の母語以外の言語が話せなかった。その島で生活するために、つまり、衣食住を確保し維持するためには、5人が協力する必要があった。当然、コミュニケーションが必要になる。

そこで、身ぶり手ぶりのほかに、5人の母語である5言語が混じりあった「共通語」みたいなものが徐々に出来上がっていった。こういう複数の（※2つ以上の）異言語が溶け合っただけの場合、それを

*ピジンとかピジン言語

とか、呼ぶことがあります。ピジン言語は、上のような小規模なものだけでなく、もっと大きな現象として、古今東西を問わず、各地で生まれてきました。

海路でも陸路でもいいです。ある土地からある土地にヒトたちが移動する。そして、住みつく。そこで、異なる言語を話すヒトたちの集団ができる。その場合に、主にある1つの言語だけが「共通語」として話されるようになったこともあれば、複数の言語が混じり合っただけで「共通語」ができることもありました。前者の場合でも、その優勢な1つの言語が「純粋に（※他の言語と混じり合わずに）」存続するということがあり得ず、他の言語の影響を受けて変化するのが自然のなりゆきらしいです。

よく考えると、当然かつ自然な現象ですね。たとえば、この国で、昭和初期に話されていた言葉と、現在話されている言葉とが違っていることは、録音された当時の音声が残っていますから、確認できます。また、このブログのバックナンバー「平安時代のテープレコーダー」2009-04-19で、平安時代の日本語（※日本語の発音）を再現したという話を紹介しました。ピジン言語でなくて、

*日本語とひとくくりされている言語ですら、「変わる」

のです。それが自然で当然なのです。

「正しい」日本語とか、「正しい」言葉遣いという言い方の、「正しい」に疑問を持つのは、ただ今述べた歴史的経緯がどうやら「事実」らしいからなのです。「正しい」って、幻想＝錯覚＝嘘じゃないの？ という感じです。話し言葉も変われば、書き言葉も変わります。歴史的仮名遣いと呼ばれる表記法から、現代仮名遣いへ変わったのは、確か第二次大戦後でしたよね。国家の命令で、ですけど。年表で見れば、つい最近のことじゃありませんか。

*

このブログでも、つい、うっかりとやってしまいますが、「日本語」という言葉が、まるで実体を持っているかのような話が、堂々と流通しているというのは、驚くべきことです。当事者の自分も恥ずかしいです。これは、まぎれもない弁解＝責任逃れです。自分を真ん中においての話ですが、歴史的な変化だけでなく、方言をまったく無視した、大雑把で不正確きわまりない国語論も、大嘘ですよ。これもまた、反省しています。

とはいうものの、この国の方言を歴史的に論じるなんてことは、専門家でも研究者でもない自分には絶対にできません。せいぜい、現在、マスメディアやネットを通じて見聞きできる、この国の言葉の現状をごく断片的に「観察」する程度のことで精一杯です。これも弁解です。弁解ばかりですね。それだけ、言葉を論じるということは難しいという、これまた弁解.....。トホホ。

とにかく、言葉ほど、身近にありながら、抽象的に、つまり、現実とはかけ離れた大嘘として語られるものもないのではないかと。そんな気がします。自戒と自責の念を強く覚えます。日本語、あるいは、国語と口にした、あるいは書いた瞬間に、とほうもない抽象的な大嘘が始まる。という感じです。

仕方がないといえば、それまでですけど.....。ヒトは、こういうレベルで身の程を知るべきなのでしょうね。

自分の限界性を意識したうえで、言葉＝言語、ひいては森羅万象について語るしかない、

と。

*

で、さきほどの無人島の話の続きです。大嘘の続きです。本当は大嘘なんだと自分に言い聞かせながら、書きますので、よろしければ、みなさんも、大嘘なんだなあ、と思いつつ、以下の文章をお読みください。

無人島に住みついた5人の人たちは男女から構成されていて、子どもたちができたとしましょう。例の「共通語」はかなり「進化」し、いろいろなこと、そして相当複雑なことまで表現できるようになりました。二世たちにとって、その「共通語」はまさに母語になります。この段階にまで来ると、ピジンではなく、クレオール（＝クレオール言語）と呼びます。というか、そう呼ぶ人たちもいます。ただし、このクレオールですが、言語学関連のサイトなどで、その定義を読んでもみると、すべての言語がクレオールではないかという印象を持ちます。

*国語（※言語）とは軍隊を有する方言である。

というフレーズ＝言葉を、以前、このブログで書きました（※「言葉を奪われる」2009-04-20）。これをもじって、

*国語＝言語とは、武力＝権力を有するクレオールである。

と言えるかもしれません。

*

以上は、狭義の言葉＝言語、つまり、日本語、英語というレベルでの「言葉を作る」のお話でした。次に、広義の言葉＝言語についてのおとぎ話をしたいのですが、話を分かりやすくするために、このブログで使っている「広義の言葉＝言語」の定義を、「平安時代のテープレコーダー」2009-04-19 から以下に引用します。

*広義の言葉＝言語とは、話し言葉、書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（※家庭だけで通じる断片的な手話）、指点字、点字、音声（※発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号など

というふうに、考えています。では、おとぎ話を書きます。日ごろ思いついたことを走

り書きしたメモを見ながら、書き写すという横着をし、箇条書きにしますので、脈絡を欠いたものになりますが、お許しください。

★ろう者（※先天的に聴力が著しく低くて、話し言葉が聞きとれない人）が、健聴者と結婚しました。2人の間では、手話が用いられていました。2人が長く暮らすうちに、2人の間だけで通じる「ホームサイン」が手話の中にだんだん増えていきました。そのうち、2人は子をもうけました。3人だけで通じる手話がその子の母語となりました。その子は健聴者だったので、両親はその子に話し言葉（＝手話という言語とまったく異なる言語）も教えることにしました。【この話はおわり】

★ろう者（※先天的に聴力が著しく低くて、話し言葉が聞きとれない人）が、健聴者と結婚しました。2人の間では、手話が用いられていました。2人が長く暮らすうちに、2人の間だけで通じる「ホームサイン」が手話の中にだんだん増えていきました。そのうち、2人は子をもうけました。3人だけで通じる手話がその子の母語となりました。その子はろう者だったので、両親はその子に、他のろう者たちと交流できる手話を教えることにしました。【この話はおわり】

★日本の話です。日本国籍を持つ、英語しか話せない人が日本にいました。帰国子女で、両親が離婚をしたため、そうした状況に置かれてしまったのです。その人が外国の国籍を持つ、日本語しか話せない人と日本で出会いました。その元帰国子女と在日の外国人が恋に落ちました。前者は、英語が日常語になっている外資系の会社に勤務し、後者は日本語が日常語になっている企業で働いています。2人の間では、共通の言葉がないために、家庭では2人だけに通じる、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージや合図のほかと並行して、2人の各母語をチャンポンにした言葉が徐々にできつつあるということです。【この話はおわり】

★あるヒトがひとり暮らしをしていました。そのヒトがペットとしてある動物を飼い始めました。その人とペットの間に、話し言葉ではない、独特のコミュニケーションの方法＝表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ＝音声（※発声）＝合図が生まれてきました。もちろん、ヒトと非ヒトですから、それぞれが違った広義の言葉を使うのですが、お互いに生活に支障のない程度の理解はできます。そのヒトとその動物は仲よく暮らしています。【この話はおわり】

★ある人に90歳を超えるおじいちゃんがあります。年金生活者です。そのおじいちゃんは、若いころから、エスペラントと呼ばれる人工言語の普及運動に熱心な人で、現在も

その運動にかかわっています。高齢ながら、なかなか元気なおじいさんで、パソコンを使いこなし、エスペラントのホームページを開設したり、エスペラントでブログを書いたり、同じ運動を行っている他の国々の人たちとメル友になったりして、毎日を送っています。【この話はおわり】

★昔々、ある大きな大陸にへばりつくような形の島国がありました。大陸とは海峡を隔てただけなので、その国は歴史的に大陸の影響を受けてきました。ものだけでなく、言語を含む文化も流入しました。その島ではさまざまな言葉が話されていましたが、根っこは同じで、言語学的には方言とみなされるものでした。1つだけ、言語学的にみて根っこが異なる言葉もありましたが、大多数の人たちは、根っこが同じ複数の方言を話していました。その方言の集まりには文字がありませんでした。そこで、大陸のある国から、法律や政治制度や宗教などを通じて入って来ていた、その島の方言の集まりとは根っこの違う言語の文字を拝借していました。いわばバイリンガルな状況が続いていたわけです。とはいえ、そうしたバイリンガルな状況に置かれていたのは、支配者階級であり、少数でした。【この話は以下につづく】

やがて、その国では、拝借している大陸の言語の文字（※象形文字を起源とする表意文字）をいじって簡略化された表音文字を作り、それを自分たちの方言の集まり＝話し言葉に当てました。大発明です。でも、複雑なことはその方言の集まりでは表現できません。そのため、大陸からある単語が入ってきた場合に、その時代の読み方をそのまま拝借する形で、大陸の言語の単語を自分たちの方言の集まりとチャンポンで使うようにしました。大工夫です。そうした過程を通して、その島国では、二重の構造を備えた言語体系が生まれました。やがて島国の中で複数あった勢力が徐々に統一され、方言と並行して「共通語」のようなものができてきました。チャンポンの書き言葉の形成が、一役かったのです。【この話は以下につづく】

そして、現代に至っていたのですが、その島に住む人たちのなかで、「内」と「外」という縄張り意識が強い人たちがいました。ある幻想にとらわれているのです。「純粋に自分たちだけの」言葉と文化がある。そう思い込んでいるのです。その人たちの中に、「実は、うちの祖先は文字を持っていたのだ」と主張する人がいて、どこからか怪しげな文書を持ってきて、これが「純粋な自分たちだけの」文字だ、と言いました。仲間は大喜びし、さらに過激な行動に出ました。大陸を起源とする単語や、近代に別の大陸から入ってきた単語を取り除こう。そして、「純粋な自分たちだけの」言葉を起源とする単語を作って、それに置き換えよう。そんな途方もない計画を立てました。【この話は以下につづく】

そのうさん臭くきな臭い計画に首をかしげる人たちも大勢いましたが、計画に賛同する人もそこそこいて（※その中には言語学者もいました）、とうとう「純粋な自分たちだけの」「言葉＝言語」＝「話し言葉＋書き言葉」ができました。その島国では、2つの言葉が共存することになりました。めでたし、めでたし。と、いきたいところでしたが、2つの言葉が政治とからみ、内戦状態になりました。【以上で、★のついたおとぎ話はおしまいです。】

*

さて、ヒトという種（しゅ）が、この惑星に住むおびただしい数の生き物の種の中の1つとして、日常生活を営（いとな）むさいに、どうしても避けられない習性があります。「テリトリー」——大和言葉系の由緒ある日本語＝和語で言えば「縄張り」——というものです。「テリトリー」も「縄張り」も、一応「アカデミック」——「漢語系の由緒ある日本語」＝「明治に入ってからヨーロッパ系言語に当てはめた翻訳語 or 造語」で言えば「学術的 or 学問的」——な場で、専門用語として受け入れられているようです。

ここで

* 「テリトリー」＝「縄張り」

と、

「アカデミック」＝「学術的 or 学問的」

という2組のペアをよくご覧になってください。

今、問題にしているのは、「うち＝内」と「そと＝外」という対立した考え方です。ヒトは、誰もが自分の全背景、つまり生まれて以来経験してきたものを基準にして、森羅万象＝世界＝宇宙を眺め、それを思考の対象とし、さらには、それに働きかけるという習性を持っているようです。

「誰もが」と書きましたが、みんなに聞いて回ったわけではないので、「ようす」としておきました。以後は、横着を決めこんで、こうした神経質な配慮はしません。ただ、そうしたスタンスで書いていることを、理解していただければ、幸いです。つまり、ここで書いていることは、単なる感想文＝でまかせ＝作り話＝与太話なのです。

*

「きょうから、中国語を使いなさい」とか、「きょうから、英語以外の言葉を使ったら、法律違反になるので、身柄を拘束するよ」とか、もしも権力＝支配する側から命令されたら、どうしますか？ 権力とは、国家かもしれません。その場合には、何らかの路線変更があったのでしょうか。権力とは、他国かもしれません。その場合には、何らかの国家間の紛争があった後なのでしょう。いずれにせよ、軍隊か、そう呼ばれていなくても、実際には軍隊と同じ武力を備えた組織、あるいは、警察や憲兵や検察のような強制力を備えた組織に従えた権力が、命令しているのです。

* 国語（※言語）とは軍隊を有する方言である。

今、論じているのは、まさに、そのことなのです。かつて、「敵性語」という言葉がありました。敵対関係にある国の言語という意味ですね。この「美しい国」（※中国語の「美国」ではありませんよ、なんちゃって）の長き歴史においては、そんな昔の話ではありません。

敵性語排斥運動は、いろいろな国で起きてきて、現在でもあちこちで起きています。複数の言語を話す人たちが混じり合って、あるいは隣り合って生活している地域のほうが、世界には圧倒的に多いのです。そうした地域で、異言語を話す人たちがうまく共存している場合もあれば、敵対し合っている場合もあります。その両極端の間には、多種多様なグレーゾーン＝灰色地帯があるでしょう。

以上、挙げた例すべての根底にあるのが、

* テリトリー＝縄張り＝『うち＝内』と『そと＝外』に分ける」

というヒトの習性＝本能です。本能ですから、簡単には、外せません。また、外す必要はないのかもしれませんが。ただし、それが自らの習性＝本能であると「自覚」＝「身の程を知る」ことなら、ヒトにはできそうです。

もしも、「霊長類」の1種であるはずのヒトという種が、他の「霊長類」と自らを都合よく分けて、自分たちのほうがもっと「高等」＝「特別」なのだという認識のもとに「霊長類学」などという「メタ学問」を研究する意気込みがあれば、上述の「身の程を知る」ことができる。そう信じています。というか、そう願っています。

*

テリトリーは、きわめて恣意（しい）的な＝でたらめな線引き遊びです。とはいうものの、本能ですから、ヒトは「ほぼ思考停止状態で＝必死に＝無我夢中に＝パブロフのワンちゃん状態で」やります。ヒト以外の生き物のテリトリー問題については、動物行動学＝エソロジーに詳しくないので、ここでは触れません。

ヒトのテリトリー問題について、考えましょう。たぶん、ヒト以外の生き物より「ややこしい」はずです。言葉＝言語がからんでくるからです。ああ、またもや言葉＝言語か。という感じですね。でも、仕方ありません。今、ため息を漏らしてしまった自分を含め、ヒトである以上、逃れられないのですから。仕方なく、言葉＝言語を使って、テリトリーについて考えてみましょう。

* 「分ける」という「言葉 or イメージ or 思考」の仕組みを、「分ける」ための「道具＝言葉」で、「分ける」。

そんなすごい倒錯＝めちゃくちゃ＝逸脱をするしか、選択肢はないのです。

これまた、弁解です。なお、この問題は、きわめてきな臭い話に発展する可能性が高いので、簡単に個人的な感想＝出まかせだけを箇条書きにして、済ませます。

* 「うち＝内」と「そと＝外」なんてない。つまり、幻想である。この幻想を、政治的「主張 or 姿勢 or 立場 or 視点」と言い換えることも可能。

*言語のレベルでの「うち＝内」と「そと＝外」の線引きは、無理。どの言語も、クレオールである。純粋な〇〇語なんて、あるの？

*文化（※そもそも「文化」そのものが実体のない幻想）のレベルでの「うち＝内」と「そと＝外」の線引きも、無理。どの文化も、他の文化の影響を受けて成立している。何千年間も「鎖国状態＝引きこもり状態（※比喩です、念のために申し添えます）」にある文化なんて、あるの？

*「文化」に似ている「思想」or「思考様式」（※そもそも「思想 or 思考様式」そのものが実体のない幻想）のレベルでの「うち＝内」と「そと＝外」の線引きも、無理。ある国の、および国の文化に「固有の」とか、「地に根ざした」とか、「その地で生まれた」とか、「内からわきでた」とか、「自分たちの（※誰を指すのでしょうか？）内側」とか、「ずっと伝わっている」とか、「受け継がれてきた」とか、別の国とは「違う」とか、「ドメスティック」とか、「本当の」とか、「本来の」とか、「自然な」とか、「真の」とか、「純粋な」などという言い方は、レトリック＝トリック＝でたらめ＝美辞麗句の一種としてなら「単なる冗談」で済むが、本気でそのようなものの実体があると考えている場合には、ともすると危険。

*文化に似ている（※その意味では「ほぼ文化」である）思想 or 思考様式は、「多重的＝多層的＝めちゃくちゃいろいろ混じっている＝自と他を超えた＝自と他の区別が不明な」状況に「投げ込まれた」形で存在しているのではないか。背筋を伸ばしてカッコよく自立なんてしていない。

以上のように思っています。だんだんきな臭い話になり、抑うつ状態が悪化しそうな兆候を感じるので、この辺で失礼をいたします。

長い文をここまで付き合ってくれた皆さまに、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

09.04.26 反「人間＝機械」説

◆反「人間＝機械」説

2009-04-26 14:53:31 言葉

「言霊（ことだま）」という言葉を見聞きなさったことがあると思います。神仏を信じてはいないというか、信じる気にはなれない自分ですが、「言霊」だけは信じているというか、畏怖しています。言霊について、いろんな「知識」で武装した説明＝理屈＝屁理屈が頭に浮かんでできますが、書き連ねることはやめておきます。それくらい、怖いのです。

だからこそ、主に言葉をテーマにした、このようなブログを書き続けているのでしょう。泉鏡花という作家が、本気で言霊を信じていた。そんな伝説を聞いたことがあります。

泉鏡花という人の書いた文章は、不思議な魅力があって、時々目を通します。全集ではなく、選集の端本を数冊持っているのです。著作権（※人権と同じく、権利という西欧発の概念＝言葉の1つです）の有効期限が切れた作家の作品は、ネット上の「青空文庫」で自由に読むことができますね。泉鏡花も、青空文庫に収められています。ただし、PCのモニターで読むのは、やはり、目が疲れてつらいです。

で、泉鏡花の文章なのですが、古い感じのする文体です。でも、何とか読んでいます。樋口一葉になると、もう古文に近く、自分には歯が立たないというか、読めません。その鏡花の文章は、翻訳機械や翻訳ソフトでは、翻訳不可能な部分が多すぎるのではないかと想像しています。

現存の翻訳機械・翻訳ソフトは、

現在流通しているいわゆる「日本語」（※一応、いわゆる、を頭にくっつけ、「」でくっ

て、「一般化＝単純化＝馬鹿化」への「配慮＝抵抗＝反抗」をしておきます。これ以後は面倒なのでくくりません)

を前提にしているわけですから、泉鏡花の書いた日本語の文章は対象外になると考えられます。

*

翻訳機械・翻訳ソフトが対象としている日本語とは、どんなものなのか？

この個人的な疑問をめぐって、「人間＝機械」説(1)～「人間＝機械」説(3)を、「言葉を作る」とからませて書いてきました。本来なら、きょうは「人間＝機械」説(4)を書くつもりだったのです。そして、きょうでこのシリーズは最終回にする予定なのです。でも、タイトルを「人間＝機械」説(4)とするのを避けました。

4＝四＝し＝死という具合に、縁起が悪いと感じているからです。お笑いになっている方もいらっしゃると思いますが、本気なのです。たとえば、本を読んでいて、途中で中断して、しおりなり、栞紐でそのページを挟もうとした瞬間、「あっ」と声を上げるのが、なぜか実に多いのです。

縦組みの本なら右ページ、横組みの本なら左ページが42ページになることが、なぜか非常に多い。「死に」に出くわすことが多い。人生を半分以上捨てたような気になっているはずの自分が、「生」に執着している実態があらわになる瞬間です。恥ずかしながら、白状いたしますが、そのような場合、自分は2ページ前か2ページ後にしおりを挟むのです。そうすれば、40＝死霊(しりょう)にも、44＝死死にも出合わなくて済むからです。

*

そんなだらしない性格なので、きょうは「人間＝機械」説(4)ではなく、

反「人間＝機械」説

としました。情けないというか、みっともないですね。でも、事実なので、書いておきます。さて、4と42は、ここでお引取り願うとして、「人間＝機械」説が「反「人間＝機械」説」になる下地があったことも事実です。一連の記事を書きながら、今書いているのは、「反「人間＝機械」説」ではないかと何度か思いました。でも、いったんタイトルを決めた以上、「ま、いっか」というテキトーな態度で通すことにしました。で、そのタイトルで記事を書いている最中にふと思ったのですが、

*翻訳機械・翻訳ソフトというのは「機械」である。

あたりまえじゃないか。あほか。と言われても仕方ありません。でも、そのことの意味というか、「機械」だということがどういうことなのか？ が頭にこびりついて仕方がなかったのです。言い方を変えると、

*機械になったつもりになる

ということです。

「思いやり」という美しい大和言葉系の語が、現代の日本語に残っています。最近、この言葉のある機会に目にし、「ああ、この国にはこんないい言葉があったのだ」と、すごく感動しました。心が洗われる感じがしました。

「思いやる」、つまり、自分ではない他者の気持ちに思いをはせる。これは、他者への想像力がないとできない行為ですね。ある種の「やさしさ」や、身内だけでなく自分とは異なる他者をも受け入れるだけの「寛容さ」がないと、「思いやる」ことはできない。

もちろん、「邪推」とか「被害妄想」とかいうものも、想像力の産物ですが、せっかくのいい話を、屁理屈で台無しにするのは、きょうはやめておきます。とはいうものの、ちょっとだけ、屁理屈をこねさせてください。

「思いやり予算」

というけしからん言葉がありますね。「思いやり」という美しい言葉を、米軍がらみの予算とくっつけるなんて、どういう神経をしているのでしょうか。ひょっとして、あれってギャグとか、アイロニーなんですか？ そこまで深読みする必要はないか？

で、ネットで検索してみたところ、国会での某政治家の答弁から、マスメディアを通じて全国に広まったみたいです。ご存知のように、国会の答弁のうち限りなく100パーセントに近くが、官僚の作文ですね。議員が不甲斐ない。また、そうした議員を選んだ、自分を含む一般の国民が不甲斐ない。そんな思いに駆られます。そうした事態に思いをはせると、

* 敵は官僚主導政治だ、

という念を強く抱きます。政治家の左右のレベルではなく、法律（※人権や義務といった言葉の体系化された集成）いじり、言葉いじりのエキスパート集団である官僚を視野に入れたレベルで議論をしないと、この国はよくなる。主権在民であるはずの国の統治機構が、ゆがんでいる。ねじれている。ねじれ国会どころではない。国会の「ねじれ」は「見える」が、官僚支配の「ねじれ」は「目につかない」。

官僚は「見えない化」作業に長けている。このような「ねじれ」を「見える化」するのが、マスメディアという「プロ」集団の役目ではないか。いや、機会とデータが目の前にあるのに「見ようと」努力していない、自分を含めた圧倒的多数の「アマ」集団が、メディアリテラシーなどと大仰に構えなくても、自己責任を果たしていないだけだ。「時事放談」でのボヤキのように、きな臭く＝馬鹿臭くなってきたので、このたぐいの話は、ここでストップします。

*

で、機械（※ここではコンピューターですが）が思考するとは、どういうことなのか？ 機械が思考するとすれば、その思考を「思いやる＝想像 or 妄想する＝自分の頭の中でシミュレートする」ことができそう。そう思って、いろいろ考えてみました。このシリーズ用の走り書きメモから、抜き出します。

*「象は鼻が長い」という例の本のタイトルを、機械はどう処理するか。「象の鼻は長い」だったら、どうか？ 日本語における主語の問題。

*機械というより、機械を作った（＝プログラムした or 設計した）ヒトおよび人たちの思考が反映されていると考えるべきか？

*もしも、「地球は太陽のまわりを回る」をすんなり訳して、「太陽は地球のまわりを回る」を入力したとたん、「ブー」と鳴る翻訳機械があったとしたら、恐ろしいことではないか？ 機械が真偽を判断する事態があってもいいのだろうか？ 文法的正誤だけを判断させるだけにとどめるべきではないか？

*「〇〇大臣は辞任すべきである」というセンテンスを入力したとたん、「ブー」と鳴る翻訳ソフト。「〇〇長官は辞任すべきである」というセンテンスを入力したとたん、デジタル化されたデータとして、エシュロンが記録・保存するネット上の翻訳ソフト。杞憂（きゆう）として、済ませることができるか？ 関連事項：グーグルの中国版＝検閲版。

*機械が真偽や正誤を判断するのは、検閲に当たるのか？ 真偽・正誤の基準は、誰がプログラムするのか？ ヒトが機械に合わせる＝ヒトが機械のプログラマーに合わせる？ ＝ヒトがある特定の価値判断（＝考え方＝パラダイム＝物の見方）に合わせる？ 思想統制？

*機械に合わせる＝機械に従う？ ヒトの都合 vs. 機械の都合。カラスの勝手でしょう？

*機械において、言葉＝文章は無意味か？ 単なるデジタル化されたデータなのか？ 電卓がデジタル化された数字を処理するのと同じレベルで、言語の処理＝翻訳を考えてもいいのか？ そんなに単純なものなのか？ もしも機械に意思・思考力があつたら……。

*機械翻訳・翻訳機械、ひいては人工知能（A I）を実現するということは、意図的であるかないかを問わず、結果的に何を目標していることになるのか？ メリットは？ デメリットは？

*ヒトは機械とは違う。ヒトは言葉を作る。ヒトは言葉を作ることが「できる」。言語能力。言語運用。Ch 教授。

少し手を加えましたが、以上のようなメモが残っていました。捨てるのもなんなので、そのまま書き留めておきます。たった今、「.....のもなんなので」と、お茶を濁すような曖昧な言葉を書きましたが、実は言霊が怖いのです。

だから、過去に閉鎖・削除したブログ記事を捨てきれずに、パソコン内およびU S Bフラッシュメモリに保存しておくのです。実に往生際が悪い。そんな者が、機械翻訳・翻訳機械だの、人工知能だの、いけしゃあしゃあと書いている。まったくもって矛盾していますね。言い訳の言葉が出そうになりましたが、きょうは、止めておきます。

*

そんなわけで、さらにメモの供養をさせてください。

きのうの記事で、ビジン言語からクレオール言語への移り変わりのおとぎ話と、★のついた6つのおとぎ話をしました。どれもが、

*言葉を作る

をテーマにしたものです。実は、このシリーズ用の走り書きメモには、「言葉を作る」に関してものが、まだ残っているのです。このまま捨ててしまうのは、心残りになりそうなので、つまり、言霊が怖いので、以下に箇条書きにします。未整理なので、ごちゃごちゃしていますが、お読みいただければ嬉しいです。

*ダライ・ラマ、マザー・テレサの英語。母語ではない。説得力。多くの人を動かす力。ブローケン・イングリッシュ。文法的に正しくなくてもいいのではないか？

*「話し言葉には文法がない」と何かで読んだ記憶。出典をさがす。検索する？

* シングリッシュ。シンガポールで話されている英語。

* インド英語。フィリピン英語。

* 和製英語。／和製漢語。国字。借用語。外来語。新漢語。造語。明治維新。／ハンゲル。／まなぶみ。かなぶみ。かな。まなかな。／文化。クレオール文化。

* 『フィネガンズ・ウェイク』。ジェームズ・ジョイス。日本語への翻訳。柳瀬尚紀。「英語の洒落は絶対に日本語でも洒落にする」という柳瀬氏の発言。翻訳の鬼。／小田島雄志訳のシェークスピアの作品。

* 『時計仕掛けのオレンジ』。アンソニー・バージェス。ナッド・サッド言葉。／『1984年』。ジョージ・オーウェル。人工語。

* 言葉狩り。差別語。敵性語。戦時下の野球の実況放送。放送禁止用語。用語の言い換え。「統合失調症」。「認知症」。

以上です。

もう少し気張れば、詳しく書くことができたかもしれないトピックもありましたが、今の調子では無理なようなのでやめました。でも、いつか、おりに触れて書いてみたいものもあります。さらに、上のメモたちと一緒にクリップで止めてあった紙切れに、次のような走り書きが書かれていたので、これを機会に書き写して残しておきます。供養させてください。「言葉を作る」というテーマとは直接関係はありませんが、狭義の言葉＝言語に関するものばかりです。

* 森有礼。英語の国語化を提唱。

* 志賀直哉。フランス語の国語化を提唱。

* 漢字の制限。当用漢字。常用漢字。文化審議会国語分科会。国語審議会。

* アメリカ英語、イギリス英語。スペインのスペイン語、中南米のスペイン語。フランス語、カナダのフランス語。中南米の日系人1世2世の使っていた日本語。植民地での言語のほうが、概して、語いや文法的に古い形をとどめるという現象は、なぜ起こるのか？ たとえば、fall と autumn 。

以上です。

こうやって、今、供養して残したメモを読み返してみると、お勉強と本や文献をじっくり読むことが苦手な自分ですけど、いつか調べものをして取り組んでみたいと思うものもあります。合掌（※供養の儀式の一部です）。

*

さて、話は変わりますが、「人間＝機械」説（2）2009-04-24 において、Ch とかいうヒト（※チョムスキーではありませんよ、念のため。バレバレですよ）の直接のお弟子さんか、孫弟子さんか、喧嘩別れなさった人たちか、知りませんが、とにかく、その人たちが作り上げたらしい、

* 森羅万象＝「世界 or 宇宙」→人間機械＝言語能力 → 正しい文＝言語運用

という「言語モデル」を勝手に、

* 「人間＝機械」説

と名づけました（※その道の方々に申し上げますが。議論を吹っかけたり、喧嘩を売っているではありませんよ、I love peace. ）。ヒトの言語能力を機械にたとえる＝こじつける＝なぞらえるというモデルは、「言葉を作る」というテーマを論じるのには実に使い

勝手がいい、すっきりしたモデルであるために、この説を用いて＝出汁（だし）にして、話を進めてきました。

で、きょうは「反「人間＝機械」説」というタイトルにしましたので、この説とはお別れします。したがって、これからは、このブログで金太郎飴のように、うんざりするほど繰り返して出てくる、

* Aの代わりに「Aでないもの」を用いる

と、

* 尻尾のないおサルさんの脳内で生じた「ズレ」→「ぐちゃくちゃ」＝「ごちゃごちゃ」
＝ 言葉・言語

という考え方というか言語観に戻ります。

「言語モデル」などいう、すっきりしたものではありません。ずっと抑えてきたダジャレ＝オヤジギャグも解禁になります。というわけですので、上記の、「お別れした」言語モデルで重要な意味を持つ「正しい」とも縁が切れます。

今後は、「正しい」「正しくない」という対立に気を遣うことなく、「正しくない」というヒトの「常＝性（さが）」について、真面目に本気で考え、作文していく所存です。また、このブログサイトをお訪ねくだされば嬉しいです。

09.04.27 あう（1）

◆あう (1)

2009-04-27 14:55:34 | 言葉

ヒトは、

*言葉＝言語というものの物質的な側面である、音声＋文字という「実体」

を、かろうじて知覚できます。かろうじて知覚したとしても、

*言葉＝言語というものの抽象的な側面である、意味やメッセージと呼ばれている、「実体」がなく、トリトメのないもの

を「理解」＝「解釈」しようとする、事態はきわめて困難になります。知覚したデータ＝情報の量と、その「難易度」＝「質」にも左右されますから、一概には言えませんが、困難であることに変わりはありません。そもそも、

*「理解」＝「解釈」という抽象的な「作業＝仕組み」

自体が、ヒトには把握＝体得できていないからです。つまり、何だか知らないけれど「分かる」or「分からない」というありさまなのです。

また、たとえ「理解」＝「解釈」することを把握＝体得できたとしても、道具の仕組みを頭で知っただけの状態でしかなく、その道具を使いこなせるかどうかは、不明です。生来の器用さ次第でどうにかなるものかもしれないし、時間をかけて熟達していく性質のものかもしれません。いずれにせよ、「理解」＝「解釈」は難しいですね。

だからこそ、これだけ、「誤解」とか「曲解」とか「話が通じない」とか「分からない」とか、「言ったの、言わなかったの」といった状況が、古今東西を問わず繰り返されてきたのであり、おそらく、現時点でも世界中で起こりつつあるのでしょう。

以上は、高みの見物が可能な他人事（ひとごと）ではありません。たった今このブログを書いている者にも、そしてそれをお読みなっているあなたも、こうした言葉＝言語をめぐるややこしい状況に、巻きこまれている最中（さなか）にあるのです。

* 「ああ、わけの分からないブログだ」

とお思いになっていらっしゃる方々には、お詫び申し上げます。ごめんなさい。これでも、精一杯、みなさんに分かっていただけのようにと、工夫しながら書いているのですが、力が及びません。

言い訳＝弁解でお茶を濁させていただきますと、「理解」＝「解釈」をめぐる「難しさ＝ひよっとすると不可能性」は、ヒトである以上、誰も免れる＝逃れることなどできない事態だとも、言えるのではないのでしょうか。「それ以前の、おまえの表現力の乏しさの問題だ」と言われれば、またもや、「ごめんなさい」とお許しを願うしかありません。

*

いずれにせよ、

* 言葉＝言語を用いるさいの「不自由さ」を「自由」と錯覚する

という鈍感さ＝たくましさを備えているのが、ヒトという種（しゅ）です。さもなければ、ヒトでなしです。ヒトなんか、やってられません。元気はつらつ、「ポジティブにいこう」の精神で、日々邁進できるのもまた、ヒトの常です。

大不況のおりとはいえ、この国の年間自殺者数が連続して3万人を超えているとはいえ、うつやプチうつをわずらう人たちが増加しているとはいえ、「頑張る」しかないのです。

もっとも、「頑張る」という言葉は、うつの人たちにとっては禁句だという説があります（※ちなみに、うつという診断名を下された自分の感覚では、「頑張って」と真剣なま

なごしで相手から言われると、確かに「えっ？ 頑張るの？ つらいなあ」という感じがして、期待されているような錯覚に陥り、頑張らないと相手に申し訳ないような気分になり、体がこわばります。つまりストレスになります。自分も他人事ではないのですが、そんな場合には、「頑張らない」で「頑張る」しかありません。

話を戻します。

冒頭で、言葉＝言語が、まるで物質的な側面と抽象的な側面に分かれるようなことを書きましたが、あれは大嘘＝でたらめ＝フィクション＝ただのお話＝「良く言ってせいぜい仮説」です。「とりあえず……と考えて話を進めましょう」、くらいの意味にとってください。

このブログ記事は、学术论文でも研究者の報告書でもありません。素人が、日ごろ考えていることを文字にして、こんなふうに自分は考えておりますが、みなさん、どうお思いになりますか？ という気持ちで、ブログとして公開しているだけです。「当たり前だよ、こっちは、あんたに何も期待なんかしていないよ」とおっしゃっていただければ、それでいいのです。

と、お断りしたうえで、今後の計画を書かせてください。

* 「あう」

というタイトルで、「言葉＝言語」の抽象的な側面について、これから何回か記事を書こうと思っております。上述の「理解」＝「解釈」だけでなく、「意味」＝「メッセージ」、「言葉＝言語」の「仕組み＝働き」といった、実体がなくトリトメのない側面についても、書いてみたいです。こうした「トリトメのないもの」について考えるとき、ヒトは支え＝拠りどころ＝ツールになるものを必要とします。これまでに、いくつかのブログ記事を通して、次のようなツールを用いてきました。

(1) 表象。表象の働き＝「Aの代わりに「Aでないもの」を用いる」。

(2) トリトメのない記号＝まぼろし＝「そっくりなものが、ずらりと並んでいる」＋

「そっくりなものが、ほかにもたくさんあるかもしれない」＝「お父さんがいない状態で、お母さんから生まれたそっくりな子どもたち」＝コピーのコピー＝起源のない複製たち

(3) うだつのあがらない尻尾のないおサルさんの脳内にズレが起きた → 「尻尾のないおサルさん + α 」＝「ヒト」＝「人間様」

(4) 「脳内のズレ」→「言葉＝言語」＝「ぐちゃぐちゃ」＝「ごちゃごちゃ」

以上です。

*

で、この「あう」というシリーズでは、

*信号

というツールを用いようと考えています。言葉＝言語というトリトメのないものを、さまざまな切り口で楽しんでもみよう、という「お遊び」の一環とと思ってください。真実とか原理とか法則とかいう、ヒトとしての身の程をわきまえない「研究」＝「思考」＝「思想」とは無縁の「お遊び」です。こちらは、そうした「お遊び」を本気でやっていますが、みなさんは、本気でおとりにならないでくださいね。

サーカスなどで、曲芸をなさっている方々は本気で演じていらっしゃいます。でも、曲芸師の方々は、お客さんに本気＝真剣に見てほしいと思っているわけではありませんね。お笑いもそうです。芸人さんは、それなりに本気で一生懸命芸を磨きながら、舞台や高座に上がるわけですが、みなさんにくつろいだ気分で「わはは」と笑っていただくことで、幸せを感じるのです。それと、このブログは似ています。

「わはは」でも「えっ」でも「おっ」でも「ばーか」でも「あほちゃうか」でも、いいです。何か「感じる」ところや、「考える」ところや、「ピクっ or ゾゾっとくる」ところが

あれば、それだけで、こちらとしては本望なのです。なにしろ、言葉＝言語について考えるとは、

* 「ない」について考える。

という、理不尽で倒錯したことを企てているのと同じなのです。ですから、自分は「絶望的な事態＝状況」に自分自身を追いこんでいるのだと、覚悟＝「身の程をわきまえる」＝自覚しなければなりません。だから、本気です。本気にならなければ、そんな理不尽なことはできません。

「絶望的な事態＝状況」を、「きわめて不自由で窮屈な枷（かせ）or 梔（わく）or 檻（おり）の中にいる」と言い換えることもできるでしょう。それなのに、ヒトはそうした状況をきわめて「自由で楽観的」なものとして知覚してしまう習性が身についています。さきほど用いたフレーズと似ていますが、

* 不自由さを自由さを取り違える。

たとえば、すっきりとして分かりやすいかもしれません。ただし、この「すっきりとして分かりやすい」が、多くの要素を捨て去ったあとの、「大雑把で錯覚に満ちた杜撰（ずさん）さ」とほぼ同義であることを忘れてはなりません。これが、

言葉＝言語を思考の対象とする代償

なのです。この事態を言い表すのに、

* 簡単に分かりやすく言えば不正確になる。複雑に言えば分かりにくい。

と言うくらいで妥協してもいいでしょう。

しよせん、言葉＝言語を思考の対象にする義理も必然性も必要も、全然ないのです。一

言で言えば、

*無用

つまり、こんなことしても、全然世の中で「役に立たない」のですから。こんなことにかかざらわなくて、「自由で楽観的に」「世の中で役に立つように」生きるのが「まっとうな」生き方です。無用なことにかかわる必要性など、まったくないのです。

*

でも、その「無用＝役に立たない」にとりつかれる人たちがいます。ここにも1匹います。どういうわけだか、います。「無用＝役に立たない」とは無縁の人たちから見れば、どこかがズレてしまっているとしたら、思えないでしょう。要するに、偏屈＝変わり者なのです。ここである「たとえ＝比喩＝言い換え」を試みます。

*「無用＝役に立たない」とは無縁の生き物たちから見れば、どこかがズレてしまっているとしたら、思えないでしょう。要するに、偏屈＝変わり者なのです。

お分かりになったでしょうか？ 今話題にしているのは、ヒトという種（しゅ）のことなのです。この惑星に生息するおびただしい数の種類の生き物の中に、

*ヒトという偏屈＝変わり者の種がいる。

そのヒトという種の中に、さらに偏屈＝変わり者がいる。こんなふうには、たとえてみると、分かりやすいかもしれません。ヒトという種が偏屈だと短絡しているわけではなく、あくまでも比喩ですので、誤解なさらないようにお願い申し上げます。

ただ、ヒトは「ちょっと変わったこと」をしている、くらいの意味です。偏屈なのは、ヒトの中で（＝ヒトであるくせに）、「ちょっと変わったことをしている」＝「言葉＝言語に対して過剰にこだわっている」、このブログを書いている者のような、ヒトのはしくれです。これは比喩ではありません。

*

この惑星で、

* 「狭義の」言葉＝言語：話し言葉＋書き言葉

を用いる生き物は、今のところ、ヒトだけであるとされています。それが事実ならば、ヒトは、「きわめて変わったこと」をしているとも言えそうです。でも、自分たちが「変わっている」とは思っていません。他の生き物に比べて「優れている」と思っています。

さて、

* 「広義の」言葉＝言語：話し言葉、書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（※家庭だけで通じる断片的な手話）、指点字、点字、音声（※発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号、および、あらゆる知覚対象など

というものを想定した場合には、その中には、ヒト以外の生き物も用いていると考えられるものも含まれますね。最後の「あらゆる知覚対象など」まで含めてしまえば、ゾウリムシも「広義の」言葉＝言語を用いていることになります。さらに「信号」も入っていますが、そこでの「信号」は狭義のものです。符号とかシグナルとほぼ同義で含めています。

*

実は、その

* 「信号」

なるものについて、もっと考えてみたいのです。このところ、別のことを考えながらブログの記事を書き進める一方で、以上のようなことをずっと考えていました。その過程で、気になったのが「あう」という大和言葉系の語なのです。

*あう＝合う＝会う＝逢う＝遭う＝遇う＝和う＝壺う＝敢う＝饗う＝あうん＝阿吽＝阿
伝＝あい＝愛

最後のほうは、「お遊び」用です。語源も、大和言葉系と漢語系の区別もあったものではありません。ダジャレの境地です。相合傘＝逢い合い傘＝愛愛傘というのと、同じくらしい「めちゃくちゃなこじつけ」＝「あほのすること」です。まさに、上で書いた、

*「脳内のズレ」→「言葉＝言語」＝「ぐちゃぐちゃ」＝「ごちゃごちゃ」

です。

でも、本気なのです。正気だという保証はまったくありませんが、本気ですので、今後もこのサイトにおいでになるのをお待ちしております。どうぞ、また遊びに来てくださいませ。

09.04.28 あう (2)

◆あう (2)

2009-04-28 14:49:15 | 言葉

*あう＝合う＝会う＝逢う＝遭う＝遇う＝和う＝壺う＝敢う＝饗う＝あうん＝阿吽＝阿

伝=あい=愛

上の言葉たちを眺めていると、いろいろなイメージが喚起されます。これまでさまざまな記事の中で、「言葉=言語」について考えるさいに、上と同じような「=」を使った「言葉の羅列作り」の作業をしてきました。思い出してみます。

*「わかる」=「分かる」=「別る」=「解る」=「判る」(※「かわる(1)」2009-03-26～「かわる(10)」2009-03-29 から引用)

*「かわる」=「変わる・変る」=「代わる・代る」=「替わる・替る」=「換わる・換る」(※「かわる(1)」2009-03-26～「かわる(2)」2009-03-29 から引用)

*「はる」=「張る」=「貼る」=「墾る」=「晴る・晴れる」=「霽る・霽れる」=「腫る・腫れる」=「脹る・脹れる」(「なる(1)」2009-03-30～「なる(10)」2009-04-02 から引用)

*「はらう」=「払う」=「掃う」=「祓う」(「なる(1)」2009-03-30～「なる(10)」2009-04-02 から引用)

*「なる」=「成る」=「生る」=「為る」=「慣る・慣れる」=「馴る・馴れる」=「狎る・狎れる」=「熟る・熟れる」=「鳴る」(「なる(1)」2009-03-30～「なる(10)」2009-04-02 から引用)

*「たとえる」「たとえ」「たとい」「たとえば」「たどる」(「たとえる(1)」2009-04-03～「たとえる(9)」2009-04-08 + 「たとえる(10)」2009-04-17 から引用)

最後の一行を除き、ひらがなで書いた大和言葉系の言葉を、漢字に送り仮名を添えるという形で置き換えたものです。それぞれの列にある「漢字+ひらがな」という組み合わせに目を走らせていく。そして、各列の最初にあるひらがなだけの言葉を声に出して読んでみる。音=音声=発音は同じなのに、「漢字が違う=感じが違う」。まさに感字です。

字を感じる。文字を感じる。それにその字の意味を重ね合わせる。すると音たちと意味たちとイメージたちが多層的な体験として、身体を揺さぶる、あるいは貫く。漢字は表意文字であると同時に発音も伴う。ひらがなは表音文字であると同時に意味も伴う。その別個であるはずの文字の体系が、日本語の中では併存し併記される。

これは夢、いや夢現（ゆめうつ）です。

それだけではありません。同じく漢字の形からとられたというカタカナまで存在する。アラビア数字＝算用数字やローマ数字が混じることもある。場合によっては、略語や記号としてのアルファベット、ローマ字としてのアルファベットが、漢字やひらがなやカタカナに混じって表記されている文章も珍しくはない。

英語を始めとするヨーロッパの言語の単語やフレーズやセンテンスまでが混じった文章も見かける。こんな驚くべきことが、あっても不思議とは思わなくなっている。よく考えると不思議。びっくり仰天。それなのに、すました顔をして存在している。実存している。これは、この国のことなのです。この国で、日々刻々と起こっている現象なのです。とはいえ、

*あらゆる言語がユニークである。

と言語学の本にはよく書いてあります。実際、そうなのでしょう。ある特定の言語が、他の言語と比べて、より複雑だとか、より単純だとか、より高等だとか、より劣っているだとか、そんなことはない。たとえば、アメリカ先住民の諸言語の中には、たとえば、ヨーロッパの諸言語と単純に比較して、かなり複雑な文法体系を持つものがある。そんなふうに言語学は説きます。

*

次のような思い出が、頭に浮かびました。アラビア語にはラクダに関する単語が百個以上ある（※数は、うろ覚えです）。ラクダの姿勢やある状態を言い表す言葉だけで百を超える。エスキモー（※現在では主に、イヌイットと呼ばれていますね）の諸言語には、それぞれ雪に関する、あるいは雪の形態や降り方や積もっている状態などを表す単語や

言い方が百個以上ある（※数はうろ覚えです）。

その百個以上というのは何千個か何十個の記憶違いかもしれませんが、そんなことを教えてくれた中学の先生がいました。その話を聞き、魔法にかけられたように、ぼーっとした気が遠くなるような気持ちになったことを覚えています。言葉って不思議だ。いたい、どうなっているのだろう――。

「ほら、日本語でもそうでしょう。コメ、ご飯、めし、飯（いい）、ライス、稲、苗、もみって言葉がありますね。それは英語では、みんな rice って言うんですよ」

「先生は、英語が専門じゃないから、よく知りませんが、雄牛、雌牛、子牛、牛肉、牛乳みたいに、みんな「ウシ」とか「ギユウ」がつくけど、確か英語では、別の単語で言うんでしょう？ 豚やニワトリも同じように、雄と雌と赤ちゃんでは違った言い方をするじゃなかったかしら」

「言葉ってというのは、その言葉を話している人たちの生活や文化と密接に結びついているのですね」

社会科の女性の先生でした。農耕民族と狩猟民族の説明の中で、そんな話をしてくれたのです。その先生の言葉が、今でも断片的に思い出されます。それを、テキトーにつないだのが、ラクダ、雪、rice についての上述の3つの文章です。

高校生になっても、その先生の話してくれたことの切れ端が頭の中に残っていて、大学受験には役に立ちそうもない、以下のような単語を調べて覚えたものでした。

* bull、ox、cow、calf、beef、milk、cattle（ウシ関連の単語）

* swine、pig、hog、boar、pork（ブタ関連の単語）

* rooster、cock、hen、fowl、chicken（ニワトリ関連の単語）

* deer, red deer, fallow deer, hart, stag, buck, hind, doe, roe, fawn, calf, venison
(シカ関連の単語)

* sheep, ram, lamb, mutton (ヒツジ関連の単語)

このように、狩猟民族（※実際には農耕にも携わっている場合がありますが）の言語を起源とする英語では、飼育したり狩猟の対象となる動物では、雄鶏や雌鶏のように同じ言葉に雄や雌をくっつけるというのではなく、独立した単語を用いますね。その意味では、言葉＝言語というものは、それぞれがドメスティックなものだと言えます。

しかし、現実には、こうした狭義の言葉＝言語が、ヒトの移動にともない、あちこちで「出合う」、「溶け合う」という現象を起してきました。ビジン言語とクレオール言語（※「人間＝機械」説(3)」2009-04-25）という現象です。その意味では、言葉＝言語は「内 vs. 外」という対立をいとも「簡単に超える＝無効にする」「力＝ダイナミズム」を備えています。

その「出会い」と「溶け合い」によって、新たにできた言葉＝言語が、それを話す集団の生活と文化に深くかかわりながら、次第にユニークな属性を「そなえていく＝つちかかっていく」という過程をたどります。その結果として、「混じり合う」前のそれぞれの複数の言葉＝言語がその痕跡をとどめることもあれば、消えてしまうこともあります。

たとえば、シンガポールの「英語」（※括弧でくくるべきでしょう）を指すシングリッシュでは、上記の家畜を区別する単語の一部は、たぶん用いられていないでしょう。たとえばシングリッシュを広義のイングリッシュの1つであるとみなしても（※あえてみなすべきだとは思いませんが）、シンガポールに住む人たちの生活や文化とは無縁の単語は、シングリッシュでは使われていないと思われます。

また、「英語」（※これも、括弧でくくるべきでしょう）が広く話されているインドやパキスタンを例にとれば、ウシを神聖視するヒンズー教徒と、ブタを汚れたものとみなすムスリム（※イスラム教徒）とでは、その人たちが話す2種類の「英語」は、地域差だけでなく、宗教観を大きく反映しているものと想像できます。

考えてもみてください。前者はいわゆる多神教であり、後者はいわゆる一神教です。その両者および現在のスリランカ、バングラデシュをつないだのが、かつての「大英帝国＝植民地主義の権化」と、その帝国の言葉＝言語である英語だったのです。実にきな臭い話ですね。でも、事実なのです。

*

それだけではありません。イギリス連邦＝英連邦（＝ the Commonwealth of Nations）という名称で束ねられた旧大英帝国の植民地。かつて「日の沈むことのない」という修飾語を冠した大英帝国の支配下にあった国々や地域では、程度の差はありますが、今でも「英語」が用いられています。「外」から入ってきた or 押し入ってきた「異」なる言葉＝言語が、その地域の「異」なる「生活と文化」あるいは「文明」をつなぎ「合わせた」、あるいは、「無理やりくっつけた」。これが、歴史的事実です。

その過程で、無数と言っていいほどのピジンやクレオールが生まれた。そして、意図的にあるいは恣意（しい）的に、国境という線引きをして英国はその地から撤収した。その結果、現在、世界に散らばる旧英国領で紛争が起き、多数の人たちの血が流れている。これも、事実です。

英国は、世界中に時限爆弾や地雷を埋めて撤退した。そのように言えば言いすぎでしょうか。言語とは直接的に関係しませんが、線引きという点では、たとえばパレスチナ問題に限って言えば、決して言いすぎだとは言えない気がします。

ロンドンにある「大英博物館＝ British Museum」を、「海賊の倉庫」だとか、「海賊の強奪品の展示場」とか、呼ぶ人たちが世界中にいるのは、当然でしょう。また今になって、「盗んだものを返せ」という声が上がっているのは、理にかなっていると思います。最近のニュース報道を見聞きすると、そう言われている国は、英国だけではありませんね。

サザビーなどでのオークションに関する、複数のニュースを思い出してください。英国に限らず、スペイン、ポルトガル、オランダ、フランス、ドイツ、ロシア、米国、日本など、かつて植民地政策を実行してきた国々が、今英国を例として述べてきたような「歴史的事実」の当事者、正確に言えば加害者だったのです。

*

違った視点からも、考えてみましょう。現在、グローバルな大不況の影響下にあるとはいえ、インドは、ITを基幹産業として目覚ましい発展をしつつあります。また、インドは、広義の多国籍企業のグローバルなコールセンターとして、重要な機能を果たしています。たとえば、デル社のパソコンを買った米国内に住むユーザーが受話器を上げて、ある電話番号をダイヤルする。すると、インド訛りの「英語」の声が聞こえてきて、適切なサポートをしてくれる。これも、ありふれた出来事になっています。

最近では、中国訛りの「英語」も聞かれるといます。実は、この文章はデル社のPCを使って書いています。サポートが必要になり、指定の電話番号をダイヤルすると、どう聞いても「中国系」の人と思われる方の声が聞こえてきます。もちろん、日本語ですが。

米国内のユーザーがDELLのコールセンターに電話をする話に戻します。この場合には、事実上の「世界語」としての「英語」の力を無視することはできない、という証しと言えるでしょう。香港では、その歴史的経緯から、「英語」を使いこなせる中国人がたくさんいます。東南アジアに散らばっている華僑にも、「英語」に堪能な人たちが実に多いです。その人たちにとって、英語は生きるための「糧 or 道具」の1つなのです。この視点から考えるならば、グローバルなレベルでの上述の事態には全然きな臭さは感じられません。

このように、

*複数の「言葉＝言語」と文化・生活が「出合う」「溶け合う」「混じり合う」という意味での「あう」

の「過酷な＝負の＝ネガティブな」側面と、「頼もしい＝正の＝ポジティブな」側面の両方を、考え「合わせ」たうえで、冒頭の大和言葉と漢字との「出会い」にテーマを戻してみましよう。

*

さて話は、がらりと変わります。大和言葉を漢字と「からませる」＝「出合わせる」ことで、何が起こるかという、

* 「分ける・分かる」

が生じるということです。

* 大和言葉の多重性＝多層性が「見える化」＝「顕在化」する。

と言ってもいいでしょう。これは非常に「興味深い＝感動的な」現象ではないかと思えます。たとえば、

* 合う＝会う＝遭う

については、新聞社や通信社が発行している「用語の手引き」や「用字用語集」などに、用法の例が記載されています。つまり、新聞や雑誌という媒体を通し、日常生活で、よく目にする漢字と送り仮名の組み合わせですね。辞書を引けば、微妙な違いが丁寧に説明してあります。例を挙げると、

* 目と目が合う／〇〇さんと会う／事故に遭う

は、基本的な書き分けですね。

* 計算が合う・殴り合う・間に合う／理想の人と出会う・席に立ち会う・死に目に会う
／災難に遭う・にわか雨に遭う

と、なるとかなり微妙な意味の違いが「書き分け」によって表現できます。さらに、

*「合致する」という意味の「あう」／「集合する」という意味の「あう」／「会合する」という意味の「あう」／「面会する」という意味の「あう」／「遭遇する」という意味での「あう」／「遭難する」という意味での「あう」

と漢語系の言葉と組み「合わせ」て、意味を比較することも可能です。

で、思うのですが、以上のような意味の違いは、もともと大和言葉「あう」に存在したのでしょうか？ それとも、大和言葉と、漢字＝漢文＝中国語が、少数のインテリ階級 or 支配者階級でバイリンガルの状況が続いている間に、中国語を「見習う」、あるいは、中国語と「出合う」形で、「あう」が新たな意味「合い」を取り入れたのでしょうか？

*「あう」は、もともと「あう」として「あった」のでしょうか？ それとも、「あう」は、別の（＝異なる）「あう」と出「あって」変化したのでしょうか？

こういう卵とニワトリのどちらが先かと似た問題は、専門家に任せるとして、素人は、

*今「ある」まます、観察する。

という方法をとるしかないようです。

言語学に、

*通時的 vs. 共時的

という対立した考え方＝方法論があるようですが、このブログを書いている者には、そのような肩に力が入った姿勢で、言葉＝言語と取り組む気力はありません。自分なりに、だんだら＝のりくらしとやっています。このブログでやっているのは「お遊び」です。と、きのうに引き続き、断っておきます。

というわけで、卵とニワトリのどちらが先かは不思議ですが、あいにくタイムマシンがありませんので、保留、つまり、「？」のまま、話を進めます。とにかく、微妙な違いが「ある」ということだけを前提に、考えていきましょう。冒頭に挙げた、

* あう＝合う＝会う＝逢う＝遭う＝遇う＝和う＝壺う＝敢う＝饗う＝あうん＝阿吽＝阿
伝＝あい＝愛

を、再び、ぼけーっと眺めていて、ふと思い出したことがあります。また、脱線させてください。

*

たびたび道草して、ごめんなさい。で、思い出したのは、

* 「ああ、イヤだ。英語って、どうしてこんなに、ややこしいの？」

という発言です。

以前、アルバイトで、塾の英語講師として中・高生に英語を教えていたことがありました。その時期に、ある授業で、ある高校生の女の子がため息混じりに、そう言ったのです。英語のスペリングと発音の関係について、愚痴をこぼしたのです。

確かに、そうですね。英語には、ローマ字式に読んでも、「ある程度OK」なものもあれば、「なんでこうなるの!？」とぼやきたくなるスペリングの単語もあります。中学の教科書でも出てくる、enough なんて、そうですね。なんで、イナフなの? eight (※エイト) も、そう。なんで、読まないの?

gh のことです。ghost (※ゴースト) だと、読んだような読まないような「ゆうれい」に出合った (or 出会った or 出遭った) ような気がするし、through なんて、発音が苦手な th で始まって、どうやら l (※エル) とは違う読み方をするらしい r (※アール) まで

が出てきて、あれりゃ！後半はイナフと同じじゃん。

なのにスルーって読めっていうわけ？ 中間テストで書かなきゃならないはめになったら、どう「スル」の？ 馬鹿にしないでちょうだい。

と、英語自体に悪態をついても仕方がないので、英語を教える人が生徒の罵倒を浴びることになります。その罵倒が的を得ているために、先生は返す言葉がない。先生も、生徒も、ニッチもさちっちもドーニモぶるどっぐ状態。

先生としては、英語の語源や、言語の構造＝体系を説明して納得させることも1つの手ですが、それに辛抱して耳を傾けてくれる生徒は、まずいない。「ややこしいことをいう先生」というレッテルを貼られたら、生徒の学習意欲をそぐ結果になることは明らか。善意が裏目に出る。友好的信頼関係にヒビが入る。

フォニックスとやらも、覚えるのに根気が要るし、万能ではない。就学以前のお子さんや、小学生くらいなら、お遊び感覚で、喜んで覚えてくれます。でも、中学で英語につまずいてしまって、高校生になってしまった生徒さんだと、フォニックスでフェニックスのように甦ってくれる確率は、きわめて低いし、時間的余裕もない。無力な先生は、なだめすかして生徒の奮起をうながすしかない。

「そうだよ、英語ってイヤな言葉だよ。でも仕方ないもんね。じゃあ、一緒に20回書いて覚えようよ」

と、言いながら、生徒の隣の空席に着くのが関の山でした。これ、実話です。

おかげさまで、その時は、through のスペリングを、その生徒はなんとか覚えてくれました。スロウグ、スロウグと繰り返し口にしながら、席を並べて一緒に書いた結果です。ああ、なんてテキトーな先生だったのだろう、と反省しています。でも、結果よければすべてよし。とにかく、覚えてくれた。万歳！

*

ところで、このブログでは、

*すべての言葉＝言語は、ピジンおよびクレオール言語である。

という考え方をとっています。これをまことに下品でエッチな表現で言い換えると、

*すべての言葉＝言語は、ぐちゃぐちゃ、くちゃくちゃであり、オージー (orgy)、レイプ (rape)、やり合い、野合などと並行して起きた、相合傘＝逢い合い傘＝愛愛傘＝愛の産物である。

となります。

そのぐちゃぐちゃが、英語の場合には、スペリングに顕著に表れていると言えそうです。イングランドの「言葉＝言語」のくちゃくちゃぶりは、イングランドのぐちゃぐちゃ＝くちゃくちゃした歴史と重なっているのです。

一時は大英帝国に匹敵するくらいの勢いを持っていた、かつてのスペイン王国の言語、スペイン語は、スペリングという点だけをみると「すっきり」していますね。ほとんど、ローマ字式に読めると言ってもいいほど「すっきり」している。そんなことを、英語講師をしていたころ、上とは別の生徒さんに話しました。

「ほとんど、ローマ字式に読めるの？」

「うん、そうだよ」

「(日本で) 英語の代わりにスペイン語を教えればいいのに」

「うん、そう思う」、

という感じでした。

スペイン語はスペイン語なりにややこしいことがたくさんあることは、黙っておきました。大英帝国ではなく大西王国か？ これは、よく考えると暴言ですね。植民地政策であることには変わりはない。前言撤回します。

*

で、話を戻します。

もしも、「大ジャパン帝国」(※「大日本帝国」とは違いますよ。どうか、誤解なさないでください) だったら？ これは、おとぎ話=つくり話=フィクション=大嘘=でまかせ=「せいぜい格好つけてアレゴリー」です。で、繰り返しますが、もしも、歴史上で「大ジャパン帝国」が成立していたとしたら、現在、世界中に大変な苦勞をしている人たちが、たくさんいるでしょうね。

現実の世界で、英語のスペリングで、苦しんでいる人たちが、たくさんいるように。漢字、ひらがな、カタカナ、アラビア数字=算用数字、ローマ数字、略語や記号としてのアルファベット、ローマ字としてのアルファベット、さらには、英語を始めとするヨーロッパの言語の単語やフレーズやセンテンスまでが混じった表記が可能。こんなややこしい言葉=言語の読み書きを勉強しなければならない。でも、この国では、現に、大部分の人たちが、「当たり前みたいに」=「ごく自然に」読み書きしている気になっている(本当は、大変な苦勞をした結果なのですけど)。

これは、この国に住む人たちだけが、きわめて優秀だからなのか？ うーむ。そういえば、年表で見ればそれほど昔ではないある時期に、この国以外のかかなり広い地域で(※大東亜共栄圏という言葉が想起されます)、上の「おとぎ話」での「読み書きの話」が現実に行われていたのです。もうご高齢ですが、まだそうした読み書きの教育を受けた人たちが生存しています。

中には、まだ、そのややこしい「言葉=言語」の読み書きをよく覚えている人がいても、驚くにはあたりません。くれぐれも、きな臭い=政治的な話にとらないでください

ね。それは、本意ではありません。お願い申し上げます。で、そう考えるとき、

* 森羅万象 = 「世界 or 宇宙」 → 人間機械 = 言語能力 → 正しい文 = 言語運用

という言語モデルを打ちたて、

* ヒトには言語を習得する能力が備わっている。その能力には、ヒトという種に共通の属性が含まれているらしい。その証拠に、ヒトの子（※特に乳幼児）であれば、人種・民族・出身地に関係なく、どんな言語でも習得させることができる。その能力を「言語能力 (linguistic competence)」と、とりあえず呼ぼう。

という、「[人間=機械]説(2)」2009-04-24 で触れた、Ch とかいう人（※記憶違いでなければ、チョムスキーではないと思いますけど）の直接のお弟子さんか、孫弟子さんか、喧嘩別れなさった人たちが提唱した言語観が、魅力を持っている = 信頼できそうだと感じられるのです。

ただ、1つ大きな問題があります。この言語モデルでは「正しい文 = 言語運用」という部分が、外すことのできほど重要な意味を持っているらしいのです。

すると、

* すべての言葉 = 言語は、ピジンおよびクレオール言語である。= すべての言葉 = 言語は、ぐちゃぐちゃ、くちゃくちゃであり、オージー (orgy)、レイプ (rape)、やり合い、野合などと並行して起きた、相合傘 = 逢い合い傘 = 愛愛傘 = 愛の産物である。

とは、相容れない = 「あい」入れない = 「合わない」という結論に達します。ですので、このさい、思い切って

* 森羅万象 = 「世界 or 宇宙」 → 人間機械 = 言語能力 → ぐちゃぐちゃな言葉・言語のありよう = 言語運用

に変更したいと考えました。

みなさん、どう、お思いになりますか？ えっ？「好きなようにやれば～」ですか？

やっばし——。失礼をいたしました。では、また。

09.04.29 あう (3)

◆あう (3)

2009-04-29 13:56:56 | 言葉

フェティシストであることは、これまで何度かお話ししました。何を「フェティシズムの対象＝フェティッシュ」にしているかと申しますと、言葉です。安上がりですし、あまり、他人様にご迷惑をかけることがないようなので、気も楽です。法に触れるまで逸脱する気配も、今のところはなさそうです。

言葉のフェティシストにも、いろいろあるようです。ある特定の言葉、たとえば人名を収集し、その由来や成り立ちに詳しい方も、一種の言葉のフェティシストでしょう。製品・商品の名前などの専門家、やたらいろいろな種類の辞書を集めている方、何か国語も勉強して相当なレベルにまで熟達されている方、言葉遣いに非常にやかましい方も、含めてよろしいかと思えます。

自分の場合には、言葉の物質的な側面、つまり音声＝発声＝発音と、文字＝表記＝活字に興味があるだけでなく、言葉の抽象的な側面、つまり意味やニュアンスを始め、「言葉」というよりも「言語」の仕組み＝働きにこだわりを抱いています。前者は、ダジャレ＝オヤジギャグという形であらわれることもあり、後者は、だいたいが屁理屈だと他人様にとられるものになります。

前者は、楽しいもの＝自己満足で済みますが、後者は、時に「いちゃもんをつけている」とか「喧嘩を売っている」とか「罵倒している」とか「当てこすりをしている」という具合に、受けとられることがあります。前者でも、まれにあります。「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というブログを短期間開設していたことがあります。これは、この『うつせみのあなたに』に収めてありますので、ご興味のある方はお訪ねください。

「でまかせしゅぎじっこうちゅう」は、抑うつがひどいときに、気晴らし＝憂さ晴らしとして今後もこのブログで、「特別号」感覚で実行するかもしれません。この間、「4月23日にギャグる」2009-04-23 というタイトルで、やってしまいました。一種の世相批判なり風刺という形をとりますので、それなりに気を使います。

ブログは、ネット上を嗅ぎ回っている検索エンジンの対象になりますので、検索に引っかからないように、工夫をします。通常の記事をしないように工夫するのは、固有名詞をわざと漢字で書かなかったり、通常はカタカナで書かれるものであれば、ひらがなにしたり、でたらめな漢字を当てる、つまり、感字をしたりするわけです。ケータイの出会い系サイトなどで、違法なメッセージを、通常とは異なる表記にするのと原理は同じです。

そうすれば、今のところ、キーワード検索のみで作動しているらしい検索エンジンに引っかからずに済み、思いもしないところから、クレームなり、攻撃をされるという事態をなんとか避けることができそうです。

話がこじれて、うつ気晴らしが、うつ悪化になっては、元（or 本）も子もありませんよね。だいいち、自分は議論のたぐいは大の苦手なのです。まして、腕力を使った喧嘩など死んでもしたくないです。たった今、キーボードに「喧嘩」と入力しただけで、身震いがしたほどです。話題を変えましょう。

*

言葉のフェティシストには、多言語を勉強する人もいるのではないかと、さきほど述べました。実は、中学生から高校生だった時期に、NHKのテレビとラジオの全外国語講座を視聴していたことがあります。1つのことに凝ってしまうという、こうした性格

は、よくありません。うつと親和性がある性格だと思います。「頑張りすぎてしまう」「融通がきかなくなって無理をする」「律儀になりすぎる」という感じです。みなさんも、気をつけてくださいね。

で、中・高生の時期に、NHKの語学講座を全部受講しようとする、ある問題が起きます。部活とかち合ってしまうのです。当時は、オープンリール式の録音テープからカセット式のテープへと移行が完了した時期でした。タイマーを買えば、いわゆるラジカセで講座を自動録音することができましたが、テレビの番組は無理でした。現在のよう、録画をする装置があるにはあったのですが、高価で何か特殊な仕事をしている人以外に、一般のユーザーはあまりいませんでした。そんなわけで、何かと理由をつけて、部活をさぼってばかりいました。

面白かったです。結局は、どれも上達はしませんでした。いろいろな言語に触れることが楽しくてしかたありませんでした。当時は、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、中国語、スペイン語だけでした。そういえば、中国語講座では、数年間の間に講師の方が、台湾国籍の方から中華人民共和国の方へと変わりました。同時に内容が、いきなり政治的な色彩を帯びてきて、いろいろ考えさせられました。当時は、まだ「政治の時代」の名残があり、微妙な問題を察知できる背景にも事欠かなかった時期です。この話題も、苦手なので、ここで止めておきます。

*

「あう」というテーマで連日記事を書いているために、「出合い＝出会い」ということについて、このところよく考えます。あいたいものに「出合う」、あいたい人に「出会う」、予期せぬものや事態や人に「遭遇する」＝「出合う or 出会う」。これが人生ですよ。

ヒトは「あう」という行為に無縁で生きることはできない。個人的には、特にいろいろな言葉（＝単語、語句、フレーズ、文、文章）や、いろいろな言語に出合った思い出を大切に心の中にしまっておきたいと思っています。人との出会いも大切ですが、それ以上に言葉や言語との出合いが、個人的には重要な意味を持っています。ここまでは、個人的な体験をまじえて、「あう」ということについて述べてきました。

*

さて、

*あう＝合う＝会う＝逢う＝遭う＝遇う＝和う＝壺う＝敢う＝饗う＝あうん＝阿吽＝阿
伝＝「あ・うん」＝ああ＝嗚呼＝噫＝あわれむ＝哀れむ＝憐れむ＝憫れむ＝あわれ＝も
ののあわれ＝あい＝愛

という、このシリーズの基本となるキーワードの連鎖に戻ります。思うところがあり、以
上の連鎖は「あう」(1)～「あう」(2)で取り上げたものよりも、長くなっています。上
の言葉たちを眺めながら、この「あう」シリーズのもう1つのテーマである、

「信号」

について考えてみます。

自分の中では、「あう」と「信号」が「あう＝むすびつく」ように思えてならないので
す。この点については、頭の中が、まだごちゃごちゃ＝ぐちゃぐちゃした状態なので、よ
りどころとなる「キーワード＝気になる言葉」を並べてみます。

*あい、愛、会い、合い、遭い、逢い、遇い、間(＝あい)、相、哀

*愛し合う、合鍵、合印、合札、合図・相図、合言葉、合間、合いの手・間の手、合気道、
合口がいい、隣り合わせる、意味合い、色合い、兼ね合い、筋合い、組み合わせ、知り合
い、付き合い、絡み合い、立会い、立ち会い、立会、御立会い、立ち合い、折り合い、兼
ね合い、張り合い、手合い、肌合い、釣り合い、お見合い、寄り合い、間合い、気合、具
合、度合い、歩合、地合い・地合、谷あい、山間・山あい、幕間・幕あい、合い方、合口
(＝あいくち)・ヒ首、逢引、合挽き・相挽き・合びき、出来合い、果し合い、試合、泥仕
合、合鴨・間鴨

*相対(＝あいたい)、相容れない、相呼応して、相携えて、相変わらず、相異なる、相
通じる、相打ち、相客、相部屋、相性・合性、相棒、相方、相次ぐ、相づち・相槌、相手、
相半ばする、相まって、相乗り・合い乗り、相合傘・相々傘、相打ち・相撃ち・相討ち、

愛相・愛想

*気が合う、通じ合う、話が合う、意見が合う、合口がいい、道理に合う、理屈に合う、落ち合う、巡り合う、折れ合う、話し合う、付き合う、取り合う、計算が合う、間に合う、向かい合う、目と目が合う、張り合う

*行き会う・行き合う、出会う・出合う、席に立ち会う、死に目に会う

*災難に遭う、事故に遭う、ひどい目に遭う、盗難に遭う、反対に遭う、反撃に遭う、にわか雨に遭う、地震に遭う、返り討ちに遭う

*和える・あえる、和え物・あえ物、ごま和え・ごまあえ

*哀れむ、憐れむ、哀れ、憐れ、物の哀れ、哀れみ、憐れみ、憫れみ

*間狂言(=あいきょうげん)、間柄、山間・山あい、谷間・谷あい、この間、間の子・合の子弁当、合服・間服、間の手・合の手・相の手

* (字は違いますが) あいさつ・挨拶、(字は違いますが) 相俟って(※「俟」に注目)、(字は違いますが) 敢えて・敢えず、(字は違いますが) 愛する・愛し合う

* 合=会=遭=和=間=相=愛=哀=憐

こうやって、気になる言葉を並べてみると、

* 「うつせみ」が「空蟬」と「現人」に「わかる」ことができるように、「空蟬」と「現人」は、「うつせみ」で「あう」ことができる。

あるいは、

* 「あなた」が「彼方」と「貴方・貴女」に「わかる」ことができるように、「彼方」と「貴方・貴女」は、「あなた」で「あう」ことができる。

と、以前からぼんやりと考えていたことが、「見える化」しているようにも感じられます。

*

大き目の辞書を引くとお分かりになりますが、「うつせみ」も「あなた」も共に、「転じる」とか「当てる」とか「訛る」とかいう、「正しくない」や「誤り」が生じた結果、

* 意味の多様性や重層性

が生まれた言葉です。

言葉が移り変わっていくという現象は、ある厳格な法則や原理に従って変化したり、理屈や論理によって体系的に進化・発展していくのではないと思われます。偶然と必然や、「真」と「偽」や、「正しい」と「正しくない」といった二項対立を軽々と飛び越え、かつ無効化し、「ぐちゃぐちゃ」、あるいは、「トリトメがない」というしかない「戯れ」に似た様相を呈しながら、変成していくものではないでしょうか。

さきほど述べましたように、10代の後半に複数の言語を「学ぶ or 習得する」というより、「かじって」いて感じたのは、親戚関係にあるヨーロッパの言語が、いかに自由奔放に絡み「合って」=戯れ「合って」、現在に至っているかということでした。親戚同士だから、当然似ている。一方で、「異なっている」と思っていたが、よく観察すると

* 「異なる」に「規則性がある」

場合が少なくない。

ある言語のある部分が、他の言語の別の部分で思わぬ現れ方をしていることも珍しくない。といった漠然とした「感じ」＝「驚き」＝「不思議」は、のちに大学生になったとき、比較言語学という領域があると知って、これも「学ぶ or 習得する」というより、「かじって」みて、氷解したこともあります。

「やっぱりつながっていたんだ」とか、「これはこういう規則性に沿って訛って伝わっているのか」とか、「これは明らかに「正しくない＝誤り＝誤解」によって伝わっている」とか、「これは偶然としか思えない」とか、「これは全然親戚関係にない言語から来たものだったのか」といった発見がありました。とりわけ、フェルディナン・ド・ソシュールとエミール・バンヴェニストは、単なる「比較屋さん」で終わらず、めちゃくちゃとも思えるこじつけめいた説を唱えていて、めっちゃ面白かったです。

*

とはいえ、すべては、

「そうらしい」

というのが個人的な結論＝印象です。「真理＝真実＝事実」ではなく、「そう見えました」「そう考えられます」というべき、アカデミックな世界で「研究」をしている人たちの「感想文＝意見書」なのだ。そんな疑り深さというか、飲み込みの悪さが、自分には生来身につけているようです。

一言で言えば、これまた「偏屈者」ということでしょうか。「分からず屋」でもいいですけど。比較言語学をかじってみて、収穫を得たというか、スリリングだったのは、今になって言葉にすれば、

* 「インド・ヨーロッパ語族＝印欧語族」においても、「あう」という現象が、「正しい」と並行しつつ、「転じる」とか「当てる」とか「訛る」とかいう、「正しくない」や「誤り」によって誘発されて生起し、単語レベル、フレーズレベル、および言語レベルで、意味と形態の多重性＝多層性という「豊かさ」を生み出してきた。

ということです。感慨と言ってもいいでしょう。これは、個人的には、とても興味深いことなのです。

以前から、

*「当たり前=ヒトの常」だと思っている、「正しくない」の「正当性（※正統性ではなく）」

を主張するさいに、よりどころになってくれそうだからです。念のために断っておきますが、すべてが「正しくない」という意味では、全然ありません。そこまで「分からず屋」ではないつもりです。ただ、

*「正しくない」には、「正しい」を活性化する力=パワー=ダイナミズム=ダイナミックスが備わっている。

ことを強調したいだけです。

というわけで、このブログでも、引き続き、偏屈者と分からず屋ぶりを発揮して、勝手気ままに、自分の考えていることを、おそらく「正しくなく」書いていくつもりです。

で、さきほど並べ立てた言葉たちの列を眺めていて、

*「信号」

という、最近、個人的に気になってならない漠然とした言葉と、特に関係がありそうだと感じた言葉を抜き出します。

*合鍵、合印、合札、合図・合図、合言葉、相呼応して、相通じる、相づち、相手、相合傘・相々傘、相打ち・相撃ち・相討ち、通じ合う、付き合う、向かい合う、目と目が合

う、行き会う・行き合う、出会う・出合う・出合い・出合い、和える・あえる、間柄、間の手・合の手・相の手、(字は違いますが) あいさつ・挨拶、(字は違いますが) 愛する・愛し合う

以上の言葉を見つめていると、喉の奥あたりにまで「信号」が来ているみたいな、生理的とも言えそうな気配を覚えます。下品で尾籠(びろう)な表現で、恐縮ですが、「ああ、出そうだ」「ああ、漏れそうだ」「ああ、吐きそうだ」といった感じに似ています。

*

上の羅列の最後の一行を、再び引用します。

* 合=会=遭=和=間=相=愛=哀=憐

漢字です。もとは中国語の文字です。白川静という、言葉のフェティシストのはしくれとしては、実にうらやましい人生を送った人を思い出しました。漢字の物質的な側面と抽象的な側面との絡み「合い」に命をささげ、すばらしい業績を残された方です。いつだったか、NHKのドキュメンタリー番組で、存命中のお仕事ぶりを見たことがありますが、映像にうっとりを見入ってしまいました。その番組を見ながら、漢字に、いい意味でエロティックな=官能的なイメージを抱きました。

さて、その漢字ですが、この国では漢字が初めて流入した時期には、主に公文書を記すのに用いられてきた「漢文=真名文(まなぶみ)」だけあって、生理的にではなく、頭に訴えてくるものがあります。情よりも理に訴えてくる、とも言えそうです。これは、あくまでも個人的な感想です。

かつて中国語をかじったところに、漢文も学校の授業で習っていたのですが、両者の共通性をまったく感じなかったのは、どういうことでしょうか？ 鈍感だったのでしょうか。おかげで、漢文は今においても、全然読めません。これからも無理でしょう。古文も同じです。読めません。今後も、無理みたいです。そもそもお勉強が大の苦手な無精な身には、もうこの年になると、手習いは無理だとあきらめております。

*

それはともかく、上に挙げた9つの漢字が用いられている言葉の中で、特に気になるものを集めてみる必要性を感じましたので、列挙してみます。

*合：合弁、合札、合成、合同、合図、合体、合判、合併、合点、合奏、合流、合致、合唱、合理、合掌、合意、合鍵、合議、化合、付合、会合、投合、併合、和合、架合（＝かかりあい）、配合、混合、接合、符合、（符号）、組合、頃合、都合、場合、集合、統合、複合、総合、適合、調合、請合（＝うけあい）、暗合、（＝暗号）、話合（＝はなしあい）、縫合、融合、顔合（＝かおあわせ）、意気投合

*会：会心、会合、会同、会見、会席、会悟、会得、会釈、会話、会談、再会、社会、参会、協会、面会、宴会、都会、密会、集会、照会

*遭：遭遇、遭逢、遭難

*和：和平、和合、和氣、和氣藹々、和声、和睦、和解、和親、和韻、和議、不和、日和、日和見、中和、付和、付和雷同、平和、共和、協和、柔和、唱和、穩和、温和、調和、緩和、融和、講和

*間：間人、問者、問使、問諜、間接、問道、間隙、間疎、間隔、間歇、間欠、人間、山間（＝さんかん・やまあい）、仏間、広間、合間、中間、手間、世間、谷間（＝たにま・たにあい）、林間、雨間、空間、夜間、昼間、峽間（＝きょうかん・はざま）、期間、時間、晴間、雲間、幕間、瞬間、隙間

*相：相互、相生、相同、相当、相好、相似、相応、相伴、相對、相乘、相思、相克、相殺、相術、相場、相棒、相違、相統、相聞、相貌、相談、相撲、人相、悪相、形相、手相、世相、皮相、死相、色相、面相、骨相、家相、実相、真相、様相、滅相、瑞相

*愛：愛人、愛好、愛用、愛惜、愛情、愛欲、愛着、愛想、愛憎、愛撫、愛護、仁愛、友愛、恋愛、情愛、偏愛、割愛、最愛、博愛、溺愛、慈愛、熱愛、親愛、寵愛、同性愛、異性愛、父性愛、母性愛

*哀：哀心、哀史、哀哭、哀情、哀惜、哀悼、哀愁、哀歌、哀憫、哀憐、哀願、悲哀

*憐：憐情、憐憫、可憐、哀憐

ぐっときます。めちゃくちゃで、ごちゃごちゃで、ぐちゃぐちゃ。それでいて、心に迫るし、染み入る。これらの言葉たちは「生きている」としか、思えない。

*いろいろな出自のものたちが「一堂に会している」＝「あっている」＝「視線を交わし合っている」＝「目配せをし合っている」。つまり、「生きている」。

語源とか、歴史的経緯とか、正統性とか、由緒とか、根拠とかいう、「正しい・正しさ」とも置き換えられるであろう、窮屈で抽象的なものやこととは無縁で、

*今、ここに「ある」ものやことをじっと観察し、今、頭の中に「ある」らしきものやことを呼び起す＝呼び覚ます＝よみがえらせる。

の精神で、「あう」と「信号」について、しばらく考えてみようと思います。

あとは、目を凝らすだけ。

夜の暗闇の中で、さまざまな信号たちが点滅しているように、既に「あう」は目の前で明滅を繰り返しながら「ある」のですから。

たぶん、「生きている」のですから。

09.04.30 あう (4)

◆あう (4)

2009-04-30 14:44:32 | 言葉

今になって「信号」というものについて考えているのには、わけがあります。とりたてて言う必要がなかったので、これまでブログには書きませんでした。親の介護をしています。

うつとの共存、および言葉と哲学について考えていることをつづる――。そんなコンセプトで初めてブログを書き始めた昨年（2008年）の12月には、ブログのサブタイトルとして、そうした意味のフレーズを明記していました。つまり、「ああ、この人はうつのリハビリの一環としてブログをやっているのだな」と分かる程度のことを書いていました。

そのうちに、あるテーマを書くさいに必要な迫られて、自分が中途難聴者であることに触れ、以後はその障害を真正面に論じた記事を書いたこともありました。

そのほか、無職の身であるとか、自分名義の預貯金は事実上使い果たしたとか、親の年金にたかって生活しているとか、折りに触れて書きました。ブログは、公開されている日記みたいなものですから、普通は他人にあまりしゃべらないようなことを書く場合があります。この記事をお読みの方で、ブログを書いているらっしゃる方も、似たような経験をなさっていると思います。

自分の場合には、ハンドルネームを使い、プロフィールも、詳細をぼかしてありますから、自分が特定される可能性はゼロとは言わないまでも、低いとだろうと楽観しています。案外、一部の知り合いにはバレているかもしれませんが、友達と呼べる人がいないので、その点については何とも言えません。

で、親の介護ですが、親がかなり高齢なので大変なのは確かです。幸いなことに、手助けしてくれる人がいるので、自分はうつとの闘い、いや、これだけ長いと、もう闘いではなく共存しかないですけど、とにかく、うつの対処に専念できます。ですから、力になってくれている、その人にはとても感謝をしています。

とはいえ、自分だけ、一日中ぼんやりしているわけにはいきませんから、家事をしたり、外へ出て雑事を片付けながら、考えたことを紙切れに走り書きして、翌日にブログを書く。そんな毎日を送っています。親の介護が必要になったのは、一昨年の初めに大病をしたからです。それまでは割と元気で、入院をした経験もほとんどない人だったので、病に倒れたさいには、こちらもてんでこ舞いしました。

*

一時は危篤状態となり、約1カ月間の入院でした。そのとき、看病をしながら、

* 「信号」

ということについて、よく考えていました。なにしろ、病院は信号だらけなのです。大病院で、先進的な医療をしている施設だったので、あらゆるところで機械や器械が作動しています。すべての情報がデジタル化されたデータとして、施設内を飛びかっている。そんな場なのです。

要するに、機械だらけ、スイッチだらけ、信号だらけなのです。難聴者である自分にとって、察知できない信号も数多くあります。ちょっとしたブザー音や、機械音声、院内放送が聞きとれない。そんなケースは枚挙にいとまがありません。

看護師さんやお医者さんやその他のスタッフの方々に、事情を話して、音声で伝えるのとは違った方法で、こちらに分かるように合図＝信号を送ってもらおうようお願いする。それしか方法はないわけです。しかも大病院は看護師さんとスタッフの方々だけでも、たくさんいます。日や時間帯によって、引き継ぎもあります。違った人が来れば、最初から説明し直さなければならない。それだけでも、大変でした。ストレスにもなりました。

*

親は無事退院し、介護が必要ですが家で生活できるようになりました。寝たきりではないので、まだ助かります。そういう暮らしに慣れてきたとき、今度は、自分が体調を崩しました。ちょうど去年のゴールデンウィーク明けのころです。疲れがどっときた感じでした。入院こそしませんでした。数日間通院し、いろいろな検査を受けました。

親が入院していたのと同じ病院だったので、ある程度、勝手に分かっていたので、心強かったです。でも、お医者さん、看護師さん、スタッフのみなさんに、いちいち耳の障害について説明しなければならないのも、体調の悪い身には、かなりのストレスになりました。で、その時期に、また考えていたのが、

* 「信号」

なのです。

* 病院で働く人たちとのコミュニケーション＝「信号」のやりとり

それだけのレベルではありません。検査の結果＝情報は、すべてがデジタル化されたデータとして記録・保管され、必要なものだけが、患者である自分に伝えられます。数字、つまり数値やグラフである場合もあれば、医師や看護師の言葉による説明という形で、伝えられます。

「信号」についていろいろ考えていた過程で、かつて大学生時代によく翻訳で読んでいたミシェル・フーコーというフランスの人の書いた文章を、頻繁に思い出しました。フーコーは、決して長かったとは言えない生涯を通じて、

* 「視線」

に注目しつつ思考を重ねた人でした。

医学・医療・病院や、刑務所・刑罰・法といった、「隔離」および、「排除と選別」を前提とする、ヒトのいとなみや施設の構造を論じた文章に、それが顕著に表れていたと記憶しています。詳細はきれいさっぱりと忘れてましたが、「視線」を重視した人だったことは確かだと思います。

ジャック・デリダという、やはりフランスの人が聴覚的な比喩を多用した思索家であったとすれば、フーコーは視覚的な比喩を用いた思想家でした。デリダの文章では、声や鼓膜を始め、ティンパニだの太鼓だの鐘だのが出てきた記憶があります。それに知的アクトバットのような駄洒落の連発が特徴でした。

一方、フーコーは、襞（ひだ）を視るとか刑務所の監視塔とか砂浜の光景とか絵画・美術作品などをめぐって長文の論文を書きました。駄洒落はあまり得意ではなかった気がします。

*

話を病院に戻します。医学では、まず兆候を「見る」という行為から始めますね。お薬を処方する前に、「診なければならぬ＝見なければならぬ」。そして、看護師さんたちは、患者と呼ばれる人を「看なければならぬ＝見なければならぬ」。外科のお医者さんなら、患部を「視なければならぬ＝診なければならぬ＝見なければならぬ」。

*みる＝観る＝診る＝看る＝視る＝視線を送る・視線を向ける＝目を凝らす・目を据える・目を澄ます・目を注ぐ・目を光らす＝目詰める・見つめる

というわけです。

そうやって、患者の身体が発する「兆候＝信号を察知する」。次にそれに基づき、「判断する」＝「診断する」＝「病名をつける」。場合によっては、「病名を告げる」こともあれば、「告げない」こともある。内科医なら、薬や抗生物質という一種の「毒」を処方する。【※なお、薬でもあり、同時に毒でもあるものについて、デリダは書き記すという

行為の両義性と重ね合わせてスリリングな議論を展開していました。ご興味のある方は、「デリダ パルマコン（ファルマコン） 脱構築」をキーワードにネット検索されるとたくさんお勉強ができると思います。】

外科医であれば、手術という形で、患者の身体にメスを入れ、一部を切り取ったり、接合したり、分離したりする。現在では、放射線などを当てるなど、もっと複雑な治療法を施すのでしょうか。専門家ではないので、詳しいことは知りません。

いずれにせよ、

* 「みる」 = 「視線」 = 「信号」

といった、「視覚をモデルにしたイメージ=比喩」で語ることでできる行為が、医療において、かつても現在も重要性を持っていることは事実でしょう。もちろん、信号には聴覚に訴えるものもあることを忘れてはなりません。聴診器がいい例ですね。

赤ちゃんの泣き声、患者のうめきも、「信号」です。もっとも、現実には、ことは以上のような単純なものではないに違いありません。で、去年の今ごろ、体調を崩した自分は、いろいろな検査を受けました。理系の科目が大の苦手なために、尿検査や血液検査をされても、いったい何をどういう原理を応用して調べているのか、さっぱり分かりませんでした。

激しいめまいに見舞われたので、X線検査を始め、CTスキャンとか、MRI検査というものも受けました。あのCTとかMRIっていったい、どんな仕組みで脳の中を映像化しているのでしょうか？ 見当もつきません。

*

昔は、医師が、五感や、五感+第六感みたいなものを総動員して、患者の身体を「診ていた=視ていた=見ていた」のでしょうか。現在では何もかもがデジタル化されたデータ・情報=デジタル信号に置き換えられているみたいなのです。

遠隔医療とか遠隔手術という言葉、このところ盛んに見聞きします。そもそもすべてが、信号に置き換えられるのなら、医師と患者の間が数センチであろうと、数メートルであろうと、数万キロであろうと変わりがない。ということなののでしょうか。

細かな細工が得意な職人さん並みの手先の機用さが要求されるという、外科医の手と指は、近い将来にロボットのそれにとって代わられるということなののでしょうか？ 喜んでいいのやら、嘆くべきことなのやら、それさえ判断が付きません。

いずれにせよ、

* 「信号」

というもの、特にデジタル化された情報＝データが、知らない間に多種多様な分野で活用されている。それを意識するきっかけになったのが、親の入院と、自分の通院という体験でした。

そう言えば、自分が両耳に装着している補聴器もデジタル信号を利用したものです。自分は、いわば、機械が聞き取った音を聞いて日常生活をいとなんでいるのです。自分を含め、みなさんがテレビやパソコンを通して耳にする音声も、デジタル信号をスピーカーという器械が増幅した機械音です。そう思うと、ますます「信号」というものが気になります。

*

言葉＝言語という「トリトメのないもの」を、思考の対象とするさいには、よりどころになるツールが必要です。そのツールとして、これまでに、

(1) 表象、

(2) トリトメのない記号＝まぼろし、

(3)「ぐちゃぐちゃ」＝「ごちゃごちゃ」、

を用いてきたという意味のことを、「あう (1)」2009-04-27 で書きました。その3つのツールでは、以上述べてきたような、病院での体験、つまりデジタル信号はもちろん、もっと単純な意味での信号も扱いきれない。そんな気がします。

もっと単純な意味での信号というのは、アナログ信号とでもいうのでしょうか、時計の針が示す時(とき)や、水銀を使った温度計が示す温度くらいの意味です。アカデミックな場で論じられている厳密な意味での「信号」について知るには、「情報理論」とかいう、非常にややこしい理系的な発想に基づいた考え方を理解する必要があるみたいです。

自分は、お勉強好きではありませんので、それとは違うやり方で、というか、我流で「信号」というものを考えていくつもりです。

そんなスタンスで考えた一例を挙げます。病院のベッドのすぐ近くの器械からぶらさがって伸びてきているコード。そのコードの先には、ナースコールのボタンが取り付けられていますね。親の入院中に、親がそのボタンを押すのを見るたびに、そして、それに応答する看護師さんの声が、壁にはめ込まれた器械のスピーカーから聞こえるごとに(※難聴者の自分には、これがとても聞きづらいのです。自分が入院する事態になったら、どうしようかと不安になります)、ナースコールという信号は、広義の言葉＝言語ではないか、みたいなことを考えていたことが、思い出されます。

きのうの記事の最後のほうで比喩的に触れましたが、夜の病室で親に付き添いながら眠っている時に、ふと目を覚まして見た神秘的とも言える光景を、よく思い浮かべます。患者の生命を維持するために置かれた機器のことです。その器械に付いているいくつかの小さなランプの点滅――。それが青だったか、黄色だったか、緑だったかまでは、覚えていません。

覚えているのは、微かに聞こえてくる器械の音。普段は補聴器を外して眠るのに、親の付き添いの時だけは、外すわけにはいきませんでした。患者に異状が起きれば、その器械が察知して、音を鳴らすか、非常用のランプ(※おそらく赤でしょう)を点滅させ

るか、電波を通じて然るべき別の器械に伝えるであろう仕組み。それらは、すべてが信号なのだ。そんなことを、今になって考えています。

上述の（１）表象、（２）記号、（３）ぐちゃぐちゃ——そうしたものは、どこかイメージが違う。でも、似ている部分や合い通じる部分、あるいは共通する点もあるような気がします。

*

「信号」について考えるとき、なぜか、「あう」を連想します。それが動機となり、このシリーズを書いています。このサイトのブログ記事を何回か、お読みになった方はご承知かと思いますが、「論理的思考」や「筋道を立てる」や「体系化する」や「まとまりをつける」ということが、自分は大の苦手です。

「でまかせ」や「テキトー」や「こじつけ」や「勘」を頼りに、文章をつづるという姿勢を貫いています。「つれづれなるままに」なんて、吉田兼好さんに対して無礼な言い訳はしません。「だらしがない」だけです。でも、これでいいと思っています。いや、これしかないと言うべきでしょう。「頑張らない」で「頑張る」というやつです。

で、

* 「信号」と「あう」がどうして「あう」のか、

について考えてきた結果、ようやく分かりかけてきました。まだ、言葉にしてはいません。こういうさいに、どのように言葉——ブログの場合には文字——にするかについては、3通りの方法があるように思います。

(A) 説明する。読む人に分かってもらえるように、なるべく詳しく、かつ簡潔に、筋道を立てて書く。(※論理に頼る)

(B) 説明する。読む人に分かってもらえるように、比喩＝たとえを用いて書く。(※比

喩に頼る)

(C) 喩を積極的に利用する。喩を、意識的に＝戦略的に、エスカレートさせて、おとぎ話＝お話＝寓話＝アレゴリーという形で、「ほのめかす」ように書く。(※これも喩的な表現なのですが、いわば「以心伝心」「阿吽の呼吸」を目指す)

以上のうちの(C)を試みてみたいと思います。理由は、2つあります。このテーマでは、(1) その方法がふさわしいように感じられるから、(3) 上で述べた(A)と(B)が現時点ではできそうもないから、です。

* 「信号」と「あう」がどうして「あう」のか

について、イメージは何となくつかめた感じがするのですが、とにかく、説明しにくいのです。また、(1)と(2)は同じことを言い換えているのにすぎないとも思えます。で、(C)の作業をこれから実行するつもりですが、それが済めば、頭の中が整理されて、(A)や(B)もできるような予感もあります。というわけで、あるおとぎ話をします。

★★★

昔々のことです。ある大陸に広がる大平原に暮らす人たちがいました。多くの部族に分かれ、散在するという形で生活していました。それぞれの部族は異なった言語を話していました。文字は存在しませんでした。部族間の交流は、主に物々交換という経済的なレベルだけで行われていました。

狩猟や牧畜をめぐるテリトリーの問題が生じ、部族間で交渉が行われたり、第三者の部族が調停にあたるといった事態も、ときにはありました。そのさいには、「手話」の一步手前の段階に相当する、身ぶり手ぶりによる「言葉」が用いられていました。それも、やがて文法を備えた手話に近いものへと発展していきました。

大平原では、声を張り上げても遠くまで届きません。空洞のある骨や石に唇を合わせて、息を思い切り吹き込んで、かん高い音を出す笛。器に張られた動物の皮と木の棒を打ち合わせて、大きな音を出す太鼓。硬いものを金属の器に打ち合わせて、よく響く音

を出す鐘。棒切れを打ち合わせて鳴らす一種の拍子木。こうしたものを使って、仲間に合図を送るという方法がとられ、部族の行動範囲は広がりました。

そうすると、他の部族と遭遇する機会が増えます。話し言葉が通じない場合には、身ぶり手ぶりや、「手話」で話し合うことになります。テリトリーと行動範囲が広がるにつれ、部族間の出会いは増します。徐々に、部族間の交流、あるいは争いが増え、部族同士が結合するという現象も起こるようになりました。

友好的な関係の部族もあれば、敵対関係にある部族もあります。部族連合のようなものも出来てきます。定期的に族長同士が集まって顔を合わせ、「手話」や「共通語」に似た混合した話し言葉が使われる機会も増えてきました。一部族のテリトリーや、部族連合のテリトリーは、拡大する一方でした。

それにつれて、部族間、部族連合間の触れ合いや抗争が生じました。こうした複雑な関係が生まれると、話し言葉だけでなく、さまざまな方法での、部族内、部族同士、部族連合内、部族連合間の連絡方法が必要になってきます。

遠く離れた人同士での、コミュニケーションの方法は、音を用いるだけではありません。火を用いる方法もありました。人間と火の出合いは、最初は、自然現象として生じました。落雷や乾燥による自然火災に遭うことは、人間にとっては避けられない事態です。

そうした災難ののち、燃え残っている火のついた草や木を火種として大切に保存し、食べ物を焼いたり、灯りとして用いたり、暖を取る。そんな形で、人間は火を利用することを覚えました。石英の一種を打ち合わせるとか、木切れ同士を擦り合わせることによって、火を起こすことも覚えました。複雑な内容を伝え合うことができる話し言葉と同様に、火を扱うことは、他の動物たちにはできません。人は、とても便利な2つの道具を手にしたのです。

話し言葉や火を神聖なもの、つまり、自分たちの力を超えた強い存在だと考える部族もいました。言葉を使って、これから起こることを占う。炎を崇め奉る。そんな習慣を大切に人々もいました。また、焚き火からヒントを得て、烽火（のろし）を上げて、さまざまな合図にするというアイデアも生まれました。

烽火は、太鼓や笛などと違って、力を込めて叩き続けたり吹き続けたりする必要がないため、便利なコミュニケーションの手段となりました。烽火の煙の色や、煙を出すタイミングをずらすことで、ある込み入った意味の合図を送る、という複雑な意思伝達の方法を考えついた人たちもいました。太鼓や笛でも、同じように複雑なことができました。

さて、ここで、ある部族で起きた話をしましょう。△という男の人が、部族の掟を破り、追放されました。テリトリーを追われ、見知らぬ土地をさまよい歩いているうちに、ある女の人と出会いました。その女の方は○という名前でした。

衰弱して病気になっているらしい△を見て、○は憐れに思いました。○は、自分の部族の集落から少し離れたところにある小山に△を連れて行きました。その小山にある洞くつに△をかくまい、1日に2度、こっそりと食べ物や水や薬草を運ぶようになりました。毎日、逢っているうちに、2人は愛し合うようになりました。

やがて、○が身ごもり、部族の人たちに、2人の関係がばれてしまいました。その部族では、他の部族の者との結婚は、族長を司会とする合議で承認されるという掟がありました。△の部族の話す言葉を聞いたことがある人がいて、△の出身地が明らかになりました。そこで、△を追放した部族と連絡を取ろうという話になりました。

烽火が上げられ、近隣の部族間の集まりが開かれました。それほど、掟というものは、大平原に住む人たちにとっては、重要な意味を持っていたのです。集会の議題は、△と○との間の結婚を認めるかどうか、でした。「手話」や、身ぶり手ぶりや、一種の「共通語」などを用いて、話し合いが行われました。

結論は、ある部族のシャーマン、つまり、天と会話のできる人に決めてもらうことになりました。シャーマンは、火を起し、炎に生贄の山羊を捧げ、トランス、つまり夢を見ているような状態になり、次のように叫びました。

「この炎が消えたあと、雨が降れば、2人の結婚を許そう。同時に、かつて掟を破った△の罪も、他の部族の者と通じた○の罪も消える。雨が降らなければ、2人を火あぶりの刑に処する」

炎が次第に小さくなっていき、日が落ちたあとの静けさのなかで、各部族の代表者たちは、息を詰めて、天を仰いでいました。急に雷鳴がとどろき、微かに明るかった空が真っ暗になり、大粒の雨が降り始めました。

動物の皮で作られた天幕がいくつも張られ、人びとは、そのなかに逃れ、灯りをともしました。やがて雷雨は止みました。もう夜です。闇と化した平原の一面に、少し間をおいて散らばった天幕が、提灯のように点々と光って見えます。その天幕の1つに、抱き合う2つの人の影が映っていました。

以上で、「★ ★★」の次から始まったおとぎ話はおしまいです。

*

「信号」と「あう」がどうして「あう」のかについての、おとぎ話が終わりました。読み返してみましたが、おとぎ話のつもりとはいえ、実に稚拙な文章で、お恥ずかしい限りです。「なんだ、馬鹿らしい」と思われるのも、もっともだと思います。

でも、もう一度、読んでほしいのです。お願いします。できれば、言葉を読むというより、言葉の身ぶりや表情を見てほしいのです。妙なことを書いて、すみません。難しいことをお願いしているのではありません。小学生くらいのコドモになったつもりで、読んでください。

話が飛躍するようですが、コドモもオトナもヒトですから、知覚し差別します。違いがあるとすれば、概して、コドモは体で差別＝区別＝知覚し、オトナは頭で差別＝区別＝知覚します。今、問題にしているのは、文字で書かれたおとぎ話です。

上のお話には、たぶん小学生には、理解しにくい言葉遣いや現象が書いてあるかもしれません。でも、いや、だからこそ、小学生くらいのコドモは「書かれている意味よりも」、「書かれている文字に注意を払って」、上のおとぎ話を読もうとすると思われれます。

そのとき、

「あっ、ここにもある＝これとあれは同じだ」

とか、

「これとあれは似ている」

という具合に気づくことがあるかもしれません。

そうした「知覚に訴える部分」が、オトナには気づきにくい傾向があります。つい、言葉の意味だけに意識がってしまうのです。ところで、「似ている」とか「同じだ」と「気づくこと＝知覚すること」は、「違い」を認めることと同じく、「分ける」＝「区別する」＝「差別する」という行為です。

「違っている＝異なる」の反対は、「同じ or 似ている」ではありません。両者を認識するさいには、「同じ or 似たメカニズム」が働いているのです。詳しいことは、次回に、できるだけ「筋道を立てて」説明しようと思います。

09.05.01 あう (5)

◆あう (5)

2009-05-01 13:29:16 | 言葉

嘘をつくのが好きな子でした。自分のことです。特に、得意だったのは、「本当であってもおかしくない嘘」です。得意だと自分で思い込んでいて、実は嘘であることが周り

にはバレバレだったなんてことも、よくありました。でも、自分では、「本当であってもおかしくない嘘」をつくことは悪いことではない、と信じていました。確信犯であり、常習犯でした。

本を読むことや、お勉強は苦手です。でも、好きな本や興味が持てることだと話は別です。それこそ寝食を忘れて熱中します。これは、小学生のころから続いている性癖です。他人の話をよく聞くことも苦手だったし、今も苦手です。一方で、読んでもない本の内容について話すことや、耳を傾けて聞いたわけでもない話の内容を他の人に聞かせることが好きでした。

恥ずかしながら、今も、時々やっています。でも、このブログでは、自粛しています。このブログを愛しているからです。またこのブログを読んでくださっている人たちを大切にしたいからです。だから、歯切れの悪い、あやふやな書き方になるのです。

たまに書いている小説となると、また話は別になります。小説は「嘘＝フィクション＝語り＝騙（かた）り」なしでは成立しません。小説を書く時には、嘘をつきまくりです。

いずれにせよ、さきほど述べた「本当であってもおかしくない嘘」を、未だに引きずっている人生を送っている、と言えそうです。

要するに、嘘つきなのです。

*

* 「わたしは嘘つきだ」

というセンテンスを命題とし、その真偽をめぐって、哲学者や論理学者とか呼ばれる人たちが、唾を飛ばしながら、議論してきたらしいです。「わたしが嘘つき」であれば、その「わたしは嘘つきだ」という発言は「真実」になるのか「嘘」になるのか？ といった議論です。個人的には、こうした「言葉＝言語の抽象的な部分」＝「意味＝メッセージ」のレベルをいじること、つまり思考の対象とするのが、すごく苦手です。

でも、ちょっと言わせてもらうなら、「わたしは嘘つきだ」を命題として考えるのは変だと思います。「わたし」は刻々変化する存在なのだし、「わたし」と名乗る存在も多種多様なのだし、「嘘つきだ」も状況＝コンテクストに左右されるわけだし、「嘘」も多義的なものだし、このセンテンス自体が各種あるレトリックの1つでもあり得るのですから。

もっとも、今述べた私見も1つの意見＝感想＝考え方でしかありません。いずれにせよ、ある種の哲学者や論理学者は、「わたしは嘘つきだ」をまともに受け取るのです。きっと、生真面目なのでしょうね。

哲学にもいろいろあり、哲学者や哲学学者にもいろいろいます。形式的な「論理＝筋道＝理屈」を重視して、真か偽かに、こだわるタイプ。矛盾を、そのまま矛盾として「肯定する＝受けとめる＝排斥しない＝排除しない」タイプ。大きく、この2種類に分けられるような気がします。

自分は、後者が好きです。断片的な文章を書き散らし、自由奔放に思いついたことを書くので、あちこちで書いたものをつき合わせてみると矛盾している部分が多々ある。そんな哲学、哲学者、哲学学者のあり方に、引かれます。

だから、ニーチェの書いた文章や、ニーチェの言ったことらしいことを集めた文章を断片的に読むことが好きです。『善悪の彼岸』なんて矛盾に満ちていて、サイコーです。要するに、自分はテキトーな性格なのです。そんなわけで、ぐだぐだして自己満足的で駄洒落に満ちた文章を、ついつい書いてしまいます。

*

そういえば、やたら、このブログでは「思い出した」だの、「かつて……したことがある」だの、「……みたいな話を見聞きしたことがある」だのと、書いていますね。それは、上で述べたテキトーな性格の反映でもあるようですし、冒頭で述べたように、「本当であってもおかしくない嘘」の自粛の結果でもあるようです。

また、現在の自分は新しいデータや情報を頭に詰め込む状況にないからだ、という気もします。つまり、新しい知識を「仕入れる＝インプットする」だけの、心の余裕も、金銭的余裕もないという意味です。

インプットするとすれば、せいぜい新聞記事やネット上のデータくらいで、本を読むことはほとんどないです。新聞記事やネット上のデータについても読み流す程度ですから、頭にちゃんと入ったかどうか＝インプットされたかどうかは、きわめて怪しいです。「知識」に対して、無精な態度で接する癖がついてしまっているとも言えそうです。

とはいえ、頭の中に残っている「知識」だか「イメージ」だか知りませんが、「ぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃしたもの」を自分なりに整理しようとして、必死で紙切れに書き留めています。それをもとにして、みなさんが今お読みになっているような長めの文章を書いています。かなり本気で書いています。

「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というブログタイトルで記事を書いたことがありました。あのネーミングは、自分の現状 or これまでの人生 and これからの人生をよく表していると思います。頭の中が「ぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ」であるために、書くという形で、出してみないことには、何が脳味噌に詰まっているのか分からない。だから、

* 出るに任せている → でまかせを実行している最中 = でまかせしゅぎじっこうちゅう

なのです。もっとも、ちょっと格好をつけるなら、

* 「言葉が書ける＝言葉を書く」ということは「賭ける＝賭く」ということである。

という、ステファヌ・マラルメというフランスの人が言ったと自分が信じ込んでいるフレーズで、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」を言い換えることができるかもしれませんが。その意味では、繰り返しになりますが、本気で書いています。それも、賭け＝ギャンブルに夢中になっている人が、本気なのと同じではないかと思っております。

*

そんなわけで、考えたり、その考えをメモしたり、そのメモを頼りに文章を書く、しかも本気になって書く、つまりアウトプットは好きなのです。結果として、このブログでは、他の人の書いた文章からの引用がきわめて少ないです。辞書から、言葉や単語を写すのは別としての話です。

何かの文章を参照しながら、書き写したというのは、『土佐日記』の出だしくらいでしょうか（※『土佐日記』については、「要するに、まなかな、なのだ」2009-03-09 に書きました）。

日本語であれ外国語であれ、古典とか、「偉い」と言われている人の書いた文章をそのまま写して、その原文に添えられていた訳文や解説をまるまる写す。あるいは、それにちょっと手を加えて誤魔化す。または、引用文にちゃんと自分なりの意見か解説を加える。そして、ブログの記事とする。

そういうのは、少なくとも自分のやり方ではありません。その代わり、「自己輸血」、つまり自分の過去の記事からの引用はよくやります。一時、これはやりすぎだと反省し、自粛したこともあります。でも、ついやってしまいます。

ここで、お断りしておきたいのは、オリジナリティ＝「これは、わたしが書いた独創的な＝オリジナルな文章だ」というような大嘘は信じていない、ということです。

*すべての言葉、つまり、話し言葉も書き言葉も、既に過去に誰かが話したり書いたことである。

と信じています。

*オリジナリティなんて、あるわけがない。意図するにせよ、しないにせよ、すべてが引用なのだ。

と思います。

著作権、知的財産権を否定しているわけでもありません。あれは、何かを書いたり、製作した人が、お金を確保するために是非とも必要な、お金儲けの仕組みです。さもなくば、飢え死にしたり、路頭に迷う人たちが、おおぜい出てきます。金銭的な保証＝保障は、ものを書くのを生業にしている人や、何かを製作をしてご飯を食べている人には、絶対に必要です。

*

話を嘘に戻します。きのうの記事で、あるおとぎ話をしましたが、あれも嘘＝フィクションです。嘘であると同時に、これまで自分が見聞きしてきたことの「引用の産物」でもあります。『引用の織物』という美しい言葉が口から出かけましたが、その言葉をタイトルにする書物を書いて亡くなった宮川淳（みやがわあつし）という、ものすごく詩的で理知的な文章の書き手だった人に失礼なので、やめておきます。

自分の場合ですと、「引用の産物」というより「引用のごった煮」でしょうか。で、きのう書いたおとぎ話は、北アメリカの先住民をイメージして書きましたが、ある程度「事実」を踏まえています。各部族間で共通語として、ある種の「手話」が用いられていたというのも、「本当」らしいです。ちゃんと記録が残っているというのです。

とはいえ、あのおとぎ話は大筋においてフィクション＝大嘘なのですが、じっくり丁寧に読んでほしい文章でもあるのです。さて、上で述べたことと矛盾することを書きます。こんなせっかちな性格の自分ですが、時には、じっくり読むこともあるのです。

じっくり読むことが苦手な自分に、「じっくり読むことの素晴らしさ」を教えてくれた人がいました。「あえて、その名は挙げない」2008-12-24、「遠い所、遠い国」2008-12-25、「横たわる漱石」2008-12-26 で、その経緯については詳しく書いたのですが、別に参照なさらなくても構いません。蓮實重彦という人です。

たとえばいうなら、カタツムリ（※ナメクジでもいいのですけど）のように、粘液の分泌の跡を残しながら、書かれた言葉の上をゆっくりと這っていく。そんな読み方の「官能性」を教えてくれた人です。自分にとっては、その人との出会いと、その人の文章との出会いが、とても重要な意味を持っています。

い」。

みたいな考え方に立っていますから、「解字」に「正しい」なんて求めていません。むしろ「楽しい」を求めています。そのことを確認したうえで、もう一度、上のリストを眺めてください。

* 声に出してみると「音声」という、「言葉の具体的＝物質的な側面」に「であう」。

ことができます。

* じっと目を凝らすと、「形」という具体的＝物質的な側面」に「であう」。

ことができます。

* 言葉の意味を考えずに、声に出したり、目を凝らすということは、実際には無理。

なので、当然のことながら

* 「言葉の抽象的な側面」である「意味」や「ストーリー展開」も意識にのぼってくる。

と言えます。

* 「具体＝物質」と「抽象＝意味」が絡み「あう」。

とも言えるでしょう。上のような、語のリスト作りは、アカデミックな文学研究や文芸批評でも、よく行われているものです。ただ、普通に「じっくりと」文章や文芸作品を読むさいには、頭の中で、たぶんリスト作りに似た作業が無意識に生じています。

みなさんが「じっくりと」読書なさるさいにも、きっと似たような作業が、頭の中で行われているはず。「読み飛ばす」「斜め読み」する場合には、疑問ですけど。いや、案外、キーワードを拾うという作業は、語のリスト作りに近いかもしれません。「速読」は、いつか、「じっくりと」考えてみたいテーマです。ここではパスします。

*

大学時代に主に外国語で書かれた文学作品を、まるで解剖するような形で「じっくりと」読む作業というか訓練をさせられました。その中で、記憶に残っている固有名詞を挙げます。ジャン・リカルドゥという人の批評は、笑い転げたくなるほど、奇抜で面白かったです。「ものすごいこじつけ」をするのですが、それが「なかなか言えていて」、絶句してしまい、その直後に笑いがこみ上げてくる。そんな感じでした。

ガストン・バシュラールという理系なのか文系なのかよく分からない人の文芸批評も、いろいろなツールを駆使して楽しませてくれました。

日本人では、芳川泰久という人が、確か（※うろ覚えで恐縮ですが）有島武郎のある小説を「十」（※十字架の形です）に注目しながら、キリスト教とからめて分析した痛快な批評を書きました。芳川氏は、夏目漱石（そうせき）の作品を「僧籍（そうせき）、送籍（そうせき）、双籍（そうせき）」をキーワードにして、漱石が一時期養子に出されたこと、兵役を逃れるために北海道に戸籍を移したことなどからめて、これまた興味深い論文を発表しました。

以上は、昔の話です。今は、こうした批評は流行らないのでしょうか。そうそう、渡部直己という人も忘れてはなりません。なかなか遊び心のある批評活動を展開していらっしゃいます。こうした批評の方法に関心をお持ちになった方は、今挙げた、フランス人2人、日本人2人、そして、さきほど触れた蓮實重彦＝蓮実重彦氏の名前を、グーグルやヤフーなどで検索することをお勧めします。

*

さて前回に、小学生くらいのコドモになったつもりで、じっくり読んでほしいと書いて

たのは、以上述べたようなことなのです。

コドモであれば、上記のリストにあるように、たとえば「人」と「火」と「炎」と「災」が似ていることを目ざとく感じ取ります。そうしたコドモの感覚に対し、

「人と火が似てるだって？『ひ』と『ひと』も似てるだって？ でたらめじゃないか。やっぱり、コドモだなあ」

とか、

「そんなふうに思うなんて、無知な証拠だよ」

とか言う、オトナがいることは容易に予想できます。

オトナの中には、上記のリストにあるように、「烽（＝ほのお）」と「逢（＝逢い引きのあい）」と「愛（＝あい）」との結びつきを感じ取る人もいるでしょう。これは、直感的な「ひらめき」であるとはいえ、抽象的な思考が働いているからです。そういう感想を述べたオトナに対し、

「そんなの素人の思いつきだよ」

とか、

「単なる連想ゲームもどきのデタラメ」

と言い返すオトナがいることも、容易に想像できます。

なお、「烽（＝ほのお）」と「逢（＝逢い引きのあい）」と「愛（＝あい）」の3語の列に△が入っているのは、ある漢和辞典に△を用いた「解字」があったからです。おとぎ話

を書く時に△を使ったのは偶然です。こうした偶然は、ものを書いていると、なぜかよく起こります。

オトナの中には、『人間』という字は『ひとと、あいだ、から成り立っているのか』とあらためて感心する人もいるでしょう。それを聞いて、

「馬鹿だなあ」

とか、

「単純な発想だなあ」

と言う人もいます。

そうした人の思いが言葉になって、ああでもないこうでもない、切りのない＝トリトメのない会話が交わされることもあるでしょうし、ないこともあるでしょう。

普通は、オトナはこういう「荒唐無稽な」感想を心に抱いても、たいてい黙っています。他人に対しては、もっと気のきいた感想を口にするものです。だからこそ、「大人げなくない＝分別ある」オトナとして扱われるのです。

*

* 「漢字」は、一種の「信号」である。

と思います。または、

* 「漢字」とは、何かと何か「あう」ことによって、熱が生じて「火」(※比喻です)が起こった結果として生まれる「信号」である。

あるいは、

* 漢字とは、これから先「あう＝逢う」ことを期待しての烽火（＝のろし）（※比喩です）、つまり一種の「信号」である。

ではないでしょうか。「何かと何か」「あう」さいの、「何か」は森羅万象くらいに広い意味でとってください。「ヒトが作ったもの＝ヒトが知覚したもの＝ヒトの頭の中で生じたもの」だけでなく、「つくったもの＝創造者＝想像者」としてのヒトも「何か＝森羅万象」に含まれます。

そうであれば、

* 「信号」とは、創造者＝ヒト＝想像者が、頭の中で想像＝創造したものである「森羅万象」の明滅である。

と、比喩的に言うこともできるかもしれません。

たった今述べたことが、おとぎ話を「じっくり読む」ことで、「以心伝心」とか「阿吽の呼吸」みたいに（※もちろん比喩です）、もしもあなたに通じたとすれば、ものすごく嬉しいです。いや、それこそ夢物語＝おとぎ話ですね。かなわぬ夢でしょう。

今回は、漢字ばかり見てきましたが、きのうの記事で扱った例のおとぎ話には、ひらがな・カタカナ・数字・記号（※たとえば、○）・符号（※「」）・句読点が用いられています。もちろん、ストーリー展開も重要な要素です。

そうした、読解のための要素＝パーツを全部、味わいながら、ヒトは「じっくりと読む」ことができる。そのことを、きょうはみなさんに思い出してほしいと思っています。そうした「読み」は、幼いころに、読み聞かせをしてもらいながら、あるいは、文字を覚えてたてのころの読書のさいに、実践していたはずで。

いずれにせよ、上のリスト＝漢字の羅列で挙げた言葉の切れ端は、あのおとぎ話の中に「ある」のです。「存在している」のです。比喩的に言うなら、「生きている」のです。ヒトが書いた「もの」でありながら、「ある」「存在している」「生きている」のです。それを感じ取ることが、「じっくり読む」ことなのです。

09.05.02 あう (6)

◆あう (6)

2009-05-02 09:43:05 | 言葉

おそらく誰にでも、「居心地のいい場所」と呼べる「空間」があると思います。「」でくくったのは、実際にそれが具体的な、つまり物理的意味での「場所」＝「空間」とは限らないからです。たとえば、会社という組織や、何かのサークル活動や、ネット社会の一角や、仲間同士の結びつきや、宗教団体や、政党である場合もあるでしょう。

これに時間的要素を加えると、回想になります。「ああ、あの頃はよかった」とか、「あのクラスにいた1年が一番幸せだった」という具合です。そうなると、「空間」というより「時空」という広い言葉を使ったほうが適切かもしれません。

あなたにとって、「居心地のいい場所 or 空間 or 時空」は、どこですか、なんですか、いつだったのですか？

個人的には、「自分の布団の中」です。そこでなら、慣れ親しんだお布団がありますし、横になれるし、目をつぶれば、夢とか空想という「幻想」の世界に浸ることができます。ある特定の時期の回想に耽ることもできます。

「お風呂」という答えも返ってきそうです。お風呂で思い出しましたが、浴槽がお墓に似ている、と書いた作家は、誰だったか？ それとも、風呂桶がお棺に似ている、だった

か？ いずれにせよ、素晴らしいとえだと思った記憶がありますが、肝心の作家の名前を忘れてしまいました。あの比喩はなかなか言えているなあ、と今も感じます。

*

ひょっとして、

*居心地のいい空間とは、他者がいない空間ではないか？

このごろ、よくそう思います。もっと詳しく説明させてください。自分と他者——その他者には森羅万象が含まれますから、自分と宇宙と言ってもいいでしょう——が溶けあって、自と他とか、内と外とかいう「分ける」というヒトの性（さが）の産物が意味をなくしてしまう。本来は実体のないはずの「分ける」という行為と作業が意識にのぼらない、ほんわかとした心境。そんな心持ちでいられたら、どんなに快いでしょう。

しかし、現実はそのではありません。「分ける」だらけです。「分かる」＝「理解する」＝「知覚する」＝「認識する」——このようにも「分ける」ことのできる「仕組み＝仕掛け＝メカニズム」が、ヒトという存在にへばりついている。離れることができない。外すことができない。逃れることができない。以上の「できない」が「できる」になった時、ヒトはヒトでなくなるのでしょうか。

まさか。ヒトがヒトでなくなる？ ヒトでなし。そんな「冗談＝言葉の遊び」でしかありません。という具合に、ヒトには、どうしても逃れられない「分かる」という仕組みが「ある」＝「備わっている」らしい。その仕組みを「意識」と呼んでもいいでしょう。

*

*「ある」と「ない」とが、どうやら「あるらしい」。

きわめて曖昧で、いい加減です。もしかすると、幻想、錯覚、嘘、虚構ではないでしょうか。その一方で、

* 幻想＝錯覚＝嘘＝虚構って、なんて気持ちがいいのだろう。

とも思います。

* 虚と実の間（あわい）。

という言葉も、謎めいていて好きです。「繰り返し＝言い換え」になりますが、

* ありもしないものをあると錯覚する。

ということは、ヒトの存在の根底にある習性ではないでしょうか。

いや、ヒトだけではなく、きっとすべての生き物の存在の根底にある習性なのではないかと想像します。すべての生き物には、何らかの知覚器官が備わっています。

* 「近くにはない＝分からないもの」を、「近くにする＝知覚する＝分かる」と感じる。

というメカニズムなしに、生き物は生き延びることはできません。食べ物を得るためにも、天敵から逃れるためにも、生殖活動をするためにも、「近くにする＝知覚する＝分かる」ことが不可欠になります。

*

* 生きる＝知覚する。

と言ってもいいくらいです。で、この「知覚する」という仕組みについて、これまで、

(1) 表象＝「Aの代わりに「Aでないもの」を用いる」、

(2) トリトメのない記号＝まぼろし、

(3) 脳内で起こったズレ → 「ぐちゃぐちゃ」＝「ごちゃごちゃ」＝「言葉・言語」、

という言葉や図式を使って説明したり、こじついたりしてきました。

まるで金太郎飴のように、何度も何度も書き続けてきました。まさに、ワンパターンです。そのような事態に陥るのは、自分の「テリトリー」の中で安住しているからにほかなりません。反省すべき点だと思います。

それはさておき（※こんな言葉でお茶を濁し逃げちゃいました）、「知覚する」という「錯覚」は、実に快いです。「自然体」でいられるから、「快い」のかもしれませんが。でも（or だから）、その「錯覚」を「錯覚」だと「言葉」で「意識」したとたんに、「不快」が始まります。居心地が悪くなるのです。むしゃくしゃする。くるおしい気分になる。そんな感じです。ここで、矛盾にお気づきになったことと思います。

* 居心地のいい空間とは、他者がいない空間ではないか？

と、さきほど書いたのに、

* 「知覚する」という「錯覚」は、実に快い。

と書き、今度は、

* 「錯覚」を「錯覚」だと「言葉」で「意識」したとたんに、「不快」が始まる。

と書いています。

「矛盾しているというより、ややこしいではないか？ 何が言いたいのだ」と、お思いの方がいらっしゃるかもしれません。言葉不足でした。謝ります。言葉にしにくいことを、話題にしているというのは、体（てい）のいい言い訳でしかありません。こういう場合には、比喩に頼るか、不正確になるのを覚悟して思い切り単純化するしか、ないようです。

そこで、単純化を選びます。

*「分かる」＝「他者がいる」とは、「不快な」ことである。ただし、それが「錯覚」であると「意識」されているならば、「快い」ことである。

では、どうでしょうか？

「直感＝直観」や「勘＝でまかせ」に頼りがちで、「論理的思考」や「筋道を立てる」のが苦手なので、たぶん論理的に破綻（はたん）した文章をつづっているに違いありません。とりあえずは、上のフレーズでご容赦願います。

なぜ、こんなことをくたくたと書いているのかと申しますと、上述の（１）（２）（３）に「加えて＝代えて」、

（４）「信号」

という、自分にとっては新しい「考え方＝金太郎飴」を、今後使ってみようと思っているからなのです。比喩に頼って言うなら、

* コンビニでの、「新商品登場！」

みたいなものです。

「信号」という「新商品」が有効なのかどうか、つまり、「売れるのかどうか」＝「ブログを読んでいただいている方々に分かってもらえるかどうか」不安なのです。「だれも、あんに何も期待なんかしていないよ。好きなようにやれば～」と、みなさんがお思いになっていることは感じております。

だから、自分にそう言い聞かせれば、気が楽になるだろうとは思いますが。とはいえ、自分の場合には、これでも真剣というか、割と本気でブログを書いているので、そう簡単に割り切れない部分もあるのです。しょせん、ひとり相撲なのに、つつい肩に力が入ってしまうのです。と、自己批判と反省をしたところで、

* 「だれも、あんに何も期待なんかしていないよ。好きなようにやれば～」

と、つぶやいてみます。

*

つぶやいてみたら、元気が出ました。現金ですね。で、前々回の「あう(4)」2009-04-30という記事の中で、あるおとぎ話をしました。そのなかで「テリトリー」(＝縄張り)という言葉が出てきました。

*テリトリーとは、「うち＝内」と「そと＝外」の線引きである。

と言えそうです。この線引き行動は、以前にも書きましたが、ヒトや他の生き物に共通する習性のようなのです。冒頭で書いた、「居心地のいい場所 or 空間 or 時空」とは、まさにテリトリーだと思います。

誰もが、自分の慣れ親しんだ場所や空間や時間(＝時期)に執着するのは、当然で＝自然なことです。だからこそ、自分とは異なる、あるいは新しい物事や現象に遭遇すると、戸惑ったり、怒りを覚えたり、批判的になったり、不安になったり、攻撃的になったりします。

たとえば、

「最近、○○という言葉遣いをよく耳にするが、あれは間違っている」、「コドモのケータイ使用は禁止すべきだ」、「ネット空間は諸悪の巣くう魔窟（まくつ）だ」、「ケータイ小説なんてクズも同然だ」、「近頃の若い者は根性がない」、「あの種の事件は、わたしたちの若い頃にはぜんぜん起きなかった」、「ベストセラーだと言うから買ったが、この本に書いてあることは間違っている」、「△△を復活すべきだ」、「あの国の人たちは、わたしたちの国の人たちとは根本的に違っている。だから、信用できない」、「あの人と、わたしの間に理解は不可能」、「わたしたちには、内から湧き出てくる、真の本来の○があるではないか」、「これが正しいことは歴史（or 自分の経験）が証明している」、「やっぱり、これしかない」……

といった発言に似た言葉を、日ごろよく見聞きしませんか？

以上のような発言を、感情語とでも言うべき言葉＝言語に翻訳すると、

「なんだ、これ」、「なんだ、こいつ」、「分からない」、「信じられない」、「こんちくしょう」、「むしゃくしゃする」、「イライラする」、「自分 or 自分たちだけが正しい＝まともだ」

みたいになります。つまり、

* 「他者」＝「異物」＝「異形（いぎょう）のもの」に出会って＝出合ってしまった

のです。言い換えると、

* 「他者」＝「異物」＝「異形（いぎょう）のもの」の存在を「知覚して」＝「分かって」しまった

のです。

「してしまった」という完了形の言い方のもつ、「失望感」と「嘆き」と「半ばあきらめの気持ち」を感じ取ってください。存在を知ってしまった以上、後戻りも、逆襲も、せん滅もできないと直感的に悟っているのです。

「あーあ」という感じです。だから、「悪態＝罵倒」でしかない「感情語」をさまざまな「決まり文句」を用いて「批判もどき」に加工するのです。ちょっと言い過ぎたようです。そこまで、ネガティブに言わなくてもいいのではないか。そんな気もします。

今、考えているのは、

* 「信号」の「他者性＝異物性」

とでもいうべき、特徴＝属性なのです。

前回の記事の最後のほうで、「信号」を定義しようとしてしました。なるべく筋道を立てて説明しようとしてしましたが、やはり、比喩に頼った表現になりました。ここで、再度、定義を試みてみます。

* 「信号」とは、ヒトの「想像界」＝「想像の産物である森羅万象から成る世界（※想像だから実体はありません）」において、何かと何かが「であう」ことによって、熱（※比喩です）が生じた結果として起こる炎（ほのお）（※比喩です）、あるいは、これから先に何かと何かが「であう」合図としての烽火（のろし）（※比喩）である。

となりましたが、「熱」と「炎」と「烽火」のところで、思い切り隠喩＝暗喩を使ってみました。これは、これで、とりあえず、OKとしておきましょう。

とはいうものの、やっぱり、自分もまた、「居心地のいい場所」＝テリトリーからは逃れないのを痛感します。「筋道」ではなく「比喩」に逃げていますね。易（やす）きに付く、というやつです。

*

ところで、「あう (4)」2009-04-30 で触れたように、そもそも「信号」について考えるきっかけとなったのは、病院という場所でした。そこでの「信号」は、たった今、上述した*付きの定義もどきのフレーズが喚起するイメージとは、かけ離れたものだという気がします。

上記の「信号」は、自分のテリトリーだと思い込んでいる文芸批評という場で、自作の稚拙なおとぎ話を扱ったさいの産物だからです。つまり、情報理論といった自分の苦手とする領域=場を意識的に避けて、「信号」を考えた結果として、あのような定義もどきのものになったのです。

そこで、「信号」をもう少し、守備範囲の広いものにしてみたいと思います。一般論と呼ばれるものに、もっと近いものにしようという意味です。そのための方法として、1人ブレインストーミングみたいなことをやってみます。

ブレインストーミングというのは、聞こえはいいですが、ぶっちゃけた話が「でまかせしゅぎじっこうちゅう」です。要するに、何でもいから、ブレイン=脳味噌からしぼり出す、という感じのきわめてテキトーな方法なのです。テキトーさにテキトーに賭けるという、テキトーなやり方です。

というわけで、このシリーズ用に走り書きしたメモから、テキトーにみつくろって箇条書きにしたいと思います。

*信号とは、本当は誰もが予期しているもの。予期しているくせに、予期していない振りをする場合が多い。例：信号が、赤に変わる。非常ベル。警報機の声 or ライトの点滅)。赤ちゃんの泣き声。雨雲。雨。台風。地球温暖化。インフルエンザのエピデミック or パンデミック。不況。火事。妊娠。宝くじの当選。褒章。臨時ボーナス。株価の上昇。為替相場。奥さん or 旦那さん or 子どもの、ヒステリー or かんしゃく or 逆ギレ。

*何かの合図を待つ時の心理。ドキドキしながら待つ。ドキドキを顔に出さずに待つ。合図が出たら、本当は焦っているのに、決められた行動におもむろに移る。

*小説を読む。特に、推理小説をはらはらどきどきしながら、ページをめくるのももどかしく読み進む。／テレビドラマ（or 映画）を見る。ストーリーの展開に引き込まれながら、食い入るような目つきで、画面（or スクリーン）を見つめる。／ゲームを楽しむ。ゲームの展開に引き込まれた状態で、コントローラーやキーボードを操作する。／スポーツの試合を観戦する。先が見えるようで見えない。これもまた、はらはらどきどき。／サスペンスの根底には「やらせ」があるのではないか？

*「偶然」に見えて、実は「出来レース」＝「八百長」＝「やらせ」。結果は、「ある程度」見えている＝分かっている。

*信号との出会い＝出会いは、予想外と予想内の狭間で起こるのではないか？それが、表象や記号や「ぐちゃぐちゃ」との違いではないか？

*「予想外の or 予期せぬ出会い＝出会い」＝「遭遇」なのか？

*情報理論における信号との遭遇＝出会い＝出会いは、出来レースのようなものではないか？ ヒトが日常生活で経験する信号との遭遇＝出会い＝出会いは、「出来レース」ではなく、「予想内の予想外」とでもいうべきものではないか？前者は真剣勝負であり、後者はお遊び＝娯楽なのではないか？

*情報理論的レベルでの信号同士、あるいは、デジタル信号同士の遭遇＝出会い＝出会いは、出来レースである。なぜなら、既に「回路」「導線 or 電線」「ニューロン」が敷設されている、あるいは出来上がっている。信号同士の「めくばせ」（※ここでヒトを出しにした比喩に頼っていいのだろうか？）だけに注目するなら、ヒトの心理が介在することはない。一方、ヒトが日常生活で経験する信号との遭遇＝出会い＝出会いは、ヒトの心理が介在するために、期待や「娯楽＝サスペンス」的要素が存在する。両者の決定的な違いは、そこにある。／とはいうものの、すべてが人為でしかないと考えれば、両者を「分ける」のはまやかashiであり、「分かった」とするのは錯覚にすぎないのではないか。

*

以上は走り書きしたメモを清書したものです。読み直してみると、

*情報理論的レベルと、日常生活レベルでの信号との遭遇を区別すること

がきわめて重要であるように思えます（※すべてが人為であるという見方を無視した場合です）。そこで、「論理の鬼」2009-01-02 で書いた文章の一部を「自己輸血」=自己引用するのが手っ取り早いのではないか、などと横着な考えが頭に浮かびましたので、さっそく実行してみます。これも、引用するさいに、少し加筆・変更して、箇条書き形式に書き直してみます。

*論理というものは、案外、熱いものなのかもしれない。

*哲学や論理学だけでなく、数学や物理学を含む自然科学でもいいが、そうした学問を学ぼうとか、研究しようとするヒトは、しばしば強い情熱（※感情、情動といったほうが正確かもしれない）を心に秘めている。

*コンピューターは以前には電子計算機と呼ばれていた。つまり、機械である。最先端のもの、そして未来のものは、従来とは違った素材が主体になるというが、現在の主流のコンピューターは金属や鉱物が素材である。機械やコンピューターというと、冷たいイメージを連想されがちだが、実際に機械やコンピューターを扱っている人にとって、一番の悩みは熱をどう下げるかだという。機械は作動、つまり動く。動くからには熱を発する。熱は機械そのものの素材を変形あるいは変化させる。すると誤作動が起きる。したがって、「熱を下げること」がきわめて重要な課題になる。

*コンピューターも、医療用のカメラやメスも、どんどん小型化されてきている。機械や器材は、「動く」のが仕事である。動くためには熱を発しなければならない。熱くなると動きに狂いが生じる。コンピューターに話を絞ると、コンピューターは、1か0の二進法で情報を処理する。1か0という仕組みを実現するためには、どんなにあがいても、何らかの移動、変化、反応という形態をとらざるをえない。分子、原子、電子、というナノの世界であっても、熱から逃れることはできない。

*数学者も、論理学者も、哲学者も汗をかく。禅僧も、修道士も、修道女も、教祖も、聖人と呼ばれるヒトも、みんな汗をかく。囲碁の名人も、チェスの達人も、汗をかく。コ

ンピューターも、あっちっち。ナノテクも、それなりに、あっちっち。バイオテクノロジーもDNAも、それなりに、あっちっち。理論物理学も粒子も素粒子も、それなりに、あっちっち。ノーベル賞も、きわめて、あっちっち。

*脳でも、事態は同じらしい。ヒトは生きている限り、熱を発する。食物を摂取し排泄をする存在である以上、必然である。沈黙黙考、冷徹な思考などとは、嘘だったのだ。

*プリズムは、勝手にきらきら輝くのではない。そんな魔法なんてない。見る者が、動く、あるいは熱くなるからきらめくのだ。

*コンピューターはもちろんのこと、「運動」(※つまり、移動、変化、反応)するものは、常に熱を発せざるを得ない。冷たいようで、実は熱い。死んだようで、実は生きている。比喻を用いれば、蓮實重彦氏の著作のタイトル『批評あるいは仮死の祭典』にある「仮死の祭典」と言える。死んだふりをして、熱い。死を装っても、うごめいている。仮に死んだとすれば、腐敗という形で熱を発する。

*

久しぶりにコピペをしまくりました。「コピーのコピー」でもある「トリトメのない記号＝まぼろし」について、連続してブログ記事を書いていたところに、過去の記事から過度の「自己輸血」＝自己引用をし、いわば「自家中毒」(※この言葉を読み、不快に思われた関係者の方にお詫び申し上げます)に陥りました。それを思い出します。ネット検索をしながら、レポートを作成するという、一部の大学生みたいですね。無精なさまをお見せしてしまいました。

以上の、箇条書きされたメモたちと、さらにそれに加わった、コピペされた上にいじくられた断片たちを眺めながら、「信号」についてしばらく考えてみます。

(1) 「信号」を、2種類に「分ける」べきではないか？

(2) 2種類の「信号」に共通するのは、「あう・であう」という言葉の身ぶり「熱 or 火」ではないか？

きょうは、これから、この2つの疑問について、ああでも「ない」こうでも「ない」、ああでも「あり」こうでも「ある」、という具合に、じっくりと考えてみたいと思います。

09.05.03 あう (7)

◆あう (7)

2009-05-03 10:21:48 言葉

浚渫（しゅんせつ）という言葉、最近見聞きなさったことがあるでしょうか。頻繁に使われる言葉ではありませんね。「浚渫船」なら、見覚えや聞き覚えがあるかもしれません。正確ではないかもしれませんが、「泥さらい」みたいに、水底から土砂をさらうことですね。

* 「読者を浚渫しなければならない」

というセンテンスが、ある本に書かれていたとしたら、どんな意味、あるいは光景を想像なさいますか？ 一字一句そのように書かれていたかどうかは、覚えていませんが、そんなセンテンスを読んだことがあるのです。

昔のことです。大学生のころでした。場所は、大学の構内にある古びた建物の一室。大学院生と学部学生の両方が受けられる講義が行われていました。フランス語で書かれた本の一節を、非常勤講師と学生たちが一緒に読んでいました。

その原書が講義のテキストだったので、各学生の目の前にフランスの書籍特有の、荒っぽい or ちゃちな作りの原書が置かれていました。その原書の訳書も持ち込み可だったので、訳書を原書と並べている学生たちもいました。訳書の装丁のほうが、しっかりして

いました。自分も、2冊並べていた1人です。「読者を浚渫しなければならない」という意味のセンテンスは、もちろん、訳書の一節です。その個所の原文では、

* dragner (※「ドラゲ」みたいに発音します)

という動詞が用いられていました。その「ドラゲ」をめぐって、学生たちが考え込んでいました。講師が、原文と邦訳書の訳文を比べて、どう思うか？ と質問したのです。

* 「読者を浚渫 (=ドラゲ=土砂のようにさらう) しなければならない」

とは、どういうことなのか？ 辞書を引いたらどうか、とも講師は言いました。さっそく、手持ちの辞書で「ドラゲ」を引いてみましたが、あまり役に立ちそうではありませんでした。

ところで、当時、この講師は、新鋭の文芸批評家、および映画評論家として活躍していました。改行を少なくして息の長いセンテンスを書くという、読みにくい文体でも知られていました。読む人により好き嫌いがはっきりと分かれるタイプの書き手でした。

ある種のカリスマ性もあり、親衛隊みたいにその人のあらゆる講義や授業に参加するという学生たちが、数人付きまとっていました。複数の大学で授業をしている人だったので、「親衛隊」は、いわばもぐりで他大の授業に出席することもあったわけです。

*

その講義でも、「親衛隊」の姿が見られました。そう言えば、その講師の別の授業で、次のようなこともありました。英語で言えば why と because にあたるフランス語を、日本語にどう置き換えるかが問題になっていました。たぶん、文学というより、語学の授業だったかもしれません。because にあたるフランス語を「なぜならば」と訳した学生に、「その日本語、不自然ではありませんか」みたいなことを、その講師が言ったのです。「もっと、自然な、普段あなたが使っている日本語になりませんか？ これは会話ですよ」と講師が付け加えて言ったような記憶があります。

前々回、つまり「あう (5)」2009-05-01 という記事の冒頭近くで、「どうやら「本当であつてもおかしくない嘘」を、未だに引きずっている人生だ、と言えそうです」などと、ぬけぬけと書いた者が、この文章を書いているのです。まして四半世紀ほど前の記憶をたどっているのですから、多分に脚色がまじっているにちがひありません。当の本人も、そう思います。ですから、今、お話ししているのは、作り話だと思ってお読みになつても構いません。そのほうが、こちらも気楽です。

さて、みなさんなら、why と尋ねられ、because で答えるような場面で、それが日本語での会話だったら、何と返事をなさいますか？「というのは」「その理由は」「そのわけは」ですか？ 教室内の学生たちが、沈黙していると、講師は「どうして、『なぜならば』って訳したのですか？」と、さきほどの学生に再び質問しました。問い詰めるような口調をする人ではありません。鼻にかかった低音のやさしい声で尋ねました。

「だって、辞書にそう書いてあるんです」

確か、その学生は、そう答えたと記憶しています。

「それですよ。『だって』です。それが、会話での普通の言い方です」

学生たちは、狐につままれたように、ぼかんとしていました。その中に、この話を思い出している自分も含まれていたことは、言うまでもありません。

さて、「ドラゲ」ですけど、大学院生・学部学生共通講義に、各学生が持ちこんでいた仏和辞典はほぼ2種類ありました。そのうちの一方に、「浚渫する」とは別項扱いで、「(※同性あるいは異性を) 引っ掛ける、ナンパする、誘う」みたいな意味も記してありました。この辺の記憶も曖昧なのですが、確かその講師は、2種類の辞書にある定義＝訳語を、学生たちに声を出して読むように指示したのです。

別項扱いの訳語を読んだ学生はいませんでした。「本当に、それだけしか、載っていませんか？」という講師の声にうながされて、誰かが恥ずかしそうに、別項の訳語を読み上げました。

「ここでの意味は、それだと思います。この本は、『いかがわしい』本なのです――」

と、身長 180 センチを超える、その年齢の人としては「大男」である講師は、煙草の吸殻をテーブルの上で始末しながら言いました。その原著の邦訳名は『テキストの快樂』でした。「快樂」が日本語でも性的なニュアンスで用いられるように、フランス語の plaisir（※英語の pleasure にあたります）も、肉体的な快樂や快感や放縱や淫欲といった意味になり得ます。確かに、いかがわしい比喩が散見される本だったのです。

*

きのうの記事を書き終え、「信号」についていろいろ考えごとをしているさなかに、以上述べた記憶が断片的によみがえってきたのです。で、思いました。

* 「信号」は、ヒトをナンパする。＝「信号」は、ヒトを誘惑し引っ掛ける。

のではないだろうか。

相手が異性であれ、同性であれ、性的な意味で「ナンパする＝引っ掛ける」ためには、ヒトはどうしますか？ 企むはずです。行き当たりばったりな性格のヒトもいるでしょう。でも、それは程度の問題であり、それまでの経験や見聞からそのヒトなりに練り上げた、シナリオ＝筋書きを頭の中に描き、然るべき準備をし、実行に備えるはずです。

* 「信号」は、企む＝仕掛ける。

とも言えそうです。「いかがわしい」と言えば、確かに「いかがわしい」行為です。

失礼な質問をして恐縮ですが、あなたは、これまでに異性からであれ、同性からであれ、ナンパされたり、ナンパされかけた経験がありますか？ あるいは、そうした場面をテレビドラマや映画で見たり、小説で読んだことがありますか？

ひょっとして、ナンパって、「ああ、されそうだ」「くるぞ、くるぞ」「あいつ、魂胆がありそう」「あやしいなあ」という具合に、予感したり、気配を察するものではありませんか？ ぼんやりとしている間に、ナンパされちゃった。で、やっちゃった。というケースも、きっとあるでしょう。失礼いたしました。

以上は、おふざけではありません。「信号」に備わっていると思われる、ある種の属性を、思い出話とからめて比喩的に説明しようと試みただけです。あまり、深く取らないでください。きのうから「信号」についていろいろ考えるという、1人ブレーンストーミングという、頭の中の「泥さらい」＝「浚渫」をしていて、偶然にダイヤモンドや金の指輪を発見したのではなく、「ナンパ」に出合ってしまったという、落語みたいな落ちの話でした。でも、自分にとって、その

* 「ナンパ」

を思い出したことは、ダイヤモンドや金の指輪以上に、大切な発見であり、めぐり合いでした。

余談ですが、邦訳である『テキストの快樂』を、例の講義の数年後に、書店で偶然見つけました（※自分が持っていた本は、上記の講義が終わるとすぐに売ってしまいました）。興味があったので「ドラゲ」の部分を調べてみると、訳文が「いかがわしい」ものに訂正されていました。指摘を受けたのかもしれませんがね。

ちなみに、『テキストの快樂』を書いたフランス人の著作が新訳されています。どれも、とても高価なので、今の自分には手が届きそうもありません。たとえ、手に届いても、たぶん、もう読む気力はないでしょう。いずれにせよ、新訳の登場は再評価につながると思いますし、このフランス人を卒論に選んだという因縁もありますので、素直に喜んでいます。

*

このフランス人は、批評の対象をとっかえひっかえする「変移」の人でした。飽きっぽいのです。すぐに退屈して、テリトリーを転々と変えるのです。この人が自ら編さんし

た著書の邦訳で『彼自身によるロラン・バルト』という本がありますが、その中に、この人が演壇で退屈そうな顔をして、横を向いている写真が収録されています。

場所は、日本だということです。写真には映っていない、その視線の先には、この人の講演を日本語へと通訳している人がいたのだと聞いた記憶があります。同時通訳ではなく、逐次通訳で、自分の発言が外国語に置き換えられるのをじっと待つのは、確かに退屈な体験に違いありません。

「待つ人は、誰しも女性的に見える」という意味のことを、このフランス人が何かに書いていた記憶があります。それにしても、この人ほど「退屈」という言葉が似合う人はあまりいません。その写真には映っていなかった、退屈のもとである通訳を務めた人と、上で述べた思い出話に出てきて、

「この本は、『いかがわしい』本なのです」

と言った講師は同一人物です。退屈が似合うあるフランス人の視線が、このブログの中で、「言葉として」あの「大男」の講師と時空を隔てて「出合った」のです。

*

では、「信号」について、まとめをします。今回で、このシリーズはおしまいにする予定です。ラッキー7で締めくくるなんて、言霊を畏怖している自分には、嬉しい限りです。「7=七」は数字ですが、広義の言葉ですので、幸運の印（しるし）だと勝手に喜んでいきます。さて、まとめに入ります。

* 「信号」は、2種類に分けることができる。

* (1) 日常生活において、ヒト or 生物は「信号」の存在を常に意識していて、「信号」が合図を送ってくるのを予期している。「信号」から合図を受け取ったとき、ヒト or 生物は、何らかの予定されている行動をとる。なお、「信号」には、ノイズが伴う場合があり、その程度次第では、予定されていた行動への障害が生じ得る。

* (2) 機械同士 or 機械のパーツ同士や、生物の器官 or 細胞同士などでの「信号」のやりとりにおいては、「信号」はあらかじめ決められた経路を通る。この場合の「信号」のやりとりによって、複数の機械 or パーツ、および複数の器官 or 細胞は、あらかじめ設定された動作＝操作を行う。なお、「信号」には、ノイズが伴う場合があり、その程度次第では、設定された動作＝操作への障害が生じる可能性がある。

* (上記の2種類の)「信号」が合図を送るさいには、熱を伴う。「信号」を受け取った側においても、熱が生じる。これを詳述すると、次のようになる。「信号」が発信された時点、および、経路を通じて運ばれる過程、そして、「信号」が受信された時点、および、「信号」を受け取った側で行動 or 動作＝操作が実行される時には、熱が生じる。この熱は、「信号」の役目を遂行するために不可欠である一方で、ノイズを生じさせ、「信号」の役目の遂行の障害となる可能性もある。

以上の4つの*で始まる文章が、「信号」についての、自分としては最も簡潔な説明です。

*

「信号」は「情報理論」と呼ばれる、自分にとってはまったく未知の分野でも、用いられている語なので、それを意識してしまい、上記の説明はいささか、ぎこちない表現になりました。とはいえ、言葉だけでしか知らない「情報理論」および、その領域で使用されている「信号」と、このブログで用いている「信号」とが、まったく関係のないものであることを、ここであらためてお断りしておきます。「デジタル信号」と呼ばれるものとも、おそらく無縁の話です。

その証拠に、このブログの「信号」は、さきほどご紹介したように、ある種の言葉を使って、ちょっとエッチな＝エロい説明をすることさえできるのです。こんなこと、学問の＝アカデミックな「用語＝ジャーゴン」では、できませんよね。ですので、たぶん、まったくの別物です。比喩としてなら、かなり面白そうなことが、いろいろできそうですけど、今のところは自粛し、後の楽しみに残しておきます。

*

たった今、上の4つの*で始まる文章を読み返しましたが、何て官僚的＝事務的な言葉を連ねているのでしょうか。恥ずかしくて、消したくなりました。でも、言霊が怖いので削除はしません。心残りなので、「信号」について別の説明を、最後に書かせてください。

*「信号」とは、ナンパを目的とした「めくばせ」である。ナンパされる対象は、いつかナンパされることを意識しながら待機している。ナンパする側も、される側も、双方がどきどきして機会＝合図を待っている。

いかがわしいですね。でも、これでいいのだと思います。当ブログは「ゲイ・サイエンス」＝「愉快なお勉強ごっこ」を目的としている、いわばネット上の小さなテーマパーク、あるいはゲーセン or 寄席です。よろしければ、また、お遊びに来てください。お待ちしております。

【以下は、ゴールデンウィーク期間中の「おまけ」です。童話ですので、コドモになったつもりでお読みいただければ嬉しいです。最後に、一言、「読者をナンパしなければならない」。とは言え、深読みをなさる必要はありません。なお、「あう (4)」2009-04-30 で取り上げた自作のおとぎ話を、「あう (5)」2009-05-01 で試みたような、テクニカルな手法の分析がしやすいようにも書いてある童話ですので、お時間のある方は試してみてください。】

★童話：『ねえ、傘、貸して』

あいちゃんは、8歳で小学校の2年生。長女で、その下に、まいちゃん5歳、みいちゃん4歳の2人の妹がいます。

あいちゃんのお父さんは、大工さんをしています。体がとても大きくて、授業参観日に教室のうしろで、クラスメートのお母さんやお父さんたちと並ぶと、目立ちます。

「あい、まい、みい、まいん」

お父さんは、夕ご飯のあとで、よくそんなふうに大声で歌うように叫びます。お酒に酔っているのです。

「よーし、もう1人、妹が来るようにすっからな」

酔ったお父さんが、3人の娘に言います。すると、お母さんが、

「もう、いいですよ」

と、必ず言い返します。そんなときの、お父さんとお母さんは、うれしそうです。だから、あいちゃん、まいちゃん、みいちゃんも、ほほ笑み、家の中が明るくなります。

「あい、まい、みい、まいん」

いつの間にか、お母さんを除くみんなで、節をつけて叫ぶようになりました。お母さんは、照れくさそうにして、にこにこしているだけです。

「まいんちゃんが、今度来る妹なの？」

あるとき、あいちゃんは、お父さんにたずねました。

「そうだなあ。そのつもりなんだけど、弟かもしれないよ。それでも、まいんはまいんだ」

「どうして？」

あいちゃんが、そう聞いても、お父さんはにこにこしているだけです。お父さんの言うことは、あいちゃんには、わかるようで、わからないことが多いです。

*

あいちゃんのクラスに、愛（めぐむ）さんという男の子がいます。学校では、先生たちは児童たちを、男女の区別なく、さん付けしています。愛さんは、よくからかわれます。名前が「あい」と読めるからです。あいちゃんには、自分の名前と同じ読み方ができる漢字の名前の男の子がいて、その子が「めぐむ」さんなのが、不思議でたまりません。

どうして？

愛さんには、お父さんがいません。亡くなったわけではないそうです。その今は家にいないお父さんが、愛さんに愛という名前をつけてくれた。そんな話を、あいちゃんのお母さんと、愛さんのお母さんが話しているのを、あいちゃんは聞いたことがあります。

愛さんのお父さんは、学校の先生らしいです。今は、あいちゃんと愛さんが住んでいる町にはいません。遠くに住んでいるようです。1か月に2度だけ、愛さんは、お父さんと会います。お父さんが、愛さんの家まで車でむかえに来てくれて、ドライブに連れて行ってくれるのです。

その話を聞いたとき、あいちゃんは、うらやましいのと、悲しいのと、いっしょになったような気持ちがしました。あいちゃんは、毎日、お父さんと会えます。愛さんは、1か月に2度しか、お父さんに会えません。

どうして？

愛さんは、どんな気持ちでお父さんと会う日を待っているのだろう。あいちゃんは、よくそんなことを考えます。愛さんのことが気になるのです。でも、学校では、あいちゃんは愛さんのそばに行くことはありません。名前のことで、からかうクラスメートたちがいるからです。

*

あいちゃんと愛さんは、小学校に入学したときから、同じクラスです。初めて、クラスのみんなど顔を合わせた日のことを、あいちゃんはよく覚えています。

先生が、男子女子に関係なく、あいうえお順で、苗字と名前を合わせて、さんづけにして呼んでいきました。苗字と名前を呼ばれて、「はい」と元気に返事をして、起立します。そして、「はじめまして」とおじぎをしながら言ったあと、時計の針と同じ向きにまわりながら、教室の中を見わたすのです。みんなに名前と顔を覚えてもらうためです。

そのときです。先生が言いました。

「恵（めぐみ）あいさんと、相田愛（あいだめぐむ）さんって、何となく似ていない？」

2人の名前は、先生の持っている名簿では離れています。愛さんの名前は、いちばん最初に呼ばれました。あいちゃんの名前が呼ばれたのは、だいぶたってからです。それなのに、「何となく似ている」と先生が言ったことが、あいちゃんには不思議でたまりませんでした。

どうして？

それからです。あいちゃんと愛さんが、みんなにからかわれるようになったのは。元気のいいあいちゃんは、みんなの人気者になりました。元気がない愛さんは、みんなからからかわれるようになりました。名前のことだけでなく、勉強のことや、運動のことや、いろんなことで、みんながからかうのです。あいちゃんには、それも不思議です。

どうして？

愛さんは、1年生のときの夏休みが終わってから、学校をよく休むようになりました。先生が愛さんの家までむかえに行っても、学校に来なかったり、来ても、保健室にいたりします。

どうして？

*

今、もうじき2年生になるあいちゃんは、たくさん漢字が読めるようになりました。学校の授業で習うというより、マンガを読んだり、ゲームをしているうちに、自然に頭に入るのです。1つの漢字にいろいろな読み方があることも知りました。クラスメートの中には、とても画数の多い、ややこしい漢字の名前の人もあります。大人が正しく読めない漢字の名前の人、何人かいます。

あいちゃんは、自分の名前が気に入っています。漢字の名前の人をうらやましいと思うこともあります、ひらがなはやさしい感じがして好きです。漢字も、おもしろくて好きです。

2年生になりました。

「あいだめぐむさん」

始業式の日、先生が名前を呼びましたが、返事はありませんでした。相田愛さんの席はあいちゃんの隣なのに、相田愛さんはいません。

どうして？

愛さんが座っているはずの隣の席を見ていると、胸が熱くなってきました。

どうして？

2年生になって1か月がたとうとしているのに、愛さんは、ぜんぜん学校に来ません。保健室にいるという話も聞きません。引っ越したという話も聞きません。

ある日、昼休みが終わって、午後の授業が始まろうとしているとき、あいちゃんは、誰もいない隣の席にふと目をやりました。机に落書きがしてありました。△と|を組み合わせた傘の絵が、描かれているのです。

|を挟んで、右に「あい」、左に「愛」と書いてあります。細い鉛筆で描いてあるので、消そうと思えば消せるのですが、あいちゃんは、そのままにしておきました。

どうして？

落書きは、そのままにしてあります。あいちゃんは、授業中に、退屈になると、その傘の絵に目をやります。毎日のお掃除のたびに、机の上をふくせいか、絵はだんだん薄くなってきています。

*

ゴールデンウィークになりました。

連休のあいだに、愛さんの家に行こう。愛さんに会いに行こう。ゴールデンウィークが終わったら、毎朝、愛さんをむかえに行って、いっしょに学校に行くのだ。隣の席に愛さんにいてほしい。あいちゃんは、そう思いました。

でも、どうして、愛さんにいてほしいんだろう？

5月3日。朝ご飯のあとに、歯をみがきながら、あいちゃんは、勇気を出して、きょうの午前中に、愛さんの家に行くことにしました。そう決心すると、体がほてってきました。

「お母さん、行って来まーす。まいんちゃん、行って来まーす」

お母さんのお腹の中にいる、妹か弟か、まだわからない赤ちゃんにも、あいさつをしました。

空はくもっています。あいちゃんは、知らず知らずに駆け足になっていました。汗が額から頬に流れてきます。とちゅうで、はっと気がつきました。愛さんに会って、何を話したらいいのか、ぜんぜん考えていないのです。お土産も、持ってきていません。

どうしよう？

そのうち、なぜ自分が走っているのか、どこへむかっているのかが、わからなくなってきました。とつぜん、ぱらぱらと小粒の雨が降ってきました。走りながら、声に出して言いました。

どうして？

09.05.04 こんなことを書きました（その6）

◆こんなことを書きました（その6）

2009-05-04 09:36:25 | 言葉

前回の「こんなことを書きました（その5）」2009-04-18（2009-03-08～2009-04-17）に、引き続き、このブログで書いた記事の整理をしてみたいと思います。今回は、2009-04-18から2009-05-03に掲載した記事のダイジェスト版です。短い解説とキーワードを挙げてあります。

これまで何度か、このサイトでくたくだとして読みにくい記事をお読みくださった方

には、「あれは、こういうことを書きたかったのか」とご理解いただけるように、またこのブログを初めてお読みになる方には、キーワードをご覧いただき、「これなら読んでみようかな」とご興味を持っていただけるように努めました。

*「こんなことを書きました(その5)」2009-04-18：2009-03-08 から 2009-04-17 に書かれた記事のダイジェスト版です。この期間中に3回の中断や道草があったため、その言い訳=弁解も書いてあります。

*「平安時代のテープレコーダー」2009-04-19：中途難聴者である自分の聴力の低下についての不安を動機に、手話を含む広義の言葉=言語へと話を進めています。「言葉を再現する」をテーマに、あるなぞなぞと、『源氏物語』の「当時の発音バージョン」のレコードを聞いた思い出をからめて、言葉=言語の時代による変化について論じています。キーワードは、「補聴器」「手話講座」「唇」「文化審議会国語分科会」「玄人と素人」「題名のない音楽会」「黛敏郎」「アイヌ」「アイヌ語」「アメリカ先住民」「イスラエル」「現代ヘブライ語」です。直接書かなかったキーワードは、「音声学」「口承」です。

*「言葉を奪われる」2009-04-20：「国語(※言語)とは軍隊を有する方言である」というフレーズをきっかけにして、言語と国家と権力=武力について考察しています。途中で話が脱線し、「事実と意見を分ける」という考え方にかみついています。手話を学びながら、手話について自分がいかに無知であったかを反省し、初めて知った手話にまつわるさまざまな話を箇条書きにしています。キーワードは、「英国」「英国における複数の言語と方言」「イスラム圏」「アジア圏」「移民』『最後の授業』『田中克彦』『ことばと国家』『蓮實重彦』『反=日本語論』『フィクションとノンフィクション』『メディアリテラシー』『ろう者』『ろう／聾』『聴覚障害・聴覚障害者)』『NHK』『ろう学校』『聴覚口話法』『手話法』『特別支援学校』『ホームサイン』『手話言語学』『フィンランド手話』『日本国憲法』『生存権』『sign language』です。直接書かなかったキーワードは、「植民地政策」「大日本帝国」です。

*「「事実=意見」=両方ともでたらめ」2009-04-21：新興のネット社会と、既存のマスメディアを対比しています。前者が主に「アマ」、後者が主に「プロ」から成る集団であるという、単純化された図式を用いながら、「事実」を「情報」として流通させることの難しさを、半ば諦めた=悲観的な調子で論じています。一方で、ネット社会で既に実現しているグローバルな状況に、もっと敏感になり、積極的に英語のサイトを利用することで、現状を打開しようと訴えています。ここでも、「事実と意見を分ける」という従来の考え方にかみついています。また、イスラム圏との付き合い方が、今後、大きな問題になることを指摘しています。キーワードは、「金賢姫」「ニュース報道」「ネット空間」

「インターネット」「中国語の固有名詞の表記」「韓国語の固有名詞の表記」「グローバル」「米国のテレビ放送・ラジオ放送」「ウィキペディア」「グーグル」「ヤフー」「英語で書かれたブログ」「翻訳ソフト」「下克上」「革命」「西欧／非西欧」「アルジャジーラ」『文明の衝突』「サミュエル・ハンチントン」『ソフト・パワー』「ジョゼフ・ナイ」です。

* 「「人間＝機械」説 (1)」2009-04-22：ネット社会で「アマ」が、これまで「プロ」が築いてきたさまざまな約束事を無効にしている状況に、焦点を当てています。そうした約束事にとらわれない「アマ」の文章に対して翻訳ソフトが無力である点を、ポジティブな現象としてとらえています。英語で書かれたブログの具体例を紹介し、その現状を読者に体感してもらおうと努めています。ネット社会では、完璧な英語など目指す必要はなく「ブローケン・イングリッシュ」と呼ばれる英語でよいのだ、とエールを送っています。テーマが、「機械翻訳」から「機械が思考する」に移るところで、記事を終えています。キーワードは、「正しい／正しくない」、「新聞社」「出版社」「校閲」「編集」「校正」「用語の手引き」「用字用語集」「電子版新聞記事」「翻訳ソフト」「機械翻訳」「翻訳機械」「玉石混交」「プレーン・イングリッシュ」「ネイティブ・スピーカー／ノンネイティブ・スピーカー」「コンピューター」「人工知能・AI」「比喩」です。

* 「4月23日にギャグる」2009-04-23：この日は抑うつ状態が悪化したために、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」という過去に試みたブログの形式を採用し、ダジャレと悪態で気晴らしをしています。お恥ずかしい記事です。当時の時事を思い出しながらお読みください。

* 「「人間＝機械」説 (2)」2009-04-24：機械翻訳という作業が、「言葉を作る」および「(ヒトが) 機械に合わせる」という行為と重なることを指摘しています。機械が翻訳しやすいように、ユーザーが言葉を作成するという意味です。その是非を問題にしています。かつて、X68000というパソコンを購入し、本気でコンピューターについて勉強しようと考えたものの、挫折した時期を回想しています。機械翻訳の開発に貢献したと言われるノーム・チョムスキーと、生成文法という考え方に触れ、自分が学生時代に学んだステファヌ・マラルメやフェルディナン・ド・ソシュールの言語観を源流とする、ジャック・デリダやロラン・バルトの考え方との「風土的な」違いについて、感想を述べています。かつて、チョムスキー的言語観が大きな影響をもっていた時期に、その流派の人たちから議論を仕掛けられたさいのトラウマにこだわり、被害妄想的な記述になっています。ここで、チョムスキー的言語モデルを拝借し、「人間＝機械」説という考え方を提唱しています。キーワードは、「プログラム」「プログラミング」「機械語・マシン語」「コンピューター言語」「議論」「ディベート」「言語能力」「言語運用」「高山宏」「学魔」「ルネ・デカルト」「ポール・ロワイヤル文法」です。

* 「人間＝機械」説 (3) 2009-04-25 : チョムスキー的言語モデルにおける「正しい言語運用」の「正しい」について、批判的に論じています。ビジン言語とクレオール言語という考え方を紹介することで、「正しい」が「言葉を作る」＝「言語の成立」過程で、いかに「正しくない」かを指摘しています。また、広義の言語という考え方をあらためて提唱し、6話のおとぎ話を語ることにより、読者に「言葉を作る」という行為を体感してもらおうと努めています。さらに、「言葉を作る」という行動において、「内と外に分ける」＝テリトリー＝縄張りというヒトの習性が障害となっていることを指摘しています。キーワードは、「機械翻訳」「翻訳機械」「翻訳ソフト」「ろう者」「手話」「ホームサイン」「健聴者」「ペット」「帰国子女」「在日外国人」「ボディランゲージ」「エスペラント」「表音文字」「表意文字」「分ける」です。

* 「反「人間＝機械」説」2009-04-26 : 本来なら「人間＝機械」説 (4) として、このシリーズを終えるはずだったにもかかわらず、なぜ「反「人間＝機械」説」というタイトルにしたのかを白状しています。言霊(ことだま)が怖いからです。同時に、「人間＝機械」説」というシリーズが結局は「反「人間＝機械」説」シリーズであったとすることで、弁解と言訳をしています。「人間＝機械」説」と決別できることを喜んでいません。「言葉を作る」というテーマで書き溜めた、走り書きメモを捨てずに、箇条書きにして紹介することで、メモを「供養」しています。かなり、言霊にこだわっています。キーワードは、「泉鏡花」「青空文庫」「思いやり」「思いやり予算」「官僚支配』『象は鼻が長い』『エシュロン』『検閲』『ダライ・ラマ』『マザー・テレサ』『シングリッシュ』『インド英語』『フィリピン英語』『和製英語』『外来語』『フィネガンズ・ウェイク』『ジェームズ・ジョイス』『柳瀬尚紀』『時計仕掛けのオレンジ』『1984年』『敵性語』『放送禁止用語』『森有礼』『志賀直哉』『植民地での言語』です。

* 「あう (1)」2009-04-27 : ヒトが言葉＝言語を用いるさいに、「不自由さ」を「自由さ」と錯覚しているのではないかと、読者に問いかけています。言葉を用いての「分ける」という行為が、すべての言説を「フィクション＝作り話」にするという考え方を提起しています。そうした「当たり前」＝「それを言ったらおしまい」とも言える八方塞(はっぼうふさ)がりの状況下で、このブログが「言葉＝言語」を思考の対象とするさいに用いてきたツールの「おさらい」＝「まとめ」をしています。新たなツールとして、「信号」というものを考えている最中だと述べています。キーワードは、「理解」「解釈」「知覚」「表象」「記号」「ぐちゃぐちゃ・ごちゃごちゃ」「あう」「大和言葉」「広義の言語」「狭義の言語」です。

* 「あう (2)」2009-04-28 : 「あう＝合う＝会う＝逢う＝遭う＝遇う＝和う＝壺う＝敢う＝饗う＝あうん＝阿吽＝阿唵＝あい＝愛」という言葉の羅列を紹介し、このシリーズ

の見通しを述べています。言葉＝言語が、それを生んだ文化と密接にかかわっているという側面がある一方で、他の文化と触れ合うことで、変化する側面があるという、2つの側面に等しく目を注ごうと訴えています。ともすると、前者の側面が強調されがちな傾向があると指摘したうえで、「すべての言葉＝言語は、ピジンおよびクレオール言語である」というフレーズを提唱し、読者を挑発しようとしています。キーワードは、「送り仮名」「(日本語の)表記法」「アラビア語とラクダ」「イヌイットの諸言語と雪」「日本語と米に関する語」「狩猟・牧畜民族の言語としての英語」「出会い」「溶け合う」「混じり合う」「さまざまな英語」「大英博物館」「植民地政策」「インド人の英語」「中国人の英語」「言語の多層性＝多重性」「共時的／通時的」「フォニックス」「スペイン語」「日本語」です。

*「あう(3)」2009-04-29：自分が言葉を対象とするフェティストであることを、再度告白しています。その萌芽が、NHKの語学放送全部を視聴していた中高生時代にあるのではないかと述べています。その体験が、のちに比較言語学をかじったさいに役立ったことも回想しています。「あう・あい」について、大和言葉系と漢語系の双方にわたり、詳細な意味の分析をしています。ここで、言葉たちが「目配せ」をし合っているという、のちに「信号」という考えにつながる言葉の「身ぶり＝仕草」に注目しています。その作業の過程で、「正しい」「正しくない」が、言葉＝言語の現実において、「正しくない」ことを再度訴えています。キーワードは、「フェティシズム」「言葉の物質的な側面と抽象的な側面」「ダジャレ＝オヤジギャグ」「キーワード検索」「検索エンジン」「多言語学習」「フェルディナン・ド・ソシュール」「エミール・バンヴェニスト」「インド・ヨーロッパ語族＝印欧語族」「転じる」「当てる」「訛る」「漢字」「白川静」「漢文＝真名文」です。

*「あう(4)」2009-04-30：「信号」について考えるようになった体験について述べています。病院という場が「信号」に満ちていることを、かつて目の当たりにし、今になってようやく「信号」をテーマに記事を書く気になったという経緯を説明しています。ミシェル・フーコーにおける「視覚的比喩」、ジャック・デリダにおける「聴覚的比喩」に関する私見を述べながら、フーコーの「視線」へのこだわりと「信号」との親和性に注目しています。「信号」についての考えを整理するために、比喩を多用したあるおとぎ話を試みるという「実験」をしています。キーワードは、「入院」「看護」「介護」「医療機器」「医療」「ナースコール」「差別＝区別＝知覚」「コドモ／オトナ」です。

*「あう(5)」2009-05-01：「嘘をつく」ことについてのエッセイもどきの文章から始まっています。それを下地にして、前回の記事に収めたおとぎ話を、ある種の文芸批評的な手法を用いて読解する作業に移っています。かなりテクニカルな分析作業をしています。こうした作業に不慣れな読者にも分かるように、大学時代の回想をまじえて、自作のおとぎ話が「信号」をテーマにしたものであることを説明しています。こうした自作の批評

が、一種の「やらせ」＝「出来レース」になることを恥じています。個人的には、現在、文学を学んでいる若い方に捧げたつもりの記事です。キーワード（※直接書かなかったものも含む）は、「論理」「命題」「理屈」「真偽」「矛盾」「フリードリヒ・ニーチェ』『善悪の彼岸』『ステファヌ・マラルメ』『賭け』『引用』『引用の織物』『宮川淳』『自己引用』『自己輸血』『オリジナリティ』『著作権・知的所有権』『蓮實重彦』『夏目漱石論』『大江健三郎論』『小説から遠く離れて』『私小説』を読む』『赤』の誘惑フィクション論序説』『ジャン・リカルドゥ』『言葉と小説：ヌーヴォー・ロマンの諸問題』『小説のテキスト：ヌーヴォー・ロマンの理論のために』『ガストン・バシュラール』『水と夢：物質的想像力試論』『蠟燭の焰』『火の精神分析』『芳川泰久』『夏目漱石』『渡部直己』『泉鏡花論—幻影の杼機』『谷崎潤一郎—擬態の誘惑』『漢和辞典』『解字』です。

*「あう (6)」2009-05-02：「言葉＝言語」という実体のないものを「知覚する＝錯覚する」ことを、「自分にとっての居心地のいい場所」＝「テリトリー」にたとえて、これまでのテリトリーとは異なる、新しいテリトリーである「信号」の有効性について考えようとしています。「言葉＝言語」を対象とする以上、避けられない事態、つまり、「テリトリーがテリトリーを扱う」という特殊性にも、こだわっています。「信号」という新しい「ツール＝道具＝玩具」を、どう手なずけようかという戸惑いに満ちたトリトメの記事になっています。一方で、このシリーズのために用意したメモ、このテーマに関係ありそうかつての記事からの自己引用が箇条書きにしてある部分は、のちに読み返しても興味深いものがあります。個人的には、愛着のある記事です。キーワードは、絞りきれません。

*「あう (7)」2009-05-03：このシリーズの最終回です。大学時代に受けたある講義の思い出を語りながら、「浚渫する」→「ナンパする」という誤訳をめぐって、「信号」の持つ重要な特性に「出合っ」ています。その偶然を喜んでいます。最後の回であるために、事務的にまとめをしたあと、やはりこんな官僚的なことで終わらせてはならないと思いつ立ち、「信号」における「ナンパする」と「めくばせ」という言葉の身ぶりの重要性を訴えて結論としています。ゴールデンウィーク期間中の「おまけ」として、童話を読者にプレゼントしています。キーワードは、「dragner」「because」「辞書』『テキストの快樂』『彼自身によるロラン・バルト』『いかがわしい』『ゲイ・サイエンス』『言霊』『愛・あい』です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」です。

以上です。

第2部 09.05.05～09.05.13

09.05.05 スポーツの信号学 (1)

◆スポーツの信号学 (1)

2009-05-05 10:53:54 | 言葉

オリンピックとは、4年に1度、「やらせ」or「ガス抜き」として催される世界代理戦争である、みたいなことを以前にも書きました。鬻蹙（ひんしゆく）を買いそうな言い方ですけど、案外、言えてませんか？「争う」という行動はヒトに限らず、あらゆる生き物に共通する習性のようなのです。

生きとし生けるものは、食べる＝生きるために争わなければならない。そのはしくれであるヒトの場合には、衣食住という基本的な営為自体が、他者（＝他のヒトと他の生物たち）との関係において、自分以外の存在のテリトリーを「侵す」という行為にならざるを得ないことは、容易に想像できます。もちろん、「共生」「寄生」という関係もあるでしょう。とはいえ、「テリトリー」と「争う」と「信号」との間に、親和性があるのは確かなようです。

一昨日の記事で、「信号」（※あくまでも、このブログで使っている「信号」です、ほかの「信号」のことは知りません）と「ナンパ」の「親和性＝仲がいいこと＝相性がいいこと＝こじつけができそうなこと」、について書きました。「争う」、あるいは「競う」と、「ナンパする」って、どこか通じているというか、似ていませんか？「めくばせ＝合図＝色目」や「にらみ合う＝ガンを飛ばし合う」という「身ぶり＝仕草＝行動」あたりに、こじつけのカギがありそうです。

*

スポーツは、勝ち負けを「かける＝賭ける」「競技＝争い」です。辞書で調べてみまし

たが、「勝つ」の語源はよく分かりません。「負ける・負く」は「まかせる＝任せる」に関係ありそうな記述があります。よく愛想のいいワンちゃんが、ひっくり返って前足を万歳させ、お腹を見せることがありますね。あれが、「負ける」と「任せる」の言葉の身ぶりです。「どうにでもしてちょうだい」という感じですね。

ちなみに、国語辞典で大和言葉系の語の語源を探ったり、漢和辞典で漢字の解字を調べてみるのは、「正しい」「正しくない」ごっこをするためではありません。辞書を引いて言葉の「身ぶり＝表情」を確認したうえで、「正しくない」の真骨頂である「こじつけ＝でまかせ＝でらため＝駄洒落」をして楽しもうという魂胆があるからです。さもないければ、「あう (1)」～「あう (7)」という、一昨日までやっていたシリーズで「愛」が出てきたりしません。

*

話をオリンピックと「争う・あらそう」に戻します。「あら、そう」なんて言うと、あまりにも馬鹿らしいからと、「愛想・あいそう」を尽かして、読者の方々がほかのサイトに飛んでいってしまうトホホな目にあいそうです。飛ばないでくださいね。このブログはおふざけもしますが、これでも結構本気でやっているのです。本当です。このお目目を見てください。パソコンでは無理ですね。もう少し我慢していただき、お付き合いくださいれば幸いです。

で、きょうは、

*スポーツにおける「信号」の働き

つまり、

*スポーツの信号学

みたいなことを実験的にやってみようと思っているのです。

一昨日までのシリーズの「収穫」(※そんなものがあつたのかしら?)として、せっか

く「信号」というツール=道具=玩具を手にしたのですから、これでしばらく遊んでみない手はないなどと考え、そういえば、スポーツは「信号」だらけではないかと思いつき、きょうの記事を書いています。で、

「信号学」

という言葉が頭に浮かんだのです。

駄洒落や、こういう「新しい言葉かもしれないもの」を思いついた時には、グーグルで“〇〇”とくくって検索してみます。言葉はみんなのものでし、人はだいたい同じようなことを考えつきますから、「この駄洒落は、まだ誰も言ったり書いたりしていないはずだ」などと高をくくって調べてみると、もう既に誰かが使っているということは何度も経験してきました。まれにヒット数が1桁で自分の作ったサイトだけが検索されると、やはり嬉しいものです。

たとえば、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」という、うつ対策ブログを短期間開設していたころ、

「(検察が) 〇〇を総選挙まで西松する (※蛇足ですが、〇〇には政治家やその秘書の名前が入ります)」

という駄洒落を思いつき、恐る恐る“西松する”をググってみたところ、「空室」でした。「空 (=開) いててよかった」と思いました。

今でも、“西松する”をキーワード検索すると、削除して今ではもう存在しないサイトがヒットします。もっとも、過去のブログ記事のバックアップをあちこちにばらまいているため、それにヒットすることもあります。お時間のある時に“西松する”をキーワードして覗いてやってください。きっと喜ぶと思います。ちなみに、“cocksuck 捜査”も、健闘しています。“コックサック捜査”のほうは、誰でも思いつきそうなので、ごちゃごちゃしていますけど。英語とはいえ、お下品な言葉を使いましたことを、お詫び申し上げます。

*

さきほどの話の続きですが、「信号」を扱うのだから、どう命名したものかと考え、ネーミング作業をしていて、“信号学”と“信号論”を検索してみたところ、ヒット数で見るとかぎり比較的「空いている」ようです。中国語らしきサイトがやたらあったり、どうやら理系の用語で存在しているらしいことも知りました。

ですので、安心してつかってみようと思います。「信号 + 学 or 論 or 楽」あたりで迷っていますが、しょせんお遊びなので、その時の気分でテキトーに語呂のいいもの当ててみる予定です。こういうお遊びは楽しいので、英語なら signalogy かな、フランス語なら signalogie かな、ドイツ語なら Signalogie かな、などとにかくにやにやしながら、空想しております。

では、さっそく、

* スポーツの信号学

をやって遊んでみましょう。

みなさんは、どんなスポーツがお好きですか？ スポーツも千差万別ですね。自分自身もする、あるいは、やった経験のあるスポーツ。自分はしたことがないけど、観戦なら大好きだというスポーツ。まず、こんな分け方ができそうです。個人的に、よく区別して考えるのは、バレーボールのようにネットみたいな境があって、敵と味方が対戦中に直接触れ合わないスポーツと、バスケットボールのように敵と味方が、それこそ汗と唾を飛ばし合い、ときには肌を接し合って対戦するゲームです。

そのほか、基本的に個人戦か団体戦かという、分類の仕方もあるでしょう。アイススケートや体操や射撃のように、「争う」というイメージが希薄なスポーツもありますね。射撃といっても、まさか撃ち合うわけじゃありませんもんね。もし、撃ち合いになったら、オリンピックが、4年に1度のほんまもんの世界大戦になってしまうじゃありませんか。ああ、こわい。

いずれにせよ、「信号」という考え方をもちいるさいには、そのスポーツにおける

* 「視線」⇒「めくばせ」⇒「色目（※広い意味で取ってください）」⇒「合図」

の役割を重視することになります。同時に、

* 「待つ」⇒「期待する」⇒「チャンス or 出方をうかがう」⇒「どきどきする」という身ぶり＝動作

にも注目します。どうでしょう？ あなたが実際にからだを動かして楽しんでいるスポーツで、または、よく観戦するスポーツで、今、挙げた「」でくられた言葉が欠かせない要素であったり、大切な意味をもっているということがありませんか？ もし、そうであれば、

* スポーツの信号学

という「でまかせ」でできた「物の見方」も、少しは有効性をそなえていると言えるかもしれません。なにしろ、以上は、一般論をしていて、特定のスポーツを名指して論じていたわけではないからです。つまり、ある程度の、「汎用性」をそなえているかどうか、「有効性」の尺度なのです。簡単に言えば、いろいろなもの同士を「つなげられる」かどうかです。

記号学 or 記号論、シンボリズム、イコノロジー＝図像解釈学、イコノグラフィー＝図像学、神話学＝ミソロジー（※ mythology） or ミソグラフィー（※ mythography）、物語論（※ナラトロジー）、テーマ批評、構造分析、フォルマリズム or ロシア・フォルマリズム、フェミニズム（※ or フェミニズム批評）、など、

懐かしい言葉がぞろぞろと思い出されます。こういった類のものが好きなのです。いろいろかじり、どれも未消化に終わりましたが、どれもおもしろいし、だいいち、楽しいのです。何が楽しいのかというと、「こじつけ・こじつける」という作業が楽しいのです。

*

以上挙げた「学問＝楽問」や「〇〇論」の根底には、

* 「いろんなものをつなげたーい」という欲望

があります。実は、上述の楽問の存在を教えてくれたのは、学魔こと高山宏氏でした。自分が大学生になりたての頃の話です。高山氏は、つなげる名人です。「つなげる・つなぐ」という作業において象徴的な名称である

「存在の大いなる連鎖」＝ The Great Chain of Being（アーサー・O・ラヴジョイの著書の邦題）

を、地で行くような著作をものしていらっしゃる方です。

この人の文章はすごいです。読みながら文章に埋められた＝象嵌（ぞうがん）された「連鎖」を感知するには、かなりの知識と想像力を要します。自分のようなお勉強嫌いには、歯が立たないです。でも、「歯抜け」なりに楽しめますので、向学心のある方は「高山宏」をキーワードに書名を検索し、ぜひ挑戦なさることをお勧めします。

ところで、

* 「いろんなものをつなげたーい」という欲望

は、比喩の多用や、エスカレートしたダジャレ＝ダジャレの頻発の根底にもあると思います。その意味では、ジャック・デリダやジャック・ラカンの戦略にも通じると言えそうです。

話を、さきほど羅列した「学問＝楽問」にもどしますが、かつて高山氏から直接紹介していただいた方で、富山太佳夫という方がいらっしゃいます。この方も、さきほど挙

げた類の楽問にとっても詳しく、また、ご自身が「読む」という行為を行う過程で、そうした楽問や理論を実践してみてくれるという、とても誠実な態度でお仕事をなさっています。文学を学んでいる方には、水先案内人となってくれる頼もしくて優しい先生だと思えます。「富山太佳夫」で、ググってみることをお勧めします。

私見では、この種の

* 「楽問=ゲイ・サイエンス」

は、真剣にやると馬鹿っぽくなります。ときには、きな臭くもなります。そうなったら、もう楽しくない。「ゲイ」ではない。馬鹿っぽいを通りこして馬鹿らしくなる。だから、あくまでも遊び心が大切だ。そう考えています。

一昨日の記事で出てきた、あのいかがわしい本を書いたフランス人、ロラン・バルト氏はその「遊び心」をもった粋な「おじさん」でした。享年 65 歳でしたら、「おじいさん」と呼ばれるギリギリのところでしょうか？

「なぜか」並べちゃいますが、ミシェル・フーコー氏が亡くなったのは 58 歳の時です。現在のような治療法が存在しない時期の死は、壮絶なものだったと言われています。モデル小説とされる『ぼくの命を救ってくれなかった友へ』（エルヴェ・ギベール著）を読んで、涙が出ました。フィクションとはいえ、病状の書き表し方がすごくリアルなのです。まだ若かったのに……。もっと知的に楽しませてほしかったと思います。

そういえば、クロード・レヴィ＝ストロース氏は、今年（注：この記事は 2009-05-05 に書かれました）の 11 月で 101 歳ですよ！ すごいじゃありませんか。もっと長生きしてほしいです。悲しい話もありました。ジル・ドゥルーズ氏のことです。70 歳まで生きたとはいえ、自宅のアパートから投身自殺しました。マルクス研究を土台に哲学を論じ、テキスト分析をしたルイ・アルチュセール氏も、最終的には不幸な生涯を閉じました。奥さんを絞殺したというニュースには、本当にびっくりしました。心神喪失とみなされ免訴にはなりましたが、今でも信じられません。享年 72 歳でした。

なんだか、芸能ニュース的な記述になりましたが、このところ、学生時代に大学で読まされたり、自分から読んだテキストの断片がやたら頭に浮かび、あのテキストを書い

たあの人はどうなったのか？ みたいなことを考えてしまうのです。抑うつがひどくなり
そうなので、話題をもどします。

そうでした。遊び心が大切だという話です。バルト氏は、批評の対象をどんどん変えて
いきました。あるものに一時的に没頭するけれど、決して真剣になりすぎない。ある
領域でけっこういい仕事をしておきながら、すぐに目移りする。浮気者だったのですね。
遊び人だったのですね。でも、いろいろ楽しませてくれました。

そのバルト氏の著作のなかに、Mythologies（邦訳名：『神話作用』および『現代社会の
神話』）というおもしろい本があります。プロレス、石鹸、俳優、ストリップ、スポーツ
カーなど、フランスのさまざまな文化現象をその「言説」にこだわりながら論じたもの
です。ああいう「めまい」を誘うような愉楽を提供してくれるのが、バルト氏の魅力で
した。

卒論で、『S/Z』という著作を中心にバルト氏について書いたのですが、その種本に
したのが、ステイヴン・ヒース（※ Stephen Heath）という、主に映画評論を手がけ
ていた英国人作の *Vertige du déplacement*（※日本語にすれば「変移のめまい」つまり、
「あちこち目移りして、とっかえひっかえしているうちに、目が回っちゃった」）という
書物でした。「めまい」というのは、「めくばせ」とは違いますが、何か気になる言葉で
す。

確か、ロジェ・カイヨワという人が、どこかで「めまい」について楽問的に論じてい
た記憶があります。鮮度の悪い固有名詞ばかり出してきて、すみません。この無精者の
自分には、新しいものを読むパワーも根性も、もうないのです。ともかく、「めまい」に
ついては「信号」とも無縁ではないという勘みたいなものを覚えるので、いつかあらた
めて考えてみたいと思っています。

*

ところで、みなさん、スポーツの楽しみ方の1つに、試合や演技だけでなく、お気に
入りの選手の日ごろの練習・トレーニング、商品価値のある選手であればスポンサーや
エージェントとの契約、プロであればギャラ、コーチやトレーナーなどのスタッフとの
連携、団体スポーツであれば他の選手とのプライベートな面での関係、恋愛・結婚・友
人関係を含む私生活などに、興味をもつことはありませんか？

現実問題として、こうした面が選手の試合や演技に及ぼす影響力はきわめて大きいし、また、そうした面に目を向けることは、スポーツ観戦をよりおもしろいものにしてくれる。個人的には、そう考えています。というわけで、

* スポーツの信号学

では、そうした面にも、

* 「視線を送りたい」

と考えています。

日本で、おそらくもっともファン層が厚いスポーツである野球なんて、そうした話題にはこと欠かないのではないのでしょうか。また、実際に、ほとんどゴシップだと言える話題が、野球の観戦と「同時に＝並行して＝シンクロして」、巷（ちまた）＝世間で語られている。そうお感じになりませんか？

「信号学的」に申しますと、さまざまなデータ＝情報が、「信号」として発せられ流通している、と言えます。スポーツ紙や、スポーツ紙の記者と、野球選手との関係をメディアを通して観察していると、世間からの視線を浴びているのは、スポーツ選手と言うより、

* 「タレント＝現在における「信号」の典型・権化」

ではないか。そんな気がしてなりません。

野球だけではありません。石川遼、朝青龍、浅田真央、高橋尚子、福原愛、中田英寿、亀田兄弟、錦織圭、北島康介、石井慧、上村愛子……なんて、観戦レベルだけでなく、その背景にあるレベルに人々の視線が注がれている（or 注がれていた）のではないのでしょうか。だからこそ、スポーツは見ていて面白いし楽しい。わくわく、どきどきする。

そんなふうには言えないでしょうか。

* 「信号」とは、ナンパを目的とした「めくばせ」である。ナンパされる対象は、いつかナンパされることを意識しながら待機している。ナンパする側も、される側も、双方がどきどきして機会=合図を待っている。

上のフレーズは、一昨日の記事からの引用です。このフレーズだけでも、さまざまな意味にとれませんか？

* 「ナンパする」

という動作=運動=行動を、いろいろな意味に重ねて取るのです。

* 「めくばせ」

という動作=身ぶり=表情をいろいろな意味に取るのです。

* 「待機」 / 「どきどき」 / 「機会」 / 「合図」

も同様です。

こんな「いかがわしい」とも言えることを考えていると、「わくわく」してきます。その

* 「わくわく感」が「信号」の特性の1つ

です。きわめて重要な特徴です。「信号学 or 信号論」を、その「わくわく感」を大切に
する=重視する

* 「ゲイ・サイエンス＝楽問＝悦ばしき知識＝愉快的な学問＝楽しいお勉強ごっこ」

にしようじゃありませんか。よろしければ、みなさんも、ブログなり、親しい人との会話のなかで、上記の視点からスポーツを多面的に眺めて楽しむことを実践してみませんか？ というか、おそらく、既にみなさんが実行なさっていることではありませんか？ そうであれば、意識的に確信犯的に楽しみましょうよ。

*

シリーズ「あう (1)」2009-04-27～「あう (7)」2009-05-03 で触れた「じっくり読む」という作業にからめて言うと、「じっくり見る」とか、「じっくり観戦する」という作業も可能だと思います。「じっくり読む」の達人である蓮實重彦氏は、『スポーツ批評宣言あるいは運動の擁護』という著作を上梓されています。

また、同氏は草野進という名で、同じく「じっくり読む」の達人である渡部直己氏との共著として『日本プロ野球革命宣言——読売巨人軍再建のための建白書』を、お書きになっているそうです。2冊とも読んだことはありませんが、どんなふう「じっくり観戦」なさっているかには、興味があります。本を読むことが苦手な自分は、自分なりに、「信号学 or 信号論」という玩具と戯れながら、マイペースで「ゲイ・サイエンス」したいと思っております。

現在、注目しているのは、石川遼です。「たとえる (10)」2009-04-17 でも、あえて名を挙げずに触れましたが、プロ選手としての成長のみならず、1つの「現象」として興味深いのです。さまざまな視線＝「まなざし」にさらされてもいます。もちろん、石川遼自身が、その視線＝「まなざし」を意識してもいます。

* ファン、そして世間の「まなざし」。

* 石川遼が、ファン、そして世間へ向ける「まなざし」。

* ゴルファーとしての石川遼が、試合中に見せる、ゴルフ場の地形、天候、風、空気、霧

囲気への「まなざし」。

*他の選手と交わす「まなざし」。

*石川をサポートするスタッフと交わす「まなざし」。

*石川という人間の内部にあるであろう、自己と交わす「まなざし」。

そうした多種多様な「まなざし」が呼応し合っている。そんなふうには見えません。

それを、自分は

*「現象」

と呼んでいます。バルトが、「神話研究」で対象としたものをイメージしての言葉です。石川遼がプレー中の映像にも関心はありますが、それ以上に、インタビューのさいの表情や発言の内容にとっても興味を引かれます。あの表情と発言は、まさに「信号」だと思います。石川遼が話している映像を見ていると、わくわくしませんか？ 比喩的に言うなら、あれは、

*期待する側と期待に応じる側との「視線」が火花を飛ばし合っている場＝空間

です。まあ、あれは一種のやらせであり、段取りであり、ルールであり、演出であり、演劇・お芝居とも言えるのでしょう。だから、

*わくわくする

のです。

*

「信号」および「信号学 or 信号論」という玩具は、まだ手にしたばかりですので、いろいろな対象と戯れるさいに、つかってみようと思っています。どうやら欠陥品らしいと分かれば捨てちゃいますけど、玩具ですから実際に遊んでみないことには、どういうふうに遊べるのかが分かりません。

スポーツは、また気が向いたときに「スポーツの信号学 (2)」というタイトルで扱ってみるとして、明日は違ったものを「お題」に、この玩具をつかって遊んでみる予定です。

トリトメのない文章にお付き合いいただき、ありがとうございました。

09.05.06 ドラマ信号論 (1)

◆ドラマ信号論 (1)

2009-05-06 09:54:05 | 言葉

ドラマって、そこらじゅうに転がっていませんか？ どこにでも転がっているということは、曖昧模糊（あいまいもこ）としたものだと考えることもできそうです。要するに、「何でもあり」であり、同時に「何だかわからない」ものという意味です。

家庭内にもドラマあり、会社にもドラマあり、政界にも、動物園の各檻（おり）のなかにも、お母さんたちと幼児たちが集まる小さな公園にも、ホワイトハウス内にも、芸能界にも、〇〇中学3年B組にも、テレビに映っているバラエティ番組の裏方さんたちの人間関係にも、ネット上の掲示板にも、そして、もちろんクレヨンしんちゃんの各回のエピソードのなかにも、東野圭吾の小説のなかにもドラマはあります。

で、きょうやろうとしている、

*ドラマ信号論

というのは、

*視線やめくばせや物色や色目やガンつけや、期待や様子見やどきどきわくわくや、やらせや出来レースやシナリオや筋書きといったものに注目する、楽間＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくなきや勉強じゃない」

となる予定ですので、十分に気をつけなければなりません。話が大きくなる。大風呂敷を広げてしまう。自己満足が高じて誇大妄想（※これって現在は差別語ですか？ だったら撤回します）化する。手におえなくなる。そんな恐れがあるのです。

「論理的に」「筋道を立てて」「事実と意見を分けて」「理詰めで」「説く」などという、芸当はとともできない「きわめてテキトーで」「直感か直観か知りませんが」「勘やら感に頼り」「理屈より屁理屈が好きで」「その癖、ものを知らない」「でまかせ実行中」の自分にとっては、きのう遊んだ「〇〇学」とか、きょう遊ぼうとしている「〇〇論」というのは、計画倒れ＝行き倒れ＝破綻（はたん）＝ボタンキューになるのが目に見えています。

ですので（※この接続詞、ぜんぜん機能していません、機能不全ですわ）、まず、ドラマの定義からしてみようと思います（※どういう意味だか、自分でも不明ですわ）。このブログは、いつもこんな感じなのです。トリトメがなくて、ごめんなさい。いずれにせよ、話を進めます。簡単にいきましょう。

*

*ドラマとは、はらはらどきどきである。

これなら、簡潔で何とかうまく行きそうですね。でも、この「簡潔」というのが曲者なのです。簡潔に定義すると、上で述べた「何でもあり」状態におちいってしまうという罠（わな）＝落とし穴＝ネズミ捕りがあるのです。かといって、長文でややこしい言葉をつかって定義すると、扱う対象を絞ることができますが、それ以前に、定義の段階で「わけがわからない」状態になってしまうという、潜在的危険性＝リスク＝「戸締り用心火の用心の対象」となる事態を覚悟しなければなりません。

ですので（※また出てきました、意味の不明な接続詞です、でも気に入っているので使っちゃいます）、その両極端のあいだで中庸とかいうものを心がけながら、話を進めたいと思います。

具体的にいけます。まず、身近なところで、テレビ番組について考えてみましょう。テレビには、ドラマがありますね。あまり広い意味ではなく、「〇曜サスペンス劇場」とか、恋愛ドラマとか、若者向けドラマ、というくらいの意味のドラマです。ところで、

* 「まるでテレビドラマみたい」

と人が言うとき、褒めていることはあまりないと思います。

* 「ぼくたちの関係って、まるでテレビドラマみたいだね」

と言われたら、相手はどう感じるでしょう？ どんな反応を示すでしょう？ 下手をすれば、

* 「バイバイ。あなたとは合わないみたい」

になりそうじゃありませんか？

* 「ばーか」

と言われて、ずっと目の前から消えられるよりは、ましでしょうが、悲しい結末であることは変わりません。

* 「まるでテレビドラマみたい」

のどの部分に問題があるのでしょうか？ 分析してみましょう。

1) 「まるで・・・みたい」

2) 「テレビ」

3) 「ドラマ」

以上の3つのうち、どの要素かが犯人のほうです。うーむ。考えているのですが、こうやって「バラバラにしてみる＝分析してみる」と、どれも悪くない＝犯人じゃないという気がします。「テレビ」のどこが悪いの？ って感じです。こういう場合には、やり方が間違っていると疑うべきです。バラバラにしてはいけないのではないかと、勝手に思っています。でまかせで言うのですが、もしかしたら、

* 組み合わせが悪い

のではないのでしょうか？ 食べ合わせが悪いと、オゲーっとなったり、トイレに駆けこんだり、最悪の場合には救急車の出動を要請しなければなりません。中毒というやつです。こわいですね。それと同じように、上で挙げた、1) 2) 3) についていえば、

* 1) + 2) + 3) = 駄目 = NG = ノー・グッド

ということになりませんか？ でまかせですけど。そんな気がしませんか？ そういうことにして、話を進めます。

どうやら、「まるでテレビドラマみたい」という表現は、蔑称（べっしょう）＝悪態＝罵倒＝「あほちゃうか」的効果をそなえたフレーズのようなのです。さて、みなさん、

*あなたは、テレビドラマがお好きですか？

「大好きです」とお答えになった方に、お尋ねします。相当、退屈していらっしゃいませんか？ 人生や生活に、ですけど。不快感を覚えになったのであれば、お詫び申し上げます。ごめんなさい。

「そこそこ、好きです」とお答えになった方に、お尋ねします。いや、申し上げます。朝、この記事をお読みでしたら、きょうも一日、頑張ってください。夜、この記事をお読みでしたら、きょうも一日、ご苦労さまでした。

で、「大嫌い」とお答えになった方にですけど、うらやましいです。テレビドラマ以上のものに興味がおありである、と仮定しての話ですけど。

何を言いたいのかと申しますと、

*テレビドラマは、日本のスタンダード＝標準＝平均値＝可もなく不可もない＝「たいして誰もが楽しめるもの」である。

ということなのです。ジス・イズ・ジャパン。そんな感じです。

*

ちょっと話題を変えます。本屋さんでは、いろいろな雑誌が売られていますね。ちょっと大きめの書店を想像してみてください。雑誌のコーナーへ行くと、週刊誌、月刊誌、ムック、不定期に刊行されているらしき雑誌などが、置かれています。内容的には、ある特定の年齢や年代をターゲットにしたもの、興味・関心事＝テーマに特化したもの（※

専門誌や特定の業界誌も含めましょう)、マンガ本、文芸誌(※ライトノベルやBL小説も含めましょう)などといったところでしょうか?

さて、日本に住んでいて、日本語の日常会話がそこそこできて、どこかの企業に勤めているのなら、仕事や自分の専門分野の日本語で書かれた書類や文書をほぼ辞書なしで読めて、学者や研究者であれば、専門書を辞書なしでほとんど完璧に理解できる、そんな外国人を想像してください。

それだけ日本語ができれば、大したものですよ。そうした日本語のレベルにある外国人とあなたが、友達関係にあったとします。で、いっしょにちょっと大きめの書店に行ったとします。その雑誌のコーナーに立ち寄りました。その外国人のお友達がおそらく手に取る可能性が低くて、あなたが手に取る可能性が高い雑誌って、どんな種類の雑誌でしょう?

あくまでも、可能性の話です。絶対にそうなるという話ではありませんので、お間違えにならないようにお願いします。言い換えると、一般論みたいなものです。

ヒントは、さきほどの、

*テレビドラマは、日本のスタンダード=標準=平均値=可もなく不可もない=「たいてい誰もが楽しめるもの」である。

です。

「TVガイド」?と思われた方、いい線行っています。たぶん、それも正解にしているでしょう。でも、こちらが用意している正解とは、ちょっと違います。ほんのちょっとだけです。その線で、もう少し考えてみてください。こちらが用意している正解というのは、ある人から聞いた話です。外国人と接する機会の多い方でしたので、いい加減な話ではないと信じています。また、答えをお聞きになれば、納得していただけたらと思います。では、ヒントを出します。

デーブ・スペクター氏は、ご存知ですよ。あの不自然なくらい美しい金髪の米国籍

の人です。あの人の売りって何ですか？ 毒舌ですか？ うーん、最近は毒舌路線じゃなくなりましたよね。民放だけでなく、公共放送にも活動範囲を広げ、アカシロの審査員あたりを目指していらっしゃるのかもしれませんがね。で、あの人は、欧米、といっても、主に米国の芸能界やセレブに詳しいのが、売りの1つですよ。ほかにも、魅力があるから、テレビによく出ているのでしょけど……。

さて、たった今、書いたことが、さきほどの質問のヒントです。もう、じらすのはやめますね。正解は、週刊誌です。と言っても、いろいろありますから、固有名詞を出さずにぼかして例を挙げます。「週刊〇潮」「週刊文〇」「週刊〇日」「女性〇身」「週刊女〇」「女性〇ブン」などです。〇がありますが、お分かりになりますよね？ コンビニの雑誌コーナーでも、駅の売店でも並んでいます。

あれって、かなり日本語が得意な外国人でも、「読めない」、「読みにくい」、「何が書いてあるのか、さっぱりわからない」みたいに口をそろえて言うそうです。

なぜでしょう？ 今、このブログをお読みなっている方で、上の〇の入ったような週刊誌を「難解」だと感じる方、いらっしゃいますか？「難解」だなんて、感じるなんて「なんかい」のう？ = 「どういうこっちゃ？」とお思いになりませんか？ なぜ、外国人にとって「難解」なのかというと、あれは、

*テレビドラマは、日本のスタンダード＝標準＝平均値＝可もなく不可もない＝「たいてい誰もが楽しめるもの」である。

からなのです。

デーブ・スペクター氏に限らず、一般的な米国人（※粗雑な言い方ですけど我慢してください）なら、たいていスラスラと読める、洋物の芸能関係の雑誌やTVガイドの類を、洋書の置いてある書店で、立ち読みなさってください。表紙の写真で、だいたい、「ああ、これがそうだな」と分かります。

ところが、です。読むとなると、難しいですよ。まさに、「難解」です。よほど、向こうの芸能界に詳しいというか、向こうのTV番組、映画、テレビのトークショー、バラエティ番組を定期的に見ている日本人でなければ、「読めない」、「読みにくい」、「何が書

いてあるのか、さっぱりわからない」という感想を漏らすにちがひありません。

TIME、Newsweek といった雑誌や、英字新聞を定期購読なさっている方もいらっしゃると思います。雑誌や新聞にも、いろいろな記事が掲載されていますね。一般論として、日本人の読者にとって、いちばん理解しやすいのは、政治や経済といったふつうは「硬い」と言われている分野の記事ではないでしょうか。

なぜなら、そうした内容はグローバルな流れのなかにありますから、日本のメディアで見聞きした情報が多いですし、理屈＝論理で読めるからです。ある程度内容がわかっているから、英語で書いてあっても読めるという部分があります。アメリカ国内の政治や社会についての記事でも、ある程度想像力を発揮すれば、まるっきりわからないということはないでしょう。もちろん、語学的な問題は別にしてですけど。

一方で、概して日本人にとって読みにくいし難しいのは、向こうの有名人やセレブや芸能関係の記事です。これには、訃報も含まれます。TIME、Newsweek であれば、米国人ならたいていの人知っている有名人の話題や、有名人同士の込み入った話の記事となると、もうお上手げです。米国に住んでいたり、米国のテレビ番組の録画などを毎日見ている日本人でないと、ピンと来ないどころか、さっぱりわかりません。

このように考えると、さきほどの外国人にとって苦手な雑誌についての話を理解していただけるのではないのでしょうか。

*

話をもどします。ゴールデンタイムやプライムタイム（※両者を区別する人もいますが、ここではどうでもいいです）で放映されているテレビドラマは、誰もが「気楽に＝そんなにあたまをつかうことなく」楽しめるものでなければなりません。だから、

* 「ぼくたちの関係って、まるでテレビドラマみたいだね」

なんて言えば、相手に振られてしまうのです。

* 「まるでテレビドラマみたい」

がネガティブな響きをもっているのは、以上のように「わけあり」だからなのです。ちょっと、屈折したと言うか、複雑な心理が働いているとも言えそうです。マンガは面白いし楽しい。でも、「あなた、マンガみたいな人ね」とか、「あなたの生活 or 人生って、マンガみたい」なんて言われたら、下手をすると喧嘩になりますよ。

これまで述べてきたことは、それと似ています。要するに、「陳腐」＝ほぼ「馬鹿みたい」なのです。でも、「なくてはならない」感じ。だから、「わけあり」なのです。

今、説明した「わけあり」を歴史的視点から見ることにも可能です。1950年代後半には、白黒テレビ・冷蔵庫・洗濯機が「三種の神器」と呼ばれていました。約一億の民が一生懸命で働いて、「三種の神器」をそろえようと、向こう三軒両隣と競っていた時期です。当時に生まれた自分も、幼い頃に目にした、この国の勤勉な人たちの「エネルギーの爆発」をぼんやりと覚えています。

ものすごい時代だったと思います。今とは正反対。仕事があふれていました。銀行や郵便局の預貯金の利率も高かった。夜になると、みんなが通帳を開き、増える残高に、にこにこしながら見入っていたものです。その当時のテレビは、「いやし」と「明日も頑張ろう」の源でした。プロレス中継、ホームドラマ、歌番組に熱狂できた時代でした。

そして長い年月が過ぎ、いつかトレンドドラマなるものが流行った時期がありました。今になって思えば、あれはテレビドラマのピークと言うよりも、残照みたいなものだったという気がします。暖炉や焚き火の炎が、最後のほうになって急に勢いよく燃え盛ることがありますね。あんな感じです。その時期に、誰かが、

* 「ぼくたちの関係って、まるでトレンドドラマみたいだね」

と仮に言ったとしても、

* 「ばーか」

という反応をされることは、おそらくなかったのではないのでしょうか？ もちろん、今の感覚から判断すると、「ばーか」って感じはしますよ。でも、それは、現在の視点に立っているからではないかと思います。当時は、たいていの人がトレンドドラマに、「ある程度」憧れていたという気がします。この「ある程度」が大切です。テレビドラマへの憧れが揺らいでいたのですから。

そして、60分なり、90分なりで事件が解決する「サスペンス劇場 or ミステリー劇場」に類した名のテレビドラマ・ブームが、お笑いや漫才や時代劇などのさまざまなブーム or 小ブームとほぼ並行して平穏に続き、「トレンドドラマ」という言葉が、いつしか「死語＝嘲笑の対象」になっていきました。

このころになると、いつでもそこそこの視聴率を保っている、サスペンス or ミステリー・ドラマを「すごく真剣に」見る人は、ほとんどいなくなります。「何となく」 or 「暇だから」見る。そんな状況になります。テレビドラマの「コモディティ化＝陳腐化」の始まりと進行です。という経過をたどり、

* 「ぼくたちの関係って、まるでテレビドラマみたいだね」

は、「陳腐な発言」になってしまったのです。言い換えれば、

* 「テレビドラマ」は「陳腐」の代名詞となっている。

です。歴史的に考察すれば、こんな感じでしょうか。

*

で、きょう実験的にやろうとしている、

* ドラマ信号論

ですが、

*テレビドラマは、日本のスタンダード＝標準＝平均値＝可もなく不可もない＝「たいてい誰もが楽しめるもの」である。

と、

*ゴールデンタイムやプライムタイムで放映されているテレビドラマは、誰もが「気楽に＝そんなにあたまをつかうことなく」楽しめるものでなければならない。

に当てはまる「ドラマ」を対象としようと考えています。これなら、みなさんにもお馴染みのものでしょうし、話が広くなりすぎないと予想しています。

したがって、芸術祭参加作品のドラマとか、子どもたちが起きているような時間帯に放映するのにはふさわしくないような、いわゆる「いかがわしい」（※あくまでも、いわゆる、ですよ）とか、スポンサーが付きそうにもないような、いわゆる「けしからん」とか、ご奇人以外には誰も見ないような、いわゆる「なんだこれ」みたいなテレビドラマは、扱いません。

*

きのうの記事にも書きましたが、このブログでやろうとしている

「信号論 or 信号学」みたいなもの

は、学問ではなく

楽問＝ゲイ・サイエンス＝「お遊び」

です。ですから、テキトーに気ままに書いていきますので、あまり真剣にお取りにならないでください。ときには、すごくてたらめなことや無神経なことも、うっかり書いてしまうと思います。そここのところは目に見てくださいね。

テレビドラマの特徴＝資格としては、まずわかりやすいことが挙げられます。難解であったり、複雑すぎではならない。また、

*「信号論」的に言うと、ドラマを「見せる側＝見られる側＝制作者」と「見る側＝見せられる側＝視聴者」とのあいだに、「めくばせ」が機能して＝働いていなければならない。

のです。つまり、前者が仕掛け、後者が仕掛けにはまる、というわけです。両者のあいだに「共犯関係」＝「やらせ」＝「出来レース」が機能して＝働いている、と言い換えることもできるでしょう。ちょっと学問ぽく説明すると、

*ドラマを「見る」という行動は、比喩的に言うなら、ドラマのストーリーやメッセージを「読む」ことである。

制作者は、「読めるもの」を「(視聴者が)読めないものに偽装する＝本当は楽に読める」、

あるいは、

「(視聴者が)読みたくはない気持ちを承知している＝本当はどうでもいい」かたちで提供し、視聴者は「読めるもの」を「読めない振りを装う＝本当は楽に読める」、

あるいは、

「読みたくない気持ちを誤魔化す＝本当はどうでもいい」かたちで「読む」。

と言えそうです。

テレビの画面のなかで、ある人がカメラ目線で「わかるかな？」と問いかける。その画面の前にいる人たちは、くつろいだ表情で、あるいは、疲れた顔をして、「さあ？」とつぶやきながら、画面に映る人のカメラ目線に、自らの視線をちらりと投げかける。そんな感じです。

きわめて、緊張感に欠ける＝リラックスした＝どーでもいー状況。それが、テレビドラマをめぐる「見せる側＝見られる側＝制作者」と「見る側＝見せられる側＝視聴者」とのあいだの状況なのです。

だから、「それなりに」面白いし楽しいし、日本の「スタンダード＝標準＝平均値＝可もなく不可もない」として、毎日、ドラマが全国で「消費」＝「視聴」されているのです。誰も、文句は言いません。誰も、目くじらは立てません。それほど、自然で当然のいとなみになっているのです。なぜなら、大きな錯覚が働いているからなのです。その錯覚とは、

* テレビは、ほぼ現実であり、見る者の視線を受けてとめてくれている。

という「約束事めいた安心感」です。

*

以上の錯覚のメカニズムが機能しているため、人は何気なくテレビをつけ、番組を見たり、何かほかのことをしたり、電話がかかってくればテレビをミュートにして電話の会話を優先したり、ニュース速報のテロップが出れば番組よりそっちに見入ったり、やたらチャンネルを切り換えたりしながら、「寂しい」or「退屈だ」or「ぼけーっ」という気持ちを紛らわすことができるのです。

こうした状況を、宗教的な比喩を用いれば、

「テレビは祭壇である」

と表現できるかもしれないし、

社会学的な比喩を用いれば、

「テレビは世界とのあいだの出入口である」

と言えるかもしれないし、

精神分析的な比喩を用いれば、

「テレビは精神の平衡を保つための治療器 or 薬剤である」

と皮肉ることができるかもしれないし、

ある種の人たちは、

「テレビは人を愚かにする」

と罵倒するかもしれません。そう言いながらも、家に帰ればつい見てしまうもの。それがテレビであり、テレビドラマなのかもしれません。

もちろん、テレビをぜんぜん見ない人もいるでしょうけど、ごく少数派ではないでしょうか。いや、案外、そうじゃないかもしれないという気がしてきました。ケータイ、ゲーム、ネットといった新興の娯楽装置が、テレビを脅かしている。そうも考えられそうです。もしかして、

* 「もうテレビなんて馬鹿らしくて、このところ、ぜんぜん見ていません」

とか、

* 「ケータイとゲームだけで忙しくて、テレビどころじゃない」

なんて、今、つぶやいている方、いませんか？ または、そんな感じの人が、あなたの近くにいませんか？ 考えれば考えるほど、「あり得る」という気がしてきました。「ケータイの信号学」、「ゲーム信号論」、「ネット信号楽」、「信号論から見たSNS」——面白そうですね。わくわくしてきました。

*

みなさんも、何かやってみませんか。「信号論 or 信号学」は、フリーソフトやフリーウェアみたいなものですから、どうぞご自由にお使いください。みんなのものです。えっ？

* 「あほらしくて、そんなこと、やってられない」

ですか？ なるほど。納得。失礼いたしました。

以上で、「ドラマ信号論」の第1弾はおしまいです。きのうの記事でも書きましたように、「信号論 or 信号学」というツール＝玩具については、まだ、扱い方がよくわかりません。「ドラマ信号論 (2)」は、いつか書くとして、あすは、また、別のテーマをつまみ食いして、楽問＝「学問ごっこ」を試してみたいと思います。

馬鹿話にお付き合いくださった方に、深く感謝いたします。馬鹿話とはいえ、これでも、いちおう、本気でやっておりますので、その点をご理解いただければ嬉しいです。

09.05.07 信号論から見た経済 (1)

◆信号論から見た経済 (1)

2009-05-07 11:25:31 | 言葉

*「信号」とは、ナンパを目的とした「めくばせ」である。ナンパされる対象は、いつかナンパされることを意識しながら待機している。ナンパする側も、される側も、双方がどきどきして機会=合図を待っている。

いきなり「ナンパ」で始まりましたが、初めてこのブログをお読みになっている方のために、そして、自分が今何をやっているのかを肝に念じるために、冒頭に挙げました。その*で始まる文章の出どころは、「あう (7)」2009-05-03 という記事ですが、別にご覧になる必要はありません。今、このブログでは、こんなことをやっているのか、くらいの感じで読んでくだされば、それで十分です。何だか、変なことをやっているとお思いでしょうが、少し辛抱してお付き合いいただければ嬉しいです。

「ナンパ」、「信号」、「めくばせ」、「どきどき」といった言葉については、おいおい触れていきますので、ちょっとここで遊んでいきませんか？ まるで、風俗関係の勧誘係のセリフみたいですね。ねえ、ちょっとカノジオー。ねえ、ねえ、きみいー。なんていうナンパの文句にも似ていますね。ぶっちゃけた話をしますと、まさに、みなさまをナンパしているんです。

*「読者をナンパしなければならない」

今、挙げた文も、さきほど紹介した記事からとったものです。そうなんです。ここはナンパサイトなのです。ある意味で、ですけど、正直に白状いたします。実は、このブログをやっている、ある道具=ツール=玩具を手にしめて、それをつかって、いろいろなテーマで実験ごっこみたいなことをやっているんです。

1人でやっても、いいのですが、せっかくブログという半公共の場を借りているので、今、お読みになっているあなたにも、参加してくださいとまでは申しませんが、ちょっと見ていただければ嬉しいのです。何だか、くどくど書いていますが、これでもくどいというか、ナンパしているのです。

で、きょうは、その玩具をつかって、経済について書いてみようと思っています。実は、経済や経済学やビジネスについては、かなり疎いのですが、それなりに本気でやってみますので、お付き合いください。

ブログの記事を書くときには、前日にだいたいのテーマを決め、家事の合間に考えたこと走り書きしたメモをつくり、それをながめながら書きつづっていく。そんな書き方をしています。きょうは経済をテーマにして、新しい玩具「信号論 or 信号学」をつかって遊ぶつもりなのですが、「経済」と言っても幅が広いですね。だいたい日本経済新聞に載っている日々話題を網羅した、広義の「経済」をイメージしています。

きょうの見通しとしては、まず、ビジネス、そのなかでもビジネス書、そのなかでも、特に自己啓発書について考えていることを書こうと思っています。その過程で、経済活動で重要な役割を果たしている貨幣という「表象」の仕組みを、言葉をいう「表象」とからめて説明します。

自己啓発書の次には、経済ニュースで知った話題を取り上げてみたいです。そこでは、「記号」と「信号」の違いについて考える予定です。このように、話が長くなりそうなので、きょうの記事は2つに分けます。まず、

「ビジネス書編」

です。

*

さて、

*これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です。

先日、このような意味の文を読んで、びっくりしました。つい、その1、2日前に、このブログで（「あう（5）」2009-05-01に書きました）、それとまったく逆の意味のこと（※「オリジナリティなんてない」ということ）を書いていたため、余計に驚いたのです。やっぱり、こんなふうにいる人があるんだ。いや、こう考える人のほうが圧倒的に多いのではないか。そんなふうで、うろたえました。

上記の*が頭についた文は、ある全国紙に連載されている記事の本文の冒頭に書かれていました。つまり、あるフレーズが記事のタイトルのように大きな活字で印刷されていて、本文の冒頭に、さきほどの「これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です」みたいなことが書かれていたのです。

その記事を書いている人は、経済・ビジネス・金融関連畑を歩んできた方で、現在、上梓（じょうし）するビジネス書がすべてベストセラーになるほどの勢いのある「超売れっ子」です。お書きになる本の内容は、お金儲け＋自己啓発書＋思考法・発想法とクロスしている傾向がみられます。ありふれたテーマでありながら、確かに「読ませるもの」を書く人です。

お金と人気の次は名誉と権力という定石（じょうせき）に従えば、あとは国会議員か？と勝手に肩間にしわを寄せ、あれこれ想像しております。あえて名指しはしませんが、おそらく、みなさんご存知の方です。誰なのかは、ここではまったく関係のないことなので、この人の名前は「匿名」にさせていただきます。で、この人は、

*貨幣の匿名性

にとらわれた結果、貨幣＝お金を含む「表象の働き＝仕組み」に鈍感になっているのではないかと自分は思いました。

「匿名性の恐ろしさ」2008-12-29、および「そして、話はお金に行き着く」2008-12-28と

いう記事で書いたことについて、きょうは新たな視点から、書いてみます。

*

さて、「表象」というのは、

* Aの代わりに「Aではないもの」を用いる

という大きな特徴をもった仕組みです。

たとえば、言葉、貨幣、映像、音声などが身近にある代表的な「表象」です。ヒトが日常生活をおくるさいに、避けてとおることができないものばかりですね。単純に言えば、言葉は「何か」を指しているし、貨幣は「いくらかの価値」を指しているし、映像や音声も「何か」を指しているということです。これらの表象たちは、今「」でくくったものの「代理」として、つまり、「」でくくったものの「代わりに」、人と人のあいだで伝達されたり、交換されたりするわけです。大切なのは、

* 「代理」と「代わりに」

です。

* 「ねえ、あれをあそこへもって行って、あれやってくれない？」

なんて会話、家族内や仲間同士でよくやりませんか？ その時の、「あれ」「あそこ」「あれをする」なんて言い方だけで、思いが通じる場合がありますよね。気心が知れている者同士だと、そうした大雑把な言い方でも十分通じます。その「あれ」「あそこ」「あれをする」という言葉も「表象」です。

で、考えてみてください。この世界で「あれ」「あそこ」「あれをする」って、それこそ、無数にあるのではありませんか？ おびただしい数の人たちが、今、この時点で「ね

え、あれをあそこへもって行って、あれやってくれない？」と、いろいろな言語で、ほぼ同時にしゃべっている可能性は非常に高い気がしませんか。

これって、すごいことです。驚くべきこと、摩訶不思議なこととも言えそうです。このすごいことを、

*表象の匿名性

と呼ぶことができます。

ややこしい言い方ですので、簡単に説明します。お金で考えるとわかりやすいので、お金を例にとります。

* 100 円玉は 100 円玉である。千円札は千円札である。日本国内なら、どこでも自由につかえる。

と書けば、わかりやすいと思います。そんな簡単なことなら、最初から、そう書けばいいのに。と、お思いになるのも、とうぜんです。でも、本当は、もう少し複雑なのです。銀行などの金融機関では、その日の決算だか勘定だか売り上げだか何だかしりませんが、1 円でも計算が合わないと、大騒ぎになるとかいう噂を聞いたことがあります。本当なのかどうかは知りません。

いずれにせよ、これに類したことは、企業でも、お店でも、役所でも、起きます。お金の計算をしていて、合わなくなる。どうして〇円多いのか or 足りないのか？ あるはずの△円が、消えた。使途不明金というやつです。あるいは、なぜか存在する不明金というやつです。

この場合には、

*この 100 円は、例の 100 円である。あの千円札は、例の千円札である。これはここにあるはず、あれはあそこにあるはず。それ以外だと変だ。

ということになります。

ちなみに「マネーローンダリング」という言葉がありますね。あれは、

*「この100円は、例の100円である」or「あの千円札は、例の千円札である」を、「100円玉は100円玉である」or「千円札は千円札である」に変える。

という作業みたいです。要するに、お金の出どころを消してしまう。だから、「資金洗浄」と直訳していますね。

*資金洗浄＝貨幣の匿名化

と言えそうです。

*

以上はお金＝貨幣の話でした。「表象」には言葉も含まれるという意味のことを、上で述べましたので、今度は言葉＝言語で考えてみましょう。たとえば、

*これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です。

と書いた人の名前を伏せるなら、その人を「匿名にする」＝「匿名化する」ということです。同時に、「これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です」の「これは」に当たる、この文を書いた人が「自分のオリジナルな」ものだと主張する「フレーズ＝言葉」も「匿名化」されます。

*「文＝フレーズ＝言葉」が「匿名化される」

というのは、その「文＝フレーズ＝言葉」を誰が言ったのか or 書いたのか分からない、という意味です。「ワードローダリング」＝「言葉洗浄」しちゃったとも言えそうです。洗濯機のなかで、お札や硬貨が、たぶん、じゃらじゃらばりばりと音を立てて回っていたように、言葉がどんな音を立てるのかは知りませんが、とにかく洗剤の溶けた水のなかを回る。そして、乾燥させれば、誰のものか分からなくなる。そんな不可思議なイメージです。

* お金も言葉も洗えば、誰のものか分からなくなる。

と考えた場合、たぶん、お金のほうが圧倒的に洗えばきれいになるとは思いませんか？ さもなければ、あれだけ世界各国の警察が協力し合っても、犯罪組織や「ならずもの国家」のお金の流れがなかなか解明できない、などという問題は起こらないはずです。あくまでも、「たぶん」です。なにしろ、お金の話には疎いし、縁遠いので、現実にはそうではないかもしれません。

*

一方の言葉はどうでしょう？ 著作権・知的財産権関連の書類、ネット検索エンジンとその結果のバックアップ、定期刊行物・書物・論文などをおさめた図書館や研究所、ペーパーワークの宝庫である各種の役所、文書保管所・倉庫（※この種の施設＝建物もあれば、ネット空間にも存在します）、エシュロン（※データを記録し、保管すると言われてます）――。そうしたものがあ限り、お金に比べれば、古今東西の無数に近い言葉の出どころを確かめられる可能性は高いと思います。

ただし、その作業は、デジタル化された情報＝データなら比較的楽でしょうが、アナログ的に存在している情報＝データなら困難をきわめるのではないのでしょうか？

視点を少し変えます。言葉というものは、たった今書いたような、気の遠くなるような出どころ探しをしなくても、

* 「言葉の匿名性」＝「誰のものでもない」＝「みんなのもの」＝「既に、いつか、どこかで誰かが言ったか書いた可能性が高い」

と考えれば、

*これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です。

という文＝フレーズが、いかにテキトー＝鈍感なものであるか、お分かりになると思います。これは日本語、英語といった言語の違いを超えたレベルで考えてもいいですし、日本語だけに限定して考えてもいいです。

日本語に絞って、考えましょう。上の文＝フレーズ＝言葉の「これは」が指している「文＝フレーズ＝言葉」が、「オリジナル」であるかどうかを確かめる方法はあるでしょうか？ ありますね。日本語が成立して以来、日本語をつかってきた日本人および外国人すべてに尋ねて回るのです。もちろん、タイムマシンも必要です。恐山のイタコさんや霊能者に助けを借りる、という手もありそうです。

以上は、物理的な意味での屁理屈です。次に、抽象的な屁理屈で説明してみます。

著作権保有者の経済的保護を目的としてつくられた、著作権や知的財産権を考慮に入れないでお話しますと（※著作権と知的財産権を否定するという意味ではありません。個人的には肯定しています。ただ、ここでは考えないという意味です）、

*「言葉のオリジナリティ」は幻想

です。そんなものはありません。なぜなら、

*言葉は、表象＝「代理」＝「○の代わりに」であり、その言葉の示すもの自体＝「○の代わりにの、○」自体も、幻想＝不明である。

からなのです。ややこしい言い方ですね。

すごく単純化した比喩で説明します。世界中の人たちは、「現実」という名の「幻想」＝「映画」を見て生きています。「現実」が「幻想」＝「映画」だというのは、「現実」と「幻想」＝「映画」の両方を、ヒトが知覚器官と脳をもちいて見ている「幻想」＝「スクリーン・脳に映し出された幻影・イメージ」と考えると分かりやすいと思います。

で、ある映画館で「映画」を200名の観客が見ていたとします。3時間くらいの長編で中休みがあったとします。その休憩時間に、ある人が大きな声で、「みんなは覚えていないと思うけど、あの橋で〇〇と△△が会おうシーンがあったの。あそこで、〇〇が「□□□」って言ったけど、あれって私のオリジナルの言葉よ。だから、誰にもあげない」と言ったとします。それを聞いた人たちは、啞然としませんか？ 極端な例ですが、「これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です」とは、それとほぼ同じです。

同じ「映画」＝「幻想」を見ているのに、その「幻想」を自分1人だけのものだと主張するようなものです。もちろん、同じ「幻想」を見ても、見ている各人の受け取る「意味」＝「メッセージ」＝「イメージ」は異なっていると考えられます。でも、言葉（※映画であれば「セリフ」）や、動作（※スクリーンに映し出される「演技」）は同じです。それがあつた特定の人の占有物であると主張する根拠はありません。

「これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です」という言葉も、そのなかにある「これは」が指す言葉も、今挙げた比喩である「映画」＝「幻想」に含まれます。ヒトは自分自身さえ、それを「言葉」という「幻想」に置き換える限りは（＝自分自身について言葉をもちいて語る限りは）、「幻想」としてしか、自分自身をとらえられることができないのです。

その「幻想」＝「言葉」に置き換えるしか、他のヒトとのあいだにコミュニケーションを成立させる手段もないのです。というわけで、共同のコミュニケーションの道具でもある「幻想」の一種である「言葉」が、「オリジナル」＝「ある特定のヒトの占有物」＝「ある特定のヒトが考え出したもの」だということはありません。

ここで、言葉は貨幣にかなり近づきます。大雑把に言えば、

*ヒトは、言葉や貨幣という、あやふやな幻想を、かろうじて現実（or 物や事やサービス）の代わりにもちいるしかない。

という状況があると考えられます。この状況を前提にして、言葉に絞って言えば、

*ヒトは、「あやふやな幻想」を「かろうじて」言葉という「表象」＝「○の代わりに」で掬（すく）いとり、それを「自分のものだ」＝「オリジナルである」と主張することがある。

という、ごく日常的に経験できる現象を説明できます。この誰もがいただく「錯覚」は、あまりにも、ありふれているために、

*「あやふや」(E「かろうじて」＝「きわめてあやふや」(※掛け算をしています)

とでも、ギャグるしかない状況であるとも言えそうです。

要するに、「それを言っちゃおしまいだ」です。でも、そのギャグ的狀況を、ヒトはギャグとも意識せずに、日々、生きているのです。知覚とは錯覚です。このこと自体に、別に悪い意味も、良い意味もありません。知覚器官をそなえたすべての生き物が、錯覚の下に生きているのです。セ・ラ・ヴィです。

*

さて、以上のように仮定する＝想定する＝妄想するとき、言葉は、お札や硬貨のように、「大きな目で見れば変動する価値」＝「ふだんは変動しない価値」ほどのレベルにまで、匿名化されてしまいます。言い換えると、「これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です」とは、「これは自分だけのお金です」とほぼ同じことになってしまうのです。

たぶん、「これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です」は単なるレトリックであるか、冗談だったのでしょうか。冗談には、冗談を添えましょう。お札や硬貨にインクなり傷をつけるという形で、自分の名や印しをつけることは、法律に触れるそうです。貨幣損傷等取締法というものがあるらしいのです。

とはいえ、お金も、言葉もみんなのもので。共有物です。あっ、そう言えば、言葉はみんなの共有物でありながら、著作権で保護される場合もあったね。こうしたややこしい問題は、いつか、日をあらためて考えてみます。いずれにせよ、みんなのものは、みんなで大切につかいましょ。

*

以上、くだくだ書きましたが、「これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です」という意味のことを書いた人が活躍なさっているビジネス書、とりわけ、自己啓発書や思考法・発想法関連の書物では、

* 「はったりをきかす」 or 「はったりをかける」

という言葉の身ぶり＝表情＝動作が重要な役割を果たしています。冒頭で挙げた、「信号論 or 信号学」的視点から見ると、「ナンパする」ための「めくばせ」の一種です。上で書きつづってきたこととからめて説明すると、

* ビジネス書、とりわけ自己啓発書は、「現実が幻想である」を逆手に取り、「じゃあ、その幻想を「思い込み」によって変えるのは実に簡単なはずだ」とみなし、あっさりと「思い込みの転換」という魔法を編み出す処世術を提供している。その「思い込み」を実践する過程において、「言葉は「表象」＝「○の代わりに」である」を逆手に取り、「じゃあ、○を他のものにすり替えることによって、「思い込み」を強化する道具にしよう」と、いとも簡単に、言葉を魔法のブースターとして利用することもある。

と言えそうです。

以上のような方法で、ビジネス書は、この記事の冒頭近くで引用した、

* 「読者をナンパしなければならない」

を実践=実行しているのです。実に、さめた=リアリスティックな発想のうえに成り立っているのです。だからこそ、

*これは自分のオリジナルなフレーズ=言葉です。

などと、いけしゃあしゃあと、あるいは堂々と言えるのです。

続けて、きょうの記事の後半である「信号論から見た経済（2）」を読みいただければ嬉しいです。間借りしているブログサイトに文字数制限があるため、1記事におさめられないのです。ご容赦をお願い申し上げます。

09.05.07 信号論から見た経済（2）

◆信号論から見た経済（2）

2009-05-07 11:27:32 | 言葉

さて、ビジネス書から経済に話題を移します。

ここで、「信号」について「ナンパ」という言葉をつかっていない、少し学問ぽい定義を「あう（7）」2009-05-03 から、引用してみます。経済における「メッセージ」と「熱」と「動作=行動」の役割を考えるうえで、参考になると思います。

*「信号」は、2種類に分けることができる。

*1) 日常生活において、ヒト or 生物は「信号」の存在を常に意識していて、「信号」が合図を送ってくるのを予期している。「信号」から合図を受け取ったとき、ヒト or 生物

は、何らかの予定されている行動をとる。なお、「信号」には、ノイズが伴う場合があり、その程度次第では、予定されていた行動への障害が生じ得る。

* 2) 機械同士 or 機械のパーツ同士や、生物の器官 or 細胞同士などでの「信号」のやりとりにおいては、「信号」はあらかじめ決められた経路を通る。この場合の「信号」のやりとりによって、複数の機械 or パーツ、および、複数の器官 or 細胞は、あらかじめ設定された動作=操作を行う。なお、「信号」には、ノイズが伴う場合があり、その程度次第では、設定された動作=操作への障害が生じる可能性がある。

* (上記の2種類の)「信号」が合図を送るさいには、熱を伴う。「信号」を受け取った側においても、熱が生じる。これを詳述すると、次のようになる。「信号」が発信された時点、および、経路を通じて運ばれる過程、そして、「信号」が受信された時点、および、「信号」を受け取った側で行動 or 動作=操作が実行される時には、熱が生じる。この熱は、「信号」の役目を遂行するために不可欠である一方で、ノイズを生じさせ、「信号」の役目の遂行の障害となる可能性もある。

以上の定義を参考に、以下の文章をお読みください。

*

きのうのニュースによると、バーナンキ米連邦準備理事会 (= F D R) 議長が5日に、米上下両院合同経済委員会での証言のなかで、住宅市場に「底入れの兆候」が複数出ていると証言したそうです。さらに、米国の景気について、年内に回復するとの期待感も表明したらしいです。「このところ」、経済に大きな影響力=メッセージ力をもった人たちの発言が報道されるたびに思うのは、

*経済とは、発言=メッセージという、めくばせ=合図のかわされる場である。その場においては熱が発生し、その熱を触媒にさまざまな行動が誘発される。つまり、合図が行動を促すのである。ただし、発生する熱がポジティブに働くという保証はまったくなく、不確実性に満ちていて、どのような行動を誘発するかの予測は不可能である。熱によってノイズが生じたり、リスクや誤作動を誘発する可能性もきわめて高い。また、めくばせ=合図は、ニュートラル=匿名的であり、そのメッセージがポジティブに働くか、ネガティブに働くかについても、予測は不可能であり、偶発的出来事 (= incident or event) or 事件 (= accident) に左右される場合が多い。

ということであり、また、そうした人たちの発言の、広義の相場への波及と浸透ぶりを観察していると思うのは、

*ニュートラル=匿名的な特性をもつ信号が、何らかのメッセージを帯びて=担って、飛び交う広義の相場においては、信号の不確実な特性ゆえに、投資 (= investment or speculation) は、限りなく投機=賭け (= speculation or venture = gamble) に近づく。

ということです。上述の「このところ」とは、「信号」について考えるようになってから、という意味です。バーナンキ氏にせよ、トリシェ欧州中央銀行 (= ECB) 総裁にせよ、何か発言するたびに、そのメッセージをめぐってさまざまな憶測がグローバルなレベルで飛びかいますね。

ちょっとまえの話ですが、トリシェ総裁の記者会見では、総裁と記者たちのあいだに阿吽(あうん)の呼吸みたいなメッセージのやりとりがあって、ある言葉を発すると、近いうちに金利の切り上げだか切り下げだかがあるとかないとか、なんて新聞記事を読んだ覚えがあります。バーナンキ議長の会見も似たようなものじゃないでしょうか。

あれって、ナンパしようとする側と、されかけている側とが、どきどき感を演出し合っている光景に似ていませんか？ 株価の動き、金利や外為相場の変動なんて、「信号」以外の何ものでもないみたいに思えるのは、このところ、自分がお酒漬けやお薬漬けではなく、「信号」漬け=「信号」浸りで、モーロー状態になっているからでしょうか。「ふおーっ、ぶふおー、ういーっ。(今質問したやつは) どこだー！」状態になっているのかもしれない。

とはいえ、相場というのは、『あい』の場」とも読めます。もう少し、各相場についてお勉強をしたほうが、「信号論から見た経済」を楽しめそうです。あすからは、新聞やネット上の経済ニュースにもっと目を通してみようと思います。強制されてやるお勉強ではありませんので、たぶん、やる気も出るでしょう。

*

それはさておき、上述のバーナンキ議長の発言のニュースを見ていて、石川遼選手の試合後の会見を思い出しました。何でも、プラスにとる。前向き。ポジティブ思考。自分に言い聞かせる。同時に、発言を聞いてくれる人たちを巻き込む＝ナンパする（※石川君、並びに石川君のお父さん、ごめんなさい、比喩ですので許してください）。石川選手については、「スポーツの信号学（1）」2009-05-05でも、「たとえる（10）」2009-04-17でも書きましたが、1つの現象として非常に興味深いです。

「信号学 or 信号論」遊びをかなり本気でやっている者としては、「信号」と「トリトメのない記号＝まぼろし」の違いについて、あれこれ思いをめぐらしているのです。なお、「記号」とは何かについては、このブログのバックナンバーである「マトリックス」2009-02-11、「こんなマヨじゃ、いやだ！」2009-02-12、「そっくり」2009-02-13、「「東京」E無限大」2009-02-14」という具合に、「記号」関連の記事が長めのものが複数あるので、今回はなるべく短めに説明します。

で、「信号」と「記号」についての目下の関心事は、

* ポジティブなメッセージと取られるであろう発言を、1) 「トリトメのない記号＝まぼろし」として扱った場合と、2) 「信号」として扱った場合の違いは何か？

です。

さて、ここで「記号」を簡単に説明します。

* 「トリトメのない記号＝まぼろし」とは、あらゆるもの＝森羅万象がなり得る。その特徴は、そっくりなものがずらりと並んでいるか、あるものとそっくりなものが他の場所にもたくさんある可能性が高いという点である。たとえば、スーパーに並ぶ大量生産された商品が「記号」である。「記号」は購入 or 入手され、消費され、機能＝役割が終わると、保管されるか、廃棄処分され、他の「記号」がそれにとって代わる。取り換え可能なのである。たとえば、議員、大臣、お笑いタレントも「記号」とみなすことができる。トリトメなく次々と登場し、まぼろしのように消えていくのも、「記号」の重要な身振り＝運動＝特性である。

以上の定義を踏まえ、「記号」と「信号」の違いについて、現時点では、次のように妄想しています。

* 「トリトメのない記号＝まぼろし」においては、「記号」の発信者と受信者のあいだの心理合戦は、意味をもたない。

* 「信号」においては、「信号」の発信者と受信者のあいだの心理合戦が、きわめて重要な意味をもつ。

以上が提起しているのは、「記号」および「信号」のやりとりでの「メッセージ」の扱
い方の違いが、両者を隔てる＝区別する大切なポイントではないか、という問題です。

* 「記号」においては「メッセージ」がほとんど意味をなさないのに対し、「信号論 or 信
号学」においては、発信側と受信側のあいだで「信号」＝「メッセージ」＝「意味 or め
くばせ」がキャッチボールのようにやり取りされ、双方が相手に対し、何らかの効果＝
運動＝動作＝行動を、働きかける＝促す＝誘導する点が重視される。

という違いがあるように思えます。

念のために、断っておきますが、ここでの「記号」はこのブログでつかっている「ト
リトメのない記号＝まぼろし」であり、既存の「記号論」や「記号学」（※多種多様な流
派があります）とそこでもちいられている「記号」（※多種多様な定義があります）と関
係がないことは、言うまでもありません。

当ブログは、学問ではなく、楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくお勉強ごっこをしよ
う」の場です。みなさんにしてみれば、「好きなように勝手にやればー」の場です。

そんなわけで、気ままにやらせてもらいますので、今後もごひいきにしていれば、
そんな嬉しいことはありません。

きょうは経済をお題にして、話題別に「信号論から見た経済（1）」と「信号論から見
た経済（2）」の2編に分け、「信号論」遊びをしてみました。こうして具体的な対象を扱
いながら、新しい玩具で遊んでみると、いろいろな発見があります。

「信号論から見た経済 (3)」は、もう少し経済のお勉強をして、いつか試みることにし、あすは別のテーマに手を出して、遊んでみようと思います。

09.05.08 信号学的視線論 (1)

◆信号学的視線論 (1)

2009-05-08 11:14:43 | 言葉

何かが少なくなったり無くなれば、補充する。補充するものがなければ、何か別のもので代用する。日常的に経験していることではないでしょうか。個人的な経験から、今述べたこととお話することから、きょうの記事を書きたいと思っています。少なくなつて、いつか無くなるかもしれないもの。それは、自分の場合には聴力です。

聴力は、ある聞こえの周波数の部分がいったん、低下したり、失われると、それを回復することは、きわめて困難、不可能に近いと言われています。早期発見、早期治療が決め手だとのこと。もし、お心当たりの方は、急いで耳の専門医を訪ねてください。すぐにです。この記事は長いですから、読むのは後回しにしてください。ことは急を要しますので。

*

さて、中途難聴者である自分の場合、数カ月に1度の頻度で「聞こえの検査」をするたびに、聴力は低下しています。良くなっていることはありません。補聴器が役に立ちそうで立たないということは、「聞こえるけど聞けない言葉」2009-01-10 でかなり詳しく書きましたので、ご興味のある方は、ご参照ください。

で、もう戻ってこない聴力を何か別のもので補わなければならないのですが、それは何だと思いにになりますか？ 視力なのです。幸いなことに、眼鏡にたよってはいますが、視力は極端に悪くはありません。ありがたい、と感謝しています。

自分がよく感じるのは、聴力が低下するにしたがって、他の人の表情、目つき、仕草、身ぶりなど、身体が発している「信号」に敏感になってきたということです。川端康成の文章のなかに、自分の目つきについて、ある女性からあることを指摘されて、はっとしたという意味の一節があった記憶があります。家にある川端の本を、あれこれめくってみたのですが、どの本に書かれていたのか探せません。記憶が間違っていたら、許してください。確か次のような話でした。

相手が無遠慮または不躰（ぶしつけ）と感じるような目つきで、他人の顔をじっと見つめている。自分では意識したことのない、そんな癖を指摘されて大きな衝撃を受けた。これまで、無意識のうちに、どれだけの人に不快な思いをさせたかと思うと、つらい。

自分が、その川端の話に興味深く思ったのは、川端がその自分の癖について、分析しているからです。これもうろ覚えなのですが、確か、川端が少年時代までいっしょに暮らしていた（※2人きりの生活だったと記憶しています）祖父の目が不自由だったために、祖父の顔をじっと見る癖がついていて、それが無意識に習癖になってしまったのではないか？

その文章のなかで、川端はそう回想し、同時に戸惑っていたのです。それを読んで、考えさせられました。目の不自由な方は、誰もが完全な闇のなかにいるというわけではなく、明暗を感じとることができる方が多いということを聞いた覚えがあります。祖父についての川端の文章のなかでも、祖父が日の当たっている方向へよく目を向けていた、という思い出が語られていた記憶があります。思い違いかもしれません。でも、よく分かるような気がします。

*

話はかなり飛びますが、フロイトの精神分析＝「精神を対象とする医学」は、ユダヤ人であるがゆえに医師になりたいくても障害が多くてなかなかない、また、なったとしても排斥されるという時代背景の産物であつたらしい。そんなことを何かで読んだことがあります。それと似た事情があつてか、たとえば米国でも、精神分析家にはユダヤ

人が多いと聞きます。

精神分析医にかかることは、以前は西欧での流行でしたが、現在は下火だとのことですね。かつては、ステータスシンボルでもあったらしいです。かなりのお金がかかるうえに、分析がえんえんと続くからです。それへの反発なのか、ブリーフセラピーとかいう、短期間で「こころの治療法」が登場したり、現在では、コーチングや、モチベーションを促す人、つまり、ファシリテーターがサポートするとかいう、新興の「いやし」の方法が流行っているそうですね。専門家ではないので、詳細は知りませんが、話としてよく聞きます。

話をもどします。フロイトとその弟子たちや、米国の精神分析医たちは、マーケティングでいう、隙間（すきま）市場＝ニッチ市場を利用したわけですね。いわば、

*隙間をついた。

のです。この記事の冒頭に書いた、

*何かが少なくなったり無くなれば、補充する。補充するものがなければ、何か別のもので代用する。

と、どこか似ていませんか？

また、話を飛ばします。ロシア・フォルマリズムという文学研究の運動が、ロシア革命とほぼ同じころに起こりました。ソ連の共産党による一党独裁体制の確立と並行するかたちで、展開していきました。そうした状況下で文学を研究するのは冒険です。下手をすると命取りになります。

独裁体制にとって、言葉の芸術あるいは娯楽である、文学ほどやっかいなものはないのです。ちょっと目を離すと、体制批判をします。締め付けると、微妙なやり方で風刺する場合もありますね。でも、文学作品を研究したり、批評するさいには、たいていは、書いてある中身に触れないわけにはいかないじゃないですか。でも、ロシアのフォルマリストたちは「隙間をついた」のです。

どうやったのかと申しますと、物語の内容＝メッセージ＝「中身」ではなく、形式＝「骨と皮」に注目するという方法をとったのです。「何か」について語ると権力が言いがかりをつけてくる。そうであれば、「何か」という「器の中身」ではなく、「器自体」について語ろうという抵抗の仕方を選びました。あたまがいいですね。結果的に、ロシア・フォルマリズムは、文作作品の形式と手法を分析するための洗練された方法を生み出しました。

文学研究では、フェミニズム批評というのがあります（※余談ですが、英語でいうフェミニスト＝feminist というのは、女権拡張運動に賛同したり、実際に運動にかかわっている、勇ましい＝ときには過激な人を指し、日本語でのやわなイメージはぜんぜんありませんね）。フェミニズム批評は、主に米国での女権拡張運動のための援護射撃の産物として生まれたみたいです。

女権拡張運動も、アフリカ系アメリカ人を中心とした公民権運動と同じく、米国社会において激しい抵抗に遭いました。それが従来の「オトコの視線から見た作品」を「オンナの目から見直す」という、とてつもなく大きな仕事へと向かったのです。これも、ある意味では、「隙間をついた」と言えそうです。「思いもしない出方をした」＝「意表をついた」という意味で、ですけど、あっぱれですね。

そう言えば、エコフェミニズムという、エコロジーとフェミニズムが合体した運動がありますね。あれも、意表をついた出方をしたものです。詳しくはありませんが、好感をもっています。

*

ついでに申しますと、構造主義は、伝統と歴史という柵（しがらみ）にがんじがらめになっていたヨーロッパの閉塞状況（＝通時的）を打破しようとする過程での産物であったと言われています。わざと歴史を切り捨て「今ある状態＝構造」に徹底してこだわる（＝共時的）。

まるで親への駄々っ子の反抗のような、抵抗をしたわけです。これも、ある意味では「隙間をついた」のではないのでしょうか。「こんなやり方もあったのか」という感じです。

見事じゃないですか。

上記の運動に共通するのは、「反作用」という比喻でも語ることができそうな現象です。何か新しいものが生まれるときには、その下地となる背景があることは言うまでもありません。その背景が、「反発」や「抵抗」というかたちをとる場合が少なくない。

*ネガティブな事態を逆にとり、ポジティブな状況へと転じる。

とも言えるでしょう。

*憤まん＝怒り＝不満が、新たなものを誘発する。

とも言えるでしょう。

*

そこで「信号論 or 信号学」の話に移りたいのですが.....。

上述の、あたまがよくて、あっぱれで、見事な業績と並べるのは、おこがましいの極致であり、

*図々しい

の一言で済ませられそうです。それを承知のうえで、性懲りもなく、しかも図々しく、このブログでしこしこやっている「信号論 or 信号学」も、それなりに「隙間について」いるなどと言ったら、あきれ返ったフロイト先生からお叱りを受けそうです。

「きみ、ちょっとカウチ（寝椅子）に横たわりたまえ。あたまのなかを、診てあげよう。さあ、小さかった頃のお話から聞かせてもらおうか」なんて.....。ナイン・ダンケ＝

ノー・サンキューです。精神分析医のカウチに身を横たえるくらいなら、棺（ひつぎ）に横たわったほうがましです。自分のこころのなかを、他人様に診てもらふ余裕はありません。自分で見るだけで精一杯です。

これまで書いた自分の記事を時々読み返してみると、自分が至るところで、視線にこだわっていることに、あらためて気づきました。「見えないものを見る」2009-01-08、「読めないけどわかる文章」2009-01-09、「目は差別する」2009-01-11、「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21、「冬のすずめ」2009-01-24、「1カ月早い、ひな祭り」2009-02-03、「1人に2台のテレビ」2009-02-09、「人面管から人面壁へ」2009-02-10。

以上の記事に、視線へのこだわりがよく表れています。そのなかで、いちばん、特徴的な部分を、「冬のすずめ」2009-01-24の後半から、自己輸血＝自己引用させてください。

「コラブログとモノブログ」2009-01-31にも、書きましたように、当ブログは友達のいないブログで、間借りさせてくれているブログサイトであるスポンサーが貼ったリンク以外は、自分の書いた記事としかリンクされていないのです。そのうえ、やたら自己輸血をするのです。こういうブログを、モノブログと勝手に呼んでいます。では、以下に自己引用します。

*

★BBCというイギリスのテレビ局が制作した生き物の番組は、よくできていて、感動します。BSで、放映されていますね。ただ、解説があまりにも出来すぎている感じがしませんか？ ちょっと、ヒトの思い入れが強すぎるように思えます。勉強になることは多いのですが、そこだけが気になります。あの番組も、ミュートで見ると印象が、がらりと変わります。言葉による解説から得られる情報とは、違った発見があるのではないかと、思います。

生き物の番組に限らず、どんな番組でもかまいません。音を消して、ご覧になると、思いがけない発見がありますよ。バラエティー番組などをミュートで見ていると、登場する人たちのあいだの目配せや、ちょっとした表情なんか、クローズアップされて見えます。スタジオ内の人の位置、雰囲気、隠された「空気」(※KYの「空気」です)をはじめ、音を聞いては、おそらく、音に気をとられて、見えない物や出来事が、きっと見えます、または「読めます」。目と耳の関係って、意外と奥が深いような感じがしま

す。

バラエティー番組は、特にうるさいですね。画面の下に字幕もよく出ます。自分は、カレンダーの裏の白い面を折ってつくった、紙切れをもっています。それで字幕を隠し、音を消して番組を見ることがあります。もちろん、親がテレビを見ていないときですけど。

いつもとは、視点や、やり方を変えてみる。それで、世界が変わって見えたり、感じられる。おもしろいですよ。虫眼鏡をつかって、写真、新聞、雑誌、パソコンのモニターなどを拡大してみるのも、けっこう、いい気晴らしになります（「目は差別する」2009-01-11 に書きました）。だまされたと思って、ちょっと、試してみませんか？

★から始まって以上までが、引用です。

*

そのなかで触れたテレビの楽しみ方は、今でも続けています。面白いですよ。でも、テレビ番組だけでなく、自分にとって、毎日の生活そのものが、そんな感じなのです。補聴器は両耳装用していますが、hear できても listen できない。つまり、人の声が「単なる音」としては聞こえても、「意味の分かる音声」としては認識されない場合が多いのです。ですから、人が話しているさいには、その人の

* 「顔色をうかがう」

ような形になります。表情からその人の気持ちをくみ取ろうとするのです。聴力が著しく低い、ろう者のなかには、話している人の口の形と唇の動きに注視して、話し言葉を読みとろうとする方もいるそうですが、現実には至難の業だと聞きました。で、相手の表情を読もうとすることですが、とにかく、疲れます。ストレスになります。

自分の場合には、肩がばんばんに腫れて凝ります。でも、そうするしか仕方がありません。何度も聞き返される目に遭う相手の方も、ストレスを覚えるにちがいません。そう思うと、つい気を遣い遠慮してしまいます。いわゆる空返事をしたり、うやむやに

会話を済ませることも多いです。

*

話をもどします。このところ、「信号学 or 信号論」というツール=道具=玩具を手にし、いろいろ遊びはじめてみて、ふと、これは、

*何かが少なくなったり無くなれば、補充する。補充するものがなければ、何か別のものので代用する。

および、個人的な、

*隙間をつく。

ではないかと思いついたわけです。

で、その結果として、さきほど触れましたような、

*図々しい

ことを書いたという次第です。

とはいえ、あくまでも、ゲイ・サイエンス=楽問=「楽しくやろう、お勉強ごっこ」ですので、お許し願います。

「信号」というものと同時に、その「信号」で重要な役割をもつ「めくばせ」「合図」といった、「視線」にまつわる比喩的な言葉の仕組みについて、しばらく考えてみたいです。

あすは、できれば、「信号学的視線論（2）」を書いてみようと思います。

09.05.09 信号学的視線論（2）

◆信号学的視線論（2）

2009-05-09 09:36:33 | 言葉

小説家を目指し、デビューの数歩前らしいところまで行ったことについては、以前に書きました。生まれつき、意気地も意地もないため、あまり「悔しい」と思った記憶はないのですが、この時ばかりは悔しかったです。それを思い出しての「泣き言」は、「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16 に書いてあります。

さて、小説家を志した以上、とうぜん習作も書き、文芸誌の新人賞への応募にそなえて、作品をだいぶ書いたわけですが、当時はウィンドウズではなく、マックを使っていました。プリントアウトした習作や応募作のコピーは、みじめったらしく、今も押入れに突っ込んであります。

マックは数回買い替えました。最後までついていたパワーブックが、やはり押入れに突っ込んであります。捨てられない事情があるのです。ノートパソコンなので、蝶番（ちょうつがい）みたいな部分があります。そこが故障して、うまく開け閉めできないのです。PCを廃棄、または売却するさいには、内蔵のハードディスクのデータをたいてい消去しますね。蝶番の故障のために、それができないので、そのままにしてあるのです。仮に開いてスイッチをONにしたとして、正常に作動するかどうか分かりません。

たぶん、そのハードディスク内に保存されていると予想される自作について、きょうは、まずお話したいと思っています。このところ、自分が遊び道具にしている「信号学 or 信号論」と関係がありそうなのです。もっと正確に言うと、「視線」をテーマに書いたのが、今からお話したい小説なのです。さきほど述べた理由があるため、何とか思い

出して、シノブシス（※あらすじ）だけを再現してみます。

★『バット・スキン・ディープ』

舞台は、東京の豊島区雑司が谷。主人公の女性Aは、ワンルーム形式のアパートに住み、翻訳家として生計を立てている。翻訳家といっても、まだ駆け出しで下訳が多く、収入は少ない。家賃の半分は実家からの仕送りに頼っている。翻訳を仕事に選んだのは、文章を書くのが好きであることと、英語が少しは得意だから、そして、基本的に1日中1人でできる作業だからだ。

顔面から右乳房にかけて、火傷の跡がある。これが、Aを孤独な人間にさせている。出版社の人たちとの打ち合わせ、図書館での調べもの、師匠に当たる著名な翻訳家との連絡、買い物。外に出るのは、それくらいしかない。あとは、アパートの部屋で自炊し、翻訳をし、趣味として本を読んでいる。傷跡は首から下がもっとも目立つが、顔の皮膚に負った傷も濃い化粧をしないと、隠せない。髪を頬にかかるくらいまで伸ばし、大ぶりの眼鏡をかけ、うつむいて歩く癖が身についている。他人の視線がこわい。他人に自分を見られるのが嫌でたまらない。

Aの部屋に、Bという女性が転がり込んでくる。AとBは、愛知県出身で、小学生時代から高校生時代まで同じ学校に通っていた。高校卒業後、Aは上京して大学に進み、Bは地元の企業に就職した。Bはカードローンで多額の負債を抱え込み、いわば夜逃げの形でAを頼ってきたのである。母一人子一人の家庭で育ったBの母親は、2年前に病死している。母が残した保険金を使っているうちに、過剰なまでの浪費癖がついたのだという。

AとBとの共同生活はうまくいかない。性格がぜんぜん合わない。一銭も持たないBに、Aは生活費だけを渡すが、Bはすぐに使ってしまう、頻繁に催促をする。Bは、借金の取立て業者から追われているために、派手な動きはできないが、やがて水商売の世界に入る。学校時代はおとなしかったBが、奔放で、軽はずみな性格の人間になることに、Aは驚く。酒癖も悪い。

Aの生活のリズムは狂う。Bに合わせて、夜間に翻訳の仕事をし、昼間に眠るようになる。Bに振り回される日常が、Aにとってストレスとなる。Bがそばにいて、過去の記憶が次々とよみがえる。不眠が続き、共同生活をしているあいだに、Aは精神的

に次第に病んでいく。

思い出したくなかった、中学2年生の時に起きた、実家での火事の体験。火事の後に学校を休みがちになり、引きこもり状態でいた頃の記憶。心配した父親が、Aに犬を与えたこと。

その犬は性格の穏やかな成犬で、深夜に散歩に連れていくことが、Aにとって唯一の楽しみと癒やしになっていた。ある夜、公園で、自分の顔をぺろぺろ舐めはじめた犬の相手をしていたとき、Aはポロポロと涙がこぼれてきたことがあった。犬には傷跡が分からない。犬の目には、美しさや醜さが分からない。ただ、新しい飼い主だというだけで、自分の傷を舐めてくれている。Aは、自分が同情されているように感じる。

Aは、国道に向かった。輸送トラックの往来が激しい道路だった。歩道橋の上まで来たAは、犬を抱きかかえた。喜んだ犬は再びAの顔を舐める。Aは犬を道路に落とした。犬のけたたましい鳴き声が出た。トラックが急ブレーキをかける音も聞こえた。Aは必死に駆けながら家に帰った。

久しぶりに見る夢だった。仕事中に寝入っていたのだ。Bが部屋に戻ってくる。Bは、美人とは言えないまでも、化粧栄えのする顔立ちで、特に肌のきめが細かい。その日、ふざけてBの頬に指で触った。和菓子のように柔らかく心地よい。なぜか、かつて飼っていた犬の腹の柔らかさが思い出された。さきほどまで見ていた夢が、あたまから離れない。

仕事で疲れたBが寝入っている。AはBの布団に近づく。カーテンを閉めたほの暗い部屋の光の中で、化粧を落とした肌の美しさに見とれる。再び、柔らかい頬に触れてみたい衝動を覚える。

数時間後、Aは風呂場で、Bの死体を解体している。暑い。気だるく、自分の体が重い。動作が鈍くなる。肉と血の臭いが、吐き気をさそう。AはBの肌の美しさに見とれる。風呂場には、ペンチや金槌をはじめ、ありたけの刃物が置かれている。そのなかから果物ナイフを選び、AはBの頬の皮を剥いていく。

*

以上が、あらすじです。この小説を書いていた頃には、川端康成と村上龍の文章に心酔していました。川端が得意とした夢と現（うつつ）の狭間の心理描写と、物を対象としたさいに冴えを見せる、村上の描写力に憧れたものです。

で、上記のあらすじの本体の小説は 400 字詰め原稿用紙で 100 枚以内におさめた作品でした。あらすじは平坦ですが、作品では、Aと犬との触れ合いと、風呂場でのBの遺体に見とれ、ナイフで皮を剥ぐシーンに枚数を費やしたはずです。

ちなみに今でも、川端と村上龍の作品が好きです。枕頭の書は何かと聞かれれば、川端の『禽獣』『眠れる美女』、村上の『コインロッカー・ベイビーズ』『イビサ』のなかから選んで答えると思います。

『バット・スキン・ディープ』というタイトルは、「名のないモンスター、あるいは外部の思考」2009-01-07 と「見えないものを見る」2009-01-08 でも、引用した、

* Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)

という英語のことわざから取りました。自作の小説では、エピグラフとして訳文と共に冒頭に引用し、読者に分かるようにしておきました。

ブログを書いていなければ、大げさな言い方ですが、「日の目を見る」ことがなかった小説のシノプシスです。小説自体が「日の目を見る」ことはないでしょう。作家志望者の習作は、そんな運命をたどるのがふつうです。

*

何だか、気が抜けたような気持ちになりましたが、きょう書こうとしているのは、

* 「視線」と、「美醜」or「虚実」

についてです。

何だか、「私家版『存在と無』一序文一」2009-01-01の続編を書こうとしているような気分にもなってきました。実は、「存在と無」を「実と虚」と置き換えて、続編を書こうと考えたこともあったのです。そのとき、あたまにあったのは、「存在と無」は、あまりにも「バタ臭すぎる」という思いです。ピンと来なくなったのです。「実と虚」なら、書けそうな気がする。「存在と無」はイメージできない。そんなふうに考えて、いったんは書こうとしたのですが、その時の体調が悪くなってやめました。

いつものことですが、トリトメがなく、しかも、訳が分からなくなってきたので、的を絞ります。「見る」とは、どういう「いとなみ＝行為＝行動」なのでしょう？あるいは、どういう「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」なのでしょう？個人的には、「いとなみ＝行為＝行動」とは抽象的レベルにあり、「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」は具体的な動きをイメージしています。順序が、逆になりますが、「信号」に関して、という限定つきで定義するなら、

* 1) 「みる・見る」という「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」は、「視線を投げる・視線を送る・合図をする・めくばせをする・色目をつかう」ことであり、相手(＝対象)に働きかけることを目的とした動作である。

と考えています。もちろん、個人的な感想です。一方、

* 2) 「みる・見る」という「いとなみ＝行為＝行動」は、世界＝宇宙＝森羅万象を、「色分けする・区別する・分かる・分ける・知覚する」ことであり、対象への働きかけを放棄＝保留することである。

と考えています。これもまた、あくまでも、私見＝愚見ですが。

上で述べた2つの定義＝フレーズの大きな違いは、

* 「見る者」と「見る対象＝見られる対象」とのかかわりの違い

にあります。上記の2つを、さらに別の言葉で言い換えてみましょう。

* 1) ヒトは、何かを「みる・見る」とき、何かを期待する。わくわく、どきどきする。

* 2) ヒトは、何かを「みる・見る」とき、何かを悟る＝発見する＝知る。驚き、啞然とする。

たった今書いた2つのフレーズを、きょうのテーマである、

* 「視線」と「美醜」or「虚実」

にからめて、さらに書き換えてみます。

* 1) すげー美人だ！ or かっこいい！ or 美形だわー！ or なんてぶさいくな！

* 2) そうだったのか！ =なるほど！ =へえーっ！ =あれっ！？ =ほおー！ =わかった！ =Eureka（エウレカ）！

となりますが、少々くだけ過ぎてしまったので、もう少し、かみ砕いて説明を加えます。

1) の場合には、「美醜」が意識にあります。「美醜」は広い意味にとりましょう。「プラス＝快」か、「マイナス＝不快」くらい広くとってもいいと思います。何しろ、「ナンパする」「ナンパされる」という「魂胆＝期待」というメッセージを帯びて＝担って、「視線」という「信号」を相手に送るのです。これから、「快＝気持ちいいこと」があるだろうという前提に立っている、とも言えます。

一方、2) の場合には、「虚実」が意識にあります。バタ臭く言えば、「存在と無」に匹敵する、「理屈＝論理＝分別」の世界を「覗き見る」行動です。ここでは「ナンパする」「ナンパされる」や「魂胆＝期待」といった心理的な余裕はありません。俗な言い方をすれば、「不意打ちをくらう」という「事件＝出来事」と遭遇することなのです。

では、そろそろ、きょうのまとめに入ります。大雑把に言って、「みる・見る」とは、「視線」の働きという点から見た場合には、上述の1) と2) の2つの状況が想定できるのではないかと考えています。その2つを前提にしたうえで、自作の小説のシノプシスを取り上げた理由を説明します。

自作のシノプシスの解説なのに、まるで他人事のような口調になりますが、あの小説は上述の1) と2) という2種類の「視線」の在り方の「交錯」を主題にしているのではないかと、思われます。こう書いていて、つくづく思いますが、小説に「作者」なんていません。詳細は、「作者はいない」2009-03-04、「毎度ありがとうございます」2009-03-06、「ゆうれいをはらう」2009-03-07 に書きました。

さて、話をもどします。主人公のAという女性は、1) と2) を混同してしまった。その結果として、悲劇が起こった。このような「解釈」もできるのではないのでしょうか。本来は、「美醜」、つまり、「プラス＝快」vs. 「マイナス＝不快」に向けられるべき「視線」が、「虚実」、つまり、「理屈＝論理＝分別」に向けられてしまった。そんな倒錯した事態に陥ってしまったために、主人公Aは犬と人を殺（あや）めてしまったのではないかと考えられます。

シノプシスのなかで、Aが深夜の公園で、火傷の跡のある自分の顔を愛犬に舐められるシーンがありますね。そのさいに、

* 「Aは、自分が同情されているように感じる。」

という個所がありますが、これが伏線であり、後の2つの悲劇、つまり、犬の殺害と、友人Bの殺害につながります。

つまり、

*美醜は皮膜に在るのみ

であるように

*虚実も皮膜に在るのみ

と言えます。これは、

*「美醜」も「虚実」も、実体はなく、「みる・見る」者のまぼろし＝幻想として立ち現れる。

ということです。ただし、

*「美醜」は、わくわく・ドキドキしながら、「めでる・愛でる＝ながめる・眺める」ものである。一方、「虚実」は、「不意にめぐり合う＝遭遇する＝悟る＝知覚する」「事件＝出来事」である。

ために、「美醜」という感動の対象に、「虚実」という「不意の出来事」を「見てしまった＝出合ってしまった」場合には、取り違えた代償として、「錯乱＝狂気」または「罰＝悲劇」とも言い換えることが可能な「こころの痛み＝こころが壊れる」が生じる。そんな事態が起きてしまったように、思えるのです。

もっとも、犬にとっての「美醜」とは「プラス＝快」vs.「マイナス＝不快」の感覚であり、飼い主＝ボスと犬自身との快い関係と言うべきでしょう。そこに、「虚実」、つまり極めて人間的かつ「知的」な行為である「同情」という「信号」を「事件＝出来事」として見てしまった。いわば遭遇してしまった。

友人を殺めたさいには、美醜というまぼろしに、虚実というまぼろしを重ねてしまった。これも「信号」にそなわっているまぼろしの仕組みに、感わされ裏切られてしまったのです。ある印（しるし）を「読み間違える」ことによる悲劇。「読み間違える」とは

きわめて視覚的な行為、つまり「視線」のなせる業（わざ）です。

実は「まぼろし」でしかない「美」の存在を「否定＝打ち消す」ために、腐り朽ちていくだけの「皮膚＝仮面」をナイフで剥ぐ。空しく愚かな行為とも言えます。同時に、象徴的な行為でもあります。今、こうやって、自作を分析してみると、大学の卒論で書いたロラン・バルト論でのテーマを、あの小説を書いた頃にも引きずっていたことを感じ、啞然とします。

ちなみに、卒論で取り上げたのは、『S/Z』というバルトの批評。その批評が扱っていたのが、男女を「取り違える＝読み間違える」彫刻家が登場する、バルザックの中編小説『サラジヌ』なのです。意識していたわけではないのですが、結果的に、バルザックの小説と、バルトの評論と、それを論じた自分の卒論と、後年に書いた自作の小説と、このブログ記事とが、めくばせし合っている。テキスト間のめくばせ、とでも言いましょうか。おこがましいですが、そんなふうにも感じられます。

*

込み入っていて、ややこしいですね。考えていることを、正確に書こうとすると、こんなふうになってしまうのです。自分を裏切ると言うか、考えていることを偽ると言うか、不正確になることを覚悟して、思いきって、単純化してみます。

* マジで＝真剣に見てはならない「もの＝信号」を、マジで＝真剣に見ると、取りかえしのつかない間違いを起してしまう。なぜなら、目に見える「もの＝信号」は、すべて「まぼろし＝幻想」だからである。

では、どうでしょうか？ シノプシスに当てはめて、具体的に言うなら、

* 「Aは、自分が同情されているように感じる。」

で、Aは「同情されたように感じる」という「とてつもなく大きな勘違い」をしてしまったのです。「信号」を「読み間違えた」とも言えます。それが2つの悲劇の引き金となったのです。1つは犬の殺害。2つ目は友人の殺害。簡単に言えば、そういうことです。

ちょっと不満が残るのですが、分かっただければ嬉しいです。

きょうは、犬と人を殺める猟奇的な話を持ち出したため、不快な気持ちをいだかれた方がいらっしまったかと思います。ごめんなさい。また、その話のなかでは、火傷という、誰もが経験し得る事故が題材になっています。お気を悪くなさった方に、お詫び申し上げます。

さて、性懲りもなく、あすも、「視線」をテーマにして「信号学的視線論 (3)」を書きたいです。ただし、話はほのぼのとしたものになる予定ですので、また、このサイトに遊びに来てくださいね。

09.05.10 信号論 (1)

◆信号論 (1)

2009-05-10 08:39:30 | 言葉

もらって嬉しいもの、という言い方があります。みなさんは、どんなものをもらうと嬉しいですか？ やっぱりお金ですか？ 一定の額内なら、何にでも交換できそうですもんね。お金では買えないものがある、という意見もあるにちがいません。とにかく、病気以外なら、何かを「もらう」って嬉しいです。包装されていたりすると、わくわくどきどきします。それは、「隠されている」＝「見えない」＝「視線がおよばない」からです。

このところ、いろいろな現象に結びつけて＝こじつけて、遊び道具にしている「信号学 or 信号論」では、「視線」がキーワードになります。

* 視線を送る＝贈る

という時の「おくる」ですが、辞書によると、自主的に「遅れて＝後れて」「ついていく」が、後になって「こころを込めて」他人に物をおくりとどける、へと「転じた」と説明されています。こじつけっぽくて、楽しいですね。「おくる」の説明の全体を読むと、何となく納得できるのですが、苦しいギャグを聞いているような面白さがあります。

だから、辞書って好きです。こう思うのは、やはり、言葉のフェティシストだからでしょうか。ところで、辞書で「転じた」「当てた」「訛（なま）った」とか書いてあるのは、「取り違え」や「勘違い」、つまり「正しくない」ことが起きたという意味です。こういうのも、大好きです。

*言葉は、「正しくない」に満ちている。だってヒトは「正しくない」からだ。

という日頃から思っていることが、辞書が堂々と認めているわけですから、嬉しいのです。

*「みなさん、別に正しくなくても、いいのですよ」

という感じですね。元気が出ませんか？ 至言として、肝に銘じましょう。

話を「もらう」にもどします。「もらう」と、たいてい「かえす」ということをしませんか？ もらったら、お返しをする。これって、ヒトにとって基本的ないとなみだと思います。文化人類学や経済学では、「交換」という漢語をつかっていろいろ理屈をつけています。どうやら、学問的にも大切なヒトの行動みたいです。個人的にも「交換」はとても興味深いことなので、「交信欲＝口唇欲」2009-01-26 や「ケータイ依存症と唇」2009-01-27 という記事でも触れました。お時間がありましたら、ざっと目を通してやってください。お忙しい方のために、両記事から主要な部分だけを、以下にコピペします。

*

★突然ですが、「交信欲 = 口唇欲」(＝こうしんよく) について、書きたいと思います。哲学したいと思います。先週の記事で、紹介した言葉です。いえ、別に、難しいことで

はありません。簡単に言えば、

「他の人と、つながりたーい」「他の人と、言葉をかわしたーい」「他の人と、文字をかわしたーい」「他の人と、映像をかわしたーい」「他の人と、心や思いをかわしたーい」・・・

という、ヒトのごく自然な欲求です。つまり、「おしっこがしたーい」「うんちがしたーい」「ご飯がたべたーい」「あの人をぶんなぐってみたーい」「眠りたーい」と同じくらい「自然な」欲求です。ふざけてなんか、いませーん。念のため。現に、以上の、どれが欠けても、ヒトは生きていくことができないからです。

分解して説明すると、

1) 「他のヒトと、〇〇をかわし (= つながり)」 = 交信 = 口唇 = つながる = かわす = ~しあう = 相互 = まじわる = くちびる

2) 「たーい」 = 欲 = 欲求 = 欲望 = 願い = 煩悩 = 本能 = 祈り = ~やりてー = ~したいわ = したい

ということになります。

*

★ 「他の人と、〇〇をかわしたーい」

の〇〇には、何が入るのでしょうか？ 上で、挙げたのは「言葉」「文字」「映像」「心」でしたが、よく見ると、メールで交わすことができるものばかりですね。スパムメールみたいに「躲す = かわす (攻撃から身をかわすの、かわす、です)」ことが、やっかいなものもありますが。

〇〇に入るものとして、その他、思いつくのは、

「愛」「抱擁」「声」「お金」「挨拶」「覚書」「契約(書)」「キス」「唇」「目配せ」「目線」「信号」「視線」「杯・盃(さかずき)」「ポイント」「約束」「密約」「贈り物」「マイルージ」「意見」「笑み」「議論」「冗談」「握手」……

って、ところですけど、まだまだありそうです。

*

★オギャー！！

ウギャー！！

突然、失礼しました。驚かせるつもりは——あったんですよ。ちょっと、ですけど。難しく考える必要はない、と気づきました。素人(「しろうと」)は素人なりに、「知ろうと」努力する。これが大切だ。そう、言いたかったんです。どういうことかと申しますと、「オギャー！！」「ウギャー！！」という、赤ちゃんの泣き声や、ゴマフアザラシのゴマちゃんの「キューツ」(ハウ・キュート！ = 何と可愛いのであろうか！)という鳴き声は、

「(お乳なんかを)もらいたーい」とか、「(おしっこやうんちなんかを)出したーい」

という、欲求の叫びである。と、気づいたのです。

「もらう」「出す」

これって、「交換」じゃないですか！？ そうだったのかあ。もらったあとは、返さなくてはならない。これって、人間にとって最低限の礼儀であり、たしなみ、ではないか？ そうか、納得。で、赤ちゃんは、何を返してくれるのか？

おしっこや、うんちだけじゃ、ありません。その笑みで、愛と、元気と、生きる勇気を、返してくれるんです。だから、親は頑張るんです。一生懸命、生きるんです。

柄にもないことを、言ってしまいました。でも、そのおかげで、ややこしそうな「交換」に「好感」をもつことができました。

*

最初の★で始まる部分は「交信欲＝口唇欲」2009-01-26 から、残りの2つの★で始まる文章は「ケータイ依存症と唇」2009-01-27 から、自己輸血＝自己引用しました。何だか、最近、横着をしてコピペをしまくる癖が出てきました。反省。

でも、こちらも楽ですし、この記事をお読みになっている方も検索する手間が省けると思いますので、お許してください。今、読み返してみると、ずいぶんおふざけをしておりますが、それなりに本気でやっているのです。軽はずみな気持ちで、こんな長いブログをほぼ毎日書いてはいませんので、ご理解いただければ幸いです。

1 番目の引用文は、ケータイをテーマとしたものです。「交信欲＝口唇欲」という言葉をこしらえて、

1) 「他の人と、つながりたい」という欲求が、ヒトにとって自然なとなみである。

と言っていることに注目してください。2 番目の引用文のなかでは、

2) 他人と「かわしたい」ものには、「視線」がある。

という意味のことが書いてありますが、それがポイントです。3 番目の引用文では、

3) 赤ん坊は、お乳や離乳食を「もらう」代わりに、泣き声、うんち、おしっこだけでなく、「笑み」を「かえす」ことで、親に相当する人に礼を尽くしている。

と書いていることが、いちばん重要な部分です。

自分は子どもをもった経験がありませんが、わが子が笑みを返してくれたら、どんなに幸せな気持ちになるだろうかと、よく想像します。さぞかし育児も大変でしょうが、愛児の笑顔を見れば、元気が出るでしょうね。でも、こればかりは、1人の力だけで実現する喜びではありませんから、致し方ありません。

*

さて、きょう考えてみたいのは、

* 「もらう」 + 「かえす」 = 「かわす」

という行動=いとなみ=行為がどんな「仕組み=仕掛け=メカニズム」であるか、です。特に「視線」を対象とした場合を想定していますが、もっと広くとらえて、「視線」を含む

* 「信号」を「かわす」

をテーマにしたほうが、面白そうだなあ、と考えています。

そこまで話を広げると、しんどいかなあ、という予感もしますが、きょう予定していた「信号学的視線論(3)」を変更して、やはり広義の「信号」に挑戦することにしました。で、きょうはタイトルを「信号論(1)」という、どうにでも展開できそうな漠然とした=大風呂敷を広げたものにしちゃいました。

さて、きのうから、「挨拶」についてずっと考えています。鮮度の悪い、古い話ばかりで恐縮ですが、デズモンド・モリスという人が、昔、おもしろい本を立て続けに出していました。『裸のサル』、『マンウォッチング』、『ボディウォッチング』などが初期の著作です。写真が多く挿入されていて、具体的に、ヒトという動物の行動（※仕草、表情、身ぶりなど）について、いろいろ興味深い視線を当てているのです。

*あるちょっと変わった人がヒトという動物に対し、ちょっと変わった人の見方から、視線を当てている

という感じの本ばかりです。読むと人生観が変わりますよ。人に対する見方が揺らぎますよ。そんな本たちです。で、そのうちのどれか忘れましたが、さまざまな民族における「挨拶」の違いが写真付きで説明されていました。ほかの本に書いてあったことも混じるかもしれませんが、世界には次のような「挨拶」があるそうです。

*おじぎ、キス（同性間でもありますね）、握手、ハグ（抱擁）、鼻の先・額・頬などを合わせる、目礼、手を挙げて合図し合う、敬礼、手話による挨拶、言葉をつかった挨拶など

たいていは、お互いに同じ動作をしたり、同じような言葉を交わしますが、上下関係、階級差、仲間かよそ者かの違いによって、異なる場合もあります。「やあ」vs.「やあ」もあれば、「やあ」vs.「ご機嫌よろしゅうございます」もあるという感じですね。いずれにせよ、「挨拶」においては

*何かを交し合う

という点は、共通しているようです。

その「何か」って何でしょう？ この記事の冒頭で挙げた「もらって嬉しいもの」ばかりとは限らない感じがします。あまり好感をもっていない人と、交換したくないものもありますよね。ロシアとか、アラブ圏では、同性間でもキスをしますが、したくない相手とキスをし合う場合もあるのではないのでしょうか。あと、抱き合うのも、そうですね。

でも、そのところを、うんと辛抱して、交換し合うことで、平和なり、安定なり、友好関係が維持できるのなら、

*我慢することが得策である。

という感じもします。そうなのです。きょう、強調したいのは、

*「信号」を交わすことには、「不快」をもって、「快」を維持する 경우가少なからずある。

という側面なのです。

ここで、またコピペをさせてください。現在ぶっ続けて「信号学 or 信号論」遊びをやっているのですが、たまには原点にもどらないと、話がそれるし、自分でも何をやっているのかが分からなくなってくるのです。ですから、「信号」についての定義を確認させてください。

まず、簡易バージョンです。

*「信号」とは、ナンパを目的とした「めくばせ」である。ナンパされる対象は、いつかナンパされることを意識しながら待機している。ナンパする側も、される側も、双方がどきどきして機会=合図を待っている。

次に、ちょっとややこしめバージョンです。

*「信号」は、2種類に分けることができる。

*1) 日常生活において、ヒト or 生物は「信号」の存在を常に意識していて、「信号」が合図を送ってくるのを予期している。「信号」から合図を受け取ったとき、ヒト or 生物は、何らかの予定されている行動をとる。なお、「信号」には、ノイズが伴う場合があり、

その程度次第では、予定されていた行動への障害が生じ得る。

* 2) 機械同士 or 機械のパーツ同士や、生物の器官 or 細胞同士などでの「信号」のやりとりにおいては、「信号」はあらかじめ決められた経路を通る。この場合の「信号」のやりとりによって、複数の機械 or パーツ、および、複数の器官 or 細胞は、あらかじめ設定された動作=操作を行う。なお、「信号」には、ノイズが伴う場合があり、その程度次第では、設定された動作=操作への障害が生じる可能性がある。

* (上記の2種類の)「信号」が合図を送るさいには、熱を伴う。「信号」を受け取った側においても、熱が生じる。これを詳述すると、次のようになる。「信号」が発信された時点、および、経路を通じて運ばれる過程、そして、「信号」が受信された時点、および、「信号」を受け取った側で行動 or 動作=操作が実行される時には、熱が生じる。この熱は、「信号」の役目を遂行するために不可欠である一方で、ノイズを生じさせ、「信号」の役目の遂行の障害となる可能性もある。

*

両バージョンとも、「あう (7)」2009-05-03 で定義したものです。この両バージョンを踏まえて、さきほど述べた、

* 視線を送る=贈る

と、

* 我慢することが得策である。

と、

* 「信号」を交わすことには、「不快」をもって、「快」を維持する場合は少なからずある。

を考えて合わせてみると、「視線」が重要な役割を果たす簡易バージョン（＝ナンパ・バージョン）の定義では、「どきどき」が「いやいや」になる場合もあるということになります。ナンパで、「いやいや」ってありますよね。繁華街なんかを歩いていて、いかにもって感じのやつが、欲望丸出しの目つきをして、今にも「ネエー、カノジョー」なんて言いそうな雰囲気を感じ取る時です。

次元というかレベルを変えると、国家間の交渉の場では、敵対関係にある相手国の代表が口にしようとするのはもう予測がついている場合がほとんどです。

話し合いの決裂や、進展なしが、最初から目に見えている。「やだなー」と思いつつも、外務省に勤めて給料をもらっている以上は仕方ないから、形だけの握手をして対話のテーブルに着く。そして、ああでもないこうでもないという「ネガティブな」「信号」のやり取りをする。

もちろん、結果は、交渉決裂か、進展なし。「ナンパ」（＝お近づきになる＝歩み寄る＝譲歩する＝一歩前進）する、しない、もあつたものじゃない。緊張感も、わくわくどきどき感も、ぜんぜんなし、ですね。

ちょっとややこしいバージョンのほうの定義では、「視線」を含む広義の「信号」の役割が、視野に入っています。そのため、このバージョンでは、必然的に、

* 「信号」の信頼性＝確実性＝有効性

が問題になります。

もう一方の簡易バージョン（＝ナンパ・バージョン）では、「どきどき」が「いやいや」になるという事態は、

* 「信号」が、きわめて不確実＝テキトー＝「ノイズに満ちている」＝「エラーを起しそうな」メッセージを、帯びて＝担って、やり取りされる。

とも「翻訳=言い換え」できます。この場合には、とうぜんのことながら、

*誤作動、思いがけない事態、機能不全

にいたる可能性がかなり高くなります。具体的には、ナンパがらみの喧嘩、第三者の介入、ゴタゴタ、バタバタ、もたもた、最悪の場合には、拉致監禁、警察沙汰という事態を招きます。ナンパも、1つ間違うと怖いですよー。

ややこしいバージョンに話をもどしますと、

*「信号」の発信者と受信者とのかかわりあいにおいて、その立場が交互に入れ替わる。

ことに注目する必要があります。やりとりですから、立場が入れ替わるのは当然です。交互に入れ替わる発信と受信のさいに発生する熱の大部分が、

*無駄=無用な熱

となり、それが上記のナンパの場合と同様に、

*誤作動、エラー、思いがけない事態、機能不全

を誘発する可能性を高めます。また、

*「信号」の発信時と受信時とのタイムラグも、きわめて不安定かつ頻繁に起きる。

ため、それが不測の事態をさらに招きやすい環境を生む要因ともなります。

機械同士 or 機械のパーツ同士の場合には、「信号」の信頼性を高めるために、

* 「信号」の運ばれる「経路」の信頼性

がカギとなります。つまり、熱とノイズの発生率を低くするメカニズムを開発することが不可欠になります。一方、生物の器官 or 細胞同士などでの「信号」のやりとりにおいては、

* 「経路」の信頼性は、ヒトが手を加えるか、あるいは、自然の摂理に任せるかの、いずれかの手段=状況に、依存する=左右される。

こととなります。

*

以上の話を、経済と相場の分野でも考えてみましょう。

* 「もらう」+「かえす」=「かわす」

という運動=動作において、忘れてはならないのは、「信号論から見た経済 (2)」2009-05-07 で指摘した (※またもや、コピペをします)、

* 経済とは、発言=メッセージという、めくばせ=合図のかわされる場である。その場においては熱が発生し、その熱を触媒にさまざまな行動が誘発される。つまり、合図が行動を促すのである。ただし、発生する熱がポジティブに働くという保証はまったくなく、不確実性に満ちていて、どのような行動を誘発するかの予測は不可能である。熱によってノイズが生じたり、リスクや誤作動を誘発する可能性もきわめて高い。また、めくばせ=合図は、ニュートラル=匿名的であり、そのメッセージがポジティブに働くか、ネガティブに働くかについても、予測は不可能であり、偶発的出来事 (= incident or event) or 事件 (= accident) に左右される場合が多い。

*ニュートラル＝匿名的な特性をもつ信号が、何らかのメッセージを帯びて＝担って、飛び交う広義の相場においては、信号の不確実な特性ゆえに、投資（＝ investment or speculation）は、限りなく投機＝賭け（＝ speculation or venture = gamble）に近づく。

のうちの、上記の２番目の*で始まる文章にある、

*「信号」のニュートラル＝匿名的な特性

とでも呼ぶべき事態ですが、これは、「信号学 or 信号論」を考えるうえで、きわめて重要な「信号」の特性だという気がします。

単純化するなら、

*「信号」は単なる光の明滅であり、「発信者＝発信側」と「受信者＝受信側」の「思わく＝心理＝メッセージの解釈＝メッセージの解説」とは無縁である。

とまで言い切れそうな気がします。

以上は、非常に悲観的＝ネガティブな表現にも取れますが、これは自分の悪い癖です、

*「信号」のニュートラル＝匿名的な特性は、ヒトによるあらゆる意味づけ、たとえば真偽・善悪・正誤といった価値判断とは異なる次元にある。

と、文字通りニュートラル＝「可もなく不可もなく」にとらえるべきだと思います。

さて、ややこしい話はここまでにし、きょうのまとめをします。

*

とりあえず、実生活に即した結論として言えそうなことは、

*「もらう」＋「かえす」＝「かわす」という行為は、社交上の儀礼でしかない。見返りや成果を期待した場合には、「当たり」もあれば「外れ」もあり、「成功」もあれば「失敗」もある。

です。

当たり前と言えば当たり前、至言と言えば至言、可もなく不可もない、ニュートラル、色気なし、愛想なし、といった感じになりました。

でも、言えてませんか？ そういえば、きのうの「単純化したバージョン」の結論である、

*マジで＝真剣に見てはならない「もの＝信号」を、マジで＝真剣に見ると、取りかえしのつかない間違いを起してしまう。なぜなら、目に見える「もの＝信号」は、すべて「まぼろし＝幻想」だからである。

にも似ていますね。「こんだけー？」と言われれば、「こんだけー」です。個人的には、「こんだけー」は失望の言葉ではぜんぜんなく、「もっとあるでー」だという気がします。だって、

*ニュートラル＝「ああでもないこうでもない&ああでもありこうでもある」には、「NG」や「ばーか or あほちゃうか」が生じる可能性がある一方で、「瓢箪（ひょうたん）から駒が出る」や「とんびが鷹を生む」可能性もある。

んですよ。

というわけで、引き続き、肩に力を入れず、気ままに「信号学 or 信号論」で遊んでみたいと思います。また、遊びに来てください。お待ちしております。

09.05.11 もくじをつくりました

◆もくじをつくりました

2009-05-11 08:14:09 | 言葉

【以下の記事に出てくる「うつせみのうつお」というサイトは、残念ながら現在は存在しません。ただ、今、間借りをさせていただいている「小説家になろう」のサイトが、「うつせみのうつお」=倉庫の役目を果たしていると思います。】

当ブログの「倉庫」である「うつせみのうつお」の「詳細もくじ」をつくりました。「1ページめ」の記事の数が多すぎて、全体がどうなっているのかが分からない。これまでの「もくじ」では、全貌がつかめない。という、内容のメールを、このブログのプロフィールに載せてあるメールアドレス宛てに、読者の方々からいただきました。

おっしゃるとおりだと思いましたので、さっそく「もくじ」を詳しいものにしました。このようなご指摘をいただくことは、ブログを開設している者としては、大変ありがたいです。他にも何かお気づきの点がございましたら、何なりとお気軽にご連絡ください。

さて、「うつせみのうつお」は、自分にとっては念願のウェブサイトでした。1つは、これまで書いた記事全体が古い順につながっているため、スクロールしながら巻物のように読めること。2つめは、神仏を信じていないくせに言霊だけは畏怖している自分にとって、これまで書いた記事を供養する「お墓」ができたこと。以上の2つの大きな理由があります。

ブログはたいいてい、1つの記事が分断された形で保存されますが、それが自分には少々不満だったのです。支離滅裂でトリトメのない記事を書いています、自分のなかではそれなりにつながっておりまして、巻物のように続けて読める形で保存できないかなあ、と以前から思っていました。で、それなら、ブログではなく、ホームページをつくれればいいのだと、遅まきながら気づきました。

ところが、PC自体の操作にしろ、ネット上のサイトの活用にしろ、とにかく、この手の分野が半端じゃなく苦手なのです。ネット上の情報をあれこれ覗いているうちに、これならできそうだというHP無料作成サイトをみつけました。1週間もかかって、仕組みをだいたい理解し、ようやく「うつせみのうつお」を開設しました。半月以上もまえのことだったと思います。とにかく、嬉しかったです。

ウェブサイトはできたものの、自分でも、そのデータの多さにびっくりしました。読者のみなさまからのメールのなかにも、そうした声が多いです。でも、自分の場合、今月の19日で、ブログを開設してまだ5か月目の新参者です。何年もお続けになっている方に比べれば、微々たるデータ量だと思います。もっとも、ブログにしては1記事の長さだけはかなりありますが、経験の長さには到底かないません。

いずれにせよ、「うつせみのうつお」の1ページめの長さをどうかしなければならない。せっかく、サイトに訪ねてくださった方に使いにくいのでは申し訳がないとは、思っておりまして。でも、ずるずるとここまでできてしまいました。

今回作成した「うつせみのうつお」内「うつせみのうつお（詳細もくじ）」は、これまで何度か書いてきた「こんなことを書きました」という、複数の記事のダイジェスト版を利用して、それをつなぎ合わせるという横着をしました。これがまた、長いのですが、

- 1) これまでの記事全体を見わたせる。
- 2) 各記事の短い解説とキーワードがついている。
- 3) 気になる記事の日付をコピーしておき、「1ページめ」や「2ページめ」に戻って、みなさんがお使いのPC画面のツールバーにある「編集(E)」のなかの「このページの

検索（F）」にペーストすれば、その記事にたどりつける。

と思います。お試しくださり、今後もまた、ご利用くだされば、そんな嬉しいことはありません。以上、よろしくお願い申し上げます。

本人は本気で書いているのですが、他人様の目から見れば、うんざりするほど長いうえに、好き嫌いのはっきり分かれそうな文体と内容の当ブログをお読みくださっている方々に、ここから感謝いたします。あすからは、また、「信号」関係の記事を書く予定です。

きょうは早い時間に病院の予約が入っているので、これで失礼します。では、行ってまいります。

09.05.12 信号論（2）

◆信号論（2）

2009-05-12 08:55:01 | 言葉

生き物の生態の映像をテレビでながめていて感じるのは、何だかみんなビクビクきょろきょろしていることです。生きるって、ビビるの連続なのではないか、などと考えてしまいます。小動物や魚などは、同じようなからだの大きさの生き物と熾烈（しれつ）な生存競争をしているだけでなく、自分より大きな生き物に食べられないように必死で生きているみたいですね。

だから、やたらビクビクあたりを警戒している。あれって、さまざまな「信号（＝何かが起こりそうな前兆）」を感知し察知しようとしている様子が、ヒトの目から見ると「ビビっている」（※ヒトの主観です）ように思われるのではないのでしょうか。テレビの画面で見ている限りでは、のどかにも見えますが、生き物の生存率というか、老衰してお亡

くなりになるまで長生きする確率はきわめて低いと、何かを書いてありました。

よく知られた例は、ウミガメでしょうか。親ガメがたくさん卵を産む。赤ちゃんガメが孵化（ふか）して、海へと続々と繰り出す。そんな映像を見ていると、ナレーターが決まって、次のようなことを言いますね。このうち無事に成長して親ガメまでに育つのは、わずか▲%しかない――。

よく考えてみれば、食うか食われるかの生き物たちの世界をヒトが映像化する場合にも、ヒトにそなわったドラマツルギー（＝作劇法）＝演出癖＝「ヒトであるかぎり避けられないフィクションの仕組み」の常として、何かを「主人公」とするわけです。たとえば、堂々とした風貌の（※ヒトの主観です）タカという鳥をテーマにした番組の映像を収録するとするなら、「主人公である」、

*タカが、いかにして自然界のさまざまな「信号」を「うまく」察知し、その結果として「適切な」行動をとるか、

に注目しながら、カメラを向けます。一方で、というか、同時に、

*タカによって食べられる他の生き物たち（※ヒトの主観ですが、たいていが、薄幸そうでビクビクして見えます）が、自然界のさまざまな「信号」を「察知しそこない」、結果として「不適切な」行動をとったり、「不適切な」事態におちいる

様子が、「脇役演技として」映像化されます。

これは、ドラマツルギー（＝作劇法）＝演出癖＝「一種のヤラセ」としては当然のことです。具体的には勝者の象徴であるタカと、敗者の象徴である小動物とのドラマです。したがって、生き物の生態をとらえたテレビ番組を見る場合に気をつけなければならないことは、そうしたヤラセの可能性を意識することでしょう。

*

いったい何を言いたいのかと申しますと、

*ニュートラルな「信号」を察知して、成功に結びつけることは、簡単そうで簡単ではない。

らしい、ということです。「勝者の象徴である」タカの場合も例外ではありません。

で、ウミガメさんに話をもどしますと、あまりビビっている様子がうかがわれないウミガメさんたちでさえ、野ウサギさんや、サワガニさんや、ムツゴロウさんのように、「それなりに」ビクビクピクピクしながら生きているのでしょうか。そういえば、小鳥さんたちも、ヒトの目には「落ち着きがなく」(※ヒトの主観です)見えます。

最近、ヒトの都合でひどい=むごい目に遭ったウズラさんの動きを思い浮かべてください。ウズラさんがイメージできなければ、ニワトリさんでもいいです。落ち着きがないですね。ニワトリさんは、野生であるより、ヒトに飼われているもののほうが圧倒的に多いです。ですから、他の生き物に食べられるのではないかとか、うかうかしていると食べ物が目の前から消えてしまうのではないかとか、「ビビる」必要は、もうないわけです。

でも、今でもなおビクビクピクピクしているのは、おそらく、先祖代々受け継がれてきた習性のなごりでしょう。あの動作=仕草を真似てみるといい勉強になります。5分も経たないうちに、目が回り、下手をすると頸骨(けいこつ)=首の骨を痛めます。つまり、

*ビクビクピクピクするのは、大変な苦勞である。

と体感できます。

*

ところで、小動物のビクビクピクピクって、株の値動きや各種の相場の動きに似てい

ませんか？ あれは、数字が勝手に動いているわけではなく、ヒトがビクビクピクピク動いている結果の現れ＝表れなのです。相場の他の参加者たちの動き（＝発せられる信号）や、世界中からひっきりなしに飛び込んでくるニュース（＝飛び交う信号）を知覚して、ヒトが何らかの思わくをいだいたり、実際に、買うや売るや仕組むといった行動を起こす。その様子は、

*ワクワクドキドキ

にも見える一方で、

*ビクビクピクピク＝「要するにビビっている」

にも見えませんか。どちらかと言えば、後者に近いのではないのでしょうか。

*株を始め各種の相場は、弱小動物のように常にピクピク動く。要するに、ヒトは常にビビりまくっている。

とか

*ヒトは、お金の問題になると、弱小動物のようにビクビクピクピクする。

と言えそうな気がします。

もう少し正確に言うなら、弱小動物と違って、

*人は、自分自身でつくったものやシステムに対してビビっている。

わけですから、

*お間抜けというか滑稽というかシュールなギャグみたい

ですね。

*

このように、このところ「信号」について、いろいろ考えていますが、

*ニュートラル＝「可もなく不可もない」＝匿名的な「信号」

であるらしいものに、自分がついネガティブなイメージ＝印象をいってしまうのは、自分に、

*「信号」を、然るべきかたちで＝自分にとって都合のいいように、受信し、処理することはきわめて困難である。

という「思い込み」があるからではないか、と考えはじめています。つまり、

*何かを思考の対象とするさいには、自分という思考する主体を柵に上げてはならない。ヒトは、メタな立場に立つことは、できない。

を、うっかり者の自分は、しっかりと肝に銘じておくべきであるということです。

かといって、上述の「思い込み」を検証しようとして、「実際は、どうなのか？」と自問したところで、これまた、一般論はきわめて困難であるように感じられます。ケース・バイ・ケースなののでしょうか？ そうなると、一般論を保留し、特定の「信号」を論じる必要がありそうです。つまり、専門化＝特化です。

これは、素人には難しい作業になります。専門家が研究すべき問題でしょう。でも、自分で考えられそうな部分は、考えてみたいです。たとえば、自分のからだ=身体です。ふだんは誰も意識してはいませんが、生きているからには、

*器官 or 細胞同士のレベルでの「信号」のやりとり

が不断に行われているはずです。

自分のからだを題材にして=思考の場として、考えてみよう。自分のからだに聞いてみよう。自分のからだを注視してみよう。そうは言っても、言うは易く行うは難し、ですね。自分自身を、実際にも、比喩的にも「生体実験」するわけには、なかなかまいりません。ある程度は、できるでしょうけど。

現在、どれくらいのヒトが、この惑星に生きているのでしょうか。65億くらいでしたっけ？ ウミガメさんや野ウサギさんに比べれば、ヒトの生存率はかなり高そうです。だからこそ、グローバルなレベルで、人口爆発などという事態が起こっているのでしょうか。たとえば、この国の平均寿命は伸びています。何を言いたいのかと申しますと、

*生物としてのヒトの生体レベルにおける「信号」のやりとりは、きわめてうまくいつている。

ということです。もちろん、医療の力を借りてです。この国の医療や高齢化という現象を見てみると、そう思えてきます（※異論もあるでしょうが、この分野に疎いので思いつきません。ごめんなさい）。

また、もちろん、世界の圧倒的多数の人たちが、この自分を含む、この国に暮らす人たちには想像できないくらいの悲惨な衛生状態、飢餓、あるいは紛争下にあるのも事実です。話が広がりすぎました。本来なら看過できない重要な問題ですが、ここでは考えないでおくことを、お許しく下さい。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りが挺好的

で、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「信号論 (3)」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます】

09.05.12 信号論 (3)

◆信号論 (3)

2009-05-12 09:39:48 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「信号論 (2)」の続きです。】

このブログでは、「信号」のやりとりを、どちらかといえば悲観的＝ネガティブにとらえてきましたが、うまくいく場合もあるわけで、きょうはその

*ポジティブな「信号」のやりとり

についても考えております。ポジとネガの両面で、「信号」をとらえるためには、一般的な「信号」のやりとりについて、図式化を試みる必要がありそうです。

A : ノイズ+熱 ⇒ ニュートラルな「信号」: 合図・視線・まなざし・表情・刺激

↓

B : ノイズ+熱 ⇒ 経路・通路 (※光・電波・波動・電線・管・ニューロンなど) : 線・糸・揺れ

↓

C : ノイズ+熱 ⇒ 回路・知覚器官・知覚組織・解読版・グリッド : 色づけ・分ける・知覚・見る・解読・解釈・識別 : 網・濾過記=フィルター・カメラ・マイクロホン

↓

D : ノイズ+熱 ⇒ スクリーン・膜・細胞・機械・器械・画面・スピーカー・発信装置=受信装置 : 幕・器

↓

E : ノイズ+熱 ⇒ 映像・音声・震動・運動・動作 : 動き・まぼろし・イメージ

↓

F : ノイズ+熱 ⇒ 賭け・ギャンブル・偶然 (accident) / 成功=不成功・当たり=外れ・作動=誤作動・正常=異常 or 異常・順調=不調・OK=エラー

以上が、大雑把で、かなり不正確な図式だということは、承知しております。多分に理系的な装いをしていますが、ド文系畑をうろちよろしてきた者の落書きにしかすぎません。それを百も承知のうえで、一介の素人が、おこがましくも「信号」について考えるさいの粗雑な見取り図として、ここに描くことを、お許しを願います。

この図をじっと見ていると、いろいろな考えが浮かぶので、参照用メモ=カンニングペーパーのように、そばに置いておきたいのです。

*

さきほど

*ポジティブな「信号」のやりとり

と書きましたが、それで思い出したことがあります。高校生の頃の話です。何の教科の先生か忘れてましたが、外国人が日本に来てびっくりするらしいことを挙げてみせたのです。そのなかで、列車がプラットホームで指定された位置にピタリと停止すること、そして、エレベーターが各階のフロアアの床と同じ高さでピタリと停止することを、先生が指摘していたのです。

聞いていたこっちがびっくりしました。ええっつ！ ひょっとして、そうではない国が、この地球上に存在するのか！ いったい、どうなっているのか？

今思い返せば、ナイーブな＝お馬鹿な、驚きです。でも、よく考えてみると、この国で当たり前なことが当たり前でないということは、ほかにももっとあるのではないかと？ 井の中の蛙（かわず）大海を知らずってやつです。

もういい年をしたオジサンになっても、相変わらずナイーブな＝お馬鹿さんな世界観をもちながら、気づいていないだけなのではないかと？ きっとそうです。マスメディアなり、ネットがあるというのに、「信号」が発せられているというのに、このアホはぜんぜん気づいていない。そうに、ちがいません。素直に反省します。

で、考えてみました。この国で暮らしていると、

*広義の機械同士 or 機械のパーツ同士でのレベルにおける「信号」の信頼性＝有効性

がきわめて高いものだと思ひ込みがちです。

実際、高いです。身の回りに目をやってみましょう。テレビ、パソコン、ケータイ、自

動車、医療機器、医薬品（「刺激＝信号」と「効果＝作動」に注目し、広義の機械とみなしましょう）などを見ていると、実に性能がいい。それが当たり前だと思い込んでいる。

電気器具ほどは身近ではないもの、たとえば、武器、飛行機、発電所、工場なども、うまく動いてくれているようです。正常に動かなかったら、たぶん、ニュースで取り上げられるでしょう。責任者が追及され、企業であれ役所であれ、トップの首が飛ぶ事態も十分予想されます。

でも、これって、本当に当たり前のことでしょうか？ むしろ、驚異的なこと＝稀なこと＝「驚き、桃の木、山椒の木」＝奇跡＝「ミラクルマン登場！」ではないでしょうか？ 自分がコドモだった頃には、やたら家にある電気製品が故障しました。故障して当たり前だった記憶があります。

テレビを見ていても、いわゆる「砂嵐」が頻繁にブラウン管に映りました。あれって、放送局で何か故障があったからですよ。テレビ自体も、画像が歪んだり、音が消えたり、チャンネルなんか（※リモコンではなく、がちゃがちゃ回すやつです）しょっちゅう故障していませんか？

テレビを何度、叩いたことか。それで一時的に直ることもあったんです。あれは、何だったのですか？ 100年もまえの話ではありません。今のオジサンたちがコドモたちだったときくらいの「昔」のことです。

*叩けば直る。

これって、今考えると、ギャグです。イマドキのコドモに実物とその光景を見せたら、たぶん腹を抱えて笑います。「ぼく（or わたし）のニンテンドーDS、ぜんぜん、故障なんてしないよ」という時代に生きている子たちなのですから。言い換えると、

*「信号」が「正しく」察知され、「適切な」作動を生じさせる。

のが、当たり前の時代に生きているのです。

でも、ひょっとすると、そんな故障や不具合や誤作動が、ギャグではなくて日常的な国々や地域が現在、この惑星にたくさんあるのではないのでしょうか。さらに言うなら、そんな故障だらけの機械や道具さえ、手に入らない人たちのほうが多いのではないのでしょうか。海外旅行をした経験のある人たちから、いろいろな感想や愚痴を聞きます。

レストランで合図(=信号)をしたのに、ウェイターやウェイトレスが来なかったり、注文どおりの品が来なかった。または、災難に遭って現地の警察に手配を頼んだ(=信号)のに、ぜんぜん動いてくれない。お店で買い物をして、日本に送り届けるように手続き(=信号)をしたのに、まだ届かない。ホテルでの決められたサービス(=信号)を利用しようとしたにもかかわらず、サービスを受けられなかった。

一流とされるホテルなのに、エアコン(=信号)がぜんぜん効かなかった。テレビ(=信号)が付かなかった。ポットの水(=信号)を飲んだら、下痢をした。お風呂の蛇口(=信号)からお湯や水が出なかった。電話(=信号)が通じなかった。バス or 列車が定刻(=信号)に来なかった。空港の時計(=信号)がすごく遅れていた or すごく進んでいた。

こんなことは、ざらにあります。文句を言ったら、変人・奇人・危険人物扱いされたという話も聞いたことがあります。

以上のなかには、語学的(=信号)に通じなかったという、当事者側に問題のあるケースも含まれていると思われます。いずれにせよ、とにかく物事(=信号)が機能しない国々が多いのを、よく耳にしませんか？

「信号論 or 信号学」的に見て、

* 「信号」のニュートラル性は、ヒトがその発信と受信を担う場合には、ヒトがきわめて「不確実な」=「ノイズと熱に満ちた」生き物であるために、「信号」に本来備わっているニュートラルな特性が損なわれる可能性が高まり、その結果として「きわめてテキトー」=「恣意(しい)的」に近づく。ただし、「信号」に罪=責任がないことは言うまでもない。

と言えると同時に、「信号論 (2)」で述べた、

*ピクピクピクピクとワクワクドキドキの違いは、「うだつのあがらない尻尾のないおサルさん (= ape)」の脳内でどういうわけか「ズレ=狂い」=「本能が壊れる」が起こってしまった結果、「尻尾のないおサルさん」が「尻尾のないおサルさん + α 」=「本能が壊れたおサルさん」=「狂えるおサルさん」=「クルエル (= cruel = 残虐な) おサルさん」=「ヒト」=「人間様」になったことと、関係がある。

のなかの、特に、

*「ズレ=狂い」=「本能が壊れる」

と、大いに関係がありそうだと思います。この前提に立つと、

*日本は、ヒト=「本能が壊れた狂えるおサルさん」の扱う「信号」のニュートラル性=匿名性=「可もなく不可もない、つまり何でもあり」性=「はっきり言えば、機能することもあれば、機能しないこともある」=「ほぼ確実性であると同時に、ほぼ不確実性」を感知しにくい、世界でも例外的な国である。

と言える一方で、幸いなことに、

*日本は、広義の機械同士 or 機械のパーツ同士でのレベルにおける「信号」の信頼性=有効性が、世界でも例外的に高い国である。

と言えそうな気がします。その理由を考えてみましょう。

*

ここで、がらりと話を変えます。この国が、「単一民族国家」だなんて、大嘘は言いませんが、

* 異人＝異分子＝よそ者＝異形の者たちを、無視する＝見ない＝「透明人間のように扱う」＝「ヒトとはみなさない・扱わない」国家である。

ことは、どうやら確かなようです。これって、程度の差はあれ、この惑星では例外的み
たいです。

その証拠に、世界のあちこちで、ローカルかつドメスティックなレベルで、異なる集
団の間での摩擦、軋轢（あつれき）、争い、敵対、にらみ合い、殺し合いが起きています。
それが当たり前なのです。これは、他人事＝他国事では、決してありません。

この国の 100 年前は、どうだったでしょう？

* 1909 年前後です。

あまりにもきな臭い話になりそうなので、ご面倒でも世界史年表をご覧ください。そ
して、この国がどんな状態だったか、お調べください。1 つ言えることは、

* 国家の安定度と「信号」の信頼性の安定度とには、因果関係の存在は不明であるが、相
関関係は認められる。

という気がします。

そして、ついでに 50 年前の、

* 1959 年前後

の日本の状況も非常に象徴的なので、年表で目を通してください。この国が「安定化」に
向かう節目の時期です。何だか、大風呂敷を広げてしまいましたが、簡略化すると、次

のようになります。

*あなたは、日本企業のブランド名で売り出されている、海外で製作 or 組み立てされた製品と、純日本製の電気製品とのどちらの性能を信用しますか？

この質問にお答えになることで、さきほど述べた「安定度」の二重の意味がお分かりいただけるだろうと思います。

さて、本日掲載の「信号論 (2)」で、小動物の「ビクビクピクピク + ポケーッ」とからめて触れた、

*「ワクワクドキドキ + ビクビクピクピク + ポケーッ」の世界である、経済や各種の相場

という、これまた「信号」だらけの環境を第三者が見るならば、あるいは、そうした環境で日々お仕事をされている当事者や、相場の参加者の方々であれば、

*「信号」を「適切に or 正しく」読み取る

などという、もっともらしく、また、小ざかしげな言い方が、いかがわしく、あやしげな表現であることを、常に実感なさっていることでしょう。

また、「正しくない信号」(※たとえば、サブプライムローンやCDOなどという高度なガセネタ=毒饅頭や、単なるガセネタ=デマや、ほぼガセネタ=ほぼすべての情報など)も存在することは事実である一方、そもそも、

*「信号」自体に罪はない=「信号」はニュートラルなものである

ことも、体感されているにちがいありません。

経済における「信号」については、「信号論から見た経済（2）」2009-05-07 と「信号論（1）」2009-05-10 で愚見を述べましたので、ご興味のある方は、ご参照願います。

*

話を「信号」プロパーにもどします。さきほど冒頭近くに挙げたA～Fの「でまかせ図表」をご覧ください。Aにある、

*ニュートラルな「信号」

から、Fにある、

*賭け・ギャンブル・偶然（accident）

にいたるまでに、いろいろな行程がかかれています。ここでは、なぜ最後に「賭け・ギャンブル・偶然（accident）」があるのか、について、説明したいと思います。

自分としては、この部分にもっとも興味があるというか、重要性を感じるのです。その説明のために、わざわざ、「叩けば直る」テレビの話や、1909年前後のこの国および世界情勢や、1959年前後の国家の安定化なんて持ち出したのです。そういう歴史的事実を前提としないかぎり、なかなか説明しにくいことなのです。

上図のうち、BからEまでも大切ですが、

*どうして、ニュートラルな「信号」が、賭け・ギャンブル・偶然（accident）という結果＝状況にいたるのか？

は、自分にとって大問題なのです。なぜかと申しますと、

* 生体（ヒトも含む生物全部を指します）内・生体間、国家（or 地域）内・地域間、機械（or 器械）内・機械（or 器械）間、器官（or 組織）内・器官（or 組織）間で、交互に（発信側と受信側が交代しながら）かわされる、本来はニュートラルな「信号」が、結果的に、ある動作＝運動を誘発するまでの過程において、「記号」のニュートラルな特性を「色付けする」＝「プラスからマイナスにいたるまでのグラデーション化を行う」仕組み＝メカニズムは何であるかと、最終的に「成否を決する」形で立ち現れるニュートラルではない「色」＝「結果」を判断するものは、ヒトなのか、ヒトとは無関係の匿名的な「出来事＝事件＝偶然＝accident」なのか？

が気になるからなのです。ややこしいですね。

この問題を、単に、さきほど述べた、

* 「信号」のニュートラル性は、ヒトがその発信と受信を担う場合には、ヒトがきわめて「不確実な」＝「ノイズと熱に満ちた」生き物であるために、「信号」に本来備わっているニュートラルな特性が損なわれる可能性が高まり、その結果として「きわめてテキトー」＝「恣意（しい）的」に近づく。ただし、「信号」に罪＝責任がないことは言うまでもない。

だけで、片付けるわけにはいかないのです。今述べたことも、よくよく考えると、不思議と言うか、やっかいと言うか、ややこしいことですね。

そこで、官僚的で事務的な作業である「簡略化」を試みるなら、たとえば、

* ピーポーピーポーという救急車の鳴らすサイレンという「信号」が、引き起こす＝誘発する、さまざまなヒトたち・ものたちの行動によって、生じる状況＝現象は、ヒトたち・ものたちに備わっている「テキトーさ」の産物なのか、そうではなくて、ヒトたち・ものたちに可能な「緻密な連携」による「ニュートラルな」結果なのか？

です。

まだ、ややこしいですね。では、もっと、うんと簡単に言うと、たとえば、「信号」の信頼度が高いはずのこの国で、病院での救急車の受け入れ拒否（＝「信号」拒否）が問題になっているが、

*ピーポーピーポーは、鳴らし甲斐があるのか、それとも、鳴らしたあとは、「神のみぞ知る」なのか？

という感じです。

ここまで簡略化すると、自分としてはかなり不満はありますが、こんな感じで表現することもできないことはありません。自分の場合、以上の問題は、フランスの詩人マラルメの戯れた、

*偶然と必然

および

*意味と無意味

にからんでくる大きな問題なのです。「偶然と必然」および「意味と無意味」について、古今東西の誰がどう考え、何を書いてきたのか？ そんなことは知りませんし、あまり興味はありません。そうしたことを調べるのは、言うまでもなく、いわゆる学者やいわゆる専門家の仕事です。そのどちらでもない自分は、

*「作者」や「オリジナリティ」といった「刻印」などない、匿名的な言葉とフレーズの断片を、拾い集め、組み合わせながら、「遊び＝楽しむ＝考える」という快樂＝官能にひたすら身をまかせたい。

と願うだけです。

そうです、「願い」＝「欲求」です。これほど、学問や研究に遠い行為もないでしょう。いや、案外、そういう「ゲイ・サイエンス＝楽問＝「楽しきお勉強ごっこ」に近いスタンスをとっている、学者や研究者もいるかもしれませんが、知りません。

というわけで、行儀の悪い人がテーブルに出されたさまざまな小皿に盛られた料理を、あれこれ中途半端に食い散らすように、このところ、各種のテーマ＝御馳走＝題材を対象に「信号論 or 信号学」遊びをしてきましたが、ひとまず、この辺で「信号」はわきにおいて、

* 「かく・かける」

という以前から気になっている言葉について考えてみたくなりました。マラルメ、あくまでも、自分にとっての固有名詞＝言葉＝まぼろしとしての「マラルメ」が恋しくなりました（※簡単に言えば、マラルメに対する私的なイメージくらいの意味です）。

文学史の本に登場する「マラルメ」とは、あまり、いや、たぶん、ぜんぜん関係ないことは確かです。むしろ、経済でいう、

* 投機・ほぼ投資（speculation）→賭け（※ギャンブル）→カジノ資本主義

といった連想ゲームに近いような予感もあります。

ですので、「マラルメ」だけでなく、「投機的一种（＝ほぼ賭け＝ほぼギャンブル）」である株に狂いながら「経済学」していた「ケインズ」という固有名詞＝言葉＝まぼろしとも、戯れてみたい気がしてきました。すると、

* 「偶然と必然」および「意味と無意味」の、「楽問＝ゲイ・サイエンス＝楽しいお勉強ごっこ」

ということでしょうか。こうなると、韓国ドラマ、イ・ビョンホン主演の「オールイン」の世界とも、からんできそうです。つまり、確率・統計がからんできそうだという意味

です。

念を押しますが、今述べているのは、おふざけではありません。本気です。正気だとは言う勇気も自信もありませんが、本気です。

いずれにせよ、

* 「かく・かける」

をテーマに、しばらく考えてみたいです。

ただ、食い散らし状態の記事たちが気になるので、そのまえに、自分のあたまとの整理として、「こんなことを書きました（その7）」を、あすにでも書いてみるつもりです。

09.05.13 こんなことを書きました（その7）

◆こんなことを書きました（その7）

2009-05-13 08:48:53 | 言葉

前回の「こんなことを書きました（その6）」2009-05-04（2009-04-18～2009-05-03）の続きです。今回は、2009-05-04 から 2009-05-12 に掲載した記事のダイジェスト版です。いつものように、短い解説とキーワードを挙げてあります。トリトメのない冗長な記事を、コンパクトにまとめたつもりですので、ご一読くだされば嬉しいです。特に、後半の記事は、読みやすく、内容もややこしくなっていますので、要約に努力しました。

* 「こんなことを書きました（その6）」2009-05-04：2009-04-18 から 2009-05-03 に書か

れた記事のダイジェスト版です。

*「スポーツの信号学 (1)」2009-05-05：シリーズ「あう (1)」～「あう (7)」の副産物として手にした「信号」および「信号論 or 信号学」というツール=玩具と、しばらく遊んでみようかと決心しています。こうしたツール遊びに、「いろんなものをつなげたーい」という欲望があることを指摘する一方で、かつて卒論で論じたロラン・バルトが、さまざまな分野を「つまみ食いしながら」移り歩くヒトであったこと、その「つまみ食い」の1つである「神話研究」という名称で、多種多様な文化現象を「つまみ食い」して遊んでいたことに触れています。「つなげたい」=「こじつけない」欲望に基づく、いろいろな「〇〇学 or 論」を列挙してもいます。「信号論 or 信号学」というツールが、どれくらいの有効性をもっているかを知るために、まず、身近なスポーツというテーマ=対象を選んでいきます。例として、「石川遼」という「現象」を扱おうとしていますが、中途半端で終わっています。キーワードは、「オリンピック」「テリトリー」「争う」「競う」「記号学 or 記号論」「シンボリズム」「イコノロジー=図像解釈学」「イコノグラフィー=図像学」「神話学=ミソロジー (mythology) or ミソグラフィー (mythography)」「物語論 (=ナラトロジー)」「テーマ批評」「構造分析」「ロシア・フォルマリズム」「フェミニズム批評」「高山宏」「存在の大いなる連鎖」「アーサー・O・ラヴジョイ」「富山太佳夫」「ゲイ・サイエンス」「ミシェル・フーコー」『ぼくの命を救ってくれなかった友へ』「エルヴェ・ギベール」「クロード・レヴィ=ストロース」「ジル・ドゥルーズ」「ルイ・アルチュセール」『Mythologies』『神話作用』『現代社会の神話』『S/Z』「Stephen Heath」『Vertige du déplacement』「ロジェ・カイヨワ」「蓮實重彦」『スポーツ批評宣言あるいは運動の擁護』「草野進」「渡部直己」『日本プロ野球革命宣言——読売巨人軍再建のための建白書』です。

*「ドラマ信号論 (1)」2009-05-06：広義のドラマの特性として「はらはらどきどき」という共通項を指摘しています。ここでは、狭義のドラマとして、ゴールデンタイムに放映されるテレビドラマを扱い、詳細な分析を試みています。テレビドラマの「陳腐さ」のメカニズムを探っています。その「陳腐さ」が「よそ者」にとって「難解」である点に、読者の注意を喚起しています。テレビドラマの歴史的变化を具体的にたどり、テレビ番組制作する者と視聴する者との、「はらはらどきどき」に基づく「共犯関係」があやうくなっていることに注目し、テレビ放送自体の終わりを予感しています。前日、そして、この日の記事のように、「信号論 or 信号学」というツールをつかって、今後さまざまなテーマを対象にして「つまみ食い」をすると宣言しています。キーワードは、「シナリオ」「筋書き」「週刊誌」「外国人」「デーブ・スペクター」「TIME」「Newsweek」「英字新聞」「三種の神器」「トレンドドラマ」「コモディティ化=陳腐化」「ケータイ」「ゲーム」「ネット」です。

*「信号論から見た経済(1)」2009-05-07: 経済を2つに分け、同日に2本の記事を書いています。まずは、ビジネス編です。経済において「めくばせ」や「ナンパする」という比喩が有効であることを指摘しています。「これは自分のオリジナルなフレーズ＝言葉です」という、ある新聞のビジネス欄に掲載された記事のセンテンスをきっかけに、貨幣と言葉に共通する「表象作用」と「匿名性」を論じ、そこから、「オリジナリティ」というものが「幻想」であることを訴えています。ビジネス書、とりわけ自己啓発書が、その「幻想」を逆手に取って、処世術を繰り広げているメカニズムを解説し、その「さめた」スタンスと、旺盛な「ナンパ」師ぶりを皮肉っています。キーワードは、「表象」「マネーロンダリング」「著作権」「知的財産権」「貨幣損傷等取締法」「思考法」「発想法」です。直接書かなかったキーワードは、「朝日新聞」「勝間和代」です。

*「信号論から見た経済(2)」2009-05-07: 同日の第2弾の記事です。テーマは経済、および各種の相場です。「信号論 or 信号学」の定義を、過去の記事から引用し、自分の話が軌道から外れないように注意しています。バーナンキ米連邦準備理事会(=FDR)議長が、米上下両院合同経済委員会で、ポジティブな証言=信号を送ったニュースを題材にしています。ここで、「信号」の「ニュートラルな」特性と、「匿名性」という、後にこのブログで頻繁に用いることになる重要な考え方を提起しています。また、「信号」に密接なかわりを持つと考えられる「偶然」「賭け」についても、思いをめぐらしています。重要人物のメッセージと、それが各種の相場に及ぼす影響とのあいだに、ナンパと同様のメカニズムが働いているのではないかと、問題提起をしています。以前、集中的に論じていた「トリトメのない記号=まぼろし」と「信号」の違いについても、論じています。キーワードは、「トリシェ欧州中央銀行(=ECB)総裁」「株価」「金利」「外為相場」「石川遼」「発信者」「受信者」「記号論」「記号学」「ゲイ・サイエンス」です。

*「信号学的視線論(1)」2009-05-08: まず、突発性難聴に心当たりのある読者に対し、すぐに専門医に診てもらうように、老婆心からの呼びかけをしています。中途難聴者である自分が、失われつつある「聴力」の代わりに「視力」で、さまざまな不自由を補おうとしているという体験を出発点にし、「視線」についての考察へと話を展開しています。隙間(すきま)市場=ニッチ市場と「反作用」を共通項とする視点から、フロイトの創始した精神分析をはじめ、ロシア・フォルマリズム、フェミニズム批評、構造主義について簡単に解説しています。その後に、どさくさに紛れこませる形で、自分の現在試みている「信号学 or 信号論」を取り上げるという、厚かましいことをしています。キーワードは、「聞こえの検査」「川端康成」「ユダヤ人」「精神分析医 or 精神分析家」「ブリーフセラピー」「コーチング」「モチベーション」「ファシリテーター」「いやし」「ソ連」「共産党」「一党独裁」「文学研究」「体制批判」「フェミニスト」「女権拡張運動」「公民権運動」「アフリカ系アメリカ人」「エコフェミニズム」「通時的/共時的」「モノブログ」「自己輸血」「自己引用」「BBC」「バラエティー番組」「補聴器」「ろう者」です。

*「信号学的視線論(2)」2009-05-09：かつて小説家を志した頃の思い出から話を進めています。故障したノートパソコンのハードディスク内に残っているかもしれない、ある習作のあらすじを紹介しています。翻訳家の卵である女性のアパートに、かつての同級生が転がり込んできたことがきっかけとなり、女性のところが危うくなる過程。女性がかつて飼い犬を殺めてしまった記憶と、現在の共同生活とが交錯し、かつての同級生を殺害するまでの経緯。この2つが描かれています。このあらすじを、自作批評するという形で、「みる・見る」という行為を2つに分類し、自作の主人公である女性が「読み間違える」という行為をおかしたために、悲劇が起こるといふ、作品の構造分析を試みています。その「批評」の過程で、自分がかつて卒業論文で選んだロラン・バルトの批評と、同じような言葉の身ぶりをしていることに気づき、時空を超えて、テキスト間で「めくばせ」が起こっているという、これまた厚かましいことを述べています。文芸批評に興味のある方や、文学研究を志している方に、読んでいただきたい記事です。キーワードは、「川端康成」「禽獣」「眠れる美女」「村上龍」「コインロッカー・ベイビーズ」「イビサ」「Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)」「視線」「美醜」「虚実」「S/Z」「バルザック」「サラジーン」です。

*「信号論(1)」2009-05-10：「もらう」・「かえす」＝「交換」という行為について、かつての記事からの自己引用をしながら論じています。「視線をかわす」から「信号をかわす」へと話を移し、「信号」がニュートラルであることの意味の深さを説明しようと努めています。かなりややこしい議論をしているため、要約は難しいです。ただし、「信号」の「ニュートラル＝匿名的な特性」についての考えは、だいぶつかめてきた様子が伺われます。個人的には、とても気になる記事です。後の記事への飛躍点となるような記述が散見されるからです。キーワードは、「おくる」「交信欲」「ケータイ依存症」「デズモンド・モリス」「裸のサル」「マンウォッチング」「ボディウォッチング」「挨拶」「熱」「経路」「(信号の)信頼性」です。

*「もくじをつくりました」2009-05-11：ブログの読者からの指摘をきっかけに、過去のブログの倉庫である「うつせみのうつお」の「詳細もくじ」を作成したことの報告です。

*「信号論(2)」2009-05-12：この日の記事が、ブログサイトの文字数制限を超えることを予想し、記事を2つに分けています。この記事では、小動物特有のビクビクピクピク+ボケーツとした動作と、特に各種の相場で見られる、ヒトのワクワクドキドキ+ビクビクピクピク+ボケーツとした動作に注目することから、話を始めています。ヒトに特有のワクワクドキドキが、尻尾のないおサルさんからヒトへと「進化」したさいに脳内で生じたと想定される「ズレ＝狂い」と関係があるのではないかと指摘しています。この

記事は、「信号論 (3)」で、ニュートラル=匿名的な「信号」について論じるための、いわば準備体操です。キーワードは、「テレビのドキュメンタリー番組」「ドラマツルギー(作劇法)」「映像化」「(ヒトの) 主観」「(番組の) 演出」「やらせ」「主人公」「脇役」「(生き物の) 生存率」「株の値動き」「相場の動き」「本能」「発情期」「繁殖期」「思い込み」「医療」「人口爆発」「平均寿命」「高齢化」です。

* 「信号論 (3)」2009-05-12：この日の記事の第2弾です。「信号」は「ニュートラル」なものであるため、「ポジティブ」にも「ネガティブ」にも取れること。現在の日本では、一見、あまりにも「信号」が「ポジティブ」に働いているため、「ニュートラル」な特性が感知しにくくなっていること。以上の2点を説明し、そうした環境で、「信号」の「ニュートラル」な特性を思考の対象とする困難さを打開する方法を提案しています。カギとなるのは、この数日前から考え続けてきた「賭け・ギャンブル・偶然 (accident)」です。ヒトは、広義の「信号」と出会いながら日々の生活を送っているわけですが、「信号」の「有効性」について、意識することはほとんどありません。「信号」の「有効性」を信頼できると感じる瞬間もあるでしょうし、信頼できないと感じる瞬間もあるでしょう。その差を成立させているものは、何なのか？ それが今後の問題であると主張しています。その問題と取り組むためには、「必然と偶然」および「意味と無意味」という言葉について考える必要がありそうだ。そんな結論にいたっています。以前から、気になっていた「かく・かける」という大和言葉系の言葉を頼りに、シリーズ的に記事を書こうと決心しています。熱を込め、うんうん唸りながら書いた記事です。キーワードは、「故障」「信頼できない信号」「信頼できる信号」「海外旅行」「世界史年表」「1909年前後」「1959年前後」「日本という国」「経済における「信号」」「サブプライムローン」「CDO」「マラルメ」「ケインズ」「投機」「speculation」「賭け」「カジノ資本主義」「イ・ビョンホン」「オールイン」「確率・統計」です。

以上です。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係なーい。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」＝「代理の仕組み」——「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いるという仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬ世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

- 09.04.29 あう (3)
- 09.04.30 あう (4)
- 09.05.01 あう (5)
- 09.05.02 あう (6)
- 09.05.03 あう (7)
- 09.05.04 こんなことを書きました (その6)
- 09.05.05 スポーツの信号学 (1)
- 09.05.06 ドラマ信号論 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (2)
- 09.05.08 信号学的視線論 (1)
- 09.05.09 信号学的視線論 (2)
- 09.05.10 信号論 (1)
- 09.05.11 もくじをつくりました
- 09.05.12 信号論 (2)
- 09.05.12 信号論 (3)
- 09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

- 09.05.14 かく・かける (1)

09.05.15 かく・かける (2)

09.05.16 かく・かける (3)

09.05.16 かく・かける (4)

09.05.17 かく・かける (5)

09.05.18 かく・かける (6)

09.05.19 かく・かける (7)

09.05.19 かく・かける (8)

09.05.20 占い・占う

09.05.21 賭け・賭ける

09.05.22 書く・書ける (1)

09.05.22 書く・書ける (2)

09.05.23 こんなことを書きました (その8)

09.05.24 と、いうわけです (1)

09.05.24 と、いうわけです (2)

09.05.25 あられる・あらず (1)

09.05.26 あられる・あらず (2)

09.05.27 あられる・あらず (3)

09.05.28 あられる・あらず (4)

09.05.29 あられる・あらず (5)

09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 卷

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12 07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました (その 20)

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第4巻

<https://puboo.jp/book/14953>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/14953>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/14953>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第4巻

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
